梅原　猛、小松和彦、伊東俊太郎
井波律子、魏　大海、呉　京煥
小川順子、尾本恵市、イウリア（リリアン）・カラリ＝ヤナコプール
ルチアーナ・ガリアーノ、川勝平太、木村　汎
金　弼東、クラティラカ・クマーラシンハ、高馬京子
マリーナ・コヴァルチューク、チャワーリン・サウェッタナン、酒井哲哉
シンシア・ネリ・ザヤス、ヴォルフガング・シャモニ、エミリア・シャロンドン
アヌ・ジンダル、末木文美士、千田　稔
ボルジギン・ルブサンジャボン・ソヨンボ、ミシェル・ダリシエ、趙　維平
張　翔、リチャード・トランス、ブライアン・パウエル
朴　正一、速水　融、ゲルガナ・ペトコーヴァ
デヴィッド・ヘバート、フィリップ・ボナン、エリザベッタ・ポルク
マイク・モラスキー、楊　際開、林　志宣
梁　嵘、陸　留弟、劉　岳兵
ロー・ダニエル、グニラ・リンドバーグ＝ワダ、王　鍵

――資料編――

略年表 202
歴代教員等一覧 204
日文研プロジェクト一覧 243
共同研究会等一覧 246
国際研究集会等一覧 263
出版物一覧 306

エッセイ

あるエピソード

梅原　猛

日文研が創設されて三〇年になる。日文研は顕著な発展を遂げており、今も新しい研究成果が次々と出てくるのはまことに嬉しく、私はわが子や孫がすばらしい仕事をしているかのように喜んでいる。

当初、このような研究所が本当にできるとは誰も思わなかったが、私は、やはりそのような研究所を日本そのものが必要としたのだと思っている。時代が必要とするものは、どんな困難があっても生まれざるを得ないのではなかろうか。最近、日本の右傾化が心配されている。日本がまた全体主義国家になって、戦前と同じ道を歩むことがあってはならない。新しい日本像を提供し、日本の進むべき道を示す使命が日文研に課せられていると思う。

ここでは日文研創設時の印象深いエピソードを語ろう。日文研がメディアでどのように評価されるかは日文研の運命に関わることである。日本を代表する新聞、朝日新聞社内で、創設を控えた日文研の是非について議論があり、私が中曽根首相（当時）と親しく、かつ朝日新聞文化部記者の尊敬の的であった丸山真男を厳しく批判していたので、そのような私を所長とする

日文研はつくるべきではないという意見があったらしい。しかし朝日新聞社には私の著書『隠された十字架』や『水底の歌』の愛読者もいて、社内で見解が分かれていたという。そこで、日文研の創設賛成派と反対派による討論を朝日新聞紙上でさせようという話が持ち込まれ、私は受け入れた。

そして日文研反対派として、歴史学者の大江志乃夫氏、考古学者の森浩一氏の登場が決まり、賛成派として私から二人推薦してほしいといわれた。一人はドナルド・キーン氏に決まったが、もう一人を誰にするかが問題であった。若き日、「思想の科学」誌を主宰する鶴見俊輔氏の影響を受けた私は、哲学は難解な哲学用語ではなく日常の言葉で語らなくてはならないと考えて、『笑いの構造』などの著書を書いた。そのような私の恩人である鶴見氏を二人目に推薦したところ、鶴見氏は討論への参加を快く引き受けてくれた。

ところが、いざ討論が始まると、鶴見氏はマルクス主義者を敵に回すことを恐れたのであろうか、日文研反対論者になったのである。キーン氏は温和な性格で、対立を好まない。そこで私は思いもよらず孤軍奮闘せざるを得なくなった。

そのような反対派の学者たちを相手に、私はソクラテスやゲーテやデカルトの言葉を引用して論を張ったが、彼らはそのような武器となる思想をもたず、ただ驚くばかりで、太刀打ちできなかった。その討論では、傍聴席にいた園田英弘・創設準備室次長に、私がおかしなことを言ったら合図してほしいと頼んでいたが、彼からの合図は一度もなかった。結局、私はどうにかこの論争に勝つことができた。以後、朝日新聞は日文研に関して好意的な記事を掲載し続けている。

討論が終わったその日の夜、園田氏をはじめ創設準備室のメンバーと飲みにいった。そこで

園田氏は「梅原さんは、ふだんは昼行灯のようだが、修羅場に強いですね。今日の討論で梅原さんを見直しました」といって初めて私をほめてくれた。いわれてみれば、桑原武夫先生も梅棹忠夫氏も修羅場に強かった。修羅場に強いのが京都学派の伝統であろうか。

その宴会で私は久しぶりに大酒を飲むと、突然、歌を歌いたくなり、村田英雄の「王将」を歌った。そして三番の「明日は東京へ出て行くからは　なにがなんでも勝たねばならぬー」というところで踊り出したのである。私が歌って踊ったのは後にも先にもそのときだけである。

このような過去のできごとが走馬灯のように蘇ってくる。この三〇年が夢か幻のようである。

（国際日本文化研究センター顧問）

グローバル時代のなかでの日文研の役割を考える

小松和彦

国際日本文化研究センター（日文研）は、今年の五月で創立三〇周年を迎えます。創立当時はバブル経済期のまっただ中にあり、エズラ・ヴォーゲルの、日本の高度経済成長の要因を分析し、日本的経営を高く評価した著書『ジャパン・アズ・ナンバーワン―アメリカへの教訓―』がベストセラーになり、巷間ではその書名がバブル景気を象徴する言葉として誇らしげに流通していました。また、海外の日本文化研究についても、それまでの日本研究は、日本の歴史や文学、芸能などを中心とした日本の伝統文化に関する幅広い知識をもったいわゆる日本学者たちによって主導されていましたが、この頃から高度成長を果した現代日本の経済や政治、社会への関心が高まり、また、日本語や日本文化を学ぶ留学生も急増してきた時期でもありました。

私は日文研創立一〇年目に当たる年に大阪大学（阪大）の文学部から移ってきたため、創立の経緯やそれまでの一〇年については『日文研二十五年史』や創立時からのスタッフの話から推察することしかできませんが、創立に至るきっかけの理由の一つに、日本の高度成長があったことは間違いないでしょう。実際、前任校の阪大に留学生センターが設けられたり文学部に日本学科が新設されたりするようになったのも、日本の高度成長による日本への関心の高まり、留学生の増加でした。

ところが、バブルが弾けた一九九一年以降は経済の低迷が続き、その間に韓国や中国、イン

ドなどが経済成長を遂げ、それにともなって、世界における、またアジアにおける日本の経済的、政治的地位も相対的に低下する傾向にあるといっていいかと思います。このため、この時期の日本を、誰が言い出したかは明らかではないようですが、「失われた一〇年」とか「失われた二〇年」などといささかネガティブに表現するようになっています。

たしかに、世界的規模で展開した日本の経済進出の結果、一部の地域では日本製品の排斥運動まで起こした電化製品や生活文化製品等の物質文化面での勢いが衰えているのは、否定できないでしょう。しかし、これに代わるかのように、ゲームやアニメ、コミックといったいわゆる日本の大衆文化、ソフト・パワーが注目を集めております。このことは日本にやってくる若手研究者や留学生の関心の変化によって確かめることができます。私が阪大で教えていた頃は、日本がどのようにして近代化したのか、どのように経済成長を遂げたのかを研究したいといった学生が多かったのですが、最近は、日本のアニメやゲームが好きだからその本場でそのような文化を生み出した日本文化の理解を深めたい、と思って来日する留学生が増えているからです。

日文研もまた、こうした国内外の社会状況の変化に対応してその役割を徐々に変えてきましたが、創立三〇周年という節目は、これまでの日文研の成果や問題点を総点検を行い、それを踏まえてこれからの三〇年を展望しなければならない時期なのではないかということを痛感しております。

そこで、以下に、気がついたことを数点指摘しておきたいと思います。

まず一番に指摘したいのは、この三〇年の間に草創期からの研究スタッフが次々に退職し、今や草創期の理念やこの間の歴史や実績を知らないスタッフが大半を占めるようになっている

ことです。日文研の役割は何だったのか、どこに特徴があったのか、どのような成果を生み出してきたのか、変貌を遂げる国内外の日本文化研究を俯瞰しつつ何を継承し新たに何を試みるべきなのか。大きな節目ともいうべきこの期に、大いに反省し議論すべきなのではないかと思います。例えば、日文研が創立された当時は、文科系の大学や研究機関では、全国の研究者を集めての共同研究は、国立歴史民俗博物館や国立民族学博物館など限られた機関でしかなされていませんでした。しかし、今ではさまざまな大学で同様の共同研究がなされるようになり、日文研の共同研究も、よほど魅力的・独創的なテーマでないとそのなかに埋没してしまって評価されにくくなっています。つまり、かつては一〇年、二〇年先を行っていたかもしれませんが、今や追いつかれ追い越されているかもしれないのです。従って、一〇年、二〇年先を行くような先導的な共同研究の方式やテーマを考え出さなければならないでしょう。

次に指摘したいのは、この三〇年間で世界各国で日本文化を教育・研究する大学や研究機関が大幅に増加し、今もなお増加し続けていることです。たしかに、しばしば指摘されるように、中国や韓国の経済成長に伴って韓国研究や中国研究が急成長し、限られたポストの奪い合い、つまりこれまであった日本文化関連のポストが削減されたり、東洋学・東洋文化研究といった枠に統合されたりする傾向が見られますが、さきほど述べたソフト・パワーへの高い関心もあって、日本文化へも関心が衰えているわけではありません。むしろ増えているといっていいでしょう。

世界各地の日本研究を眺めると、日本研究に関して長い歴史をもつ国や地域もあれば、最近ようやく大学で日本語・日本文化を教える教員を得た国もあります。当然のことながら、日本文化に関する教育や研究のレベルは異なっておりますが、海外の日本研究者の支援をミッショ

ンとしている日文研としては、それらの国々の研究者への支援を怠るわけにはいきません。従って、日文研では、海外から研究者を招いたり、所員が世界各地を飛び回るだけではなく、インターネットを介して迅速に研究情報を提供したり、研究者を結びつける効率的なネットワークを再構築し強化していかねばならないでしょう。

さらに留意したいのは、日文研創立当時は、「国際日本研究」と称する研究機関や大学院の専攻は皆無だったのですが、近年は同様の名称を用いた学部や学科・専攻が次々に誕生していることです。この背景には、やはり留学生の増加があります。これまでは日系の企業などへの就職には日本語を習得するのが有利だといった思いから留学してくる学生が多かったのですが、日本の大衆文化の世界的な浸透の結果、最近では日本語を習得し日本文化をより深く理解しようとする学生が増えつつあります。つまりＩＴ技術の進展・浸透にともなって、インターネット等を通じて日本の大衆文化もグローバルな広がりをみせ、それに触れた学生たちが日本にやって来るようになったのです。その受け皿として、グローバル化、国際化を意識した専攻が設けられるようになったわけです。

ところが、日本の大学における教育・研究体制は、明治以降一貫して欧米の最新知識を吸収することに置かれ、日本文化を海外においてあるいは留学生に教えたりするという日本文化発信・流布のためのプログラムをきちんと整備してきませんでした。そうしたことは、日本に留学しその後母国などの大学に職を得た、限られた外国人日本研究者に任せてきたのです。私自身、日文研に赴任して以後、フランスやインドに客員教授として招かれてその国の日本語や日本文化教育に直接触れるまで、その国の日本文化教育や日本文化研究の実状について深く考えることがありませんでした。このため、極端な言い方をすれば、かつての阪大時代の私がそう

だったように、多様な関心をもつ留学生を前にして、どのように教育をしたらいいかわからず途方にくれているといってもいいかもしれません。

そのいっぽうでは、海外の日本文化研究者の層が厚くなり、しかもインターネット等を通じて日本に関する情報や資料が日本に来なくとも容易に入手できるようになるにつれて、早晩日本人による日本文化研究よりも、はるかに優れた日本文化研究者が陸続として生まれて来ることになるでしょう。そして日本の大学でも日本文学や日本史の教授たちのなかに外国人が混じっているという時代がやってくるはずです。いや、もうそのような状況が生じているようです。日本文化・日本文化研究のグローバル化とはそういうことでもあるのです。

そうした状況を前にして、日本人日本研究者たちは安穏としているわけにはいきません。ウチからのまなざしとともにソトからのまなざしを意識しつつ、自らの研究を磨き上げ、日本文化研究を先導していなければならないのです。「国際日本研究」は未熟です。従って、その中身を世界の日本研究者たちとともに精緻にしていく必要があります。

日文研は三〇年の歴史をかけて海外の日本文化研究に関する情報を収集し、また日本文化研究者の支援を行ってきました。その蓄積を活かし、率先して「国際日本文化研究」とは何かを問いかけ、その体系化や教育プログラムの作成の手助けをすべきでしょう。

最後に、こうした状況をふまえた、日文研の新しい取り組みを簡単に紹介しておきます。すでに指摘したように、海外での近年の日本文化への関心がとくに大衆文化に向けられていることから、日本の大衆文化をより深くより体系的に捉えるためのプロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」を二〇一六年度から六年計画で発足させました。そして、このプロジェクトを軸にして海外の日本文化研究機関とのネットワークの強化や国内

の大学の「国際日本文化」関係の大学院や専攻とも連携してコンソーシアムを形成し、人材・情報の交換を図り、グローバル化する日本文化研究へのさまざまな処方箋を考えていこうとしております。また、この大衆文化研究プロジェクトでは、国内外の日本の大衆文化に関心をもつ大学生たちのための教科書作成を含む教育プログラムの作成も計画されています。

こうした取り組みに対応させ、従来の「海外研究交流室」をリニューアルするとともに「文化資料研究企画室」「広報室」等を統合して「総合情報発信室」に改組し、二〇一六年度に発足させた「プロジェクト推進室」「インスティテューショナル・リサーチ（ＩＲ）室」とともに、四室体制で研究部の諸業務を支えるとともに、国内外の研究者の研究支援や社会に向けての情報発信の強化に努めることにしました。

さらに、共同研究のあり方にも再検討を加え、海外の研究者を多数含めた「国際共同研究」をいっそう強化し、共同研究の高度化・国際化をさらに進めようとしています。

もっとも、大衆文化プロジェクトにせよ、国際共同研究にせよ、従来型の共同研究にせよ、実りある研究成果を生み出す基礎となるのは、共同研究を主宰する研究者やそこに集う研究員たちの日頃からの個人研究です。しっかりした個人研究なくして共同研究の成功はありえないのです。そのための支援も怠るわけにはいかないでしょう。研究所の評価は、外部資金をどれだけ獲得したかにあるのではなく、ときにはそれが必要なこともありますが、どれだけ所員たちが個人研究や共同研究の成果を学界や社会に送り出し、そしてどのような評価を受けたかにあります。その点ではこれまでの日文研は、研究スタッフはわずか三〇人ほどですが、大いに誇ることができる成果を挙げてきたと思います。

いずれにしても、日文研の将来は、所員の絶え間ない努力と国内外の日本研究者たちの研

鑽、協力・支援によって切り拓かれるものです。所員の方々には先輩たちの足跡を鏡として可能な限りの奮闘を期待し、そして関係者の皆さんには、今後ともよろしくご指導・ご鞭撻をお願いしたいと思います。

（国際日本文化研究センター所長）

「日文研」の想い出

伊東　俊太郎

「日文研」創立三〇周年、まことにおめでとう存じます。私が日文研に赴任したのは、平成元年（一九八九年）一二月でした。従って創立（一九八七年）後三年目ということになります。一二月という半端な月になったのは、前任校東京大学の定年が平成二年の三月（満六〇歳）ということになっていましたが、梅原猛所長（当時）のご意向で、その前に移ってほしいとのことでした。しかし東京大学の大学院過程（科学史・科学基礎論、比較文学・比較文化、西洋古典学担当）のことなどもあり、簡単には離れることができず、やっと定年直前のぎりぎり四ヶ月前になって、転任が可能になったという次第です。

当時はまだ大枝山町の本施設は出来ておらず、何か京都の役所の一部を間借りしているような状態でした。翌年（一九九〇年）には桂坂の主要施設が竣工し、我々は内井昭蔵氏設計の明るい壮麗な建物に引越しました。周囲の自然と調和した何という居心地のよいところだろうと、都会中心で育った私は感嘆しました。そこの「コモンルーム」には、当時の教授たち、埴原和郎、中西進、山折哲雄、濱口恵俊、飯田経夫らの皆さんが若い研究員と一緒になって、ワイワイ議論しており、梅原所長もしばしばおいでになり、その輪の中心になっておられました。私も日文研のそんな自由で賑やかな雰囲気が大好きで、そこでの語り合いに加わったのは今でも楽しいなつかしい想い出として目の前に浮かび上がってきます。

またこの研究センターの若手（当時）の所員たちのご協力やご援助にも深く感謝します。とくに私の場合、安田喜憲、鈴木貞美、上垣外憲一の三氏のご助力は有難かったです。研究センターでは二回の共同研究（平成二・三年度と平成四・五年度）を主催しましたが、鈴木・安田両氏は共同研究会の幹事役も務めて下さいました。その成果は『日本人の自然観』（河出書房新社、一九九五）と『日本の科学と文明』（同成社、二〇〇〇）として出版されていますが、いま前者の目次だけを掲げると、次の通りです。

伊東俊太郎編『日本人の自然観―縄文から現代科学まで』

序論　循環の世界観―アイヌと沖縄の自然観から　梅原　猛

第一章　縄文

縄文時代の時代区分と自然環境の変動　安田　喜憲

縄文宗教の母神と日本人の自然観　吉田　敦彦

縄文の精神世界をさぐる　小山　修三

第二章　古代

古代人の自然観―その始源について　中西　進

記・紀創世神話における自然―道教的・錬金術的コスモゴニー　荒川　紘

歌の発生と自然　古橋　信孝

野遊び　久野　昭

第三章　中世

中世日本人の自然観―仏教を中心に　山折　哲雄

『新古今集』の自然観　上垣外憲一
第四章　近世・近代
国学者の自然観　百川　敬仁
ラフカディオ・ハーンと神道　平川　祐弘
武道の自然観―阿波研造の場合　源　了圓
近代における日本人の自然観―西洋との比較において　渡辺　正雄
日本近代文学に見る自然観―その変遷の概要　鈴木　貞美
第五章　現代
新自然観としての四次元問題―宮沢賢治『春と修羅』序を中心に　金子　務
現代科学が日本人の自然観に与えた影響　村上陽一郎
今西錦司の自然観　柴谷　篤弘
湯川秀樹の自然観―中間子論形成における　伊東俊太郎

錚錚たる顔触れによる優れた論考が並んでいます。あらためて読んでみると、この研究会における当時の活発で生々とした遣り取りが、今でも快よく思い起されます。まことに日文研における私は仕合わせでありました。私も幾分かは研究所の活動に貢献でき、私自身がそこから多くのものを学び、成長することができました。梅原顧問をはじめとして、既往の研究員・職員の皆様方のご好意に、この機会に篤く御礼申し上げます。

今ではスタッフもすっかり入れ替り、私の居たころご一緒したのは、小松現所長と井上章一教授のお二人ぐらいとなってしまいました。しかし、その後も優れた人材が次々に採用され、

創立三〇周年を迎えた今日、日文研はなお隆々として発展を続けているようです。

そこで最後に一つの提案をして終わります。それはこの記念の年に、日文研による「日本文化研究賞」（「研究奨励賞」を含む）を創設したら如何でしょうか。これは世界の日本研究者にとって少なからぬ励みになるでしょうし、また「日文研」のもつ国際的役割の一部も果たすことになるでしょう。是非ご検討をお願いしたいと思います。

（国際日本文化研究センター名誉教授）

日文研のこと

井波律子

私が、金沢大学から日文研に移ったのは、今を去ること二二年、一九九五年四月だった。当時の日文研は創立後八年のまだ若い組織であり、創立以来のメンバーが大半を占めていた。建物の大部分は完成されていたが、周囲の環境や風景は現在とはまったく異なっていた。

京大の大きなキャンパスのある御陵坂のあたりは、広漠とした荒野のようであり、今や日文研のすぐ間近まで迫っている住宅地も、雑草の生い茂る空き地だった。私の研究室は南棟の一階だったが、まだ日文研ハウスが増設されていなかったため、窓から、荒野のかなたの山まで見渡すことができ、眺めていると、晴れ晴れと解放された気分になった。

このように、日文研は野原に忽然と出現した別天地の観があったが、建物の構造もゆったりとしながら、うまく考えられていた。たとえば、研究室からどこかへ行こうとすると、必ずコモンルームを通らなければならない仕組みになっており、ここには、だいだいいつも雑談に興じる人々がいた。ちょっと慣れると、いつのまにやら私もごく自然に座り込んで、雑談に加わるようになった。

当時の日文研は創立当初の熱気が残っており、ごく普通の大学から移って来た私にとって、運営システムがあるのやら、ないのやら、何とも把握しがたいところがあった。かてて加えて、いろいろな意味でめったにお目にかかれないような、変った人々も多かった。そんな不可

思議なことも、あれこれ雑談しているうちに、何となく雰囲気として理解できるようになった。日文研はこじんまりした組織だが、メンバーそれぞれの専門分野が多岐に渡っており、雑談のなかで、未知の分野の話をいろいろ聞くことができ、耳学問ができるのも面白かった。

日文研に移って二ヶ月後、少しずつ馴染みかけたころ、初代所長の梅原先生が退任されて、河合先生が二代目の所長になられ、六年間、在任された。この間、私はますます日文研に馴染み、自然体といえば聞こえはいいが、要するに、ありのまま、思いのままに過ごすようになった。

私事ながら、私は子供のころ向こうっ気が強くて喧嘩っぱやく、事を起こすことも多かったが、大人になるにつれて、めんどうなことには関わりたくないと思うようになり、よほどのことがないかぎり、思いどおりに振る舞うことは控えるようになった。しかし、日文研暮らしが長くなるとともに、子供時代に帰ったように、いたって率直に思ったことを口にするなど、楽な気分でごく自然に過ごせるようになった。これは、何といっても、日文研の肩ひじ張らない自由な雰囲気のおかげだと思う。

プライベートな面では、最初、桂の公務員宿舎に入ったが、半年後、小学生時代に住んでいた西陣界隈のマンションに転居、さらに五年半後の二〇〇一年春、銀閣寺近辺のマンションに引っ越した。西陣に転居したころ、なぜか金沢にいたころに比べて、一日が三時間ほど短く感じられ不思議だった。考えてみれば、そのぶん通勤時間がかかるようになったのであり、日文研は別天地ですばらしいところだけれど、遠いのが難だと痛感した。とはいえ、そのうち、もともと町育ちなので、デパートや繁華街を通過して別天地に向かうのも面白いと、思えるようになり、二〇〇九年春に定年退職するまで、何とか元気に通勤した。

というわけで、公私ともども、慌ただしい日々がつづいたが、けっきょく日文研には、

一九九五年春から二〇〇九年春まで一四年間、お世話になった。この間、日文研にとって、いちばん大きな転機はやはり二〇〇四年の法人化だったのではないかと思う。それまで単独の機関だったのが、機構のなかに入ることになり、会議の議題もにわかに増えて難解な用語が飛び交い、何事においても手続きが複雑化した。こうしたなかで、日文研の長所（ときには短所にもなるが）である、ノンシャランな自由さを保ってゆくのは、至難の業だと思われるが、今はただ健闘を祈るのみだ。

個人的には、ちょうど法人化のころから、九〇を越えた老母の老化がめだつようになり、定年までの数年間は家のことに追われて、コモンルームや喫煙室で、ゆっくり雑談する時間もだんだん少なくなっていった。母は私の定年後一か月、九五歳で他界したが、定年の間際は何かと忙殺され、日文研で過ごした一四年間の感慨にふける余裕もなかった。定年退職して八年になんなんとする今、思い返してみれば、むろん楽しいことばかりではなかったけれども、それも含めて、「日文研は面白かった」と、思うばかりである。

（国際日本文化研究センター名誉教授）

井上靖の『蒼き狼』から読む「狼の原理」

魏　大海

先日、井上靖学会で『蒼き狼』についての発表をした。歴史小説であるかどうかは別として、「蒼き狼」表象について大変興味を感じていたからである。

井上靖のあとがき「『蒼き狼』の周囲」によれば、大学時代に当時のベストセラーである小谷部全一郎『成吉思汗ハ源義経也』（大正一三年）と同著に対する史学者の反論を載せた「中央史壇」に触れ、戦後には那珂通世訳注『成吉思汗実録』（『元朝秘史』、昭和一八年）を入手し、チンギス・ハーンに関心を持ち、資料を集めて構想を練り始めたという。那珂通世訳注の『成吉思汗実録』にある有高巌の「序」では、次のような内容がある。「元朝に秘蔵されていた特殊の資料で、蒙古の太祖成吉思汗の事蹟を主とし、これに祖先の傳説及び（中略）元蒙古語を禿兀兒字で書いていたのを明初に漢字に書き改めたが、その際まず漢字を音標文字として蒙古語を音の儘に記し、次に各語に漢語の傍訓を施してその意義を示し、別に本文の大意を部分的に漢文に要約せるものを附していたものである。……人名と事実の誤謬が少なくないので、博士は前記の三様の體を具へた『忙豁侖紐察脱卜察安』（訳して『蒙古の秘史』）を得て、蒙古語法に基き嚴密に修訂せられたのであり、その内容がわが『古事記』に該當するといふ趣旨から古體の假名交り文に翻訳せられ、これに精緻な注釋を加へて『成吉思汗実録』と名づけ出版されたのである。」

これにより、井上靖が『蒼き狼』を書いた当初の状況を一応想像することができる。那珂通世訳注の本の方が、元々の『元朝秘史』よりも、誤謬が残っていたとしても、信頼性の高い典籍である。しかし、那珂通世訳注の『成吉思汗実録』では、実は狼に関する記述は冒頭のたった一言である。反対に井上靖の小説『蒼き狼』では、題名だけでなく、作品の中に「狼」に関する表現がもの凄く多い。「狼になれ！　俺も狼になる！　鉄木真は何回も口の中で繰り返した。……狼にならなければならなかった。狼には無限の欲望があるはずであった。」「……狼たちに見えた。眼は千里の遠くを見透す鋭さと、いかなる物をも自分のものとする強い意志を現わす烈しさをその光の中に持っていた。……攻撃のために作られた体躯は今やみごとに仕上がっていた。艶やかな胴体は美しく引き緊まり、四肢は雪原と強風の中を駆けるために必要な肉だけをつけ、尾は宙間を切る一本の刃となるために充分ふさふさしていた。」「上天より命あって生まれた蒼き狼があった。西方の大湖を渡ってきた惨白い牝鹿があった。その二匹の生きものが営盤して生まれたのがモンゴルの祖バタチカンであった。モンゴルは蒼き狼の裔であった。」傍線を引いた表現しか、『元朝秘史』と一致していないようである。

このような「狼」表象が、一体何を意味しているか？詩人である歴史小説家がメタファーあるいは暗喩としたのは、一体何であろうか？井上靖によると、「成吉思汗を書くにしても、一代のうちに欧亜にまたがる大国を建設した英雄の英雄物語を書く気はなかった。また古今未曾有の残虐な侵略者としての成吉思汗の遠征史を書く気もなかった。成吉思汗の一代を書くとなると、すべてそうしたことにも触れなければならないが、しかし、私が成吉思汗について一番書きたいと思ったことは、成吉思汗のあの底知れぬ程大きい征服欲が一体どこから来たかという秘密である。」その「秘密」とはいったい何なのか？作家自身は「狼の原理」の発明こそが、

物語執筆の原動力になったと書いている。それは通常の狼のイメージより複雑で、彼の想像する征服王の行動を説明する格好の隠喩だったらしい。

日本では狼は一般に残虐、凶暴のイメージでのみ語られる。たとえば柳田国男の「日本狼に関する描写」（『遠野物語　山の人生』、岩波書店、一九七六年）をひもとく。ある爺さんが酔っ払って夜道を帰ると、狼の吠える声が聞こえ、夜通し止まなかった。翌朝、厩では七頭の馬が無残に食い殺されていて怖くなったという。別の話では山道で鹿が横腹を食い破られたばかりで、湯気が立っているのを見たという。これはモンゴルの草原狼のイメージとだいぶ違っている。そこでは残虐の他に、勇敢、強靭、専念、孤独、堅忍、団結、叡智などの特性も、狼の世界に関わっている。正しいかどうかは別として、狼の原理は勝利と成功に関わっている。正義や罪悪とも無関係であるように、唯一の目的としては生存なのだ。これはイギリスの動物学者ショーン・エリスの所論だったと言われている。弱肉強食は自然の鉄則とも言える。狼の原理あるいは法則に則るものでもある。ところで、井上靖が一番関心を持っていたのは「狼」のどのような素質なのか？「狼」の一般的な素性であるか、あるいは特殊な種類の「狼」なのか？柳田国男の「日本狼」の記述から感じとられたヒントでもあるが、日本の島国生態の中にいた日本狼が、日本の狭い国土や豊かで美しい自然の中にいた日本狼が、日本人と同じような島国根性みたいなものを備えていたかもしれない。なんとなくこのような「日本狼」が、広大なる蒙古草原の自然環境にいた「草原狼（蒼き狼）」と、絶対的に違う素性の持ち主だったとも推測できるはずだ。井上靖が興味を持っていた狼のイメージは、「日本狼」ではなく、蒙古草原の特別な素質が持たれる「蒼き狼」であっただろう。

「蒼き狼」と同じような草原環境にいた人間――成吉思汗や蒙古民族の人々は、大草原の中

で日々生き抜いていくことで、自然と「蒼き狼」と同じような素質を持つようになったのではないだろうか。こういった仮説が成立するならば、「蒼き狼」が、成吉思汗の一生及び元朝の興亡と密接に関わる表象になってくるであろう。草原狼と、同じような自然環境で養成されたのは、正に神話的狼に似たような性質のあった成吉思汗といった民族英雄であろう。それが「狼性」あるいは「侵略性」も含まれた性質だと言われてもいい。

これは正に井上靖の歴史認識あるいは歴史観に関連していたものであろう。狼だけによって蒙古の英雄である成吉思汗の一生、戦闘の秘密を解明しようとするなら、難しい挑戦だったと思われる。元朝の成功を「狼原理」だけにより解釈しようとするのは大変難しい。その原因は成吉思汗の初期建国の時代の国のシステムとも深く関わっている。一三世紀前後、宋の時代の中国国家システムは、実は成吉思汗の国より随分進んでいた。紀元前二二一年前後、秦の始皇帝が既に六国を滅ぼし天下を統一した秦の時代は、既に進んだ中央集権制の封建社会に入った。中国最初の封建社会が、紀元前四七五年の戦国時代からであった。成吉思汗の最初の蒙古人建国神話の時代に、その国は、まだ完全に奴隷制社会から脱出していない状態であっただろう。ところが、何か非常に複雑な原因で、勿論前述の「蒙古狼」の素性とも密接な関連があって、ますます強大になり続け、やっとモンゴルを統一するという大業を達成したわけである。

井上靖は小説家であるから、歴史のままに考える必要もなく、その意欲もなかったかもしれない。多分、井上靖が探っていたものは「成吉思汗のあの底知れぬ程大きい征服欲が一体どこから来たかという秘密」でもなかった。では一体何を探っていたのか？井上靖が探っていたのは、成吉思汗と草原狼「蒼き狼」との共通性、成吉思汗といった空前絶後の「狼性」に通じる蒙古民族英雄の魅力あるいは蒙古帝国の強過ぎた戦闘力及び征服ドラマ表象に露呈された自然

生態に関わった「人間性」と動物界の「狼性」との共通点であったのだろう。あの巨大な征服欲の秘密が、すべて「蒼き狼」といった狼性にあるとは、ちょっと考えにくいが、この民族英雄の類を見ない無敵の魅力の秘密が、「蒼き狼」表象の中に含まれていたことはありえる。井上靖は、成吉思汗にだけでなく、草原狼「蒼き狼」の持つ、神に似た天性あるいは原理に完全に魅惑されていたのであろう。

（中国社会科学院外国文学研究所教授）

日文研と私

吳　京　煥

私は韓国の大学で日本文学を教授・研究する者であるが、今日はこの場を借りてそのような自分の職業について少し考えてみたいと思って筆を取った次第である。だからと言って別に外国文学は翻訳同様不可能であるとか、そういう小難しいことを言うつもりはない。ただ日本文学の研究を仕事にしている人間の脳裏をたまに掠めるものがあるので、それについて考えようというのである。

文学は感動を媒体にして影響を及ぼす言語体系である。影響は変化を意味する。そして変化は新生の機縁になることもあれば、不安を与え、混乱を引き起す場合もある。日本文学が私に影響を与え、変化をもたらしたことは確かである。ところが、そのための不安と混乱も同時に経験して来たし、なお現在に於いて経験しつつあることもまた事実である。それは私が日本文学に対して享楽主義者や唯美主義者にはなり切れない人間であることへの証拠であろう。要するに純粋な耽溺者にはならないのだ。それは私が文学に対して真正な理論家だからではない。恐らく私の中にある韓国人としてのアイデンティティーなるものの固執のためであると思っている。日本文学への感情移入と自分の国民的アイデンティティーは一見無関係のように見えよう。しかし、その両者は自分の中のどこかで触れ合っている。そして、その理由について私はまだ答えを出せずにいる。

その未解答の問題には、自我の形成や歴史・伝統など様々な難問が関わっていよう。ただ外国文学に向き合う人間として堅持すべき態度、あるいは心得とも言うべき一つの言葉を私はいまだに記憶している。それは大学院生の時の指導教授であった野口武彦先生から聞いた一言であった。その言葉を聞いた日のことはほとんど忘れてしまったが、言葉だけが明瞭に残っている。たぶん先に述べた問題が話題に上がったのであろう。先生は次のように言われた。「そりゃ呉君、外国文学の研究に携わるというのは、自分の魂を半分相手に売り渡すことだ。」

そのような先生の言葉が私に与えた衝撃を今でもよく覚えている。反撥の気持とそれから魂を半分だけ売り渡すという言葉の不可解な意味のためであったろう。魂を全部売り渡すことは自己喪失を意味するに違いない。だからと言って少しも売ることなしに取りかかっては相手は一切自分の姿を見せないに決っているという一種のジレンマに陥っている自分をどうすることもできなかった。私は「先生、その言葉いささか穿ち過ぎではないでしょうか」と生意気な返事をしてその場をやり過ごした。

しかし、先生の言葉は長い間私から離れなかった。現在の私はその言葉に対して次のような仮の結論に達している。それは日本文学という研究対象と自分との間で取るべき距離感覚であると。それでも言葉の曖昧さは残存するのであるが、先生の言葉から引き出せる最大の理解であると思っている。そして、その理解から引き出したもう一つの問題が自分の中にあった。それは日本文学の研究が眼差すべきは日本文学の特殊理論であるか、あるいは日本文学が表現した人類の共通理論であるかという二者択一の問題である。勿論そのふたつはどこかで通底しているかも知れない。しかし、そのような楽観的論理は端緒にはならない。

私は随分長らく自分に与えられた研究課題の解決に汲汲としたあまりそのような遠望をもつ

ことがなかった。自ら設定した課題の中で下した自己完結的な論理をよしとしたと言えよう。そのような私にもう少し広い展望を開かせてくれたのが日文研で過ごした一年間の研究生活である。率直に言って、その時まで私は国際的で学際的な研究方法には無関心に近い態度を取っていたが、日文研の活動とその業績に接することができるに従って自分のその時までの態度を相対化する機会を得ることになったと思う。勿論それは日本文学の内面的理解の重要性を蔑ろにすることを全く意味しない。ただ私が思ったのは、国際的ないし学際的研究が日本文学の共通理論的研究への可能性を示すものとして説得力があるということである。

日文研が創立三〇年を迎えたというお話を聞いた。お祝いを述べるとともに今後のさらなる発展をお祈り申し上げる。私が日文研に滞在して研究生活を送ったのはもう七年も前のことである。日文研は日本研究者にとって申し分のない機関であると思っている。図書館の充実と密度の濃い研究内容、そしてスタッフたちによる行き届いた研究支援は私の研究を大いに助けた。特に私に研究の方向については反省を促したことについては先述した通りである。お世話になったすべての方々にこの場で感謝の言葉を申し上げたい。

日文研滞在中に東日本大震災が起こった。そのことから受けた深い印象が消えずに残っていることを最後に申し添えたい。

（釜山大学校教授）

文化研究の懐の深さ

小川順子

一九九八年の始まりは私にとって波乱の幕開けであった。修士論文を書き上げ、漸く研究の面白さに気付き、さらに進学し研究をしていきたいという気持ちが強まっていた。修士論文のタイトルは「市川雷蔵と幻の劇団『テアトル鏑矢』」。時代劇スターの市川雷蔵を研究したものである。当時の私の中では、市川雷蔵をライフワークとして研究し続けていきたいという気持ちももちろんあるが、彼を永遠のスターたらしめた時代劇映画をきちんと研究し、その中で彼をきっちりと位置付ける必要性をヒシヒシと感じていた。雷蔵を研究対象とすることで、時代劇映画の魅力に取りつかれ、なかでも時代劇映画の醍醐味と言えるチャンバラ／殺陣への関心が強まっていったと言い換えてもいいだろう。当時は欧米が主流のフィルムスタディーズがようやく日本にも浸透してきて、映画を研究することが一般化してきていた。とはいえ、作品論でもなく作家論でもなく、どのようにチャンバラにアプローチしていけばいいのかは、自分の中でまだ確立できておらず、迷いの中それでもチャンバラを研究したいという気持ちが勝っていた。

当時の所属大学院にはまだ博士課程がなかったために、研究を続けたければ、他大学の大学院に進学するしかなかった。修士論文をひっさげ、研究が出来そうだと判断した大学院をいくつか受験した。世間知らずであった私にとって、その時に遭遇した出来事は予想を超えるもの

であった。まず、修士論文そのものを、学術的ではないと否定されることがたびたびあった。市川雷蔵のようなミーハーがもてはやす時代劇スターについて語るのは、一種のゴシップを含む芸能ネタであり、学術とは関係がないというような言われようだった。それに輪をかけてショックだったのは、博士論文のテーマとしてチャンバラを研究したいと言った時の反応だった。ほとんどの面接では嘲笑の嵐だった。中には大学院での研究を馬鹿にしているのかと言わんばかりの不機嫌さを示されることもあった。映画は研究対象として認められてはいても、その中でヒエラルキーがあり、時代劇映画／チャンバラは研究対象としてはあり得ないという反応ばかりであった。血迷った小娘が場違いのところに来ていると思われたらしく、ことごとく落ちてしまった。その中に総合研究大学院大学（総研大）文化科学研究科国際日本研究専攻の受験があった。あまりの面接官の多さにもはやどう反応されているのかさえ判断できず、ただただ緊張のまま部屋を後にした時、これが最後の受験校だったのでお先真っ暗な気分で帰宅したのをよく覚えている。総研大の国際日本研究専攻と言えば、日文研の先生方が指導に当たる。当時日文研には映画研究者はいなかったため、そのこともあって、またもや「チャンバラなんて」と思われたに違いないとひどく落ち込んでいた。が、なんと合格し、四月から研究への道が開かれたのである。唯一、日文研だけが研究のチャンスを与えてくれたと言って過言ではない。チャンバラを研究することを受け入れてくれた日文研の懐の深さに感謝し、その時はあまりの嬉しさに舞い上がってしまった。その後筆舌に尽くしがたい研究の厳しさを思い知らされることになるとは露知らず…。

　さて、チャンバラ映画を研究対象にしたのはいいものの、まだレンタルはＶＨＳの時代。日本映画はコストも高く、すぐに絶版になる上、そもそも時代劇を置いているレンタルショップ

が限られている。戦前の映画はほとんど残っておらず、残っていても断片であったりする。まずは映画を観なくては話にならない。ただ、ラッキーだったのは、日文研が京都にあることだ。東京の方がおそらく名画座などで古い映画に触れる機会はたくさんあるだろうが、京都は何といっても時代劇映画製作のメッカである。時代劇映画に限ると、恵まれた環境である。

印象深い例を挙げたい。太秦の大映通り商店街に空き店舗があった。倉庫かガレージのようながらんとした空間だった。期間限定（半年間だったと思う）で、そこで時代劇映画を上映することになった。壁一面に、東映や大映のポスターが貼りめぐらされ、パイプ椅子が並べられた簡易映画館となった。映写機はたった一台。一巻回すごとに明かりがついて休憩、フィルムの交換となるという普通では考えられないが、何とも和やかな空間であった。映写を担当していたのは元映写技師。場所は撮影所が多かった太秦という事もあってか、観客にはエキストラで映画に出たなど、上映される映画に何らかの形でかかわった人が結構いる。休憩の合間に、そういった人たちの話を聞く機会が得られるのは貴重な経験であった。京都に限らず、京阪神と範囲を広げて探せば、かなりの映画をスクリーンで見ることが出来た。次はいつその映画を観ることが出来るかわからず、必死でメモを取りながら観たことも記憶に残ってよかった。もう一例挙げたい。阪東妻三郎映画祭を観に行っていた時である。阪妻のファンは圧倒的に男性が多かった。おまけにかなりの高齢層だ。そのような観客に交じって毎日足繁く通うものだから、観客の「お爺様」たちも当然私に興味を持つようになり、休憩の度に話しかけてくる。「あんた、若いのに阪妻好きか」「阪妻はええよなあ。あの映画はな…」といった感じで、阪妻への熱い思いをたくさん話し出す。当然、阪妻が生きていた時代を知らない私にとって、それがどれほど貴重な話であったことか。

日文研の先生方も映画好きな方はたくさんいらっしゃる。発表の時に、ついつい対象映画への愛が、変わった指摘となって表れることもある。不思議なことにすでに「芸術」としてあるいは海外からの評価が高く多く語られてきている作品については、そういう現象はないが、プログラムピクチャーとして大量生産されたチャンバラなどについては、時々起こる現象だ。極例だが「同時代にその映画を観ていないのに何が分かる」というようなこともあった。大衆娯楽を扱うとはそういう事であることを学んだし、そういう気持ちになるほど映画への愛が深いこと、そしてそう思う人々の体験を聞くことが、研究にどれほど不可欠なものかということも学んだ。映画は今では運が良ければ観返すことが出来るようになった。しかし、同時代にどのように受容されていたのかは、作品を観るだけでは決して知り得ない。ある映画が上映された当時に常識であったたとえば噂や反応は、語り継がれたり流行現象になったりしているものでなければ後世で知ることは難しい。ある作品にまつわるいわゆる「小ネタ」のような当時の共通認識などは、おそらく忘却の彼方に追いやられてしまうことが多いだろう。それが、懐かしの映画作品を耳にすることで、「この映画は当時こういうことが言われていたけれども知っている？」という形で、教えていただくことが多かった。中には私が無知だけだったものも含まれるが、そのような話を一つ知ることで、映画の見方が変わってくる。そのために、知らず知らずに多くの先生方に指導していただいている結果となった。なんとも幸運な話である。

チャンバラ映画研究が難航したのは事実である。先行研究が少ないこともその一つだが、「殺陣」に絞り込んだ時に、映画と隣接する領域を知らないと何も語れないことが、どんどん明らかになったからだ。たとえば武術、芸能、風俗などが挙げられる。得物としては圧倒的に刀が多いため、修士の頃から居合道を習い始めたりしていた。それだけでは一部の流派の体験

にしかならないために、杖術も習い始めたが、いずれにせよ初心者レベルである。幸い、日文研の先生の中には武術をたしなんでいる方が何人かいらっしゃった。教えを乞うたことは言うまでもない。また、伝統芸能だけでなく、大量生産された時代劇映画は「髷をつけた現代劇」でもあるため、映画製作当時の流行が伝統芸能とどのように混ざっているのかを知る必要もあった。風俗も同様である。時代考証をしっかりとした上で、あえてそれを再現せずに工夫することは、製作者たちがよく語っていることである。また物語も実在する歴史上の人物や、起こったとされる歴史的事件を題材にすることは山の様にあるが、それは題材であって、それらを借りて現代劇が作られているのである。中学から歴史が苦手だった私にとっては、一から勉強し直しである。映画は虚構だからと言い切ることも可能だが、やはり最低限のことは必要である。特に「殺陣」は動きが重要だが、私たちの生活様式が激変している中、当時の動きを知る由がない。それこそ伝統として伝えられているものなどから、推測していくことになる。大量生産された時代劇映画にはパロディも多い。パロディかどうかを知るためには、その元を知らないといけない。気の遠くなる課題が山積みであった。多分野の専門家が集う日文研だからこそ、迷走する私の指導を引き受けて下さったのかもしれない。それは先輩たちにも言えることである。それぞれの研究テーマが異なっているために、逆に互いに興味を持っていろいろ聞きあったりすることが出来る。時間はかかったが、日文研で博士論文を書き上げ、なんとか今も研究者として歩み出している。

チャンバラが確立された研究領域でなかったために、様々な領域の先生方に指導を仰ぐことが出来たと思っている。何とも無謀なテーマの取り組みから始まり、あまりの無知さに半ばあきれられていたことも多かったと思うが、多くの先生方は面白がって話を聞いてくださった。

また、日文研では領域をまたいだ共同研究が当たり前で、それに末席ながら参加させていただいたおかげで、そういう研究スタイルが私の中で常識となっていた。これは今でも大きな財産だ。最近はチャンバラと並行してピンク映画に関心を持っている。日文研ならばきっと面白い研究ができると信じて。

（中部大学人文学部教授／国際日本文化研究センター客員教授）

形造り（かたちづくり）―日本将棋における敗者の美学

尾本惠市

一

私の楽しみの一つは将棋である。もっとも、このごろは集中力低下のため、指すより観戦が主である。日文研に在職していた二〇年前、嵐山在住の木村義徳プロ九段を訪ねては「飛車落ち」で教えていただいた。飛車一枚のハンデだがこれが難物で、もしプロ高段者に勝てばアマ四～五段の実力者といわれる。一〇局近く挑戦してやっと勝つことができ、日本将棋連盟から五段位をいただいた。

同氏は、昭和前半に将棋界の頂点に立った木村義雄一四世名人の三男で、早稲田大学在学中にアマ名人となり、特例でプロ棋士になるやA級（最高級）に駆けあがった異例の経歴の持ち主である。『弱いのが強いのに勝つ法―勝負の理論』（日本将棋連盟、一九八〇）や日本将棋のルーツを推定した『持ち駒使用の謎』（二〇〇一）などの著書がある。

その機縁もあり、平成九年度から日文研共同研究「将棋の戦略と日本文化」を実施した。そこでは、木村氏をはじめプロ棋士や将棋を愛好する学者（例えば、元物理学会長の伊達宗行氏）など、文・理を問わず多様な方々に集まっていただき、将棋という日本文化を歴史から娯楽、さらに勝負論から人工知能にいたる広範な切り口で分析した。二年間続けた研究会から『日本文化としての将棋』（三元社、二〇〇二）が生まれた。

それまで、大学等の学際的研究プロジェクトとして将棋が選ばれたことはなく、また将棋が代表的な日本文化であるとの理論づけもなされてこなかった。そこで私は、日本文化の条件として「伝統性」「独創性」「大衆性」の三点をあげ、将棋はこれらを完全に満たしていることを示した。

まず伝統性であるが、清水康二氏の奈良市興福寺境内での考古学調査によって、将棋駒の原型が平安時代末期の天喜六年（一〇五八）にすでに存在していて、ルールも現在とほぼ同じであったことが判明している。おそらく将棋は、僧侶の手慰みとして発達した。一方、貴族社会の記録に将棋が全く出てこないことは、囲碁との大きな違いである。なぜであろうか。

将棋の原型がいつ頃、どのようなルートで日本に渡来したのか、私は日本人の起源を研究する人類学者として大いに興味をもっている。いずれにせよ、将棋は日本で少なくとも一〇〇〇年近い伝統をもつ古い文化である。

次に独創性（ユニークさ）はどうであろうか。広くチェス・ゲームと総称される盤上遊戯には古代インドの二人制チャトランガ、ヨーロッパのチェス、ペルシャのシャトランジ、タイのマックルック、中国の象棋（シャンチー）、朝鮮半島のチャンギ、モンゴルのシャタルなどがあるが、ルール上、日本将棋だけのユニークな特徴がある。それは、「持ち駒」の存在である。

他のチェス・ゲームでは、駒の取り捨てによって、戦うにつれ駒数が減ってゆく。しかし、将棋では、相手の駒を取って「持ち駒」として再使用する。戦争に例えてみれば、一般のチェス・ゲームでは相手方をほぼ全員殺せば勝ちであるのに、日本の将棋だけは捕虜を一切差別せずに味方につけて戦う。

戦後まもなく、ＧＨＱが将棋を戦争のモデルで軍国主義をあおるものと疑い、著名なプロ棋

士の升田幸三名人を呼んで質したことがある。すると升田は、「タバコを一本くれ」といい、深々と吸ってからおもむろに「貴公らのチェスでは、敵を片端から殺してゆく。しかし、将棋は違う。相手の兵を殺すのではなく捕らえ、しかも奴隷にするどころか一切差別せずに自軍の一員として戦ってもらう。どちらが平和的なゲームか。」と答えた。将棋が禁止されずに残されたのは、このことによるともいわれる。

情報論的にも、将棋は優れたゲームといえよう。チェスでは戦いが進むうちに情報量（指し手の可能性）がどんどん減少してゆき、引き分けが多くなる。将棋では反対に、戦いの過程で情報量は増大してゆき、引き分けはまれである。欧米の著名なチェス・プレーヤーの中にも、この点で日本将棋をあらゆるチェス・ゲームの中で最も進歩していると認める者もいる。

三番目の「大衆性」については、わが国の将棋人口の多さを挙げることができる。昭和五一年にＮＨＫが行った調査によれば、一五歳以上の日本人で将棋を趣味とする者（駒の動かし方を知っている者も含む）は一六・四パーセントで、これは囲碁の場合の九・六パーセントをはるかに凌駕する。木村氏によれば、囲碁と比べて一般に将棋の道具が安価であるからだという。

二

実は、日本の伝統文化としての将棋には今一つの興味深い特徴がある。それは、標題にあげた「形造り」という行為に象徴されるもので、日本文化の一つの側面にある「勝負と礼儀、または美意識」に関係する。

将棋は、数学でいえば「代数」より「幾何」に近く、九×九＝八一の升目をもつ盤面に、性能を異にする八種四〇枚の駒が様々な形で並び、協力して動きながら、最後に相手の玉（もと

もとは王ではない）を詰める（逃げられなくする）ゲームである。つまり、盤上の駒の配置が「形」であり、それによって、対局者は自分が有利か不利かを判断する。この形勢判断の決め手が「大局観」といわれる能力で、これが勝負の最大の決め手となる。

将棋は非常に複雑なゲームで、有利と思えても実はそうでないことが多く、不利と思える局面を逆転して勝つことも可能である。しかし、プロ棋士や、アマでも相当の高段者で将棋に美学を求める者は、決定的に不利になったと感じたとき、そこで「形造り」を行うのである。つまり、負けて駒を投ずるときの最終局面の形が美しくなるように作為する。

美しくない終わり方とはどんなものか。負けと判っているのに、いたずらに長引かせるために玉が逃げ回る、または自殺行為にはしる。まだ逆転の可能性があるのに気づかずに投げてしまう、などである。逆に、大差で負けそうな将棋でも、最終的に「一手違い」、つまり、相手がうっかりすれば逆転する形にすれば、実力が同等で美しいと認定される。

東京の暁星小学校に安次嶺隆幸（あじみねたかゆき）という先生がいる。彼は、将棋が教育に役立つとの信念で、希望者に課外授業を行っている。一度見学に行って驚いた。生徒たちは将棋盤を挟んで対局していたが、私が行くとさっと立って挨拶するではないか。しかも、彼らの眼はキラキラと光っている。

安次嶺先生の教育は、将棋の技術だけでなく、「礼に始まり、礼に終わる」精神を教える。しかも、感心したのは、将棋は勝つだけでなく、「かっこよく負ける」ことも大事だと教えることであった。負けることにも価値がある、と教えるのが将棋である。私も、「学校で将棋を教えよ」と言っている。

将棋は武士道と通ずるところがある。鍛錬によって技術を磨き勝負に勝つのが目標だが、徹

底した自己責任によって、醜い負け方をしないよう努める。武士道と軍国主義を同一視するのは、見当違いである。先の大戦の責任は武士道ではなく、無能なリーダーたちの行為にあった。木村義雄一四世名人によれば、彼らの誤った「大局観」が敗戦を招いた。

三

西洋起源のスポーツでは、勝者がガッツポーズをとり歓声を受ける一方、敗者は悔しさに顔をゆがめながら消えてゆく。情報論的にいえば、勝者と敗者とは1と0の関係にある。しかし、日本の武道や将棋の場合は全く違い、勝者はおごらず、敗者も悪びれるところがない。

私は、毎週日曜日のＮＨＫ教育テレビの将棋対局を観ることにしている。プロ棋士の対局態度でいつも感心するのは、その姿勢のよさである。和服に身をつつみ、正座をし、背筋をまっすぐに伸ばす。対局中、ほとんど同じ姿勢を崩さず、表情も変わらない。この姿勢が思考力を助けるのかもしれないが、日本文化の特徴としての形に関する美意識もあろう。

対局を始めるとき、上位者と下位者の区別はなく、二人は同時に深く一礼し「お願いします」という。面白いのは、勝負がついたときである。負けた方が「負けました」とか「ありません」と言って頭を下げると、勝った方は困ったような表情で同じように頭を下げ、両者はしばらく無言で盤面を見つめ合う。傍目には、どちらが勝ったのかわからない。

チェスや囲碁でもたぶん同じだろうが、将棋では、勝敗にいたった過程、つまり作戦や戦い方、正確さや見損じがなかったかなどを、勝者と敗者が一緒になって検討する。いわゆる「感想戦」である。これは、プロ棋士だけでなく、アマチュアでも有段者では当たり前のこととして行われている。

一般の人にとっては、将棋は単なる娯楽だから、面倒なことを言わずに単に「勝った」「負けた」でよい。しかし、日本文化論として将棋を見るとき、それは「勝負事」には違いないが、単なる勝ち負けを争うだけの世界ではない。二人の人間の知的コミュニケーションとして、互いに相手への敬意をもちつつ、協力して一つの作品を造る。勝者と敗者は共に価値がある。米長邦雄永世棋聖には、『共に勝つ』と題する著書がある。

なぜ形造りなどということをするのか。一局の将棋は「棋譜」という形で記録が残され、誰でも見ることができる。棋譜を見れば、対局者の能力と将棋に対する美的感覚がわかる。

かつて、米長氏と「勝負する知―将棋と学問」という対談をしたことがある。彼の三人の兄はみな東大に行ったが、彼だけは「兄貴たちは馬鹿だから東大へ行った」と言ったことは良く知られている。初対面のとき、私は「馬鹿なので東大に三〇年もいました」と挨拶した。升田幸三名人は「たどりきて、いまだ山麓」との名句を残しているが、学問でも同じである。

学者の残す論文や著書は将棋の棋譜と同じで、永遠に残り、批判の対象となる。人生の残り少なくなった私は、自分の学者人生はどうやら「負け将棋」だと感じている（教え子たちには申し訳ないが）。そろそろ、形造りに入らねば、と思う今日このごろである。

（国際日本文化研究センター名誉教授）

日文研―ギリシャと日本

イウリア（リリアン）・カラリ＝ヤナコプール

私はギリシャに生まれアテネ大学哲学部考古・美術史学科を卒業後、ギリシャ政府奨学金を得てソルボンヌ大学に留学した。パリでは六年もの月日を過ごし、今ではフランスは私の第二の故郷となっている。その頃の私は日本についてほとんど知らなかったが、船員として世界中を巡っていた従兄弟から日本の話を聞き、またパリで多くの日本人学生と知り合ったこともあり、少しずつ日本への旅が私の夢となっていった。そして、ある友人の日本人学生に招待され東京でひと夏を過ごすこととなった。ヨーロッパとは異なる文明と新しい体験。その時日本は、私にとって愛すべき第三の故郷となった。

その旅の後、文部科学省の奨学金で日本へ行くという貴重な機会を得たものの、アテネ大学での就職など個人的な理由でその奨学金を辞退せざるを得なかった。これは私の人生の中で最も大きな後悔の一つとなった。そのせいか、その後も心のどこかに「日本で研究する」という夢を持ち続けていた。

その夢は日文研のおかげで叶えることができた。日文研にはたった四ヶ月しか滞在しなかったが、それは私にとって新しい学問の旅、大きな挑戦であり、結果として本当に心地よく実り多いものとなった。この滞在の目的は、先史時代のギリシャと日本の文化的側面を学び理解し比較することであったが、私の目の前にあった日本の風景はバルカン半島南部やエーゲ海の

島々とよく似た魅力あふれる新しい世界だったのだ。日本でもギリシャでも、遊牧民や居住民といった様々な人間集団が、変わり続ける自然環境のなかでなんとか生き延びようとし、新たなものを生み出そうとしていた。人々は似たような環境条件の中で生活様式の選択を余儀なくされていたのだ。多くの人々が海のそばで暮らし、あるときは水や海の恩恵に与り、またあるときは火山や地震によってその生命を脅かされてきた。その私の研究にとって大きな助けとなったのは、日文研の図書館、その効率の良い相互貸出システム、そして客員研究者のための快適なオフィスや図書スペースであった。ギリシャでは、大学や外国の研究所においても日本考古学に関する本を見つけることはほとんど不可能なのである。

滞在中、幸いにも私は安田喜憲先生、宇野隆夫先生という日本の偉大な教授に招かれ意見交換をすることができた。その他にも、栗山茂久先生、パイ・リー先生、ジル・カンパニョーロ先生といった多くの客員研究者とも友情を結ぶ機会を得た。おかげで多くの博物館や遺跡、貝塚を見学することができ、貝製装身具や特徴的な土器、日本独自の葬制に関する知識を得ることもできた。安田先生が連れて行ってくださった遺跡と仙台の博物館での経験は本当に素晴らしいものであった。

その数年後、磯前順一先生がアテネを訪問され、滞在中に日本の宗教についての講義をしてくださった。それは私の学生にとって、日本人の宗教や社会文化環境を理解するまたとない機会ともなった。

今でも、日文研でのすてきな思い出の数々をありありと思い出すことができる。私は研究所の裏にある森と、夏に咲くクチナシの花の香りが大好きだった。アパートの窓から臨む夕陽に映える京都の町並みと、午後の講義、そしてカクテルパーティーが本当に懐かしく思い起こさ

れる。

帰国後私はヨーロッパ、アフリカ、アジアの新石器時代についての本をギリシャ語で執筆したが、拙著の一章は日本の先史時代に関する日文研での研究成果である。ささやかではあるが、これは私から日文研への恩返しでもある。講義にしてわずか二時間ほどの内容だが、知る限りギリシャでは唯一の日本考古学に関するものであろう。今となっては叶わぬ夢だが、もう一度日文研を訪問し、さらなる理解を深める機会を得たいと切に思っている。

文学、歴史、考古学は過去の社会をより良く理解するための基礎として切り離せない関係にある。ギリシャや日本のような偉大な古代文明は、物的証拠を無視して語ることはできない。いつの日か、私の講義を受けた教え子の中から日本で実際に資料を検証しながら日本考古学を学ぼうとする若者が巣立ってくれることを願ってやまない。

（アテネ大学考古学科教授）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

音楽学的見地からみた日文研の思い出

ルチアーナ・ガリアーノ

私の脇机には白と青のエナメル皿がある。富士の絵が描かれ茶色の角がある（ひとつの角は少し欠けている）。あまりきれいでないが、ひとつの物語がある。私は二〇〇七年九月から二〇〇八年七月まで日文研ハウスで客員研究員として暮らした。偉大な歴史学者と畏敬の念を抱いている愛すべきジェームズ・マクマレン教授の部屋の向かいで、彼は京都市内の蚤の市に出かけ素敵な磁器を集めていた。ある時帰ってくると、富士山の皿しか見つけられなかったが、あまりひどくて買ってこなかったと言った。次の時、蚤の市に出かけると、彼の言うのがどの皿かすぐに分かり買ってきた。だからそのそれほどひどくないと私が思う皿は、特別な人生の一時期をすごした日文研の研究と暮らしを思い出させてくれる。刺激的で知的に豊かで多彩な場所、興味を湧かせる著名な学者、最高に有能で親切なスタッフのなかに理想的に没頭できたことを。

二〇一四年九月、人生で二度目の日文研生活を送った（二〇一四年九月～二〇一五年三月）。それはヴェネチア大学の不当な措置のためにキャリアが閉ざされ、憂鬱症に陥った後だったので、研究生活への復帰、人生への復帰のような滞在だった。最初の客員では能と音楽という一種秘密めいたテーマの研究に打ち込み、多くを学び、すべては後の研究に役立った。数年後、再び九月に戻ってくると界隈がずいぶん様変わりしたことに気付いた。富裕な住宅地域とな

り、ぐんぐん拡大する京都大学のキャンパスが近くにできたこともあって、交通は便利になった。しかし基本的な生活の便はまだ遅れていた。有名なスーパーマーケットがあるだけで、近くにレストランも店舗も喫茶店やバーもない……。今度は研究テーマがずっと世俗的であったので、修道院のような日文研ハウスで暮らすことはやめ、静かで便利な桂の付近に住むこととした。こうして私の今の関心とも通じる京都の洗練された音楽生活を楽しむことができた。現代音楽に熱心な御所南の小さなカフェーのコンサートや催しによく出かけ、偉大な参加者や演奏者に会った。たとえば古い友人の作曲家の近藤譲や西村朗、ピアニストの大井浩明。そこで新たに知ったヴァイオリン奏者辺見康孝には、その後東京で企画したレクチャー・コンサートに出演してもらった。もうひとつの好きだった場所は先斗町の元気のいいライブ・バーで、小さくて満員でにぎやかで、最新流行のジャズやフォークを聴けた。ほかにも烏丸に大人向け、アイドルなりそこね向けの場所があったし他にも京都大学の近くに……。京都芸術センターで聴いた日本の現代音楽の偉大なコンサートも複数あった。他にもいくつかの劇場のイベントでも音楽はいつでも舞台の基本要素だった。毎朝毎夕、元気を出してバスに乗って季節ごとに変わる丘に立つ日文研に通った。

この第二回の客員の研究テーマは一九五〇年代末から六〇年代にかけて、国際的な前衛シーンで重要な役割を果たした数人の日本人作曲家・音楽家・アーティストで、後にジョージ・マチューナスによって創立・組織され、フルクサスという名で知られる「非芸術（ノン・アート）」運動の先発隊を果たした。

私のフルクサスへの関心は一九七〇年代にさかのぼる。当時私の個人的な態度はそれまでに見たり読んだりしていたフルクサス・アーティストの態度とかなり一致していた。八〇年代に

イタリアの国立ラジオＲＡＩの文化チャンネルでこのラジカルな前衛についての四回続きの番組を作ったのだが、一度も放送されずに終わった……。話題や素材がまだ過激すぎたのだと思う。それから何年も日本の現代音楽の調査研究に明け暮れ、日本のフルクサス・アーティストの素晴らしいグループと出会った。近づきたいという欲求が再燃した。国際交流基金を得て二〇一一年九月から一一月に始めた。日文研の二度目の客員は願ってもないことで、おかげで研究を深め終えることができた。

フルクサスが差し出す多彩なイメージ―奇妙で子どもっぽくおかしなことをする人たち―を別にして、運動が今日の世界におけるアートの役割、アーティストのアイデンティティにとって中心軸だったことは今では反論の余地がない。その美学―多くの仕掛けとともに―はあまりに深く今日の社会状況に埋め込まれているので、彼らが元々どこから現れ出たのか見分けられなくなっている。フルクサスは一九六〇年代の最もラジカルで（過激・根本的で）実験的な芸術運動で、芸術・文化についての決まりきった考えに挑んできたと記されてきた。コンセプト・アート、インスタレーション、パフォーマンス・アート、インターメディア、ヴィデオのような現代アートのカギとなるフォームの誕生に中心的な役割を果たした。

フルクサスは一九五〇年代末から六〇年代末にかけて展開した多くの前衛運動のなかでも特に独創的だった。意図しなかったことだが、それは史上最初のグローバルな前衛芸術運動だった。アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、日本のアーティストを一緒にしたからである（時には文字通り同じ場所で同じ作品の制作に関わった）。これはフルクサスがグローバルな運動であっても、いわゆる先進国限定だったことを意味する。それは運動の本質を構成する特徴だった。アジアにおける近代化／西洋化の先駆としての日本の役割は、悲劇的でかつ積極的な

意味合いを含むとはいえ、フルクサスにおける役割を定めるのは重要だった。

もうひとつのフルクサスの革命的な特徴は、ジェンダーと差別の問題に向かったことで、先進諸国の社会でやっと表面化し始めた時期に、穏やかな意識を持って立ち向かったのを、私は明らかにしてきた。ここでも女性の地位、ジェンダーの役割、性差別についての日本の姿勢は戦後女性の世代の感性を形作っていて、日本のフルクサスの女性アーティストの大きな存在はそれをはっきり物語る。

最後に（私の立場からすれば小さくない）点は、フルクサスが芸術運動や潮流のなかで音楽が主要な役割を果たした最初の、そして今のところ唯一の運動であったことだ。多くのメンバーは訓練を受けた音楽家だった。作曲や演奏に関わり、イベントはしばしば音楽的なラベルやタイトルと結びつけられた。芸術的な試みはよくコンサートのような音楽世界の表象の型のなかで披露上演された。音楽演奏の身振りや設定、さらには音自体と結びつけられることがあった（ただしフルクサスの拡張コンサート活動の必須ではなかったが）。研究で発見し、本で書いたことは、音楽性が日本のアーティストを束ねるカギの要素だったことである。音楽性は運動を全体としてまとめるのに重要な役割を果たした。

国際的なフルクサス運動の観点でいうと、日本人アーティストの貢献は本質的だった。運動の形成に基本的な役割を果たし、彼らの芸術的試みはとりわけラジカルで、詩的で、奥深く、首尾一貫していた。フルクサスの歴史とアウトプットは、日本人アーティストの作品も含め、広く（また深く）研究されてきた。しかしこれまで運動のなかで日本人とそれ以外の区別をしてこなかった。だが日本のフルクサスには自身の歴史があり、強烈な一〇年間に芸術や知性の場面で存在を示し続け、意識下で無言だったが深い影響を果たしてきた。それはほかのどの国

にも見出すことができない。彼らのプロジェクトは西洋側の同胞よりも洗練され明瞭に記されていた。多層的で複雑な意味を持った作品は、大規模な組織や協力なしにはむずかしかった。イベントはいつも一般と専門のプレスによって報道され、多くの心の開かれた観衆が参集した。これらはすべて日本のフルクサスに典型的な一面だった。

フルクサスのアーティストから国籍をベースに日本人を選び出すことで、日本の独自性という問題にぶつかった。それは危険な基盤である。一人のアーティストの作品に文化的な含意が隠れているのは当然としても、アーティスト個人としての独自のアイデンティティを一般化したりたぶん中立化せずに、文化的アイデンティティの特定の場を指摘するのはむずかしい。さらに日本対西洋、ラジカル対リアリスト、近代対伝統といった偽りの二項対立を超えるのもまたむずかしい。日本の個別の位置を探る小道は入り組みたどるのがむずかしい。「文化の場」問題が浮上するからだ。この点に関して、東京芸大時代からの古い友人の細川周平教授との議論、近代日本についての知識の宝庫、アンドリュー・ゴードン教授、アンドリュー・ガーストル教授との意見交換は基本だった。日文研フェローシップが与えてくれた十分な研究時間のおかげで、資料を見つけ、重要人物と話し、仲間の研究者と会話することができた。図書館のすばらしい蔵書と親切で有能な図書館員―江上敏哲さんのスタッフ一同―には、私の許しがたいようなミスがあっても助けてもらった。

吼える六〇年代の生き生きしたシーンに活躍した数名の日本人前衛アーティストの肖像を浮かび上がらせながら、日文研からいただいたことを少しでもお返しできたらと思う。この仕事に、日文研からの援助は決定的だった。

参考文献

Friedman Ken, 1998. *The Fluxus Reader*, London: Academy Editions
Kellein Thomas, 2007. *The Dream of Fluxus. George Maciunas: An Artist's Biography*, Köln: Edition Hansjörg Mayer
Luscheticｈ Natasha, 2014. *Fluxus. The Practive of Non-Duality*. Amsterdam: Brill/Rodopi

（国際日本文化研究センター元外国人研究員）
原文：英語
翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

国際日本文化研究センター三〇周年を祝す

川勝平太

日文研創立三〇周年おめでとうございます。

正式名称「国際日本文化研究センター」は「日文研」「ニチブンケン」'Nichibunken'の名で世界における日本研究のメッカとして内外で広く通用するまでになりました。三〇年間の成果の現れであり、ご同慶の至りです。

英語の正式名称はInternational Research Center for Japanese Studiesですが、私がJapanese Studiesの名をもつ海外の研究機関を最初に知ったのはイギリス留学中のことでした。オックスフォード大学のNissan Institute of Japanese Studies（日産日本研究所）です。オックスフォード大学の希望と日産自動車（株）の援助とが相俟って一九八一年に設立されました。私はその開設記念式典などに日本人留学生代表として招かれたので鮮明に記憶しています。日文研の創設に先立つこと六年前でした。

オックスフォード大学にはInstituteが当時、Oriental Institute（東洋研究所）、Institute of Agricultural Economics（農業経済学研究所）、Institute of Archaeology（考古学研究所）、Institute of Economics and Statistics（経済学・統計学研究所）、Mathematical Institute（数学研究所）などがありました。Japanese Studiesが大学公設のInstituteになったことで、日本学が数学、経済学、考古学などと並ぶ学問となった――これがその時の感懐でした。

日文研が創設された一九八〇年代の日本は注目に値します。世界の中の日本の地位が劇的に上昇したからです。その前の七〇年代にオイルショックが世界経済を襲いましたが、その危機を最も見事に切り抜けたのは日本経済で、七〇年代末にはハーヴァード大学のエズラ・ヴォーゲル教授が『ジャパン・アズ・No.1』を著しました。

一九八五年、先進国首脳の「プラザ合意」がありました。円の対ドル相場を一気に二倍にするほどの激しい円高誘導を決めたサミットです。その背景には、日本製品には、価格でも品質でも、欧米製品が太刀打ちできないという現実があり、世界経済に占める日本のプレゼンスが際だったのです。

同じ一九八五年、京都賞が設立されました。先端技術・基礎科学・思想芸術の三部門からなる国際賞です。毎年、ノーベル賞級の学者・思想家・芸術家が選ばれます。数ある国際賞のなかでの特徴は関連部門の「最高の人」を日本人のみで選考していることです。選考できるということは、日本人の知的水準が一九八〇年代半ばには世界レベルになっていた証しです。

八〇年代の日本人学者の研究成果が続々と国際的に認められるのは少し後になります。二一世紀のノーベル賞受賞者の数はアメリカについで日本が世界第二位で、イギリス、ドイツ、フランスなどを寄せ付けません。ノーベル賞受賞の日本人の研究はだいたい八〇年代のものです。ノーベル賞は、文学賞と平和賞をのぞけば、物理学賞、化学賞、医学・生理学賞、経済学賞など「洋学」の賞からなります。それら「洋学」のどの分野においても本場の西洋に勝るとも劣らない学者を続々と輩出できているのは、非西洋圏では日本だけです。

そのことの意義は何でしょうか。西洋由来の学問（洋学）は、江戸期には蘭学として、明治期以降は滔々と舶来しました。明治維新期には洋学を教えられる日本人がおらず「お雇い外国

人」に頼りましたが、留学生を欧米に派遣して現場で学ばせ、国内では明治中期から洋学の全分野にわたる翻訳運動をすすめ、大正期には日本人が日本語で洋学の中身を習得できるようになりました。西洋のどの国の文学も翻訳され、「世界文学全集」が何度も編まれています。洋学の全領域の摂取に百年ほどかかりましたが、それ以後は洋学を自家薬籠中のものにしました。洋学摂取の時代が一区切りしたということです。

Japanese Studiesは日本における学問史の中でどのような位置を占めるのでしょうか。日本史を大まかに古代・中世、近世、近代にわけると、各時代の主流の学問があります。古代・中世は仏教、近世は儒学、近代は洋学です。いずれも舶来の学問で、国づくりの戦略として導入されました。仏教は鎮護国家を、儒学は徳治国家を、洋学は国の西洋化を目的に国家が旗を振り積極的に受容しました。

古代の仏教は隋・唐代中国からもたらされましたが、八九四年に菅原道真が遣唐使派遣の中止を建議したころから自家薬籠中のものになります。中世の仏教の新味は禅です。禅の自力本願は鎌倉武士の死生観にかない、武家社会の根幹をなす思想として歓迎されました。禅は、栄西・道元・聖一国師など留学生だけでなく、南宋が一三世紀末に滅ぶ前後に亡命してきた中国人禅僧学者が、北条氏の保護のもとで、鎌倉五山を興したのが発展の基礎になりました。禅は、室町の足利氏も保護し、京都五山が確立したころから自家薬籠中のものになりました。「ゼン（Zen）」は中国音でも梵語音でもなく日本語の発音であり、それは日本の禅が世界に通用している証です。江戸期の儒学は中国の古典の習得にあきたらず、日本の古典（古事記・万葉集）を重視する国学者が台頭するころから自家薬籠中のものになりました。

近代日本の洋学が自家薬籠中のものになったのは前述のように一九八〇年前後のころです。

私の専門は経済学ですが、そのころにイギリスに留学していましたが、邦訳や日本人学者の文献で勉強したマルクス経済学の水準が、イギリスの学者とまったく遜色ないことを知って拍子抜けするとともに自信をもったのを覚えています。

八〇年代には海外からの留学生の受け入れを目指す動きが活発になります。八〇年代に「留学生十万人計画」が立てられました。平成期にはいると日本人の海外留学より海外から日本への留学生の数が上回ります。日本からの留学は六万人くらいで頭打ちになり、海外からの留学生の数は毎年数千人の規模で増え続けており、現在は二〇万人を超えています。青年は憧れる国に留学します。日本の青年がかつて憧れた欧米諸国はそうではなくなり、逆に、海外の青年が日本に憧れて来日しています。

では、海外の青年は何を教わりたくて来日するのでしょうか。一つの事例があります。石川県は海外から日本に留学している百カ国を超す留学生を相手に「ジャパン・テント」という夏期大学を八〇年代から毎年開催しています。カリキュラムは当初は国際経済、国際政治、地球環境などでしたが、留学生がそれらよりも加賀・能登の文化や歴史に圧倒的に関心のあることがわかり、一〇年経った頃から、加賀百万石、能・狂言、加賀・能登の工芸（友禅、漆器、九谷焼）、加賀料理・和菓子、能登の風物、日本人の生活習慣、加賀出身の西田幾多郎・鈴木大拙の紹介などのカリキュラムを組むようになり、それを「ふるさと学」と称し、すっかり定着しました。外国人学生に地域の「フィールドワーク」をさせているのです。石川県総体がフィールドでありテキストです。そのころから日本各地で例えば「東北学」「京都学」「長崎学」「薩摩学」等々の地域学が勃興し、一般市民を相手に「検定試験」まで実施されるようになっています。

私が預かっている静岡県では平成二五年六月に富士山が世界文化遺産となりました。以来、今月（平成二八年十二月）まで四三ヶ月の間に茶畑（世界農業遺産）、南アルプス（ユネスコ・エコパーク）、駿河湾（世界で最も美しい湾の認定）、源兵衛川（世界灌漑遺産）等々、なんと四四件の地域資源・人材が世界クラスに認定されています。平均すると一ヶ月に一件の認定ということになり、ものすごいスピードです。静岡県だけでそうですから、まして全国においてをやということです。

学問はそれが生まれた風土と無縁ではありません。経済学の父アダム・スミスの『国富論』は分業と自由貿易を主張していますが、イギリスをフィールドとした経済論です。マルクスの『資本論』も叙述の八割はイギリス経済の実証分析です。イギリスのフィールドが日本の現実と違うのは当たり前ですが、それでも学ぶのは理論を通してイギリスを日本が目指すべき現実のモデルとしたからです。今や日本が諸外国から学ばれるフィールドになりました。

さて、Japanese Studies にかかわる最大にして本質的な問いは「日本とは何か」というものでしょう。日文研創設者の梅原猛氏の広範囲の関心も、中心はその問いをめぐるものといえます。仏教には個人の生死から宇宙におよぶ世界哲学、儒教には『論語』を軸にした人生哲学、洋学にはキリスト教があります。では Japanese Studies におけるそれにあたるのは何でしょうか。その回答として梅原氏は「人類哲学」を提起しました（『人類哲学序説』岩波新書、二〇一三年）。

人種・宗教・地域を超えた「人類哲学」を日本が唱えうる根拠は何でしょうか。人類には全体性があります。全体性の根拠の一つは日本古代に見出されます。古代日本に仏教や儒教が伝わったことは常識ですが、梅原氏の『翁と河勝』や井上章一氏の『キリスト教と日本人』（講

談社現代新書、二〇〇一年）が示唆しているように、キリスト教の影が濃厚です。

それだけではありません。日文研の近く、太秦の広隆寺に半跏思惟像弥勒菩薩が安置されています。六〇三年に聖徳太子が秦河勝に下賜した弥勒の像です。弥勒は梵語の「マイトレーヤ」の漢字表現ですが、古代ペルシャ語のミトラ（ミスラ）の転訛です。ミトラはアフラ・マズダと並ぶゾロアスター教の神です。弥勒にはゾロアスター教の影も濃いのです。

そもそも弥勒が「像」であること自体、アレキサンダー大王のインド遠征の遺産としてギリシャの彫刻文化がガンダーラに入った帰結ですから、ギリシャ文化も影を落としているのです。

正倉院の一万点に及ぶ宝物は、朝鮮半島、中国、シルクロードとその周辺地域、インドなど南アジア、ペルシャとその西のギリシャ・ローマに及んでいます。飛鳥・奈良の古代日本には「汎ユーラシア」と形容すべき全体性が胚胎していました。

飛鳥・奈良の古代日本に蒔かれたユーラシア各地の種が、縄文文化と弥生文化とに耕されていた肥沃な大地の上に順次花開いてきたのが日本の歴史であり、いわば即自態としての全体性が徐々に対自化されてきたといえます。そのような即自態としての、日本の全体性を対自化した最新の成果が人類哲学の提示であるともいえます。日文研の Japanese Studies は国際性・学際性・総合性を備えています。日文研の存在は使命的です。

（静岡県知事）

至福の一一年

木村　汎（ひろし）

一

〝日文研〟での丸一一年間は、極楽だった。早（？）朝、出勤すると、コモンルームのお嬢さん方が笑顔で研究室の鍵と伝言メモを渡してくれる。研究に疲れると、コーヒーがしゅんしゅんと沸いているコモンルームへ出掛ける。世界中から集まった学者たちと談笑して、行き詰った研究のヒントを得るなどして、再び机に向う。昼食は所内付属の「赤おに」で済まし、研究室のソファーで二〇分間、仮寝。再びコーヒーを飲んで、深夜まで研究に没頭する。

研究費は潤沢で、外国人学者の招聘を依頼する国際電話などを自らの研究室に居ながら公費でかけることすら可能だった。もし研究上の支障が生じるならば、管理部へ足を運べばよい。彼ら事務方の人間は、我儘きわまる学者を助け、わが国の日本研究の水準を上げることが、ひいては国際学術交流に資する道である。こう確信してやまない実に有難い集団だからである。

なかでも、私がとりわけ感動し重宝したのは、図書館（正確には、情報管理施設）の文献資料取り寄せサービスだった。何しろ研究上必要な文献を一枚のメモに記し、係の人に手渡せばよいからだった。数日経つか経たないうちに世界中の図書設備から探し出された当の資料が、時には現物で、さもなければコピーの形で届く。個人では到底手に入らない資料や情報が日文研の名声、信用、相互サービス、ネットワークのお陰で、ほとんど瞬時に無料で入手可能にな

る。これは、まるで奇跡だ。

ちなみに定年退職後の私が右に記したほとんど全ての便宜を瞬時にして喪ったことは、改めてつけ加えるまでもないだろう。午前中、ときには午後も費やして、家内――わが家では「専務」と呼ぶ――との二人からなる零細企業方式で、日文研時代の効率の何十分の一かをやっとこさこなしている。

二

もとより、私は歴代の所長をはじめ常勤、非常勤、客員教官の同僚たちから数々の恩恵と刺激を受けた。今回は、紙数の制限上、そのうちの一点に限って以下、記すことにしよう。それは、論文の書き方に注意するようになったことである。

日文研に赴任してまず気づいたのは、文科系の人間が多いせいか、所員たちのなかに他の集団では滅多に見つからない文章道の達人が揃っていることだった。噂によると、「表現能力が劣る者は、研究者としては不適格」。これが、梅原猛初代所長による所員選びの一つの基準だったという。（これを聞いて、政治学担当の私の任命が、他の一四人の教授に比べ一年も遅れた理由にはじめて納得がいった。）たしかに、梅原所長自身が小説まで物される名文家なのである。一例を挙げるに止めても、著作『法然の哀しみ』のネーミングには唸らされる。

赴任後の私がまず参ったのは、杉本秀太郎教授の文章。書き出しの一行を読んだだけで、日本一の文章の達人ということが明らかになる。先生は私の存在など全く意にとめられなかったが、私が唯一ロシア語を読む同僚だということが分ったあとは、ロシア文学についてポツポツと話し相手になってくださるようになった。チェホフの短篇のなかでは『かもめ』がお好きだ

とか、司馬遼太郎の作品では『ひとびとの跫音』が一番よいなどと語ってくださった。慌ててそれらの作品を読み直してはみたものの、所詮感性の劣る私には先生の意味するところが今ひとつ分からなかった。

杉本先生が〝西〟の名文家ナンバー・ワンならば、〝東〟のそれは間違いなく芳賀徹先生だろう。フランス文学を専攻する稀代の名文家、二人が、同時期に日文研に在籍したことは、まさに奇跡としか評しようがなかった。「人たらしの名人」梅原所長のみがなしうる凄腕人事の結果に他ならなかった。その恩恵を受けて、私ごとき非文学的人間ですらも、お二人をキャップとする北海道アイヌ探訪旅行へお伴できる機会などを享受した。杉本氏は、文章のみならず、暇さえあればピアノに向い、デッサン帳を広げる多才多趣味のルネッサンス人間だった。芳賀氏も負けていない。蕉村にたいする氏のいれ込みと業績は、氏自身の単に詩歌ばかりでなく、絵画にたいする情熱と造詣の深さを物語っている。氏の名人芸の文章からは単にビジュアルな映像のみならず、馥郁たる香りまでもが立ち昇ってくるのだ。

私はごく短期間、日文研研究主幹の一人に任命され、どうしても二、三の公文書を作製せねばならぬ羽目に陥った。そのとき、私の文書に真赤になるまで朱を入れたのは、石井紫郎教授だった。先生は、日本法制史の第一人者であるばかりか、東大副学長を勤めた後、日文研へ赴任されたばかりであった。東大法学部出身の高級官僚を相手にして一言も文句を言わせない文章を、自らワープロを打ってすらすらと作製されるのだから、参った。

日文研で唯一困ったのは、自分のメールボックスを開く度に三日に一度くらいの割合で、たんに梅原、河合隼雄、山折哲雄ら歴代所長ばかりでなく、研究熱心な所員の出版物が献本されているのを見出さねばならないことだった。何時まで経っても、そのようなプレゼントにたい

してお返しができない自分が不甲斐なく、つくづく惨めに思えるからだった。有難い献本とはいえ、それら全てに目を通していては、自分自身の研究や執筆の時間がなくなってしまうことも憂慮された。そういう訳で、在職中、井波律子氏による旺盛な中国文学研究を充分にフォローし損なったのは、残念至極だった。退職後ボツボツ読み直してみて、井波氏もまた抜群の文章力の持ち主であることが改めて分り、脱帽した。

三

日文研退職後は、老人が邪魔すべきではないと心に銘じ、一、二度の祝賀会参列を除いては日文研へ足を向けたことはない。それでも、新聞紙上などで日文研の発展を興味深く見守っている。とりわけ、現教職員の方々の活躍を知る度にＯＢの一人としてこのうえない喜びにひたっている。文章という点に限って述べると、最近例えば次の方々が私の目を引いた。

猪木武徳氏。父君は、京都大学名誉教授（政治学）の猪木正道氏。正道教授は、文学作品では短篇小説よりも、ドストエフスキイ、トーマス・マンなどの長篇小説を好まれた。武徳氏も父親譲りの良き伝統を引継いでおられ、読み込む対象が古今東西の巨人ぞろいであることには改めて驚かされる。アリストテレス、アダム・スミス、トックビル、福沢諭吉…等々。新しいところでは、誰もが読んだ振りだけで済ましがちなトマ・ピケティの膨大な書物を原典でじっくり丹念に読んでおられる。ここまでは父君譲りであるが、文章表現となると少々異なる。正道先生は歯切れがよく明快で、戦闘的でさえある文章を書き、読者を惹きつけた。ところが、武徳氏は、いかにも二代目らしく、おっとりとした筆使いで、悠久の真理を求めて諄々と説かれる。われわれ専門外の者から見て誠に器の大きい学者だと敵服せざるをえない。

井上章一氏は、未だ若い内から〝井上節〟としか他に評しえようのない独特の語り口を確立し、一家をなされた。たとえば近年の『京都ぎらい』にも、それが現れている。誰からも決して批判されないように前もって用心深くしつこいまでに四方八方に防衛網を張りつつ、自身の所論を進めてゆく。その後になって、結局、自説以外の正論が世の中にありえないことを、慎しみ深く、しかし断乎として主張される。この手法こそは、まさに京都人の生き方の真骨頂ではないか。すべての読者が気づき同意するように、井上氏ほど京都を愛し、京都贔屓の人間も珍らしい。そうでなければ、猪木武徳氏と同様、「京都の名門、洛星高校」でフランス語を学んだ語学の達人が、故桑原武夫、高坂正堯氏などと同様に東京人相手に意識的に京都弁をしゃべりつづける筈がなかろう。

要するに『京都ぎらい』は、新書版の分量に過ぎないものの、会田雄次著『アーロン収容所』と並びたつ戦後日本の画期的出版物である。かつてマルクスは、階級の差別さえ根絶すれば、人類全員が幸福になる共産主義社会に生きることが可能になる――このようなナイーブきわまる性善説にもとづく史観を提唱し、事実によって見事に裏切られる羽目になった。人間は人間である限り、自分とは異質な存在を発明し創り出し、彼らにたいする差別意識によって己の優越感をエンジョイしようとする。この業ともいえる人間性の本質を京都人に託して改めて剔抉してみせた点で、『京都ぎらい』は和辻哲郎『風土』以来の快挙だろう。

梅原猛初代所長は、故園田英弘氏を伴って上京し、文部省の屋根裏に住み込むまでして日文研の創設に命を削られた。そのような苦労は、実りの秋を迎えつつある。今や梅原先生は微かな、だが莞爾たる笑みを浮べていらっしゃるに違いない。

（国際日本文化研究センター名誉教授）

来る三〇年に期待する

金　弼東

世界の日本文化研究を先導してきた「国際日本文化研究センター」（日文研）が創立三〇周年を迎える。心からお祝いを申し上げたい。日文研は、一九八〇年代の前半に京都市の文化的な諸構想の内の一つとしてあげられた。日本精神の涵養とその国際化を通じて「国際国家日本」を建設しようとした中曽根総理と、京都の著名な学者達の意見統合によって、日本文化を研究する総合的研究機関として一九八七年に旗をあげた。国家的次元で日本文化の総合的研究を通して、文字通り「大国日本」の民族・文化の優秀性を世界に発信しようとする、戦略的アプローチにより設立された代表的な機関である。要するに、「日本人のアイデンティティ」を確立し、そして国家意識や日本精神を涵養しようとした時代的イデオロギー状況と無関係ではなかった。

そのため日文研は、計画の当初から「大国化」を主導した中曽根総理の政治的意図と、地域の活性化をはかる地元京都の財界の意図、京都の文化首都化等をめざす京都の有力学者の意図との性急な合意の行く末を危惧する声も多かった。政治主導のもとに急ピッチで設立された日文研が、どこまで民主・自主・独立の精神を貫いて、日本文化研究に邁進できるかという批判であった。このような批判には多くの進歩的な学者や団体を含め、海外からも同じく批判的なスタンスで同調する動きも少なくなく、日文研の前途は必ずしも楽観的ではなかったといえよう。

だが、日文研は設立当時の「日本の国家主義の宣伝機関」というイメージを払拭し、時間が経つにつれ「研究センター」としての本領を発揮し始めた。基本的には「研究」「国際」の意味に忠実だったからである。同センターの建立に最初から深く関与し、初代所長まで務めた梅原猛氏は同センターの「国際」とは、「この機関が日本人ばかりか外国人の日本研究者も集い、共同研究をしたり情報を交換したりする研究所であるとともに、国際的にも通用する視点から日本を研究するという意味を含んでいる」と指摘した。国家主義の宣伝機関ではなく、日本研究の国際化を実現しているという主張である。

歴史的にみると、決して世界文明の中心とはいえない日本文化を、国内外の著名な研究者と「国際的に通用する視点」から日本研究を「共同」で行い、発信するという発想は、設立当時の視点で考えれば果敢な試みであった。設立されてから三〇年間、国際的・学際的な視野から日本研究者を育成してきたのではなく、日文研が招聘した世界各国の日本研究者の数（外国人研究員）も四〇〇余名に至っている。研究成果だけを概観しても、日本研究六九九件、日文研叢書四二九件、共同研究報告書五二三件、海外シンポジウム報告書四〇六件、国際研究集会報告書一四八〇件など、各分野で幅広い成果を蓄積している。日本文化を媒介とする知的交流の国際化の基盤が確実に固まったといえる。

日本研究を通じて世界的なネットワークが構築されている中、韓国からも、中国、アメリカについで多くの研究者が招かれ日本研究（個人研究、共同研究、各種のセミナーや研究会）に励んでいる。筆者も二〇〇八年度に招かれ各国の日本研究者と交流を深め、一年間の研究を足場に『戦後日本の文化外交研究』（二〇一四）を出版するなど、日本研究と絡んで今までも各種の支援を受けている。滞在中における細心の配慮には感謝の気持に堪えなかったが、特に印

象深かったのは、数百人の来場者が集まる学術講演会をはじめ、外国人研究者の研究成果が「日文研フォーラム」という形で市民たちに毎月披露されることであった。非常に新鮮でわくわくする経験であり、その経験は私が韓国へ戻って地域社会で「市民教養大学」の講座を開くきっかけにもなった。

その結果、同センターは世界的な日本研究センターとして多くの注目を浴びるようになり、文化交流の核ともいえる知的交流の確固たる土台構築にも成功した。小松和彦所長が触れているように「日本の文化・歴史を国際的な連携・協力の下で研究するとともに、外国の日本研究者を支援するという大切な使命」を貫いたからである。それだけではない。日本研究に必要な貴重な資料を収集、保存し、それを国内外の研究者に開放するシステムは、海外の日本研究のレベルアップを含め、日本研究の国際的拠点としての存在意義を一層高める役目を果たしている。

日文研が過去三〇年に及ぶ輝かしい役割と成果を基に、今後も、日本研究とそのシステムを発展的に築いていかれることを願ってやまない。日本国内の研究者及び関連機関との協力関係をより強化しながら、来る三〇年も、世界における日本研究の中核的機関として位置づけられることを、日本研究者の一人として心から期待し、声援を送りたい。

二〇一七年一月

（世明大学国際言語文化学部教授）

日文研は研究の心

クラティラカ・クマーラシンハ

傑出した研究活動を行ってきた国際日本文化研究センター（日文研）が三〇周年を迎える。これは祝うべき大きな出来事であり、ここにその祝辞を述べることは私の大きな喜びです。

誰もが知るように、研究は高等教育の文脈では一人でやり遂げること以上に重要な学術的探究と考えられています。したがって博士論文前と後の両方のレベルでなるべく多くの研究プロジェクトに参画することは、ほとんどすべての研究者にとって熱い希望であります。しかし経済的限定によりこの目的に達成できる者は多くありません。しかしこの点で私は日本へ行く奨学金を一つ、フェローシップを三つ獲得することができ、達成することができたのです。私は研究の成功をただ国際日本文化研究センターに返したい。その研究成果がどれほど重要であったかを述べなければ、私にも私の国にも恩義を果たさなかったことになりかねないでしょう。

最初の奨学金で一九八五年から八七年まで大阪外国語大学へ留学し、能について研究することができました。二〇〇三年には東京の大東文化大学にて日本の民俗劇についての研究に専念する機会を得ました。二つの研究を終えたおかげで、シンハラ語で伝統的な日本演劇と日本の民族芸能について著作を著すことができました。その次の助成金は二〇一一年七月から二〇一二年四月にかけて九州の創価大学で得たもので、能に描かれた仏教について研究しました。

しかし助成金の中で私が最も価値があったと思うのは日文研よりいただいたもので、ここは

研究室に夜まで居残って仕事を続けることができる滞在型の研究所なのです。その間、知識を深めることができました。この時のテーマはシンハラ演劇に対する日本伝統演劇の衝撃でした。荒木浩先生が受け入れ教員で、ふたつの演劇の登場人物の精査から行い、日文研のすばらしい条件のおかげで仕事を楽に進めることができました。最新設備、各国語の紙媒体や電子データを備えた図書館は静かな環境と相まって、最も進んだ研究に向いていました。これらのおかげで調査を進めることができ、私は最大限に満足することができました。

インフラもさることながら、日文研にはその他にもたくさんのプラスの特徴があります。毎週のように開かれる研究集会はその一つです。それは他の大学人や彼らの国の課題、関心、興味に関して広い知識を得るのに良い機会でしたし、木曜日に英語で開かれるセミナーはなかでもすばらしく、いくつもの発表を聞く機会を得ました。滞在中、私は二本の英語論文と一本の日本語論文を発表しました。ゆったりしたコモンルームは多くの研究者がふらりと立ち寄り、研究やよしなしごとをコーヒーやお茶などを楽しみながらリラックスして話し合える場所でした。日文研の田園的な場所もこれらに彩を与えてくれる特徴です。ハウスの同宿者が朝夕、センター近くの丘あたりでトレーニングをするのは滞在中見慣れた風景でした。それらを今でも数え上げることができますし、懐かしくまた非常に幸せに感じます。三〇年間の献身的努力に対して心より祝福を述べたいと思います。

（シンハラ百科事典編集長・名誉教授）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

日文研創立三〇周年を迎えて

高馬京子

日文研創立三〇周年おめでとうございます。三〇周年を迎えられるにあたってこのように文章を寄稿させて頂ける機会を頂けて大変ありがたく思います。

私が日文研の存在を知ったのは、一九九〇年代半ば、当時の職場で見ていた一冊のフランスと提携していたある雑誌がきっかけでした。そこで掲載されていた日文研の記事を偶然見つけ、国際的な視点で日本文化を研究する研究所があるのだということを知り、どんなところだろうと調べ始めた記憶があります。当時ある海外ファッションブランドの広報をしていた私は反省的に「なぜ、人は海外（欧米）ファッションを追いかけるのか」、海外の商品が氾濫する日本において「日本文化はどう説明できるのか」という疑問を抱いていました。そんな時、日文研の存在を知り、国際的な視点で現代の文化とはなにかを研究してみたいと思うようになりました。その時の「種」が芽をだしたのか、まもなく実家近くの大阪大学大学院に社会人入学し、その間フランスに約四年間留学し、そして思いもよらなかった縁が重なりリトアニアの大学で八年間教鞭をとることになりと、まさに、国際的な視点で、微力ながらも日仏メディアにおけるファッションや女性の相互表象について研究に取り組むようになりました。

二〇〇六年からリトアニアという東欧の国に住みながらその地の大学で教育、研究活動を進めていました。当時のリトアニアの勤め先に定期的に日文研の出版物が送られてきており、そ

れらを眺めながら「外国の大学に勤める身として、いつかあの日文研で外国人研究員として研究滞在できればいいな」と思うようになりました。そして、二〇一三年九月から一年間、山田奨治先生にカウンターパートをお引き受け頂き、日文研で外国人研究員として研究滞在させて頂くことが叶いました。

日文研に滞在中の一年間は充実した時間を過ごさせていただきました。日文研が主催される研究会やら講演会に参加し、聴講、時には発表させていただく機会を頂けたことも大変有難い経験でした。海外在住の頃、日本語で書かれた文献、資料の入手が現地では日本のようにはできないというのが悩みの種でもありましたが、タイトルや発行日もわからないある日本の大衆誌の記事まで探し出し、様々な資料を入手してくださった日文研図書館の皆さまのおかげで、多くの資料を集めることができ研究を進められたこと、歓送迎会やらランチミーティングなどで日文研の諸先生方、職員や院生の皆さんや、また他国の外国人研究員の先生方と様々な意見交換、交流をさせて頂いたこと、近くの桂川小学校に出前授業に行かせていただいたこと等、当時一二年近く日本を離れていた私にとって、研究面、交流面でも日文研で日本を再発見していく時間を過ごさせて頂いたと今思い出しても懐かしく、大変感謝しています。

滞在中、朝、日文研ハウスから研究室へ「通勤」し、また夜研究室から日文研ハウスへ帰宅するという毎日の中で触れた日文研の自然も美しく、ここは日本なのだなと強く感じさせてくれるものでした。二二時近くの帰宅時に遭遇する鹿や猿といった動物たちもさながら、特に春の夜、帰宅時に中庭を抜け、光に照らされる入口付近の大きな枝垂れ桜を見るのが毎日の楽しみでもありました。

このように日文研の外国人研究員という時間を過ごさせていただいた後、現在は、明治大学

情報コミュニケーション学部でフランス地域文化論、同大学院では超域文化論を中心に教鞭をとりながら研究をすすめています。そんな中、私が冒頭で書いたような「なぜ海外のファッションを追うのか」という問を抱えていた二〇年以上前とは、私達をとりまくメディア環境も大幅に変わってきました。デジタルメディアが発達し、受信者と発信者の境目が曖昧になった今日、当時のような西洋のファッションブランド、西洋の大手ファッション雑誌だけが世界のファッションスタイルを決定するという時代ではなくなり、デジタルメディアを通して局所的なファッションが生じ、またそれらが言語文化を共有しない人々に局所的に様々に受容され、トランスナショナルな空間で形成、伝播、変容されていくようになりました。世界を代表する大手ファッション雑誌でも、「デジタルファッション」というコーナーが設けられ、そこでインスタグラムに掲載されたファッションを紹介しています。このように、特にファッションのようなポピュラー文化は、今までとは異なった方向からも形成、伝達されている傾向もみられます。日文研の外国人研究員時代にも調査させて頂いていたデジタルメディアによって海外の若者にも容易に受容されるようになった若者のストリートファッションとしてのkawaiiファッションはその最たる例の一つといえるでしょう。kawaiiファッションを調査する今日の私の問は、冒頭にあげた問「西洋の文化を取り入れながら形成される日本の（ポピュラー）文化はどのように説明できるのか」から「デジタルメディアを通して海外で様々に受容、変容、伝達される日本の（ポピュラー）文化はいかに説明できるのか」へと移行してきました。議論については場を改めたいと思いますが、文化の伝播の方向性が異なるにせよ、この二つの問の根底にあるもの変わらず同じなのかなという気もしています。

日文研で外国人研究員として一年間滞在させていただく中で、日本人として海外で生活、研

究、教育する中で感じた海外で語られる日本文化と私の知っている日本文化のずれに対する違和感について、既存の学問領域、研究対象を超えて考えさせていただく機会を頂きました。そのような機会を下さった日文研、諸先生方に感謝しつつ、今後の日文研の更なるご発展を心よりお祈りしております。

（明治大学情報コミュニケーション学部専任准教授）

日文研での一年

マリーナ・コヴァルチューク

私は日文研（国際日本文化研究センター）で一年間（二〇一三年七月～二〇一四年七月）研究しました。研究テーマは、幕末及び明治初期の日本におけるロシア帝国のイメージ形成です。主要な研究資料は森有礼、福沢諭吉ほかその当時の優秀な日本人で、ロシアを訪問し、ロシアの国家やその国民について自分なりのイメージを持つことのできた人々の日記や回想録です。

幕末期の日本語資料を使用しての作業は時間も集中力も必要とするものでした。研究に着手したころは、一年間で必要な資料を集め、せめて部分的にでも分析ができればと思っていました。一年間で研究を完了できるとは思っていませんでした。

しかし私の心配は杞憂に終わりました。日文研は都会の喧騒から離れ、仕事をするのに最高の環境でした。招聘研究者にはすべて個室が用意されていました。そして私個人としては、日文研図書館もまた、むしろより重要な仕事場所と言えるところでした。幼い娘はこのホールを、ホグワーツの図書館にたとえたものでした（「ハリー・ポッター」を読んだ方にはわかっていただけると思います）。図書館は本当に魔法のような作業環境でしたから、このたとえも的外れとは言えないでしょう。

日本やその他の東アジア諸国の文化、芸術、歴史に関する蔵書のおかげで、その地域の歴史や文化に関するどんなテーマも調査することができました。便利な電子目録で、必要な資料も

わずか数秒で見つけられました。さらにほんの二分ほどで、書庫の書棚から必要な本を手にすることができます。ロシアではここまでの膨大な日本語や英語の特殊な資料にアクセスすることはできません。日文研で研究を始めてから最初の四ヶ月間は文献調査に明け暮れました。私の関心がある分野での日本や西欧の最新の研究成果を知ろうと、日夜資料を読み続けました。この期間でどれだけの新しい情報を得ることができたか、言葉にはしがたいものがあります。

息抜きとして書庫の書棚の間を散歩したものです。その間にも興味深い資料を見つけることがありました。そのようにして見つかった資料の多くは私の研究に直接はかかわっていないものの、日本の歴史や文化に関するもので、「日本」という世界観に色彩を補い満たすものでした。

日文研は素晴らしいところにありました。まず、手つかずの自然に囲まれながらも生活上の不便がないということからはじまって、ありとあらゆる点でここまで便利な生活上、仕事上の環境に恵まれたことはこれまでにありませんでした。この研究所で一年間を過ごすうち、夜ごとの鹿の鳴き声も耳慣れたものになりました。徹夜で作業をした時などは、日文研ハウスの窓から原っぱを散歩する鹿の姿を見かけたものです。また、猿が時としてセンターの屋根を跳ね回ることにも、鳥の鳴き声のポリフォニーにも、そして何よりも極めて澄んだ空気にも馴染むことができました。ここの空気には香りも味もあるように感じられたものです。

このような環境で研究をすることは満足の一語につきます。センターの隔離された環境に疲れたときは、娘と一緒に京都の街中まで出かけました。日本の古都には驚くようなエネルギーが秘められています。どういうわけか、ここでは一見矛盾している、静けさと程よい喧噪と、人混みとが共存しているのです。祇園の通りを歩き、多数のお寺や神社を訪れたことは研究に取り組むための支えとなり、内なるエネルギーを満たし、何よりも日本文化の精神に入り込む

ことができました。多くの外国人研究者が、日本文化を研究する外国人研究者のための研究センターを、京都にこそ創設すべきとした発起人に一度ならず感謝したことと思います。

日文研で過ごした一年間を回想するにあたって、私の研究をサポートし支えてくださった多くのスタッフのことを感謝の念を持って思い出さずにはいられません。なかでも日文研に招聘してくださった戸部良一教授、戸部教授が日文研を去られてから私の研究をサポートしてくださった佐野真由子准教授に感謝の念を表します。

日文研では充実した研究ができたほかにも、研究成果を発表する場も与えてくださいました。長期研究で訪問した研究者すべてに、その研究成果を研究者相手に発表するのみならず、日本の一般の聴講者にも聞いていただく機会が与えられていました。

私個人としては、京都の一般の方々の前での発表は身震いのするような出来事となりました。二〇一四年八月、第二七七回日文研フォーラムで、「森有礼が見た19世紀半ばのロシア帝国—虚像と実像」をテーマに発表しました。準備中は日ロ関係の歴史が聴衆の皆さんにとって関心があるかどうかと心配でしたが、杞憂であったことがわかりとても安堵しました。発表までに会場は満員となりました。聴講者の方々はとても注意深く発表を聞いてくださり、発表後は質問もあり、感謝の言葉も頂きました。私の研究テーマは、今日の所謂メインストリームである歴史と文化の対話からはかけ離れたものですので、日本人とロシア人の交流初期の歴史に、京都の聴講者の方々が心から関心を寄せてくださったことが一層嬉しく感じられます。

こういう公開発表は素晴らしい機会だと感じられます。そのおかげで自分の研究成果を、本来届けるべき人々に知らしめることができるからです。学術の世界がある意味閉じられた場所であることは、その深刻な欠点のひとつでもあります。われわれは研究に取り組み、そのため

に多くの時間やエネルギー、時には納税者のお金をも費やしますが、その研究成果が社会の共有資産になるとは限りません。

学術雑誌への寄稿は研究成果を知らしめるためのよくある手法といえます。しかし日本の学術雑誌に外国人研究者が寄稿することはそう簡単ではありません。日本語を母語としない研究者が欧州言語から日本語にテクストを移そうとするとき、論文の言葉は変化を強いられますが、それが肯定的に作用しないこともあります。というのも、日本語を知っている研究者が、同時にすぐれた翻訳者であるとは限らないからです。研究者の日本語の知識は日本語の資料を読むためには十分かもしれませんが、自分の考えやアイデアを、日本の学術語の規範に即しつつ伝えるためには不十分ということもあるからです。

結果、外国人研究者の多くが日本をテーマにした研究を、その国際的な言語の地位をも考慮して、英語で発表したがる傾向があります。それらの研究は専門家に対しては知られるようになりますが、やはり言葉の壁の問題から、日本の読者に広く知られることはありません。

ですから、外国人研究者の研究テーマに関心のある人ならだれでも聴講できるような、公開発表の場というのは、非常に重要な要素だと思うのです。事実やヴィジュアル、デジタルの情報にくわえて、そのような場では、学術上の様々な課題や問題に対する日本の従来のそれとは違ったコンセプトやアプローチの仕方の本質を、聴衆に届けることができるからです。

最後に、今一度日文研のスタッフの皆さまのお仕事、招聘研究者に対する気配りやお心遣いに感謝するとともに、センターの今後の一層の発展と、これからも充実した事業をなされるよう、お祈りしたいと思います。

（極東連邦大学助教授）

日文研「創立三〇周年を迎えて」

チャワーリン・サウェッタナン

蝉の声を聞くたびに日文研を思い出す。京都大学で修士号・博士号を取得し、タイのチュラーロンコーン大学で数年間専任講師をしていた私は、二〇〇六年の夏、あの世界的に有名な国際日本文化研究センターに客員研究員として赴いた。若手研究者にとって夢にも思わなかった人生の転機である。

あの日から研究者への道が徐々にひらけたとも言えよう。日文研は四季折々の美しさを見せる桂坂にある、優れた人材にも恵まれた立派な研究機関である。コモンルームで交わされる会話は研究に対しても人生観に対しても常に刺激を与えてくれた。一年中暖かい光に包まれるコモンルームでのゆっくりと流れる空気は、あれから一〇年経った今でも私の身体に沁みついている。

日文研に着任してまもなく、「エジプトのシンポジウムで発表してみませんか」という突然のお誘いを招聘教員の山田奨治准教授（当時）からいただいた。日本研究を普及させるため、毎年世界のあちらこちらの国で海外シンポジウムを主催するそうだ。「えっ〜！　この私がエジプトで発表するんですか？」……これもまた思ってもみないことだった。せっかく誘っていただいたのだし、エジプトには訪れたこともないし、肝心の発表はともかく、張り切って「はい、行きます！」と答えた。

それから慌てて発表の準備を始めた。現地の研究者の方々や学生さんたちに理解してもらうために、彼らの関心のあることを分かりやすく発表するようにという貴重な助言を山田先生からいただいた。大学院では自分の関心のあることにしか眼を向けていなかった研究者の私は、初めて聞き手の関心やそれぞれの社会の必要性について真剣に向き合って考えてみた。

シンポジウムでは「Multi-dimensional approaches to Japan」というテーマで、日本とアラブの文明比較、思想史、文学、言語学などの話題が取り上げられた。宗教及び社会の厳しい規律によって抑えつけられているように見えるエジプト女性ならきっと興味を示してくれるだろうと思って、「広告に描かれる女性像」について発表することにした。山田プロジェクト研究室や研究協力課の皆様のおかげで準備は順調に進んだ。

いよいよ出発の日がやってきた。ミラノ経由カイロ行きのアリタリア航空だった。ミラノに一泊して翌朝カイロに向かう予定だったが、ミラノ空港のチェックインカウンターでなぜか私だけが引き止められた。「エジプトのビザがないから搭乗券は発行できない」と言われ、次の便で日本に帰されるというのである。

考えてみれば日文研からの乗客は研究者、大学院生、事務職員を合わせて二〇人ぐらいいたが、私とロシア人留学生の二人を除いた全員がエジプトのビザが要らない日本人だった。搭乗時刻は刻々と迫ってくるのに、あまりのショックでどうすればいいかも分からない自分が本当に情けなかった。その時、片倉もとこ所長（当時）が言い出した。「みんな先に行ってて。私はチャワーリンさんと一緒にグラウンドスタッフと話してみる。」私の不注意でこんな大変なことになったのに、片倉所長をはじめ、山田先生他三人の先生・事務の方がどこにも行かず、私の運命が決まるまで忍耐強く一緒に残ってくださった。

搭乗時刻があと三〇分になったところで、もう時間がないと思った。ミラノであと一泊して翌朝一人で日本に帰ると片倉所長に言ってみた。でも、片倉所長の決意は少しも揺れなかった。片倉所長や日文研の仲間の熱い思いが伝わったのか、グラウンドスタッフの男性がいきなり搭乗券を差し出し、「入国はできないと思うけど、とりあえず行ってみろ」と言った。

ミラノからカイロへの飛行時間は約三時間半しかなかったが、私にはまるで一日のように思えた。ハラハラドキドキしている私に、「一緒に行こう。大丈夫だから」としっかりした声で引っ張ってくださった片倉所長は本当に大きな心の支えであった。カイロに着いて、日文研の研究者と一緒にカイロ大学のシンポジウムに参加するためにやってきた、と入国管理職員に説明すると、意外にも速やかに入国させてくれた。きっと名高い日文研のおかげで何とかその場でビザを発行してくれたのであろう。

これは二度としたくない経験ではあるが、それまで国際学会に参加したことのなかった私は、日文研の優秀な先生方と並んで発表でき、地元の研究者の方々や学生さんと交流することもできて本当にうれしかった。家族に反対されても、「チャワーリンのように大学の先生になりたい」と夢を語ってくれたシナイ半島出身の女子大生の顔を今もくっきりと覚えている。日文研が私をどんどん広い世界へと導いてくれたような気がした。

「研究者は知識を社会と共有することで社会に貢献するものだ」ということを日文研に教わった。どんなに難しい研究をしてもその結果が人に伝わらなければ意味がないということを。日文研で過ごした一年間は社会との関わりについて考えさせてくれる訓練となった。海外シンポジウムから日文研フォーラム、公開講演会、東京講演会、学術雑誌、それから桂坂小学校の出前授業まで、さまざまな形で研究活動を国内および国際レベルで社会に広げるべく努力

を厭わない日文研に本当に心から感謝している。

日文研の一年間は長いようで短かった。大学院や職場で学ぶことのできないその経験こそが、今研究者の道を歩んでいる自分にとって何より有意義なものだった。社会に貢献する研究者としての義務を果たすこと、チームでそれぞれの専門を活用して共同研究することなど、日文研から学んだことは数えきれない。共同研究の機会に恵まれた日文研で、もう少し積極的に活動すればよかったと一〇年前の自分を悔やむ思いもあるが、懐かしい蝉の声を楽しめる日がまたいつか訪れてくれると信じよう。

（マッコーリー大学講師）

忘れえぬ人々

酒井哲哉

私が初めて日文研を訪れたのは、いまから一五年くらい前のことである。当時はまだバス便もまばらで、桂駅前のドーナツ屋さんで待ち時間を潰すこともたびたびあった。バスを下車して坂道を登ると、忽然と、おとぎの国のような建物が現れ、この東西融合様式が国際日本文化研究の殿堂なのか、と妙な関心をした記憶がある。その後、何度か日文研の企画にかかわることになったが、一番思い出深いのは、二〇一〇年度から二年間勤めた客員教授時代の共同研究プロジェクト「帝国と高等教育―東アジアの文脈から」である。一九九〇年代に入って日本近代史研究は大きな転換をとげ、植民地帝国としての戦前期日本が抱えていた問題を、現代的な関心から読み直す作業が進められていた。私自身が編集委員を勤めた『岩波講座・「帝国」日本の学知』も、その潮流のなかにあった。

この岩波講座を編集する過程で気にかかったのは、京城帝大や台北帝大のような植民地大学が果たした役割は何だったのか、という疑問であった。同講座のいくつかの論文はこの問題を新たな視角から扱っており、この延長線上に、帝国日本と植民地大学に関する総合的研究が可能になるのではないかという思いがわいた。同じことを感じた他の方々もいたようで、この主題に関する共同研究会を立ち上げようというふうに話が拡がっていった。幸い、日文研の国内公募共同研究に採択されたことで、極めて恵まれた環境で研究会を行うことができ、海外から

講師を招請することも容易となり、隔月に上洛するのが待ち遠しい、たいへん充実した研究会となった。

研究会を始めるとき、まず気をつけたのは、狭義の教育史研究者に限らず、歴史学・人類学・政治学・法学など、できる限り様々な専門分野の研究者を領域横断的に集めることだった。そして、朝鮮史・台湾史など狭義の植民地史研究者に限らず、植民地を主たる研究対象としてこなかった方にも声掛けしようとも考えた。植民地史は長年の蓄積があるが、各学問分野のなかでは周辺的なものとして位置づけられてきたむきがないとは言えない。だが、およそ近代日本の学知を扱う者ならば、立場の如何を問わずどこかで「帝国」の問題と向き合わざるを得ない、それが常識となるような知的土壌を作りたかった。それこそが、教育史の専門家でもなければ、植民地史研究者でもない私の果たすべき役割だと、思ったのである。各学問分野を代表する研究者からなる二年間の共同研究会を終え、そのうえで、韓国・台湾から主要な研究者を招請し、日文研で国際研究集会を成功裏に開催したことで、万事は整ったかのように思われた。

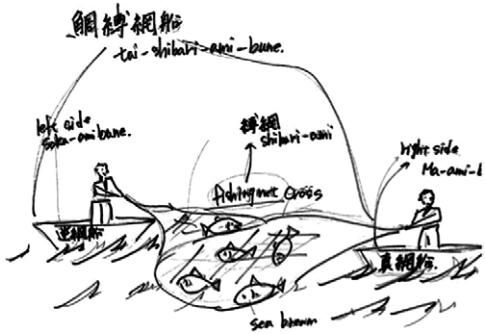
だが、物事は常に順風満帆とはいかないようで、いざ成果を世に問おうとした瞬間に、思わぬ出来事がおきた。出版を予定していた編集者から、突然、書籍の内容が一貫性を欠いた寄せ集めであり、「植民地的近代」のような社会的要因の分析に偏り、教育史・大学史から逸脱しているので、全面的に改稿すべきである、といいわたされたのである。確かに、私は教育史の専門家でも植民地史研究者でもないので、正直、植民地大学の共同研究代表として力不足だったと思う。だが、私以外の執筆者はいずれも力作の論文を寄稿し、巻末の付録に至るまで、関わった人たちの経験と熱意が伝わるものだった。また、植民地大学を学問対象とする際に、そ

れを取り囲む政治的・社会的状況に言及することは、少なくとも私にはきわめて自然なことのように思われた。この編集者の方には、こうあってほしい植民地大学史像がおありだったのだろうと推測するが、そもそも歴史的評価が対立する主題を扱う論集だけに、私としては極力各執筆者の立場を尊重したかった。こうして、出版については、はじめからことをやりなおさなければいけないことになった。

困惑する私をこのとき全面的に支えてくださったのが、松田利彦教授であった。松田教授は、冷静に次の方策を考えてくださり、自ら東京まで出向いて、いくつかの出版社との交渉に立ち会ってくださった。捨てる神あれば拾う神あり、ということで、私たちの企画の意義を理解してくれる出版社も現れた。これまでの研究生活で初めて経験した事柄だっただけに、人の親切さが身に染みてありがたく思った。そして、日文研の華やかな活動の背後には、このようなスタッフの献身的な姿勢があるのだということを実感できたのは、世間知らずの私には本当に勉強になったできごとであった。この場をかりて、関係者に厚く御礼を申し上げたい。

一つの組織を三〇年続けることは、やはり大変なことである。あのメルヘン調の建物には、きっとまだまだ知られていない秘話がたくさんあるのだ。だが、よいことも、よくないことも、それぞれ包み込んで歴史にしていくことが明日を生きる大人の知恵だ、と思うのである。

（東京大学教養学部教授）



鯛縛網（香川県直島）　スケッチ：Y・N（二〇一二年）

ニッチの出口―研究所の向こうのノスタルジックな発見についての手紙

シンシア・ネリ・ザヤス

昔の一年は早く終わっていきます。私は研究を整理し始めています。このスケッチがフィールドノートに隠されているのを見つけました。あなたは文章と私のフィールドノートからそれが何か理解するのを手伝ってくれましたね、覚えていますか。タイシバリアミ（鯛縛網）という伝統漁法です。二そうの小舟にご注意ください。

何十年も昔、直島の海辺では女性の人形使いがこの小舟を舞台にして演じていました。直島女文楽は今では世界クラスの舞台設備をもった新しい場所で演じられます。私は感銘を受けましたが、もしこの古い舟の舳先を使って岸辺で演じていたなら、もっと本物の感を得たとは思えませんか。

世界的に知られたベネッセ・ハウス・ミュージアム、アートハウス・プロジェクト、地中アート・ミュージア

ムはどれも空にくっきりとシルエットを描いていて、昔の上演が行われていた岸辺を見下ろしています。ベネッセコーポレーションは瀬戸内トリエンナーレのおかげでこの静かな島を現代アートのメッカに変え、世界の注目を集めています。きっとあなたもきいたことがあるでしょう。漁猟はもはや昔のようには行われていません。

今でも海苔栽培、カレイの養殖などの漁業を営んでいる数軒を除いて、直島はこう言ってよければコスモポリタンの島です。草間彌生のぶよぶよしたアート作品がそれを象徴しています。彌生は元祖カワイイ・アーティストです。彼女の作品をお好きですか。カワイイが若者だけのアイデアとは思いません。それはすべての日本人の心にあります。

ところで細川周平先生に出くわしたら、研究者向けの宿舎、日文研ハウスでの滞在が直島調査を実り多くしてくれたと伝えておいてください。図書館は二〇一一年の研究に必要な宝物殿でした。

ニッチで外国人研究員として初めて滞在してから（二〇〇六年一〇月から二〇〇七年九月まで）一〇年になろうとしています。あなたに会って、私たちが愛着をこめてニッチと呼んだ場所についてずいぶん教えてもらいました。

あなたを通して私にとってニッチとはどんなところだったでしょうか。私にはニッチは修道院で作品を書きたいと夢見る学者のための隠遁の場所です。中世ヨーロッパの僧院のように学者たちはここではあまり口をきかずお互いに少し会釈するだけです。空間は思索に向かう小道によって結ばれています。コモンルームは学者がおしゃべりし事務を執る唯一の空間です。この静謐さの彼方に「グギの教え」というのがあり、構内の出口の向こうにある生活を発見しました。

私の中にニッチの優しい思い出を残した出会いについて話させてください。年が終わるごと

に懐かしさを感じます。公式の地図ではニッチには正門、北門、南門の三つの門があります。正門は主要な出入口のゲートで、すべての外国人学者は最初そこを通ってニッチに到着します。それはニッチに別れを告げるときに最後に通る門でもあります。

私にとって休みの時には北門があいているでしょう。そこから入ると守衛さんが入場者を待ちかまえ、研究室のカギを渡します。南門があくことはめったになかったけれど、ある春の日にはここを通り抜けました。あなたは桜に縁どられたぐねぐね道を桂坂保育園の下に通っているのを見せてくれ、ピンクの花びらがひらひら舞う下をぶらぶら歩いていきました。

他に二つの非公式の門があります。一つは構内の東側にあり日文研ハウスに一番近い門、もう一つはその西側と北側の仕切りがぶつかるところにある門です。

この二つの門からもっと興味の湧く出会いに導いてくれましたね。ある秋の日の昼食の後、赤おにレストランの背後にある出口に連れていってくれました。道を横切って小屋に通じる門をくぐりました。池がありすてきな堂々たる見かけと彩り豊かなアヒルが自由にカタツムリや水草を食んでいました。野生なのか、それとも管理人のペットなのかと考えました。あまりにおとなしく私たちは近づいていきました。

頭上には赤、黄、緑のカエデの葉が紅葉の季節らしくありました。長く図書館で仕事をした後、一人で何度も何度もこのスポットに出かけました。この自然のポケットを紹介してくれてありがとう。

ハウスに近い出口は私の心に一番近い出口です。あたかも象徴的に若いころからの思い出のあるふるさとに私を連れ帰るかのようです。一九七七年、外国人学生として初めて日本を訪れたときには吹田の関西留学生宿舎で暮らしました。ある日、高槻市は宿舎のフィリピン人学生

をマニラ市高槻市姉妹都市祝賀会に招待してくれました。なぜ高槻とマニラなのでしょうか。それは一七世紀に町の家臣だった高山ジュスト右近（一五五二年～一六一五年）が、キリシタン信仰を捨てなかったためマニラに追放されたからです。大家族すべてに下層の侍まで彼とその地まで同行しました。偶然ですが、二〇一七年二月七日、高山は大阪カテドラル聖マリア大聖堂で列福されます。この単語をご存知ですか。列福とはカトリック教会が死後、死者の天国入りを認められることです。その人物は「福音された誰それ」と呼ばれ、彼ないし彼女の名で祈る個人のために間に入ることができます。もし福音された高山が力なり奇蹟を起こされたなら、聖ウコン・ジュスト・タカヤマと列せられます。

一九七七年に初めて高槻を訪れたときには地方都市と思っていましたが、それ以上だったのです。

阪急駅の南口にはショウテンガイがあり、屋根がついた通りでいろいろな物やサービスの店が並んでいます。それは特別でした。なぜなら近くのハタケで採れた農作物がスーパーマーケットに運び出されるからです。地元産や海外の食べ物がありましたが、京都駅の店に比べると並べ方は洗練に足りませんでした。でも京野菜、淡路島の牛乳（神戸の近く）、チリのサケ、オーストラリアのビーフ、カナダのシシャモが桂のような「高級」地区のスーパーマーケットよりも二割から五割安く買えました。あふれる物のほかにショウテンガイと通りの庶民的な雰囲気を楽しみました。

駅の北口にはバー、レストラン、学校や宗教の建物、地元の役所関係がありました。高槻カトリック教会ではウコン・ジュスト・タカヤマの彫像の出迎えを受けるでしょう。数メートルいくと高槻城跡である公園があり、博物館兼図書館が高山一族の遺産を展示していました。日

曜のカトリック教会のミサと庶民的市場の光景には懐かしさを覚えます。特にミサの後のノミの市で服の安売りをしているのを見ると、家に帰ったかのようでした。他にも一〇〇円肉餃子や古本屋で和辻哲郎の『風土』の初版本に出会ったときにもワクワク喜びました！

普通の道すじでニッチに帰るとハウスに一番近い門から入りました。暗くなっていると時には野生のシカの歓迎パーティに迎えられることもありました。ニッチは森のある山へ向かう道に通じる丘にあるため、野生動物に出会うことは驚きではありませんでした。敷地を通り抜けていくのを見たことはありませんが。

ニッチの出口の向こうには冒険があります。特に客員研究者には。門の数々を見せてくれてどうもありがとう。さまざまなことに立ち向かう愛を共有できる日本の友だちと知り会えて楽しかったです。お元気で、お健やかに、来たる二〇一七年の酉年をお幸せにおすごしください（英語だとyear of rooster雄鶏の年と呼んでhen雌鶏の年と呼ばないのをフェミニストは変だと思わないのかしら、なんてダジャレ）。

（フィリピン国立大学国際研究センター教授）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

隠れた宝

ヴォルフガング・シャモニ

日文研とは私は梅原先生の所長時代以来縁があり、多くの先生方にお世話になってきたが、一番深い縁を結んだのは、その図書館である。この図書館の中心はてっぺんにあの美しいステンドグラスがはまった無限に高い丸天井をいただく閲覧室。日文研に行くたびに私は真ん中の丸いカウンターの左側後方の丸くまがった閲覧テーブルの果てあたりに陣取ることにしている。後ろにはあらゆる辞書類がならび、左には書庫への通路があり、右前には親切なスタッフの方が座っているカウンターがある。そこは私の天国である。

この図書館の特色は勿論、日本文化の総合的な研究に必要なあらゆる方面の文献をあつめているというところにある。そのうちで私から見て何よりも貴重なのは、外国語で書かれた日本に関する研究書また一般の書籍、日本語から外国語に翻訳された文学などを徹底的に集めているというところにある。しかも、それは英語だけではなく、あらゆる言葉のものをも集めるに精を出しているということである。日本の歴史的経験の資料の何が「外国」で理解され、評価され、あるいは批判され、無視されてきたかを、総合的に調べられるのは日本国中で日文研だけではないかと思う。この日本中心の見方は勿論、問題もないわけではないが、他の大学が日本関係の外国語の文献を十分に集められない以上、この一箇所にそれらの資料を丹念に集め、あちこち書籍を捨てていく現在の世の中に逆らって、未来の世代のためにこれらを救っておく

ことには大きな意味がある。

そして日文研が国内外の貴重な古い文献を費用を惜しまず収集し、デジタル化して国内外の読者にアクセスできるようにしていることは大変ありがたいことである。他方、普通の書籍売買のルートをとおしてはなかなか手に入らないいわゆる grey literature を見つけ出して収集することにも努力しているのはこの図書館の誇りである。ここで、私は日文研の図書館に隠れている grey literature の一つの宝物を紹介したい。それは子供時代の私の日本とのかかわり方につながる書物である。

私は一九四一年生まれで、西ドイツのルール地方の炭鉱町で育った。アジアのことをはじめて知ったのは、五〇年代のはじめ、つまり私が一〇歳のときではなかったかと思う。しかもそれは東アジアではなく、中央アジアという当時の「秘境」で、スヴェン・ヘーディンというスウェーデンの探検家の本（子供用の版）などを通してであった。丁度そのころ一〇歳位の子供たちのあいだでトレーディング・カード（ドイツ語では Sammelbilder）をあつめるのが流行った。ある会社の日常的な品物、たとえばチョコレートとかマーガリンなどを買うとそれに小さな安っぽい絵がついてくる。それらの絵は子供たちが熱中するような何かのテーマでまとめられていて、我々は熱心にあつめだす。重複することがあるので、お互い交換したりして、全セットをそろえるのが目的であった。そろったらそれらを指定の帳面に貼る。サッカー選手のシリーズは特に人気があった。時代とともに絵が大きくなり、テーマも広くなった。ザネラ社のマーガリンが特に凝ったものをつけて、すこし年上の子供たちにも人気があった。そんな中で最高に贅沢なものが「中国・チベット・日本」というシリーズであった。マーガリンについてくる絵は一つの物語の挿絵になるもので、絵の裏側にはその話の要点が書かれてあった。そ

れらの挿絵が全部そろった段階で、代金を払って貼り帳面をザネラ社に注文するのである。その貼り帳面というのは三二×二四㎝、六三ページの大型のもので、「本」といえるようなものであった。表紙は赤色のバックに龍と中国の「磚塔」が描かれ、それにChina Tibet Japanが例の漢字まがいのローマ字で書いてある。本を開くとChina Tibet Japan: Tom Birkenfeld abenteuert durch den Fernen Osten（中国・チベット・日本、トム・ビルケンフェルトが極東を冒険する）という内題の上に「中国　西蔵　日本」がまともな漢字で書かれてある。私にとってははじめて目にする漢字であったと思う。中は細字でぎっしり冒険談の書かれた本で、集めた挿絵を貼るべきところに貼ると、ところどころにまた別な空白がある。つまり、貼り「本」にはおまけとして物語とは関係のない絵、例えば、上海の旅行案内のパンフとか、平凡な伝統的な山水画とか「剪紙」をデザインした小さな飾り絵などがついていた。それらも指定されたところに貼るようになっていて、それはいままでの「ザネラ絵」貼り本になかった贅沢であった。日本のものは富士山とその周辺の絵地図（おそらく戦前のもの）と「かけをどり」の絵に唄の書かれたもの（江戸時代のもの、もっとも「日本のレストランのメニュー」と説明されてある）があった。それらの絵も私がはじめて見る東洋の「美術」の例であった。

さて、貼り本の物語はどんなものであったか。主人公はトーマス・ビルケンフェルトといい、英語風に「トム」とよばれている。ベルリンに住んでいる少年で、「中学」卒業つまり一六か一七才あたりでこれから新聞記者になろうとしている。父は技師で、上海で発電所建設に携わっていて何ヶ月も中国に行っている。時代は「北京には今、毛沢東の政府がある」とにげなく書いてあるので、一九四九年以後であることが分かる。

筋はおおよそ次のとおりである。主人公のトムは上海にいる父から「この珍しい国」を見に

来るよう言われ、ハンブルクから船で香港に行く。そこから物語がはじまる。迎えに来た同年齢の中国の男の子、父の仕事仲間王さんの息子に案内されて香港とその周辺を探検する。香港から広州、杭州、上海、南京、北京に行く。本文のところどころに中国の人口、歴史、儒学、仏教、太平天国の乱や孫文のことなどがはさんであるが、当時の政治の話は一切でてこない。旅の途中海賊や阿片を密売する人が出没し緊張ある場面も用意されてある。北京への途中曲阜孔子廟を見物し、そこでトムが出会ったシンガポールからの留学生との儒学の是非についての議論が紹介される。泰山を訪問したあと、夜、泰安の駅で列車を待っていると、見知らぬチベットの坊さんが現われ、ダライ・ラマへの秘密の伝言を頼まれる。そこでは毛沢東の政策とチベット仏教の対抗がほのめかされている。それで新しい冒険がはじまる。北京から飛行機と馬をのりついでラサまで行く。ダライ・ラマとの謁見の後、重慶経由で上海に帰る。その後、父が仕事で日本に行くことになったので、トムは船で長崎に渡る。長崎では原爆のこと、又元禄時代に長崎に来たドイツの医者ケンペルのことが述べられている。長崎からバスで父の友人「中村さん」が住んでいる雲仙に行く。トムはすぐ「日本は旅行にむいた理想的な国」とわかる（電車、バス、船のそれぞれの運賃までが記録されている）。全体として日本旅行は短く冒険などをふくまず、むしろ旅行宣伝の匂いがつよい。雲仙で温泉と花見と和歌のはなしをする機会がある。神武天皇のことから昭和天皇の「人間宣言」のことまでも説明される。長崎から列車で二九時間かかって東京に行く。すでに一八歳になったトムは東京である国際通信社に記者として雇われ、最初の仕事は皇太子の「立太子の礼」を取材することであった。これで物語がおわる。

さて、この本はよくも、当時のドイツの少年に興味あるテーマを一つの物語につなげ、間に

ある程度、中国と日本についての知識をもはさんだものだと感心させられる。勿論、おおくは型にはまった見方を採用し、特に絵には噴飯の沙汰としか言えないようなものもある。しかし、全体として青少年向きの冒険談と地理をうまく組み合わせて教育効果もねらい、成功していると言っていい。

それでは、この本は何時ごろ出たのか、また作者は誰であったのだろうか。この種の本にはよくあることだが、刊行の年は明記されていない。日文研図書館の目録では出版年代として［一九――］とあり、著者は Thomas Birkenfeld とある。ドイツ国立図書館 Deutsche Nationalbibliothek では一九六〇前後とある。日文研以外の日本の唯一の持ち主である東京のドイツ日本研究所の目録では一九五五と明記して、著者としてやはり Thomas Birkenfeld をあげている。刊行年代は内容から判断して一九五三年あたりかと思われる。皇太子明仁の立太子礼は一九五二年一一月一〇日であったからである。ただし、トーマス・ビルケンフェルトは主人公であって著者ではない。小さな奥付をみると、Text（文）：Fritz W. Kuck とある。この人は六〇年代に学校の地理教科書などを作った以外知られていない人物である。道理で地理はかなり詳しく書かれてある。我々子供が一番魅力を感じたのが絵で、その作者は Anton M. Kolnberger とある。これもあまり名前のない人で戦争中は戦争小説の挿絵、戦後は青少年の読み物の挿絵を描いたようである。絵は当時の通俗的な挿絵に共通するスタイルのもので、極彩色で子供たちをたのしませた。当時の映画館の手書きのポスターも共通のスタイルだったことを思い出す。

この種の本は消耗品で、そのうち捨てられる運命にある。しかし、こういうものは一つの時代を代表していて、いくら陳腐でも、どんなに間違っていても、当時の西ドイツ大衆文化の東

アジア観を示す、それなりに貴重な資料なのである。そして私のような者にとっては子供時代をまざまざと目の前によびもどして、自分がどんなところから出発してどれほど長い道を歩いてきたかを思い出させてくれるものなのである。このなつかしい「本」を日文研の図書館に見出したときの驚きと喜びは忘れられない。

（ハイデルベルク大学日本学科名誉教授）

日本の美の多様性について

エミリア・シャロンドン

最近ますます取り上げられている「日本の美」は、わび・さびの範囲で説かれ続けている。それでいいのか。ある日、このような疑問に目覚めた。そのきっかけとなったのは、桜の色は地味な日本の色に似合わないという展覧会の時に聞いたあるヨーロッパ人の意見であった。その少し後、二〇一四年、研究者に最適な環境を提供してくれる日文研で研究する機会に恵まれ、学んできたことを考え直すチャンスが訪れた。そこで、「日本の美」イコール「わびの美」を問い直す鈴木貞美先生の共同研究会の成果報告として出されていた『わび・さび・幽玄―「日本的なるもの」への道程』（水声社、二〇〇六年）に出会った。著書の冒頭に、鈴木先生も、どうして日本文化は数多くの要素を含んでいると承知ながら、「わび」「さび」「幽玄」こそ「日本的なもの」であるという思いが日本人の心にひそんでいるかと、問いただす。そこで、私の疑問は、日本の美意識の問題から、もっと大きな「日本的なるもの」の問題に触れ始めた。日本の美意識という概念は「日本的なるもの」の一部として取り上げられているからである。鈴木先生によれば、わび・さびが「日本的なるもの」として確定されるのは一九七〇年代に行われたユネスコ・アジア文化センターが行った日本の伝統文化に関する調査から始まった。他方、鈴木先生が紹介する前衛画家の岡本太郎は、その事を明治時代の国家主義官僚に始まると考えた。鈴木先生によれば、岡本太郎はこの国家主義官僚の中心に岡倉覚三（天心）を

据えた。このようにして、問題を探るのに、私は岡倉天心と深い関係があると考えられている *Histoire de l'art du Japon* という本を開いた。

一九〇〇年のパリ万博の日本展覧会に合わせて帝国博物館によって編纂された *Histoire de l'art du Japon*（後ほど『稿本日本帝国美術略史』として日本語で出版された）は、歴史的な流れに沿って様々な日本美術の様式をまんべんなく詳しく紹介している。公家と武家の趣味の違いやその違いの上に成り立つ絢爛と素朴さの美学が、対比的に取り上げられている。どちらかといえば、貴族の趣味が日本的なものとして高く評価されている。茶の湯が日本の美学に及ぼした影響も指摘されながら、わび・さびの美は、あくまでも茶道の枠にしか評価されていない特殊な趣味として紹介されていた。つまり、日本美術を発展していくものとして紹介する本であった。また、支配層・庶民・知識人の趣味も区別され、美意識の中心は時代の流行により動くものとして説かれていた。日本の社会を、当時の社会階級（官人、農民、職人、商人）ではなく、文化や美意識の立場から公家、武家、庶民、知識人に分けていたことはとても興味深かった。知識人を別の社会層として取り上げるのは、日本文化を理解するのに大きな意味があると感じた。それらの社会層の対立は美術の中心を移動していたというアイディアはとても興味深かった。つまり、対立かどうかは別にして、「日本の」美意識の中心は一つのものではなく、四つの異なる範囲を動くと考えられることである。

日本の帝国博物館館長であった九鬼隆一男爵が書いた序文によれば、当初『稿本日本帝国美術略史』の編集主任に岡倉天心が選ばれていた。岡倉天心は『茶の本』などにおいて、「わび・さび」を日本なる美意識として位置付ける。それでは、どうして『稿本日本帝国美術略史』はこのような考え方を表すことなく、様々な様式からなる日本の美学を紹介するのだろうか。答

えは二つある。

一つは、九鬼隆一の序文から窺われる。岡倉は途中で編集から離れさせられたわけである。実は、九鬼隆一の保護を受けていた岡倉は、ロマンチックな事件に巻き込まれた。九鬼は、岡倉に、妊娠している妻をヨーロッパから日本に帰る際、お伴してくれるように頼んだ。そこで、まさしくトリスタンとイゾルデの物語のように、若い二人は恋に落ちた。九鬼は妻と離婚した。彼の息子が岡倉天心のそばで育ち、岡倉を父のように愛し彼の思想に大きな影響を受けた。そして日本の美学・美術史は偉大な九鬼周造を得た。しかし、岡倉は美術学校の校長のポストも、『稿本日本帝国美術略史』の編集主任のポストも失った。『稿本日本帝国美術略史』（帝国博物館編、農商務省、一九〇四年）は、東京美術学校西洋学科の一教官、福地復一により完成された。序文によれば、福地は岡倉が考えていた内容をかなり変更した。

もう一つの答えは、岡倉自身の日本人の美意識に関する見解が思いがけない形で残されており、そこから辿ることができる。『稿本日本帝国美術略史』と同じ頃に、外国人のために考えられたもう一冊の本が出版された。日本民族の様子に重点を置く、*Japan, described and illustrated by the Japanese*（『日本人がみずから描いた日本』）である。その本は英語で書かれ、一八九八年ボストンに出版された。なんと、その本には岡倉天心のかなり違った考え方を表す一〇枚のエッセイが載せられている。

『日本人がみずから描いた日本』の編集者、フランシス・ブリンクリー（一八四一～一九一二）はもともとイギリスの砲兵隊軍人だった。日本に愛着心を感じ、日本に住み着いて、『ジャパン・ポスト』の編集者やイギリスの『タイムズ』新聞のジャーナリストを務めた人物であった。当時の大臣、金子堅太郎（一八五三～一九四二）が書いた序文によれば、この

本は想像ではなく事実を表し、日本人自身によって書かれているので、日本文化の専門家でない外国人が作り出した日本の間違った印象を正そうとしている。読んでみると、イギリス人のブリンクリーが書いたような様式で、ブリンクリーの著書（どちらが先に書かれたかいいにくいが）からそのまま載せられた部分もある。とにかく、その本の目的は、日本の歴史、宗教や行事、そして財政と外交というテーマで、日本国全体を紹介することである。『日本人がみずから描いた日本』は当時どこまで人気があったかわからない。そこに日本の美、民族の美意識を把握できる手がかりを少なくともこの私には見つけられなかった。写真は当時の様々な日本人や生活様式を見せるものとして興味深いが、文章とは全く一致しないので、写真だけではよくわからない。

それに対して、そこに載せられた岡倉天心のエッセイは、本文よりずっと興味深い。コンパクトながら、専門家の知識を活かした日本の美術の紹介として貴重なものである。これらのエッセイは、一〇枚の絵画を通じて日本の美術や趣味を説明しようとする。それらのエッセイとの出会いは驚きそのものだった。そこで岡倉は他の英語の著書と正反対の立場に立っていることはその驚きの一つである。「徳川時代の絵画一枚」において彼は「足利勢力」は「藤原文化の炎を完全に消した」というような激しい表現により、武家の趣味に対する自らの態度を示した。「足利の優美な純粋主義を好転した」豊臣秀吉時代の「仮の光彩」さえ「本当の足利以前の感情を復活させる」ことができなかったという悲しむような指摘において、『稿本日本帝国美術略史』と同じく貴族の趣味への憧れが感じられる。その中で、とくに注目されるのは、水墨画に対しての姿勢である。一七世紀の光琳派の画家たちは、流行の狩野派が描いていた「清純な景色と冷静な姿」の水墨画に対して「昔の巨匠たちの暖かい彩」を「借りた」。水墨画

の冷たさと強さがそれ以前と以後の暖かさと淑やかさに対比されている。光琳派における「暖かい彩の自由な扱い方」は「時代の武士的活力に対して俗人の対立として重要」である。足利時代において引き立てを嫌う趣味の成立に役立った禅も批判される。「自然を自然として無視することにより」、禅は「美術をグロテスクへ導いた」という記述は、禅と自然との関係について現代の私たちにはなじみにくい。『東洋の理想』で足利時代の美術を賛美し、『茶の本』で日本美術の展開における禅思想の重要な役割を高く評価する岡倉とは全く違う姿である。

以上のような態度から、これらのエッセイを書いたときの岡倉は、水墨画やわび・さびの文化が日本の特徴をなしたという立場に立っていなかったと考えるしかない。ちなみに、「足利時代の絵一枚」のエッセイの最後に、雪舟と雪村の作品を優れたものとして認める文章がある。しかし、水墨画の例は一枚も紹介されていない。

岡倉は最初の一ヶ月だけ『稿本日本帝国美術略史』の編集者だった。そのとき彼は日本の美術を二〇枚の絵画で紹介するつもりだった。それらの挿絵の一〇枚が、結局、『日本人がみずから描いた日本』に載せられたのではないかと考える。それは一八八九年のことであった。そして、インドに旅をした後、一九〇五年あたりに彼はボストンに移った。日本から離れた岡倉は、日本の美意識について以前と違った見方に立った。確かに、自分の文化を中から見るときと、外へ出て外国人に説明しようとしているときとで、見方が変わる場合がある。わび・さびの優れた美学やその日本文化への影響は、海の向こうから日本を見つめたとき、岡倉に本当の姿を見せたのであろう。

ところが、教養のある岡倉には、一つの大きなポイントがみえなかった。わび・さびの優れた美学観念は日本人の生まれつきの特質の上に成り立つものではなく、日本の美学者の数世紀

に重なった探索の結果であるという重要なポイントである。生まれつきの「日本的なるもの」の探求は『稿本日本帝国美術略史』も貫くものである。実は、明治時代だけではなく、ずっと以前から、そしてずっと後の時代にも存在した探求である。今になっても変わりなく、日本人は日本人の全てに通じる趣味や傾向を求めている。この「日本的なるもの」、あるいは「国風」の特徴への集中を前に、日本文化の多様性が犠牲にされる。日本文化の諸元素への理解も犠牲にされる。「日本人の美意識」を持たない日本人も犠牲にされる。さらに、「みやび」や「いき」などの美的観念を理解することもできず、その美を評価することもできなくなる。すべては同じものへと引っ張られる。

今回取り上げた三冊の著書は、日文研の素晴らしい図書館や研究状況のおかげで出会った。そのおかげで、「わび・さび」の枠を一歩出ることができて、日本文化の多様性に目覚めた。「日本的なるもの」の眼鏡を外して、日本文化の多様な素晴らしさを理解したい。

（国際日本文化研究センター元外国人研究員）

日文研―日本研究と国際交流の中心

アヌ・ジンダル

ある一人の人生には消し難い徴を残す経験がある。国際日本文化研究センターの外国人研究員としての一年間（二〇〇九～二〇一〇年）はそんなひとつだ。その期間、私は模範的な学術的な仕事をやり遂げることができた。初めて日文研を訪れたのは国際交流基金を得て京都の同志社大学で学んでいた一九九九年のことだった。その時には設備に非常に深く印象づけられ、いつかここに戻って研究を続けられたらと望んだことを覚えている。

二〇〇九年二月末、日文研に到着した時にはしんしんと降る雪が迎えてくれた。今でも忘れないのが、コモンルームから見渡せる静かな中庭の桃の木に雪が舞う光景だ。スタッフが非常に手際よく私を研究室と、所内に作られた非常に心地よい日文研ハウスの部屋に案内し、荷ほどきさせてくれた。どちらも必要な設備がすべて整っており、よくしつらえてある。客員の研究者としてある限りの設備を使って仕事を能率よく進めることができたほか、快適な滞在を可能にする実務面にもずいぶん配慮してもらった。

日文研は国際級の設備と非常に高い水準の環境を誇り、理想的な学術空間を最大限作り出すように作られ、調査や研究に没頭し集中できる。国際協力・共同研究がその中心活動にあり、世界中の学者のるつぼとして議論や発表を行い、日本研究に関連する多様なテーマに各方面からのアプローチや視点を展開している。月例のセミナーでは日文研の教員と客員との間で楽し

いネットワークが築かれ、国際セミナー、発表、講演、催しが目白押しで、模範的学術活動に磨きをかけるようなダイナミックで活発な雰囲気が生まれている。図書館は書籍、雑誌、資料、データベースが驚くほど所蔵され、興味の湧く円形構造で頭上にステンドグラスを備えた研究向けの静謐な場所を作り出し、自由にコピーとスキャンができる。私はこの安息場に何時間も幸せにすごし、日本美術・建築・デザインの多くの分野にわたる貴重な資料を読み集めた。

美しい建物と敷地と庭が牧歌的に設計され、丘の麓に広がっている。桜並木が正門まで植えられ春には一斉に花が咲く。しだれ桜がカーブを描いた階段にあって濃いピンクの花を見せつける。ある冬のしとしと雨のなか、夜の一一時に研究室からハウスに帰ろうとすると、庭で灰色のウサギが庭で楽しそうに草を食んでいるではないか。折々気ままな集まりが庭で開かれ、誰もが国の食べ物を持ち寄るような雰囲気のなかでくつろぎのんびりできた。ある集まりでは狸のような動物が仲間に加わろうとしてきたが、彼は私たちと安全な距離を取るのを好んだ。

日文研の素晴らしいスタッフは支援と援助を惜しまず、私の研究と私生活のすべての面が円滑に進むよう最大限の気遣いをしてくれた。特に三ヶ月間家族が合流している間にはお世話になった。娘のアサワリは桂坂小学校に入学し、日々の宿題や学校との交渉はスタッフが手伝ってくれた。家族がいる間は仕事と家族の素敵な両立生活があったが、彼らがニューデリーに帰ると毎晩一一時近く、守衛さんがおやすみなさいを言いに来るまで研究室で働きづめとなった。ハウスの部屋にもどると夜中の二時までラップトップで仕事をした。これはすべて最高の仕事環境と条件のおかげである。

私の研究テーマは浮世絵で、日文研図書館に膨大な資料があるのを発見した。受け入れ教官の早川先生は浮世絵について非常に広範な知識をお持ちで私を優しく手伝ってくれた。そして

親切なことに日文研の特別資料の浮世絵を見せてくれた。それほど間近にオリジナルを見ることができたのは、特別な配慮があったからである。日文研には客員教員に特別で寛容な待遇があり、東京へ数多くの画廊（多くは浮世絵専門）を訪問しに出かけた。早川先生の推薦と指導で慶応大学で開催された国際浮世絵学会で発表することができた。そして日文研イブニング・セミナーの発表で私の研究は頂点に達した。

国内外で日文研はシンポジウムを毎年開催する。宇野先生のご招待で、「アジア新時代の南アジアにおける日本像―インド・ＳＡＡＲＣ諸国における日本研究の現状と必要性」と題された二〇〇九年の日文研海外シンポジウムに参加できた。偶然にも私の国で開かれ、一行とニューデリーを旅行した。新しい領域を掘り下げ、新鮮な発想を提供する論文が日文研やその他の国の教員によって発表された。私の論文は「日本とインドにおける現代美術の交流と傾向」と題し、日印の文化交流についての深い関心や両国の美術界のアウトプットの比較を扱った。

京都生活はユニークで最上級の経験だ。古都として京都は美しい寺院、美術品、文化イベント、季節ごとに変わる素晴らしい風景に恵まれている。春の桜や秋の紅葉あり、金閣寺、竜安寺、今出川の御所あり、二条城、鴨川、哲学の道、嵐山あり。数えきれない経験、風景、光景を短くまとめることは難しい。近くの奈良には重厚な東大寺があり、町中をわが物顔で歩きまわる鹿が人なつこく寄ってきて手先の食べ物を食べていく。コスモポリタンの大都市大阪も近い。東京へは新幹線でわずか数時間だ。

加茂川会は非常に親切に京都で暮らす外国人のために素晴らしいプログラムを提供してくれる。竹林公園や磁器の工場や花見などに参加した。大八木さんの一家はとりわけ親切で、親友となって何度も私を美しいお家へ招いてくれた。創価学会のグループも多くの集まりに招いて

くれたし、葉山さんの一家は私の九歳になる娘の小学校入学の手続きを特に手伝ってくれた。

ニューデリーに帰った後も日本美術・文化についての研究を続け、日本の視覚芸術と現代表現・デザインに関してインド国際センター、インド・ハビタット・センターで発表した。「浮世絵礼賛」「もみじに魅せられて」のような私の展覧会は、日文研滞在や日本研究との関わりからきっかけを得た。

インドでは日本研究はますます人気を高めている。いくつかの大学は日本語、文学、歴史、国際関係論の卒業コースを持っている。日本語のコースは多くのインドの学校で六学年から上で開かれている。毎年数名の学生が文科省奨学金で日本滞在をおこなっている。インドの文科省のオフィスは学生のための日本語スピーチ・コンテストを定期開催している。アスラーニ大使によって設立された日印パートナーシップ・フォーラムが両国民の友好関係を深めるのに専心している。日本大使館の外部団体であり日本文化情報センターは日本語クラスと文化プログラムを主催していたが、今では国際交流基金のニューデリー事務所が日本語と文化への高まる関心の一番の刺激剤として機能し、つねに日本の文化プログラム、ワークショップ、映画上映、アート展を開催している。

日文研の教員とスタッフは私の非常な助けとなり、温かく寛容に迎えてくれた。ここで深い感謝の念を表したい。二〇一七年、日文研が三〇周年を迎えるという。この祝賀の機会に際してすべての教員とスタッフの皆さんにお祝いの言葉を送ります。おめでとうございます。

（国際日本文化研究センター元外国人研究員）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

共同研究のことなど

末木　文美士

二〇一五年三月に退職した。その後すぐに家の近くの大学図書館を使いたいと思って出向いたら、入り口のところでシャットアウトされ、この図書館は研究者のためのものなので、一般の方は入れません、と拒否されてしまった。一匹狼というと格好いいが、組織を外れるというのはこういうことかと、大いにショックを受けた。その後、その大学で主催している市民講座の会員になれば図書館が利用できると聞き、さっそく手続きをして事なきを得た。日文研は有難いことに名誉教授にも優しくしてくださるので、大いに甘えて相変わらず出没して、図書館などを利用させて頂いている。

それはともかく、この度、日文研が創立三〇周年を迎えたことは、まことにおめでたい。昨年は、小松和彦所長が文化功労者の栄誉に輝き、井上章一教授の『京都ぎらい』がベストセラーになるなど、日文研も一気に全国区に躍り出た感じだ。井上さんの名前は日本中の津々浦々で語られ、講演に行くと必ず懇親会で名前が出る。元同僚というだけで僕まで持ち上げられて、まるでタレントの元同級生みたいに鼻が高い思いがする（文化功労者のほうはそれほどポピュラーではないようだ）。

二〇〇九年に日文研に赴任して六年間在籍したが、それまでいた大学という場との違いに途惑った。大学は学生優先なので、実質的な個人研究費はほとんどなく、科研ですべて賄わなけ

ればならなかったし、事務は本当に事務手続きのためだけで、それも人員削減で、学生の生活上の世話までも研究室の教授に押し付けられていた。日文研は研究組織ということを表看板にしているので、個人研究費をきちんと使うことができ、事務のサポートがしっかりして、研究に専念できた。

国際研究集会の際の研究協力課の手際のよさには、外国人のみならず、日本の大学関係者も皆舌を巻いている。大学では、事務的なことも含めて教授の責任ですべて行なわなければならないので、院生クラスを総動員して、よれよれになりながら、やっと何とか実現するというのが常であった。研究所の雰囲気も落ち着いていて、居心地がよい。イギリスのカレッジ制度に倣うものであろうが、木セミ、イブセミ、日文研セミナーなど、外国人を含めて、異分野の研究者の方と自由に討論できる場があるのも嬉しかった。国際性と学際性というスローガンは、単なる外向けの恰好づけではなく、実際に有効に機能している。

そんな雰囲気の中で、僕の研究も大きく広がった。それまで、大学では専門知識を教授し、後継者を育成するということが最大の任務であったから、なかなかその専門の枠から出にくかった。多少越境的な仕事をすると、本業を疎かにしているかのように、冷たい目で見られた。日文研は越境が当たり前で、というよりはそもそも境界そのものがないようなものだから、自由にしたい研究ができた。『近世の仏教』（吉川弘文館、二〇一〇）、『哲学の現場』（トランスビュー、二〇一一）などは、日文研にいたから書けた本である。そんなわけで、日文研にはとても感謝している。人文系の研究状況が急速に悪化する中で、学問の理想の灯を掲げる最後の砦と言ってもよい。

もっともその日文研にしても、今日、次第に追い詰められて、のんびりしていられなくなり

つつあるようだ。僕が辞めた頃から、現役の先生たちがやたらと忙しくなって、落ち着かない様子だ。人間文化研究機構という実態不明の組織の下部組織として、いろいろな圧力がかかり、「唯我独尊」が通用しなくなっているのであろう。「普通の国」ならぬ「普通の施設」になりつつあるような、いやな予感がしないでもない。大学に二三年身を置いて、「象牙の塔」が「普通の職場」に変わる様子を目の当たりにしてきた身からすると、同じことが時差をおいてここでも起こってきているような、そんなデジャビュにとらわれる。とはいえ、組織から外れた人間が、評論家的に行く先を憂えても仕方ないことだ。三〇周年を機に、現役の先生方の意欲的な活動によって、必ずや新しいユニークな日文研が育っていくものと信じている。

＊

日文研の研究活動のいちばんの中核は、何といっても共同研究である。以下、僕自身が主宰した共同研究について、少し裏話を含めて記して、責を塞ぐことにしたい。在任中、僕は共同研究を二回組織した。二〇〇八―一一年の「仏教から見た前近代と近代」、ならびに二〇一三―一四年度の「日本仏教の比較思想的研究」である。

前者は赴任前年から始まっている。これは、もともとは二〇〇七年中に人事が通っていたのであるが、前任校の関係で赴任が一年遅れたため、共同研究だけ先行させたからである。そのために、幹事の磯前順一先生には随分と細かいところまで気を遣って頂いた。様子が分からないので、共同研究の標準に従って、年に五回研究会を開催し、各回は一日で終わらせることにした。そのために朝から夕方までびっしりと詰め込み、懇親会まで含めると、相当ハードなスケジュールとなった。試行錯誤の結果、午前は『妙貞問答』のテキスト研究、午後は近代仏教を中心とした発表を二本というスタイルができあがった。

日文研の共同研究は、モデルとなった京大人文研と差異化を図るために、テキスト研究はあまり重視しない発表形式が中心のようである。しかし、もともと僕は文献学者であるから、テキストに即した研究は外せないと考えて、『妙貞問答』を選んだ。隔月の研究会では、細かく本文を読み込むことはできなかったが、それでも分担して読解を進め、『妙貞問答を読む』（法藏館、二〇一四）に巻上の本文研究を含めた成果を出版することができた。それと同時に、それが刺激となって、ブリーン教授らによる『妙貞問答』の英訳 *The Myotei Dialogues*, Brill, 2015 も完成出版されたのは嬉しいことであった。

午後の部は趣きを変えて、僕だけでは研究をカバーしきれないので、磯前氏、林淳氏（愛知学院大学）、吉永進一氏（舞鶴高専）、大谷栄一氏（佛教大学）と私とで運営委員会を作り、相談しながら、テーマやゲストを決めるという方法を取った。近代仏教の研究は今日もっとも進展の著しい領域であり、僕の知らない新しい研究も少なくない。この方式は非常に有効で、僕自身もいろいろと目を見開かされ、勉強になった。

午後の部に関してもうひとつ重要なことは、それをベースに二〇一四年一〇月に国際研究集会「近代と仏教」を開いたことである。その時招待した海外のゲストの選定や交渉は、運営委員にお任せしたので、ミシガン大学の大御所ドナルド・ロペス教授はじめ、僕が直接面識のない方ばかりをお呼びすることになった。そのためにゲストの著作を事前に読み合せるなど、予習が大変だったが、これもまた、僕にとっては未知の領域を勉強することができて、とても有難かった。その成果は、日文研の黒表紙の報告書『近代と仏教』に日本語版を収めると同時に、英語版を *Eastern Buddhist*, NS43-1&2, 2012 に Feature: Modernity and Buddhism として、林淳氏の編集で収録することができた。さらに、その成果をもとに、構想を改めて日文研叢書と

して『ブッダの変貌』（法藏館、二〇一四）を出版した。

在任期間が短いことが分かっていたので、この一回目の共同研究はかなり頑張って、いわば一度の共同研究で、二つ分やったくらいの成果を上げた。しかし、さすがにそれは頑張りすぎで、継続はできない。途中一年休んで、二回目の共同研究は、在任期間の関係で二年間だけになったこともあって、あまり気負わずに、無理に成果を期待せずに、自由にすることにした。ただ、メンバーをほぼ総入れ替えして、哲学的な分野の方に多く加わっていただいたので、それはそれで楽しく、勉強になった。二年目には国際研究集会「比較思想から見た日本仏教」（二〇一五年二月）も行なった。

さすがに、報告書は年度内には間に合わなかったが、二〇一五年一二月に『比較思想から見た日本仏教』を山喜房仏書林から出版した。山喜房は東京本郷の東大正門前の仏教書専門書店で、出版も行なっている。東大在職中に大変お世話になったこともあり、以前からここから出版したいと考えていた。ただ、完全原稿をＰＤＦで提出して、そのまま印刷にかける方式なので、編集作業もすべて自分で手作業で行なわなければならなかった。それはそれで楽しかったが、後で見ると、一部形式が異なっているところもあって、ご愛敬である。

そんなわけで、僕としては楽しく共同研究を行なったが、ただそれを何回も繰り返すことになると、少々マンネリ化しそうな感じもある。毎年分厚い共同研究の成果が続々と出版されるのは壮観ではあるが、たちまち狭い書棚に並べるスペースがなくなってしまう。今後、電子出版などの方法を積極的に採用することも考える必要があろう。

退職後、他の先生方の共同研究に加えていただき、研究会に出てみると、それぞれ個性があって、なるほどこういうやり方もあったかと、納得するところも多い。共同研究は大学院生

やオーバードクターの若手の勉強の場という意味も大きく、どの共同研究もそれぞれの方法でその点に意を用いているのは、心強い。予算的な問題もいろいろあるようだが、やはり共同研究は日文研の柱である。それぞれの先生の工夫を生かした活発な活動と大きな成果を期待したい。

（国際日本文化研究センター名誉教授）

その後の出会い

千田　稔

私が日文研に着任したのは一九九五年四月である。阪神・淡路島大震災の復興に必要な物資を積んだトラックが国道九号線をひっきりなしに走っていた。国道を北に折れてしばらく行くと日文研の建物がよく見えた。ところが二〇〇八年に退任する二、三年前から住宅地が拡大し、京大工学部の建物が広い敷地に林立し、日文研の建物は埋没した。

日文研あたりの住宅地は桂坂という名で呼ばれているが、開発業者の命名で正式の地名ではない。何々坂という呼び名は、都会のおしゃれな一角をいうのであろうか、近年の女子のアイドルグループに乃木坂46や欅坂46があるが、これらの坂の名は桂坂同様いずれも正式の住居表示ではない。桂坂という名は東京好みの、今風の言い回しで言えば、こじゃれた呼び名であったようだが、アイドルグループに先駆けていたとは、命名者は大した語感の持ち主であったようである。

日文研の向かい側に桂坂小学校がある。今も続いているのかどうか知らないが、日文研のスタッフは小学生に年に一回程度、授業を担当することになっていた。私は、地名についての話をし、この学校の名前の桂坂は正式の住所表示でないので、郵便番号もないという意味のことを小学生に話した。たちまち子供らの顔に落胆の表情が浮かんだ。学校名をつける時に、いろいろな事情があってのことだろうが、私は子供たちを悲しくさせてしまった。

日文研時代の仕事で地名に関わるのは、科学研究費によるもので、『大日本地名辞書』の著者吉田東伍ついて、わずかながら調べたことである。『吉田東伍　前期論考・随筆選』を新潟県北蒲原郡安田町教育委員会（当時）の渡辺史生氏と共編し、「日文研叢書」に加えていただき、その後、単著で『地名の巨人　吉田東伍』を上梓した。私は研究を職とし始めたころから、吉田東伍の評伝を書きたかったが、やっと日文研時代に曲がりなりにも実現した。この仕事が、予想もしなかった出会いを生むことになった。

吉田東伍の主たる業績は『大日本地名辞書』であることは、いうまでもないが、その刊行が完成したのは一九〇七年である。その翌年、秘蔵されていた世阿弥の一六部集を目にして一九〇九年の二月、『能楽古典　世阿弥十六部集』を世に出す。能楽の世界では画期的な出来事であった。

吉田東伍と能のつながりについては、私の関心の外にあった。ところが二〇〇九年三月に早稲田大学で開かれた能楽学会で「吉田東伍　学問と人」という演題で話すようにと招かれた。すでに日文研を退任して一年を経た時である。おそらく東大の松岡心平氏からお声をかけていただいたように記憶する。そしてその年であると思うが、平城京遷都一三〇〇年祭を翌年に控えて、国立能楽堂のニューズレターに短文を寄せるようにとの依頼があった。能が京都で生まれたように思う風潮があるが、実は奈良（大和）が発祥の地であるということを述べ、京都中華主義におちいりがちな日本文化論の陥穽に触れた。

そのようなことがあって、いつのまにか、私は能楽関係者の中で、能楽を知らない研究者となってしまった。そして能楽小鼓方大倉流十六世宗家大倉源次郎氏が奈良県桜井市多武峰談山神社にて談山能の制作を担当されることになり、お誘いを受けることになった。談山神社に

は、「摩多羅神」とよばれる能面があり、能楽関係者にとってはこれまでその解釈について議論がなされてきたが、談山能の監修者である二六世観世宗家観世清和氏が「摩多羅神面」を使用して能が奉納される。談山能は二〇一二年以来毎年開かれてきたが、昨年の五回目でとりあえず幕をとじ、その後は、構想を新たにして続けられるという。何回目であったろうか、談山能の顧問をされている梅原先生と会場でお会いする機会があった。

このような能楽とのご縁で、ある時、大和の能楽発祥の地をめぐった。それは、談山能のシンポジウムで、私は、秦氏の支配圏であった大和川の支流である寺川流域に能楽の足跡がみられると発言したことによる。私は、幼少のころから親しんできた寺川が、中世芸能文化の母胎であったことを、あらためて知ることになり、自ら少なからず衝撃をうけた。

話は日文研退任の頃にもどる。その頃万城目学氏の小説「鹿男あをによし」のテレビドラマの歴史考証をしていて、退任の講演の前日に主演の綾瀬はるかさんや玉木宏さんらスタッフとの慰労会が予定されていた。私は、出席したいという気持ちが強かったが、もし飲みすぎて翌日の講演に差しさわりがあっては困ると、自制した。

講演を終えて、知人とタクシーで奈良に向かった。たまたまその車にテレビがついていた。ちょうど「鹿男あをによし」の放送時間だった。運転手にチャンネルを選んでもらった。こころざしは、はたせなかったけれども、青垣めぐる故郷へと車は暗やみの道を走っていた。あをによしの故郷へと。

（国際日本文化研究センター名誉教授）

日文研の外国人研究員の思い出

ボルジギン・ルブサンジャボン・ソヨンボ

二〇一一年半ば、日文研に研究計画を送ったときは、どんな結果がくるのか楽しみでなりませんでした。もし落ちたら、という不安ももちろんありましたが、京都へ行って「シャーマニズムと神道―モンゴルと日本のふたつの土着宗教」の研究をやりたいという強い気持ちと裏表でした。文化人類学者としてふたつの国のふたつの宗教の比較研究をしたいと思いました。神道についてはチェコのプラハ・カレル大学へ留学したときに少し学んだことがありました。

首を長くして待ちわびた末、二〇一一年秋に日文研研究部より、私を二〇一二年四月一日より二〇一三年三月三一日まで外国人研究員として受け入れるというメールが届きました。そのメールによれば、私の計画は「モンゴルのシャーマニズムと日本の神道：伝統的宗教信仰及び実践の比較研究」と少し変更してありましたが、これは本当に私を幸せにしてくれました。生涯最高のなかの最高のニュースといってもよいでしょう。そのメールを受けた日のことを思うと今でも幸せになります。私はモンゴル初の外国人研究員として選ばれたとのことでした。

その一方でまったく新しい生活環境のことを思うと不安が高まりました。何もかもが私には初めてなのです。そのうえ日本の食も習慣も伝統も知りません。不行儀なことをうっかりしてしまったらと思うと不安でなりませんでした。日本の生活スタイルも言葉も知りません。カルチャー・ショックで苦しむんじゃないかという心配がずっとつきまといましたが、英語が幸い

にも生活のコミュニケーションでも研究でも非常に有効でした。

「外国人研究員のためのガイド」という小冊子が出発前に送られ、不明な点がはっきりしてとても役に立ちました。海外研究交流室の琴浦香代子さんと研究協力課の西山明美さんがいろいろと説明してくださり、とりわけ親切にしてくださいました。今も二人のことを大きな感謝の念とともに思い出します。京都に着くや、日文研が優れた研究所で世界中の研究者の受入経験が豊かな場所であることがわかりました。到着するや研究と生活に必要なことがすべて整っていました。仕事も研究の環境にも満足し、仕事と生活どちらにとっても快適でした。

朝九時から夜遅くまで精いっぱい研究につとめました。モンゴル人には珍しい動物を二種類見たのは面白い思い出です。研究室からハウスに昼食のためにもどると一匹の子ザルがそこにいました。同じ日の夜一〇時半ごろには北の道を森の方へ一頭の鹿が走り去るのを見かけました。そんな光景にもすぐに慣れました。図書館とそのサービスは最高の質でした。日文研の仲間に加わるということは、非常に友好的で国際的な研究者チームに加わることでした。

京都の研究時間は私の人生にとって黄金の時間だったと言わなくてはなりません。京都の時間は私だけでなく、一緒に来訪した夫と五歳になる孫の男の子にも素敵な思い出を残してくれました。孫は、京都や大阪にある動物園、水族館ほか子どもの好きな場所に連れていきましたので、京都、日本、日文研をとても気に入りました。特に新幹線の旅が大好きでした。

滞在中には京都、奈良、東京の主要な神社を訪問し、宮司に神道関連の質問をして疑問を質したり祭礼を見学しました。ジョン・ドウギル（立命館大学）、マイケル・ワチュカ（同志社大学）、岩橋さん（神社本庁）、今泉さん（明治神宮）、乾さん（上加茂神社）にはシャーマニズムと神道の比較研究を深めるにあたってとても助けて下さいました。この有名な神道研究者

や宮司はいずれも私の担当となったジョン・ブリーン教授より紹介を受けました。

神社の祭に参加し観察することは研究の重要な一部分でした。坂本の山王祭を皮切りに多くの祭を見ました。八坂神社の祇園祭ではとても有名ですが、巡行の前日に屋台を組み立てるのを見に行きました。一〇月に開かれる時代祭では御所の前に私と夫は席を取りました。大阪で七月に開かれる天神祭では花火に特に驚きました。三月の東大寺・お松明では巨大な松明が群集の頭上を移動するのに昂奮させられました。八月京都の五山送り火、伏見稲荷大社の祭も見物しました。それ以外でも京都の歴史名所をあちこち訪れました。御所、金閣寺と銀閣寺、二条城、清水寺、平安神宮、東寺、天竜寺の庭園、嵐山などです。二〇一三年の新年は有名な八坂神社に真ん中の息子、義理の娘を連れて行き日本の友人と一緒に祝ったのをつねに楽しい思い出としています。

他の女性と同じように買い物が好きですから、空いた時間には高島屋によく行きました。モンゴルの男性は格闘技が非常に好きですが、ご多聞に漏れず夫も相撲のテレビ放映にくぎ付けでした。一五日間は毎日テレビに夢中でした。二〇一三年一月、私たち夫婦と孫は新幹線で東京に行き、国技館で初場所を見物しました。私たちの古い友人で日本駐在モンゴル大使のクルルバタール氏が招待してくれたのです。横綱白鵬がその場所は優勝しました。私たちは皇室席の近くでしたが、その日には皇族はお出ましではありませんでした。取り組みを非常に楽しみ、売店で夫は力士の写真のついたカップをいくつか買いました。間違っていなければ好きな力士は大関魁皇と関脇安美錦だったと思います。

日文研滞在中に二本の論文をまとめました。ひとつは“A Survey of Japanese Studies in Mongolia: Focusing on Choi. Lubsangjab University of Language and Civilization”で、『世界の日本研究 2014

日本研究の隆盛』に収録されています。第二の論文は日文研での研究の主要な結果で「シャーマニズムと神道―モンゴルと日本の土着宗教の比較」と題されていますが、まだ日本語では出版されていません。

滞在中には日本の伝統文化遺産や生活様式に近づく機会を得ました。自分の目でどれほど日本の人々が伝統と文化を愛しているか、伝統的習慣を喜んでいるか、祖先より伝えられた習慣や行儀を誇り、国民の習慣に敬意を抱いているかを確かめました。その日本人の性格を心より讃えます。研究の中心だった神道の祭礼と高山の岩信仰など自然崇拝を比較する論文を構想しています。いつかその調査が認められることを心から待ち望んでいます。

一年間の研究生活の結果、以前にはわからなかった多くの不明な点が明らかになりました。共同の研究者や新しい日本の友人に心よりの感謝を申し上げます。友人のなかには私たち家族を家に招待して日本食をふるまい、有名な味噌汁や寿司の作り方を教えてくれた人もいました。そういう日本料理は作れるようになりました。最後まで外国人としてどうしても覚えられなかったのは、正しい角度でお辞儀をすることです。日本人はいともたやすくやるわけですが、何百回やっても私はうまくできませんでした。きっと私の体はかたくてきちんと曲げられないのだと思います。日本人は体が柔らかくてお辞儀ができるのです。私は友人を真似て最善を尽くすようにしましょう。そのチャンスがもう一度来るのを心から待ち望んでいます。

（国際日本文化研究センター元外国人研究員）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

中日音楽交流の橋をかけよう

趙　維平

国際日本文化研究センターは私の研究歴において、深まりと広がりを持たせてくれたところである。日本での留学生活を終え上海音楽学院に戻って教鞭を取ったちょうど一〇年後の二〇〇九年一〇月に、日文研で外国人研究員として一年間の研究生活を送った。多忙な仕事から抜け出し、再び自分の研究に没頭できる貴重な一年間だった。博士論文は奈良、平安時代における中国唐代音楽の受容に関する研究で、日文研では東アジアと中国の音楽関係に焦点を絞り、中日両国における踏歌という音楽ジャンルの実態調査により、両国の文化性格にまで研究を深めた。[一] そして唐楽の影響を受けた催馬楽の史料に出会って、平安、鎌倉時代まで五百年間のリズム変遷に関する研究も出来た。[二] 京都市民を相手に、東アジアの雅楽について講演をしたことも全く新しい体験だった。かなり専門的な質問をされた市民の皆さんの古い文化への関心に驚かされた。日文研の細川周平教授と中日音楽や世界音楽について幅広く交流できたのも貴重な思い出となっている。また、夕日が沈みつつあるセンター周辺を散歩したときの安らかさや快さもまるで昨日のように記憶に止まっている。

国際日本文化研究センターは私にとって、もう一つ特別な意味を持っている。実は上海音楽学院にも国際日本文化研究センターと名前がよく似ている中日音楽文化研究センター（中日音楽文化研究中心）がある。センターは二〇〇三年一二月五日、上海音楽学院で行われた「第五

回中国際日音楽比較研究会」が閉幕する際に設立された。中国初の日本音楽研究の専門機関センターとして発足して以来、日本音楽研究や日本の音楽教育に関する学術シンポジウムを主催するほか、日本音楽の演奏や解説など、様々な音楽活動を催しており、日本音楽を中国に紹介する窓口としての役割を果たしている。

中国には、日本研究センターがいくつかあるが、芸術文化、特に音楽に関する研究センターはそれまで一か所もなかった。海を隔てた一衣帯水の隣国である日本の音楽、特に日本の古典音楽や伝統音楽について、民間ではもちろんのこと、音楽研究者の間でもあまり知られていなかった。一方、日本では中国の音楽歴史や伝統音楽に関する研究が盛んに行われている。田辺尚雄、岸辺成雄、林謙三、小泉文夫をはじめとする研究家が輩出し、多くの研究成果が蓄積されている。市民センターで開かれた中国音楽関係の講座に足を運んだ一般人も後を絶えなかった。それを思い知らされたのは日本留学や日文研滞在の時だった。

一九八九年に日本文部省国費招待留学生として馬淵卯三郎教授の指導の下で大阪教育大学の修士課程に入学した。初めてのゼミで日本人の学生が解説抜きの『六国史』や中国文献の『通典』を、辞書を片手に通読した姿を見て、感服というか、慚愧というか、複雑な心境だった。大きな刺激を受けた私は図書館で勉強に明け暮れ、史料や書籍と奮闘した日々が始まった。修士課程を終了後大阪大学博士課程に進学、博士号を取得、一九九九年に錦を飾ったつもりで母校の上海音楽学院に戻った。一〇年ぶりの故郷は町並みが見知らぬほど変わったが、日本音楽や日本の音楽研究に対する未研究の状況は依然として昔のままだった。中国古代史や東洋音楽史を専攻にした私は、日本に保存されている史料や日本の音楽研究成果抜きでは、中国やアジアの音楽歴史も語れないことをよく知っている。そこで、中日音楽研究センターを作ろうと

思った。

研究史料の不足に悩んでいた私は一時期助成金の申請に走りまわった日々を送っていた。一九九九年帰国して二年目、日本駐上海総領事が上海音楽学院で開かれた新年コンサートに招待されたのが転機となった。パーティの席で当時駐上海総領事の杉本信行氏に日本音楽資料を集め、上海で日本音楽研究センターを作りたいという話を持ちかけたら、前向きに進めようという快諾をいただき、思いがけない展開を迎えた。当時文化担当の副領事だった野口裕子さんの協力を得て、アジアの文化援助に当たる「草の根」という助成項目の申請に成功した。

書籍リストの作成やセンター設立の企画のため、野口さんは何回も上海音楽学院を視察に訪れた。私たちは書籍購入チームを組み、日本大学の蒲生郷昭教授からの紹介で国立音楽大学附属図書館に勤務していた長谷川由美子氏のご協力で日本の雅楽、能楽、歌舞伎、文楽などの伝統音楽資料や、研究用の楽書などのリストを作り、二年間もかけて、一千万円相当の資料をやっと揃えた。その中には「日本国史大系」、「国書総目録」、日本音楽史に関する書物、民族音楽学、日本の民謡、音楽に関する辞典類、一級資料、日本明治から西洋系の創作作品および多くの音楽研究書、そして一部の音響や映像製品も含まれている。中日音楽文化研究センターが二〇〇三年末から正式に設立された後、センターの所蔵資料は一般公開するようになった。中国唯一の音楽専門資料室として、全国の研究者に日本音楽を調べるのに必要な資料を提供している。

中日音楽文化研究センターは国際日本文化研究センターと名前がよく似ていて、双子のように聞こえるが、学術研究能力において大きな差がある。しかし、文化交流の窓口として果たした役割は同じである。日文研にいる間、文学、歴史学、民俗学、美術など多分野にわたる研究

発表会や学術シンポジウムに出た経験も帰国後センターのイベント企画に役立った。

センターは研究者に資料利用の便宜を図る一方、日本音楽を中国に紹介する研究機関として位置付けられている。ことに正倉院の楽器の資料や日本に伝えられた中国古代の琵琶譜、箏譜、横笛譜、催馬楽など、中国古代音楽研究に大変貴重な資料を中国の学者に知ってもらうために、二〇〇五年にセンターにより「唐楽と東アジア古譜に関する国際シンポジウム」が主催された。これまで同じテーマのシンポジウムが四回にわたって行われた。シンポジウムがきっかけで、東京学芸大学の遠藤徹教授、法政大学のスティーヴン・ネルソン教授、神戸大学の寺内直子教授、オーストラリアのシドニー大学のアラン・マレット教授、アメリカのアーカンサス大学のレンブラント・ウォルパート教授、エリザベス・マーカム教授など多くのアジア古代楽譜の専門家が上海に訪れた。

国際音楽シンポジウムのほか、センターは年に数回日本から音楽研究者を招き、日本及びアジア各国の音楽に関する講演会、演奏会、ワークショップを計画的に主催している。

二〇〇七年四月に大阪大学の山口修教授が三味線、尺八と箏の演奏者を連れ、センターで上海音楽学院の学生を相手に応用音楽学やアジア音楽の比較研究についてのシリーズ講演を行われた。学生に三味線、尺八と箏の生演奏を聞かせながら、日本化に変容されたそれらの楽器の形態、音律や音色など、中国の元の楽器とはどこが違うのか細かく説明した。そして、上述した楽器で一七世紀に成立した三曲という日本の音楽ジャンルのコンサートも開かれた。生演奏をはさみながら歴史的変遷や理論的解説をする、このようなイベントは中国の学生にとって全く新しい体験となった。

センターは「日本の仏教音楽の楽譜」や「日本における専門音楽教育」をテーマにした講演

も設けた。アジアでも仏教声明のような古い記譜法があるとはまったく驚いたと講演を聞いて衝撃を受けた学生もいた。また、日本における専門音楽教育の講演は、中日における西洋音楽の摂取及びその背景について、同じアジアの国として改めて考えさせられるきっかけを与えたと感想を述べた。

センターは日本の古代音楽だけでなく、近代から西洋音楽の影響を強く受けた二〇世紀前半の日本音楽の紹介にも力を入れた。二〇一一年に五月に、日文研の細川周平教授が「一九三〇年代の日本音楽史」をテーマにした講演で日本の民謡、歌謡曲、流行歌からクラシック音楽の創作に至るまで幅広く日本近代音楽史から多くの例を取りあげ、多彩な音楽様式を展示したうえで分析を加えた。一九三〇年代におけるレコード会社の発展、マスメディアの普及および国民教育のレベルアップがその時代の日本音楽に繁盛をもたらした要因で、その背景には当時の政治行政や経済の発展があると指摘された。

ここ一〇年間、センターは日本、インド、インドネシア、韓国、オーストラリアなど、十数か国の学者を迎えた。敷地面積が三〇平方メートルもない狭いセンターが、学生に世界の音楽に接する窓口を広げた。一〇年前まで日本音楽の研究どころか、基本的な知識さえなかった状態が変わりつつある。私が指導した学生の中で『「博雅笛譜」の曲名考—唐楽の変遷をめぐって』(二〇一一年修論)、「三味線の役割形成と歴史変遷に関する研究：地歌を中心に」(二〇一一年博論)、「中日文化のコンテクストにおける尺八の歴史と変遷」(二〇一四年博論)、「シルクロードにおける西アジア楽器の東流に関する研究」(二〇一六年博論)などのテーマで優秀な修士や博士論文を出している。また、卒論に基づいて書かれた論文が中国の音楽研究専門誌に載せられ、中国における日本音楽の研究に拍車をかけている。それもセンターが設立した一〇

年間で挙げた大きな成果の一つと言えよう。

センターは専門音楽研究や教育に尽力する一方、日本の演奏団体が中国で行われるコンサートの解説や優秀な音楽研究成果の翻訳出版などにも積極的に力を添えている。これまでの中日音楽交流の橋がまだ一本の丸本橋だとすれば、これからの一〇年間は、その橋がもうすこし太く、丈夫にできないかと期待している。専門家の先生方、演奏家の方々、センターとともに中日音楽交流の懸け橋をかけようじゃないか。

（上海音楽学院教授）

（一）「奈良、平安時代における中国音楽の受容と変容―踏歌の場合」『日本研究』第四三集、二〇一一年三月

（二）「日本における唐楽の歴史的変遷―催馬楽の拍子に関する研究」『音楽芸術』二〇一一年　第一期　一八四～一八九頁

「世外桃源」の歳月：日文研での研究生活の思い出

張　翔

（注：「世外桃源」とは中国晋代陶淵明（三六五？～四二七年）の『桃花源記』で出た政治的世界から離れた平和的、ユートピア的、神秘的場所である。）

『封建郡県論を巡る思想連環―東アジアにおける他国認識と自国改革』という研究テーマが認可され、共同研究の代表者として二〇〇三年八月から丸一年間滞在し、また二〇一三年一〇月から半年間戻ることができた。その間、故園田英弘教授、伊東貴之教授をはじめ、各国の学者の皆様から様々な貴重な助言をいただいたのは言うまでもなく、スタッフの皆様に確実なサポートをしていただいたことは、一生忘れられない記憶である。今回、日文研での研究生活を通じて、国際共同研究について考えたことをこの場を借りて述べさせていただく。

一、

日文研に来る前、東京大学や京都大学の客員研究員として滞在したことがある。いずれも世界屈指のすばらしい研究、教育機関に違いないが、正直に言うと、その中にいる外国人研究者がある意味で暫時的で異質な存在に過ぎず、日文研のように外国人の研究者が常時的、構造的な存在という感じがどうも薄いような気がする。というのは、日文研の学者やスタッフが、面

倒を顧みず一人で多数の外国人研究者を相手にする場面も時々見受けたからである。

それよりも重要なのは、そこでの研究が独善的、一方的、また自己満足型ではなく、オープンで自由、そして交互型だということではなかろうか。一つ例を挙げると、ある日文研の共同研究会で川勝平太教授は今まで日本の近代化を「脱亜」（もちろん経済的・物産的自立という意味で）の成功という意味で捉えられていたが、韓国の李御寧教授や皆様との議論の中で、きっぱりと「帰亜」や「返亜」の重要性を再確認し、受け入れられるようになった。これはとても印象的であった。すなわち、日本人研究者と外国人研究者の間の対話により、それぞれの学問の関心や指向などが常に流動的、発展的で、必要に応じて調整や修正もできるものではないか、と推測できる。自由な意見の交換はその根底にある。

日文研のメリットは様々な機会に各国の学者たちと議論ができるということである。日本の学者ばかりでなく欧米やアジアなどの学者たちとも日本語で話し合っていたのはある意味で奇妙な光景ではないだろうか。その場合、日本文化の研究はメインテーマに違いないが、それと同時に、各国の文化、生活や研究体制などにも話が広まっていく。日本文化の研究だけでなく、日本文化研究を通じて諸文化の交流や対話も実にその中で含まれている。ふだん学術シンポジウムで出会った外国人の学者との交流は時間の制約で、必ずしも日文研での外国人学者との交流ほど深くも長くもない。というのは、互いに時間をかけて質問したり答えたりする機会も日文研にいる間多くあり、日文研で友人になりその後も続いて交流することもよくある。

二、

日文研は一つの国際的日本学のセンターでありながら、京都市民にも日文研周りの住民にも

好意的に受け入れられているのではないかと思う。二〇一三年早春、日文研フォーラムの枠で京都市内ハートピア京都の大会議室で市民の皆様に対して「中日文化異同論の推移：近代以降の日本と欧米の学界を中心に」というスピーチをする運びとなり、伊東貴之教授の司会で穏やかに行われた。少し時間がオーバーしたにも関わらず、市民の皆様が興味津々（たぶんそうだろう）で聞いてくださり、スピーチの後、日文研のスタッフを通じて聴衆から多くの質問や励ましの言葉をいただいた。驚き感心したのは、最近中日関係は必ずしもよろしくないが、好意的で、実にいろいろな意見を述べられており、かなり自由で多元的なものであったことだ。

もう一つ今も忘れられない体験がある。ある日、桂駅西口へ行くバスを待っていたところ、一人の年配の女性の方から、涙を流している五、六歳の女の子を指さして「お願い、この子は桂駅前のある英語塾に行きたいが、お母さんが突然いなくなり、授業の時間に間に合わないのを恐れて泣いているから、一緒に行ってあげてください」と言われて驚いた。向こうは僕が外国人だと知っているかどうか分からないが、初めて出会ったものであっても、多分日文研の人だから安心して頼めると思っているかもしれない。なぜなら、昼間に日本人の男性が外へ出かけるのは少ないのではなかろうか。しかし、まったく知らない人に小さい女の子を頼むのは、相当信頼度が高い社会でなければ、できないはずだ。日本の安全性が高いのを認めたうえで、日文研という存在が地元の人々からすっかり馴染まれているではないかとも思う。

実は一度その出来事について旧知のある大学教授に面白げに語ったところ、「気をつけてよ、もし誘拐犯と思われたら大変だよ」と注意された。その先生は横浜の大学で教え、住居も横浜である。横浜では人の往来も多く、多分こういうことはまず考えられないだろう。しかし、京都の日文研は、まさに「世外桃源」といったところで、日文研の皆様と外国人研究員たちが地

元の住民と互いに和やかに共存している。これはその一つの例とは言えないだろうか。

三、

実を申し上げると、最初に来た際、日文研がイエズス会の現代日本版ではないか、とひそかに思っていた。しかし、少し時間がたつと、それは誤解・誤認だろうと悟った。確かに日本人の研究者と外国人の研究者により、日本文化についての共同研究が行われているが、日文研は日本文化を輸出したり、広めたりするという目的より、日本文化の各分野の研究について、互いに議論したり、ほかの文化と比較したり、意見交換したりすることを通じて、その真相・真髄・真価を問おうとする純粋な学術活動をサポートすることを主な目的としているように思われたからである。そして前述の通り、日本文化の研究ばかりでなく、日本文化研究を通じて諸文化の間の交流や対話も実にその中に含まれているのはありがたいことである。

今の日文研は世界中の日本文化の研究に携わる学者の「補給基地」の一つと言える。なぜなら世界各地の研究者がここに来て、さまざまな情報や知識を吸収し、資料を入手しているからである。また、その「交互発信地」の一つとも言える。なぜなら世界各地の研究者が継続的にここで集まり、日本文化研究の成果について、意見交換し、また世界に向かって発信しているからである。そしていつか、世界中の日本文化研究者の一度は必ず訪れるべき「聖地」（の一つ？）になるかもしれない。日文研での日本文化研究がこれから世界にも理解可能な、参考可能な、また世界各地の文化の比較研究にも役に立つものになるよう、切望してやまない。

二〇一七年一月

（復旦大学歴史学系教授）

京都、出雲と日文研の思い出

リチャード・トランス

私が日文研に着いたのは二〇一四年一二月三〇日で、二〇一五年一二月三〇日にアメリカに帰国、まる一年間、滞在した。京都滞在中は毎日のように、妻と一緒に坂の下のスーパー、イズミヤへ買い物に行き、日文研への坂を登って帰り、四季を通して移りゆく自然を観ながらの登り下りを楽しんだ。はじめのうちは随分、妻にぶつぶつと不平を言っていたのだが。中古の自転車を買い、運動しがてら猿や鹿、鳥類保護地区など、日文研周辺の自然を観察するようになった。かなり人口密度の高い京都にこのような自然が残っていることに驚いた。

初めて日文研を見たのは二〇年以上前で、故ウィリアム・タイラー先生を訪ねた時であった。その当時、家はあまりなく、バスもまれであった。現在は、高級住宅地になっていて驚いた。四〇年前に一年間ほど京都の靴屋で働いたことがある。給料は非常に安かったが、毎週のように京都見物をしていた。七〇年代には外国人は殆ど見かけなかった。街並みは貧しく、寺には自由に入れた。最近では中国、欧州、インド、各国の観光客が街にあふれ、市中は昔と比べられないほど繁栄している。しかし、私の若いころの京都をやはりなつかしく思う。

さて、私は、日本現代文学を専門としてやってきたが、かなり以前から地方文学に興味を持ち、明治三〇年代の地方色論争から始めて、地方としての異郷または理想郷、純粋日本を保存する空間、郷愁としての対象等、現代日本文学及びその批評における田舎は、繰り返し、繰り

返し、現れ、主張され、論じられて来たので、その重要性を此処で指摘する必要はないと思うが、地方文化を定義するのは、〈中央／地方〉のパラダイムによるものである。即ち、統一した巨大な組織は複数の未分化の地方を全体的に定める。私の以前の研究によると、このパラダイムに従うとある地方の特徴性を蔽い隠す。地方に於いては典型的な文学活動はあり得ないし、その地方々々によって変わってくるだろう。このために、一つの地方、その地方の観点からある文化史を書こうと思いついたが、これは思ったより難儀なプロジェクトになっている。

様々な理由で、出雲の国という地方を選んだ。この長年にわたる研究を行うには、ある地方にコミットメントが必要と思う。東京、京都、大阪より私の出雲地方との関係はずっと長く深いものである。妻とそこで会い、子供はそこで生まれた。おそらく私の「日本」との経験は「出雲」との経験である。また、本格的な昔風の地方文化史を書くのには、起源から始めなければならない。出雲の考古学的な研究は特に豊富である。八世紀に完成した『出雲国風土記』には出雲の自然と名産物、交通線と国内の郡、神と神社などが描写されており、古代の出雲を知る上で貴重な史料である。『出雲国風土記』の記録によると、宗教的な意味でも出雲は独特な存在である。『出雲国風土記』、「出雲国造神賀詞」「出雲国計会帳」「出雲国大税賑給歴名帳」など―瀧音能之の言葉を借りれば、「出雲には、他の地域と比較する驚くほど豊富な古代史料が残されている。これも出雲地域の特殊性といっても良いであろう。」鎌倉時代にも、出雲の国の特殊な存在は続いた。結局、出雲の人々にとって出雲地方は中央であり、その観点から見るのが、このプロジェクトの本心である。

いうまでもなく、この研究は日本と出雲で行わなければならない。日文研はこの研究を可能にしてくれた。鈴木貞美先生の紹介で、ジョン・ブリーン先生の招待をいただいた。これまで

の私の専門は現代日本文学であり、古代研究では経験不足の私が、二人の先生の支持を得たことに、感動した。日文研で受けた待遇は素晴らしかった。宿泊施設は申し分なく、施設のインターネット・アクセスは良かった。Nichibunken Evening Seminar、「失われた20年の日本研究のこれから」のようなシンポジウム、その他の講演と共同研究の会合と発表は非常に面白く、最近の日本に関する一流前進的な研究を知らされた。又、同僚の外国人研究員との交際は楽しく、友情にあふれるものであった。

日文研のスタッフは皆親切で精通しておられるが、特にお世話になったのは、図書館の人々であった。日文研の図書館のコレクションは、アメリカでは手に入らない出雲に関する資料が多く、本当に役に立った。スタッフは図書館にない本や雑誌記事を快く注文して下さったり、外の大学から借りたりもしていただいた。彼らには心から感謝している。

出雲の国は歴史的概念であり、地方行政の観点からは存在しない。しかし、現在の地図に載っていない出雲は根深くかつ具体的なイデアであり、島根県に住んでいる約六八九、九六三人なら誰でもその境を知っている。島根県内の石見の国との境は三瓶山あたり、広島県と鳥取県の境は中国山脈の日本海側の分水嶺に大体はまり、北東から南西の日本海に面した海岸は約三百㎞。この想像上の国を探検するため、現地調査を行わなければならない。この点にも、日文研の管理者と先生たちの許可を得て、毎月一週間から一〇日間ほど、出雲地方を訪れた。出雲地形を踏査し、出雲だけで得られる資料を集めた。これも、日文研が可能にしてくれた。

要約して言えば、私の思い出では、国際日本文化研究センターは、日本研究のための理想的な環境であった。

（米国オハイオ州立大学教授）

日文研思い出のあれこれ

ブライアン・パウエル

私の日文研の思い出はずいぶん昔にさかのぼる。初めの方のは今では少しかすんでいる。最初に訪問したのは建物が完成する前、一九八七年だったと思う。案内してくださったのは横山俊夫京都大学教授で、園田英弘先生と白幡洋三郎先生の二人が日文研の目的について説明してくれたと記憶している。着いた時には既に暗くなっていて、日文研は無人の野の真ん中にあるように思えた。

しかし日文研が日本の話題を研究している外国の大学人、研究者に多くの機会を与えようとしているとはっきりとわかった。翌年の一九八八年、英国日本研究協会（ＢＡＪＳ）の会長に選ばれ、その目的のひとつとして日文研の事業を会員に紹介しようと決心した。国際交流基金のおかげで翌一九八九年、オックスフォードのキーブル・カレッジで開かれたＢＡＪＳの学会に日本から学者を一人招待することができることになったので、日文研に適当な学者を派遣していただけないでしょうかと園田先生と相談するように理事会より頼まれた。

今は亡き埴原和郎先生がその時には日文研代表の学者として選ばれてやってきた。当時のＢＡＪＳ事務長は、彼を非常に礼儀正しい人物で、カレッジ制大学であるオックスフォード大学がどう組織されているのかに興味を示したと記憶している。埴原先生は学会の全体で刺激的な講演を行い、多くのＢＡＪＳ会員に日文研の仕事と施設について語った。

日文研との次の接触は二〇〇三年のヨーロッパ日本研究協会（ＥＡＪＳ）ワルシャワ大会だった。学会は中欧・東欧の日本研究というテーマのプレ会議から始まった。これはＥＡＪＳでもっと進めるべきだと前々から考えていたことだったので、日文研が共催したのを喜んだ。白幡教授は大観客の前で挨拶し、日文研が中欧・東欧の学者による日本研究に関心を持っていると強く語った。

二〇〇五年にはウィーンでＥＡＪＳ学会が開催され、過去最大規模の七〇〇名以上の参加者を数えた。この時には日文研は「協力的な環境における独創的な学問　日文研の研究」と英語で銘打ったワークショップを持ち、多くの出席者を集めた。そして白幡先生をリーダーにしたチームが日文研で行われている研究の多様性をうまく伝え、その豊富な電子資料に関する目覚ましい解説を行った。その間ＥＡＪＳの会長となった私は、日文研にこの催しを主催する手間をかけていただいたことについて、協会からの感謝の意を表すことができて嬉しかった。

二〇〇六年になってようやく私自身、外国人研究員として六ヶ月間、日文研の研究活動に参加できた。私の印象はそこで研究休暇を取ったことのある世界中の数多い学者の印象と非常に似ていると想像する。まず図書館の資料と有能で協力的な図書館員に驚いた。コモンルームのスタッフの好意に魅惑された。訪問者の滞在をできるかぎり実り多く、また完璧にしようと努める信頼おける事務スタッフへの賞賛の気持ちも尽きない。とりわけ日文研教員が立ち上げている研究会が、非常に幅広いテーマをカバーしていることに驚かされた。どの研究会に参加しようか決めるのがむずかしいほど興味深い研究にあふれていた。

私の六ヶ月の研究はいくつもの非常に楽しい外出で区切りをつけられた。たとえば白幡先生と一日田舎を回り、農業の方式を観察し、現在の農民と実際に会ったこと。早川聞多先生のご

招待で、ジョセフ・キブルツ先生と嵐山の川で夜の鵜飼いを見にご一緒したこと、他の客員研究員や事務スタッフが主催する京都市内観光に何度か出かけたこと。その他、三〇分でも時間があれば、日文研を離れてすぐに美しい環境のなかを散歩できた。

客員研究員にとっては、本務校での事務の責任や重荷を忘れていられる天国のようなところだった。もちろんそれは日文研自身の教員とは違う。中心の建物は全員がコモンルームを通らないと個人の研究室に行けないような構造にデザインされたと聞いた。その目的は教授や他の研究者が会議やセミナー以外でも、時々は気楽に会えるようにするためで、この建築の特徴を決めた人の頭には、ケンブリッジのカレッジがあったと教えられた。私から見ると、それは日文研ではあまりうまく機能していないように思えた。コモンルームを通るときにほとんど誰もいないことがよくあったからだ。この日文研のコモンルーム文化は、過去二〇年間にオックスフォードでも起きたことのように思う。カレッジの教員はあまりに多忙になったため、コモンルームに立ち寄り、新聞・週刊誌・月刊誌の大きなコレクションを読んだり、同僚とおしゃべりしたり、といったその設備を使いにくくなった。二一世紀の初め、私が所属したオックスフォードのキーブル・カレッジでも一日の大部分、コモンルームには人気がなかった。しかし次のような例外もあった。

オックスフォードのカレッジではコモンルームはコモンテーブルによって補なわれている。このコモンテーブルは共同体の感覚強化の重要性を象徴する用語で、無料で簡単な食事がカレッジ所属の教員と研究員にふるまわれている。そこで三〇分以上かける者もいれば、一〇分で済ませる者もいる。しかし全員が同僚とコモンテーブルにつかなくてはならない。食事の一部分と大半に考えられているコーヒーは、コモンルームで食後にならないと出てこない。日文

研滞在の頃、それと似たことがあれば、コモンルームは当初の目的をもっときちんと果たせるだろうと。白幡先生の退任講演では日文研教員が今では事務仕事の重荷に直面していると述べていた。だからくだけた社交の場というコモンルームの役割が非常に低くなっているに違いないと思った。もし何とかしてコモンルームを教員の日々の営みのなかに組み込めたならば、教員も訪問者も利を得ることができるだろう。

多くの元客員研究員と同じく、日文研時代を非常に懐かしく思い出している。学者である妻のイレーナともども幸せな思い出に満ちている。三〇周年を心よりお祝いしたい。日文研は学問の世界にあって特別な何かを創造した。いつまでもその仕事が続きますように。

（オックスフォード大学キーブル・カレッジ名誉フェロー）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

桂坂にて

朴　正一

五〇年ぐらい前に、私は時がゆるしてくれるならば、京都に一日でも長くいたいと思ったことがあった。

そして五〇年後に京都に移転した。三年過ぎた今、その時のことを振り返ってみると、古都に移って来てから、自然を近くにするようになった。桂坂に現れる鹿や猿の集団、猪や美しい声でさえずる鶯など、知らず知らずのうちにフレンドになっていった。木の葉のさざめきや時雨の雨音は自然界の諧調を伝えてくれた。日が沈み、あたりが暗闇の中に隠れる頃、遥か遠くに見える市街地の灯は、人間界の姿を宝石の輝きの中に包み込んでいた。朝は静かな景色の中に日文研の旗が揺らめいていた。構内の中庭には石柱が並びそれらは音楽的な旋律を奏でていた。小高い塔のような構えのある建物は、象徴的な存在であった。

ここを訪れてから、アメリカ大陸から、ヨーロッパから、中東からアジアなど、世界から訪れて来た碩学の人々に逢うことができた。私の在職している大学の研究棟の同じ階にも数十人の外国人の先生がいるが、顔をあわせる人は少なかった。ここでは一年近くいる間に、いろんな人が集まり散じて行ったが、そんな間に私も妻と二人で一年過ごした。

ここにいて、研究の場として忘れられない思い出を与えてくれた。まず、育んでくれた自然との係りの中から、サスティナビリティ（Sustainability）の考え方を想起した。また、ものと

人の移動というものを「盌」（わん）に光を当ててみてみた。人はお茶で酔うことはないが、茶碗に酔う人は多くいる。就中、一、井戸、二、楽、三、唐津と昔から言われている。京都の北山や東山文化は天目茶碗が中心であったが、侘茶が広がるようになると、高麗茶碗が注目され出した。所謂、高麗茶碗は朝鮮の地方の民窯で焼かれたものが、日本に伝世していったものだが、当時の数寄人や大名などに見立てられて、新しい価値観を持たれ、愛され、人々から尊敬されていった。井戸茶碗は、天に向かう線と、波打つ横の線があって、前者は内側に向かう力と外側への力の均衡があり、後者はまるで水を連想させるようだ。無作為の作為によるもので侘茶の無作為に通じるものがある。ファジィ（fuzzy）ということばがあるが、これら「盌」にはそういう特性があるように思われる。定規で計ったようなものではなく、遊びの空間のあるそんな中から、新たな創造が生まれ出るようなほっとした不思議な世界である。それから、日本語の造語力の凄まじさは驚愕に値する。例えば、井戸、伊羅保、三島、呉器、熊川、などに分類されているが、それらは更に、細分類され、因みに、井戸は大井戸、青井戸、小井戸、井戸脇、小貫入がある。伊羅保だったら、古伊羅保、黄伊羅保、釘彫伊羅保、伊羅保片身替といった具合になっている。一方、井戸茶碗は、私たちの国では二〇世紀の後半にできたネーミングでは「粗質白磁」であり、二〇世紀の前半の用例は「粗体白磁」であった。何故伊羅保と呼称されるのかは、多少の説明を要するように思われる。抑々、韓国では、クル（그릇）、サバル（사발）、サギ（사기、沙器）、トジャギ（도자기、陶磁器）、ワン（완、碗、盌、椀）といった言葉があるが、お茶のものだったらチャクル（찻그릇）、チャサバル（찻사발）などがよく使われている。日本語の用法のような茶碗の趣によってネーミングすることは少ない。高麗青磁の関連で緑青磁を「粗質青磁」とするかどうかという点は熟慮が必要だ。更に、圧巻で

ある井戸は謎が多い。単なる「盌」だけではなく、茶会記や箱書きを見ると伝世品を通して、遼々たる歴史が感じられる。昨今、グローバリゼイションの趨勢がみられるが、理論や計算などによって形成された社会や世界には、このような時空が大切であり、それらのユニークさの根源にあるものを認め合い、尊び、共感し合うことが必要だと思う。いずれにしても、人生に於いて、気に入った「盌」と一つでも巡り合いたいものだ。

桂坂から離れて帰国し、また元のモードに戻ったが、桂坂でのことはいつ迄も忘れないだろう。明日も井戸の謎を求めて、ミュージアムに宝探しに出掛けるつもりだ。

（釜山外国大学校日本語創造融合学部教授）

国際日本文化研究センター創立の頃
歴史人口学・家族史の国際比較研究プロジェクトの出発

速水　融

慶應義塾大学で経済学部長を仰せつかっていた一九八九年のある日、突然梅原猛先生から連絡を受けた。どういう用件か分からないまま帝国ホテルのロビーでお会いすると、なんと「速水さん、新しく京都にできる国際日本文化研究センターに移って来ませんか」といきなり言われ、驚倒した。

私は理論経済学から離れ、経済史からも一歩抜けだし、だいぶ前から歴史人口学を自分の研究分野とするようになっていた。もし日文研が経済学、あるいは経済史のポストの適任者を求められているのならば、自分には到底勤まらないと申し上げた。

数日後、なんと梅原先生が三田の私の研究室に来られた。当時、私は全国の江戸時代の人口史料―多くは「宗門改帳」をマイクロフィルムで収集し、それを整理用紙に転記し、人口統計を作るという作業を大学院生やアルバイトの方々と共に進めていたので、かなり広い面積の研究室を使っていた。そして生意気にも「私の研究には、これだけの人員、広い部屋が要るのです」と説明した。先生は、その時は何も言わずにお帰りになり、数日たってまた電話で、「速水さん、ぜひ日文研に来て下さい」とのことである。

さあ大変、真剣に悩む事になった。学部長の職を途中でやめるわけにもいかないだろう。相

談すべき野村兼太郎・高村象平両先生はもう逝かれている。私は思い切って石川忠雄塾長に相談した。塾長は、私も日文研ができるとき多少係わりましてね、と無縁ではないことを言われた。しかし、学部長の任期を勤める事はきつく申された。また、「移るなら日文研に塾の学問を持って行って下さい」と励ましの言葉も戴いた。これで私の気持ちは治まった。

国立の研究機関というのは、どういうところか、想像も出来なかった。実は大型の研究費が交付される可能性のある状況だったので、研究に専念できるなら定年までの貴重な五年半を思い切り歴史人口学に打ち込める、と考えるに至ったのが何よりも大きかった。

かくて私は定年前五年半（選任）プラスもう五年（兼任）、併せて一〇年あまり、二〇世紀最後の一〇年間を京都で過ごすことになる。時に一九八九年九月末、三五年半に及ぶ慶應義塾大学を辞し、京都の日文研に移る事になる。六〇歳寸前のことだった。

京都へ来てみると日文研はまだ仮の住まいで、本建築ができるまでは専ら「京都」を知るべく、町中を回ることにした。京都には他にはない「文化財」の集積がある。それは梅小路蒸気機関車館である。何しろ私は幼稚園時代に、日光駅で初めて目の前を仕業する「ロコモー」に取りつかれ、ダダをこねて日光見物をせず、誰かに付いて貰って駅の傍から離れなかった「三つ子の魂」の持ち主である。

京都に赴任した頃には、もう蒸気機関車はリタイヤして、所々で「見世物」的に運転されている状態だったが、私はそれには堪えられず、動かなくてもいいから、昔日のロコモーを多種揃える梅小路こそ蒸気機関車の聖地だと思ってきた。何はおいてもまず訪れ、敬意を表すべきである。最初が同じ「梅」の字であることに免じてお許しを乞おう。もう一つの「梅―梅」連関である。

一九九〇年四月、研究室棟が完成した。私の研究室（個室）は南側にあり、京都の街からすれば西側の、いわゆる西山の山裾まで見える絶景が目の前に広がる特等席であった。東京では、窓からみえるのは水平と垂直、つまり直角からなる風景であるが、日文研の研究室からは、目の前に斜めの稜線が横切っているのである。その斜めも決して直線ではなく、やわらかにふくらんだり、へこんだりしている。要するに不規則な「ななめ」である。こういった不規則性が目の前に展開する場所で、日のある間の大部分を過ごすのは生まれて初めての経験であり、まず仕事を始める前に、斜め読みならぬ風景の斜めぶりをゆっくり楽しむことにした。

そのななめの見える部屋に長く愛用している愛用しているキャノワード四五というワープロ機を置き、持ってきた図書資料類を並べ、私個人の研究室は整った。そして嬉しいことに、一九九一年度より五年間の大型研究費（創成的研究）が採択され、九〇年度はその準備費としてなにがしかの研究費もいただくことになった。「創成的」とは、文部省が毎年一件に限って採択している研究費で、毎年一億円、五年間を基本とし、これによって当該研究分野の飛躍的発展が期待されるものであった。また、日本における研究を国際的レベルに引き上げるべく、国外の研究者とメンバーを組んだり、国際学会で報告したりすることを大いに奨励していた。

ということで、一九九〇年は研究プロジェクトを構築すべき一年となった。まずこのプロジェクトであるが、私一人では手に余る。とくに家族の史的研究を進めている方に是非来て戴きたい。東大を出て、その時点では同志社の女子大学で教鞭をとられている落合恵美子さんが適任ではないかと考え、九四年から日文研の専任として来て戴くことになった。落合さんは、プロジェクト終了後、京都大学文学部に移られ、ご自身のアジア家屋史研究とともに、多くの若手研究者を育てられている。

また、この研究では大型コンピュータを用いる大量データの処理が不可欠である。幸い日文研には小野芳彦助教授がコンピュータ専門家として居られた。

さらに幸運だったのは、日文研が助手のポストで一人公募をしたことである。シアトル市にある州立ワシントン大学で学位を得た社会学の黒須里美さんが採用された。私はこの人ならば、英語は堪能だろうし、社会学でも実証的研究ならば立ち上げる大型プロジェクトに適任だろう、と考え、強く推挙した。現在黒須さんは母校麗澤大学で大学院委員長をつとめ、比較人口・家族史研究の事務局長として国際的な活動をされている。日本の歴史人口学・家族史研究のセンターは麗澤大学にある、と言っていいだろう。ポーリン・ケントさんとともに、助手として、この上ない協力者であった。

かくしてプロジェクトの本陣は整った。より難しいのは、国外の研究者を決めることである。国内を含め、一人一人名前を挙げ、どのようにしてメンバーに入って戴いたかを述べることは避け、なぜ日本を含んで五つの国が研究対象となったかを明らかにしよう。

フランスで始まり、イギリスに渡った歴史人口学は、キリスト教社会ならば、どこにでもある教区簿冊（Parish Register）を用い、特にルイ・アンリの考案した家族復元法（Family Reconstitution）を用い、出生と死亡、結婚に関する人口学的指標の検出に成功した。しかし、それだけでは家族・世帯のことはわからない。イギリスのケンブリッジ・グループを創設したピーター・ラスレットは、戸籍簿型の資料の発掘に力を入れたのも、教区簿冊だけでは限界があることを見抜いていたからである。

われわれの「ユーラシア人口・家族比較史プロジェクト」では、最初から、人口学的観察にとどまらず、同時に家族・世帯の在り方や変化の分る史料を有する国・地域を対象としたの

で、日本の他、中国（遼寧省）、イタリア（北部）、ベルギー（リエージュ近傍）、スエーデン（最南端）の計五つの社会である。日本以外では、それぞれの国のある部分であって、国の名をつけて呼ぶことははばかられる。その日本でも、研究目的に沿って利用可能なのは、北から会津藩領、奥州二本松藩領、信州諏訪藩領、天領大垣藩預り地、長崎近傍の一村落、天草一村落というようにバラバラに散っている。現時点における史料調査の結果、最も研究目的にかなうものを抜き出すとこのような状態になってしまうのである。

国外の研究者は、準備の一年間に直接お目にかかって、こちらの意図も伝えるべく、勤務校または学会報告の場に出向いて研究チームの編成を行った。

まず、アメリカのロスアンジェルスにあるカリフォルニア工科大学（Caltech）へジェームス・Z・リー教授を訪ね、清朝期遼寧省の人口調査簿を拝見し、その整理分析法も知ることができた。同じ漢字文化圏なので、史料はわかりやすかった。こちらの「Eurasia Population and Family History Project」の趣旨を説明し、是非参加してほしいという要請に快諾して戴いた。

ボルチモアで開かれていた学会に出席されていたジュネーヴ大学のジョージ・オルター教授は、ベルギー・リエージュ付近の一九世紀の戸籍簿型史料を用いてリエージュ近傍の歴史人口学研究を進めて居られる方だが、その学会に出て、そこで同様のお願いをし、快諾を得た。さらに、スエーデン南部の研究を進められているルント大学のトミー・ベングッォン教授は、大学に彼を訪問し、同様にプロジェクトへの参加を勧誘し、快諾を得た。ここでは、教会の全教区民を対象とする識字試験簿（聖書の読解力を調査する Examination Register を人口調査史料としている）を基礎史料として居り、原史料を見せて戴いた。

もう一国、イタリアには行けなかったが、人口学の大家M・リヴィ・バッチ教授に事情を書

簡で訴えたところ、マルコ・ブレスキ教授を中心とする研究者数名が、戸籍簿型の史料を用いて研究を始めている事を知らせて戴いた。利用史料は、教区簿冊と教会へ来る者の家族の記録 Status Animarum（魂の記録）である。

フランスとイギリスを歴史人口学の先進国だとすると、我々が対象となる地域を研究する研究者の勤務先は、先進国ではない。しかし、先進国にはなかった人口と家族を結合して捉え、意識的ではないが、人口学や統計学を駆使して一挙に先進国入りをする研究集団という装いをまとっていた。

これら五つの社会で作成された人口調査簿は、もちろん今日の国勢調査や行政資料と比べ正確度は落ちるだろう。しかし、住民台帳型史料として共通点をもつものであり、なるべく長い期間をカヴァーする良質の史料を、多くの地点について収集し、たとえば event history analysis のような手法を用いて比較史的に分析すれば、アジアの二社会、ヨーロッパの三社会の歴史人口学および家族史の比較研究が出来る。

かくて、国際日本文化研究センターは、国際研究チームによる共同研究の中心となった。日本国内のプロジェクト参加メンバー三五名、研究をサポートして下さるアルバイトの方々も決まった。一九九〇年四月、新しい建物が次々完成するなか、多分最も広い部屋を頂戴し、私は、気に入っているダンテ『神曲―地獄篇　第三歌』「Lasciate ogni speranza, voi, ch'entrate!（ここをくぐる者　すべての希望を捨てよ）」を記した横幕を部屋の入り口に掲げ、歴史人口学への途が如何に困難なものであるかを全員に言い聞かせつつ、本格的研究のスタートを切ったのである。梅原猛先生、有難うございました。

（国際日本文化研究センター名誉教授）

ビジョンを持った中心地

ゲルガナ・ペトコーヴァ

ブルガリアの日本研究は一九六〇年末に外国の大学から帰国した最初の留学生によって生み出され、彼らは新しい学術分野を確立し、知的なコミュニティの核を築いた。東欧の国におけるこうした学術的な革新の必要性には政治的戦略、知的交流、文化相互のコミュニケーション、経済計画などいろいろな理由から説明をつけることができるだろう。しかし一つ確実なことは、ブルガリアは何十年にもわたって日本に対して非常に良いイメージを抱き、日本文化への関心は五〇年間たえず上昇していたということだ。

日本研究が生まれる最初の数歩は語学的な学問分野が政治的な変化と経済的な乱流の迷宮から踏み出されたのだが、そのステップを振り返ることは、大学の学問（アカデミア）がどれだけ日々の興味の結果であるのか、あるいはそれが最初の波から何十年たってようやく表面に表れるようなもっと深層の渦や流れなのかを考え直すよい道筋だろう。それは人文科学の未来について決して終わらぬ議論にも関わる。

ブルガリアの政治的な変化は一九八九年に起こった。一九九〇年、ソフィア大学は最初の日本語学科の最初の常設課程を開いた（その時は五年間の修士課程だったが、今は四年間の学士課程を採っている）。少数だが非常にやる気のある学生を集め、ゆっくりとしかし着実に学問分野が拓かれていった。それは国で最も名声が高く人気のある大学プログラムのひとつとなった。

ブルガリアの日本学確立の中心人物はツベタナ・クリステワで、当時は若く将来性の高い研究者だったが、今では国境を越えてよく知られた日本の古典文学の著名な専門家である。彼女は日文研を訪れた最初のブルガリア人だった。彼女の名前は今なお賞賛とともに綴られ、あらゆるブルガリアの日本学研究者の尊敬を受けている。彼女に続いて訪れたのはエミリア・ガデレワ、リュドミラ・ホロドヴィッチ、ボイカ・ツィゴヴァで、いずれも日本学発展に貢献した。二〇〇三年から二〇一〇年にかけて東アジア言語文化学科長をつとめたボイカ・ツィゴヴァは二度にわたって日文研の研究員となり、学士・修士課程の改善に努め、ブルガリアの日本学の競争力を高め、生気を与え揺るぎないものとした。最近では若い世代がバトンを引き継いでいる。

ブルガリアは文献学・言語学の強い学派の長い歴史を持っている。古くは九世紀のシリルとメトディウスの兄弟と二人の弟子たちによるキリル文字の発明と普及があり、弟子のなかには今日のキリル文字の版の発明者として知られるクリメント・オフリドスキがいる。新しくは二〇世紀のツベタン・トドロフとジュリア・クリステヴァ（二人はソフィア・聖クリメント・オフリドスキ大学卒業）の学術的貢献が知られている。ソフィア大学の言語学部は現在では三〇以上の外国語を非常に高い国際レベルで教えている。大半の卒業生は少なくとも三〇の言語のうちのひとつに関して、ネイティヴ・スピーカーに近い能力を身に着け、国際的な環境でキャリアを積んでいる。

しかし私たちは乱流渦巻き、頭を悩ませる時代を生きている。一体この語学の伝統は懐疑的な人文科学者によっていくども攻撃され、どうやって生き延びていけるのだろうか。

私たちの学生たちは今『伊勢物語』をオリジナルの中世日本語からブルガリア語に翻訳して

いる。そして多面的で多層的で多義的で非常に生き生きした言葉に驚いている。それは人類普遍の本性に合った言葉だという印象を持っている。学生たちはナルト、デスノート、ワンピース、ピカチューとともに育ったマンガ・アニメ・ファンだが、同時に日本学の勉強は「より良い人」になると信じている。こうした勉強は知的な挑戦や楽しみをもたらすと最近のアンケートで答えている。日本に「恋して」いるのだが、決して収入の良い将来のキャリアが待っているからではなく（ブルガリアではめったにないことだが）、未来のためのビジョンを約束してくれるからなのだ。彼らは大胆にも訊いてくる。「センセイ、いつになったら源氏や平家を翻訳するのでしょうか」。彼らは決してマンガ版の翻訳を述べているのではない。ブルガリアの読者のための贈り物としてマンガも訳すのをためらってはいないが。

つまり……文化と語学の防波堤を必要としている。ビジョンを持った中心を。

私は日文研の活動については二〇〇二年からのことしか知らない。それは博士学生の時期、論文審査員だったクロプフェンシュタイン先生を訪問したときだった。そのときにたとえ短期間でもこのような研究所に埋没できるよう最大限の努力を払おうと決意した。この決意を実現するのに一〇年以上もかかってしまったし、何がそれほどまで魅力的だったのかを理解するのにほとんど一五年もかかってしまった。事実、日文研は三〇年間の存在を通して、つねに前線に立っているというより前線そのものだった。それは最近の共同研究の課題をざっと見渡すだけでわかるだろう。「投企する古典性―視覚／大衆／現代」、「多文化間交渉における「あいだ」の研究」、「3.11 以後のディスクール／『日本文化』」ほか多数。政治や社会の変化に敏感で、国のレベルを保ちながら同時に国際性を志向している。業績に貢献すると同時にその触媒として機能している。

日文研は理論を学び共有し発見し拡散し、協力し再考し疑問視し発見する場所であり、伝統を守り創造する場所である。人文科学の未来にとって真に先を見る場所である。

（聖クリメント・オフリドスキ大学日本学科）
原文：英語
翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

日文研　深い衝撃を持つ研究所

デヴィッド・ヘバート

三〇年にわたって国際日本文化研究センター（日文研）は世界中の日本研究の分野に深く、また広範囲の衝撃を与えてきた。日本に関心を持つ研究者に重要な資料をふんだんに差し出し、日本の社会文化の遺産を一般に鑑賞させてきた。研究と学会のための私のグローバルな旅のなかで日文研所属の研究者による著作と複数の大陸の書店でしばしば出会ってきた。日文研が直接出版する雑誌『JAPAN REVIEW』やその他の出版物は主要な学術書店で敬意を持って遇され、収集され、新しい知識の普及に役立つユニークで尊敬される場を提供している。私は二〇〇九年の夏、外国人研究員として招かれる大いなる特権を得た。それは日本に興味を持つ他の研究者に喜んで語る非常に意味のある経験だった。いくつかの理由で日文研を偉大な資源だと何度も推薦してきた。⑴所属する研究者が非常に知識が豊富でまた援助を惜しまず、評価と生産力が高いこと、⑵極めて職業性の高い図書館スタッフの有能ぶりと能率のよさ、⑶研究と住居双方にわたって設備が心地よい環境に囲まれていること、⑷京都のあらゆる恩恵に十分に近いうえ、美しい山のそばの自然の中に位置していること。

日文研ですごした時期について多くの心安い思い出を持っている。いろいろな分野の多くの研究者との深い会話。彼らは貴重なアドバイスを与えてくれた。スタッフの配慮の深さは真実驚くべきで心打たれる瞬間を持った。膨大な図書館の資料の合間を探索したり、近くの山々を

歩いている時に思わぬ発見に出会った。中庭の楽しいピクニック（近くの山から現れたイノシシの訪問を受けた）、スタッフとの音楽リサイタルもあったし、コモンルームと中庭から一生に一度の日蝕を見た。日文研と細川周平先生に拙著のなかではっきりと謝辞を述べた。二冊はスプリンガー出版から出版され、一冊は日本における西洋音楽を扱い（『日本の学校における吹奏楽と文化的アイデンティティ』）、もう一冊は近刊のアンソロジーで『日韓社会における翻訳・教育・革新についての国際的視野』と題されている（そこには日文研の郭南燕先生が寄稿している）。将来、日文研に戻ってみたいと心から願っている。そしてこの重要な三〇周年をお祝いしなければならないと思っている。このすばらしい研究所に加わる機会を得たことにとても感謝し、西ノルウェイのフィヨルドから、心よりお祝い申し上げたい。

（西ノルウェイ工科大学教授）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

京都のへりにて

フィリップ・ボナン

朝まだき、夜明けの静かな窓を開くと町の音が聞こえてくる。すると場所の境界地の効果から何ひとつ逃れられないことに気づく。一種の生き生きとした実生活の都会的トポロジー。

日文研のキャンパスは町の南西の境界地、最近できた京都大学イノベーション・パークの背後にある。山麓のふもとにあるさほど急ではない棚地に建っている。田んぼに侵食されず、資源を利用されず、森の外れを開発されない日本の村落の伝統的な場所、里山のすぐそばにある。

最初の夜明けの音風景はちょうど版画のように前景、中景、遠い背景というように平面配置され、都市の音風景の遠近多様な配置よりもずっとすっきり感じ取ることができる。午前四時か四時半ごろには最初の夜明けの光が前景に現われ、全国三紙の新聞配達が購読者の家のとびらに配っていく音が聞こえる。バイクを止めてはふかし、数百メートル先のカーブでは速度を落として坂道の直線道を上っていく。ゆっくりと止まっては走りやがて遠くに去って沈黙を残す。

遠景には重々しくガタンガタンという雑音が聞こえる。五時ごろに郊外を走る一番電車だ。屋根を超えて、夜明けの明るさと静けさのなかを音が直線を描いて広がっていく。町の中心五条の延長にある国道九号線には、赤いランプをつけた車が連なり、近くの地域を結んでいる。消防車やパトカーや救急車のような優先車のサイレンが道路を突っ走って遠い日没に去っていく。北西に向かう道路の脇道は、建物の近景に隠されているが、想像する以上に近い。それこ

そ私たちの中心地にあることのエコーである。

時折、太陽が昇り気温が我慢できないほど上がると、鉄砲と間違えそうな爆発音が聞こえる。次に何かの爆発音かと思う。その次に麓に広がる大きな竹林に火事でも起こったかと思う。しかし実は鹿を畑から追い出すために野菜農家が取りつけた自動圧縮空気爆発装置なのだ。かつては添水唐臼が使われていた。

中景には時折、車が町内を結ぶ歩道を備えた広い環状道路を走っていく。歩道のある道路を走っていくが、生活路はもっと狭く歩道はない。環状道路にはバス停があり、町内の役に立っている。五、六本の線が最寄りの郊外駅、区役所、市民センターまで二〇分以内で結んでいる。谷の底には桂川の支流、小畑川に沿って九号線が走り、バスで京都駅まで一時間足らずで行ける。線の終点にあり、それは境界にいる特権である。早い時間にバスに乗ると席はあいているが、三つ止まるとサラリーマンやオフィスレディ、制服姿の中高生が座席を占領し、立つ人も現れる。

私たちは周辺地、つまり郊外にいる。食品が必要だが近くのスーパーマーケットになければ、中心地のどこに買いに行けばよいかを知っている。だがそれには長い道を徒歩、バス、鉄道、地下鉄で行く必要がある。都心の活気あるど真ん中にたどり着くには乗り換えがいろいろあって、どれに乗るべきかを覚えなくてはならないだろう。それは境界地に住む代価である。日常品はだんだん見当たらなくなっている。

日が昇り丘に最初の光が届く七時一五分前ごろ、山にある大きなクスノキと墓地に眠っていた大きなカラスが目覚め、ガアガアとうるさく啼いてから、街に放り出されたゴミをほじくり出している。毎朝、ローラースキーをはいた男がトレーニングのためにスキーのストックを

持って舗装道路を上がり滑って下りていく。真夏になる前にセミがうるさく啼きだし、夜明けの曲を木々から奏でる。連中も街中にはめったにいなくなった。重役たちは高級車のドアをばたんとしめて職場に去っていく。ふたつの世界が交差する。

そこは一五年前には存在しなかった新しい地区だ。丘の麓の坂のゆるい場所に建設されたが、市街地が広がる平地よりすこし飛び出している。その場所はやる気満々の若いエリートを喜ばせるような立地である。大きな郊外の一戸建ては二台の車庫を正面に備え、紳士向けには三〇〇馬力の四輪駆動、婦人向けには軽の車が並んでいる。これはすべて「京都プロトコル」の国で起きていることだ。私たちの同僚オーギュスタン・ベルクを心配がらせ、省察した風景の殺人が実際に起きつつあると考えられる。

街とその境界地

京都の町の歴史はよく知られている。七九四年、天武天皇が当時の中国の都、長安をモデルに条理構造で創設した。町の中心部分についてだけにあてはまるが、その発展と縮小、東への移動、古代の方形構造の町（ちょう）の垂直的な分割、道路の格子よりもメディアに近い内部構造、家屋の道路への浸入などが知られてきた。今日では当時より広がり、かつては街を守っていた山に達している。丘は今では街区で取り囲んでいる。町は繰り返して周囲の山に達しそれを越えて、さほど高くない丘陵部には連絡道路が通じている。あたかも都市の液状のテーブルクロスが少しずつ高さを上げて溢れ出し、細かなすきまの隅々まで流れ出し、つい隣の平地の傾斜に流れ落ちていったかのようだ。

都市の街区が成長し拡大するし丘の麓にぶつかるとき、その境界地の部分で何が起きている

かをあまり描いてこなかった。ヘリで暮らし仕事をしてきたことから、京都工芸繊維大学の所在する北東部の松ヶ崎、日文研の所在する桂坂、細い白川と太い鴨川が流れる東山（一九世紀末に琵琶湖疎水が引かれた）の三つの例を挙げたい。その土木工事を扱った小さな博物館はその建設以前と以降についての貴重な図面を公開している。それぞれは都市の歴史と日本社会の一面について教えてくれる。

桂坂地区は都市計画の地区で、あるところは車道、あるところは歩道で境界地の道が作られた。しかし逆説的だが想像される以上に利用されている。住宅地区がある反対側には二六八メートルの白砂山の森にいたる坂が始まっている。そこには朝早くに鹿が啼いていたり、夕方には一群の猿が警戒の声を発している。森や竹林を登っていく小道を歩くと、環境は楽しいのだが、危険（猿、蛇、時には熊までも）に警戒するよう立札が立っている。西洋ではもはや野生の自然と都市化された空間がこれほど近くぶつかってはいない。

地域の都市計画には特徴がある。ゆるやかに曲がるしっかりした道が住宅地区を横切り、その次の網目に通じているが、そこには計画はなく、いわゆるグリーンウェイになっている。たいていいつも誰もいないが公園もある。ペットの散歩をしたり子どもたちも遊びにやってくる。町内のパーティもある。

森のそばには主に学校のために教育用の観察公園も作られ、アマチュアの自然写真家が大きな鳥小屋のかげで、珍しい野鳥が池に飛んでくるのをまだかまだかと待ち構えている。つまり近くの自然のために、人はそれを保護している。自然は必ずしも善良で関大ではない。

境界地の幾何学的な効果。あたりの空間の半分ほどには街路も都市の設備もない。人口密度は低く、あまり活動も生活もない。看護学校と学校があるぐらいだ。コンビニもない。地区の

中心、象徴的な交通のロータリーの端には郵便局、町医者、本屋さん、銀行のＡＴＭに囲まれ、中規模のスーパーマーケットが建てられている。西洋の中都市の真ん中にもっと対応するのは、このあたりに主に郊外の駅と太い主要道路があることだ。

したがってこの境界地の道路には都市的流れの横断がない。樹液は一方向にしか流れないのだろうか。排水路や灌漑路が少しあるだけで、「水路」はない。都会の組織のふたつの性格によって中距離で等間隔で網目を作り結ばれている。一方、境界地に固有の流れもある。散歩する者、多くのウォーキングやジョギングをする人が半緑地を利用して丘ぞいにいる。車両、特にタクシーが、この道で少し停車し休む以外の関心なしに止まっている（道路網では無料で駐車することはほとんど不可能だ）。しかしこの新しい地区には丘しかなく、寺社仏閣はない。それは郊外駅のさらにずっと向こうの平地にある遠くの村まで探しに行かなくてはならない。

バスを待ちながらこの平和な地区で目を閉じ、車がおだやかな速度でタイヤと車輪の音を呼び出し、また残して通り過ぎると、田舎の町にいるような気がする。建物からの反響音も少なく、環境の静けさを感じ、瞼の裏には遠い子ども時代の夏休みが浮かんでくる。

ある意味で境界地は少なくともところどころ植物環境と音響環境、動物と人間の行き来に関して入り混じっている。この先端地は野生の獣を防ぐために溝を掘り高い金網をわざわざ張っていても侵入は妨げられない。たぶん将来のひびや割れ目を見越して小さな抜け道もありそうだ。

しかし間違ってはいけない。描写すること、物事と調和すること、それを感じ取ること、このように都市の感覚的風景を分析し始めることは決して現実の丸ごとコピーでもただの複製でもない。というのも都市の形といわれることは社会の組み立ての一貫性であり、住民と自然、文化と世界、この場所と都心と力の関係の投射であるからだ。この個別的な地区が置かれたこ

の場所を前からの決まりごとに則った便利な街中、歴史的な場所、新しい場所の都市活動におくことでもある。日文研は京都大学のイノベーション・センターのさらに「先端」に作られている。文字通り境界地に立てられ、それにふさわしく知識の境界地、研究の先端に位置している。

（国際日本文化研究センター元外国人研究員）

本文の完全版は以下を参照。*Esthétiques et façons d'habiter au Japon, Maisons, villes et seuils*, Philippe Bonnin et Jacques Pezeu-Massabuau, ed. du CNRS, 2017.

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

南アフリカで日本の宗教を教える

エリザベッタ・ポルク

二〇一四年八月に日文研を去って二年以上たつが、良い思い出が何も消えずに残っている。一年間の研究は信じがたいほど成果が上がり濃密だった。同僚（特に担当教員となった磯前順一先生）とスタッフには心より感謝を述べたい。祇園祭の研究計画を持っていたため、その町内のひとつ白楽天町に一年間暮らし、祭礼の諸活動に参加した。そのひとつひとつを楽しんだが、そのなかには山鉾巡行に数時間、炎天下ついて歩くというのも含まれていた！

日文研の後に私の人生は世界の別の部分、別の半球、南アフリカに移った。そこの日本研究はまだ生まれたばかりである。大げさと思うかもしれないが、国全体で日本の宗教研究者はもちろん日本学の専門家は私と夫のウーゴ・デッシしかいないのだ。最近プレトリア大学で日本語コースが始まったが、それは日本関連の話題を大学レベルで教えるところだった。私はケープタウン大学で日本の宗教を紹介した最初の教員だった。そこでは（日本の）仏教、日本の宗教とメディア、仏教と女性・ジェンダー、世俗化理論について今は教えている。もちろん私の授業ではいずれも日本関連の話題を全部とはいわないが、少なくとも数回加えている。たとえば仏教についての大学院の授業では日本の仏教に焦点をあてている。

ケープタウン大学宗教学科で教え始めたとき、南アフリカに日本研究を築き始めようと考えた。これはとても挑戦的な目的だが、まだアイデアの段階である。南アフリカはＢＲＩＣＳの

メンバーで日本よりも中国との関係が深い。そのためもあって孔子学院を通してケープタウン大学では中国語が教えられている。大学の需要は社会経済的な現実に結びついた潮流と無関係ではありえず、同国の社会／経済における日本の役割は決して大きいとは言い難い。多くの例のうちのひとつとして観光を挙げてみよう。ケープタウンは著名な観光都市で（南半球の）夏には世界各地から訪れる観光客で文字通りぎゅうぎゅう詰めとなるが、この驚くべき自然環境を持った美麗な都市に冒険しにやってくる日本人は極めて少ない。西ケープ州地区の日本人コミュニティも小さい。だからといって学生、若者が日本や日本の文化、特に大衆文化に興味を持つのを妨げることにはならない。ケープタウン大学にはアニメのサークルが作られ、学生グループが週に一度集まって自分たちで日本語を学んでいるし、ケープタウン近くには私立の日本語学校がたいそう繁盛しているらしい。

誰もが知るように、南アフリカは一九九四年まで恐ろしいアパルトヘイトに苦しみ、その結果はいまでもこの「虹の国」と呼ばれる若い民主主義的な国に不公平と格差を残している。ネルソン・マンデーラ（敬意をこめてマディバという愛称で呼ばれている）と彼の遺産は南アフリカ文化の主流を占めていて、若い「ボーンフリー」世代の教育が国の未来にとって根源的な役割を果たしている。「ボーンフリー」世代とはアパルトヘイトを知らない一九九四年以降に生まれた世代という意味だ。何十年もの不正が積もり積もって暴力となって爆発することもあり、昨年は国中のほぼすべての大学で暴力的な抗議があった。こうした困難はあるものの、ケープタウン大学の多様で多文化的な環境での教育は豊かな経験である。南アフリカには一一の公式言語があり、私の学生は最も多様な背景の出身である。そのうえ留学生もいて、私の教室は多文化的というだけでは足りないほど多彩極まりない。

学生は誰も日本語を話さないが、何人かは日本文化、特にマンガとアニメについて知っている。私が教えている日本の宗教というテーマは彼らにはまったく新鮮で、多くの学生が日本の事をもっと知りたいと願っていて、ここでの二年間に彼らの関心が高まるのを肌で感じている。南アフリカには、特にケープタウン大学には日本学科を設立する潜在力が潜んでいると思う。ここで日本関連の研究の発展と日本関連の話題を教えるのに励んでいこうと思う。これは長期計画で、挑戦は小さくない。しかし学生が日本の宗教や文化の世界を紹介してくれてありがとうと私に感謝を述べると、これがやりがいのある道だと信じていける。

（ケープタウン大学准教授）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

ジャズ喫茶の（偽）研究

マイク・モラスキー

「ズルイよ！　そんなものを「研究」と呼ぶのは……。」直接言わなくても、周囲の研究者たちが内心そう思っていたようだ。しかし、そう思われても仕方がない。日文研の招聘研究員として一年間も京都に住みながら、全国のジャズ喫茶をめぐる。「研究」や「調査」と言えば聞こえはよいが、けっきょく北海道から沖縄まで、各地のジャズ喫茶にふらっと立ち寄り、店主に話しかけ、テキトウに情報を訊き出しながらノートに書き留める。そのような出鱈目（しかも、楽しい！）なことだから「研究」とは大義名分だろう。もちろん、店主に事前連絡を取り、インタビューに同意してもらってから時間をきちんと約束し、出かける場合もあったが、何の予告も無く突然店に闖入することが私の得意な常套手段。それでも、実り多い調査になった。

皮肉ながら、その理由のひとつは近年のジャズ喫茶の衰退ぶりに見られるかもしれない。全盛時代だった一九六〇年代とはちがい、最近のジャズ喫茶は暇で仕方がない。とくに昼間開店しているジャズ喫茶を訪れると、客が一人もいないことがしばしばあり、地方都市や小さい町のジャズ喫茶となるとなおさらである。そのような店へはるばる遠くから足を運び、店主の話を訊かせてもらいたい客が現れたら嫌がる人はあまりいないだろう。はじめに多少の警戒心を見せる店主も出合ったが、だいたい話し込んでいるうちに気持ちが解け、それから何時間にわ

たり我が店の歴史などについて熱弁を振るい、おまけに酒盛りまで発展したことも何度もあった。れっきとした「研究調査」とは呼べないにせよ、ジャズ喫茶を新たな角度から考察する機会を得たことは間違いない。

＊＊＊

さて、五〇代以上の日本人読者なら、少なくとも一度ジャズ喫茶に入ったという可能性が高いだろうが、ネット時代の現在ではずいぶん減ってきたので、念のため定義しておこう――「ジャズ喫茶とは、ジャズのレコードを客に聴かせることが主目的の喫茶店である」、と。すこぶる単純明快な定義のように思われるが、それでも留意すべき点がいくつかある。

まず、「喫茶店」という用語に留意したい。一九五〇年代から七〇年代のほとんどのジャズ喫茶は昼前後から開店しており、日夜問わず客がコーヒー一杯さえ注文すれば、少なくとも二時間は邪魔されずに流れている音楽に没頭できた。懐に余裕のないジャズ好きの若者にとって、これがジャズ喫茶の一番の魅力だったのだろう。だが、客の足が途絶えてきた今日では、コーヒーだけで営業が成り立たなくなり、生き残るのに夜間のみジャズバーとして営業形態を変えるか、日中はジャズ喫茶だが夕方以降は「ジャズバー」専門という風に、ある程度は従来の営業形態を脱却することが要される。

前述の定義のなかでもうひとつ注意すべき言葉は「レコード」である。つまり、ジャズ喫茶というのはライブ演奏を主に提供するのではなく、あくまでもオーディオ機器を通して再生音源であるレコードが主役だというわけである。「レコード」はＬＰに限るか、ＣＤも含まれるかについて議論されることはあるが、ジャズ喫茶の従来の役割のひとつは、海外（主にアメリカ）からの最新のジャズレコードを客に紹介することにあり、その意味でＣＤを含めなければ

最新のジャズを聴かせることができなくなるため、情報基地としての役割を失ってしまうから、私は他の条件さえ満たしていればCDしかかけない店でもジャズ喫茶として認める（いうまでもなく、ネット時代の現在では、最新の情報と音源が容易に入手できるだけに、そもそも情報基地としての役割も無効になっているだろうが、その問題をここで棚に挙げたい）。

こだわりあるジャズ喫茶では、千枚以上のLPが店内の棚に並んであり、一万枚以上のコレクションを誇る店もいまだに数軒残っている。レコードをいっさいかけないでCD専門のジャズ喫茶でも、名盤レコードのジャケットを店内に飾ることにより当店が「本格派」であることをアピールすることが常套手段になっている。同様に、個人ではなかなか購入できない超高級のオーディオ機器が設置されることも、その店の音質に対するこだわりを演出する効果を兼ねている。実際にジャズ喫茶客のなかに、レコードよりもオーディオ機器を聴くために訪れる人もめずらしくない。要するに、レコードの数にせよオーディオの機材にせよ、ジャズ喫茶が〈希少性〉をウリにしながら〈こだわり〉を演出する側面が見受けられる。

「レコード」に関して最後に留意すべき点は、レコードやCDは、同じ再生音源媒体である有線放送やインターネットラジオなどと、本質的に違うということである。ジャズ喫茶の店主は「マスター」と呼ばれるが、まさしくジャズレコードに対しある程度の“mastery”（通暁）が求められ、常に演出される。言い換えれば、ジャズ喫茶の店主が有線放送を流すことは、まるで自己否定のような行為になり、そこまで手を抜く気だったら店をたたんだ方がよいと考える客が多いだろう。あるいは、ジャズ喫茶の店主というのは、一切喋らないラジオのジャズ番組のDJのようなものだと言えよう。通常のジャズ喫茶の場合、LPの片面（または、それに匹敵するCDの曲数）を立て続けにかけるから、DJとは違い一曲ごとに違うレコードをかけ

るわけではないが、ジャズ喫茶店主もＤＪも客／聴衆に聴かせる音楽、そしてその音の流れや組み合わせのセンスによって評価されるところが共通している。音の流れが単調にならないように気を遣わなければならず、ときに刺激や驚きを与え、ときに安堵させたりうっとりさせたりすることもあろう。つまり、聴き手の感情をうまく操るのも一役だと言える。対照的に、有線やインターネットラジオなどではその責任をすべて別人に任せている。レコードのコレクションも要されなければ、流れている音楽に対する知識も、興味でさえも、一切要されない。チャンネルだけを選べばよい――「モダンジャズ」や「ジャズヴォーカル」や「ピアノトリオ」や「ボサノバ」などのように。いわば安易な消費選択による「インスタント雰囲気」ができ上がるわけである。そのおかげで、現在のどんな飲食店であろうとジャズが聴こえてくるが、幸か不幸か希少性の高い音楽からありふれたＢＧＭと化してきた。

最後に、地方のジャズ喫茶の特徴について簡潔に触れたい。東西南北の数々のジャズ喫茶を訪れ、すでに閉業した店の店主を含め百数十人へのインタビューを行ったが、地方都市や小さい町のジャズ喫茶には、東京と京都のような「ジャズ喫茶激戦地」とはいくつかの違いが目についた。まず、地方都市のジャズ喫茶全盛時代が東京と京都より五年ないし一〇年の遅れで生じたようである。議論の余地はあるものの、私は東京のモダンジャズ喫茶全盛期を一九五〇年代末期から一九七〇年代前半までと見なしている。また、全国でジャズ喫茶の軒数が一番多かったのは一九七〇年代半ばの東京だが、同時代の京都の店舗数が五〇軒もあったので、人口比で言えば東京を上回っていたといえる。その理由はいろいろ考えられるが、当時ジャズ喫茶族の中心は学生であり、当時の京都は市内の学生人口も（人口比で）圧倒的に大きかったからである。対照的に、地方都市にジャズ喫茶があったとしても、軒数は一桁に限り、一軒しかな

い町もめずらしくなかった。上述した通り、東京と京都に比べ地方都市でジャズ喫茶が現れ始めたのが遅く、軒数がピークに達したのも一九八〇年代前半だったようである。しかし、興味深いのはそのような実態をめぐる違いではなく、地方都市のジャズ喫茶が担った役割にこそ大きな相違点があるように思う。

どんな飲食店であろうと、その役割や機能は多面的であり、客にとって違う側面が強調される。ジャズ喫茶も例外に漏れず、ある客にとって主としてジャズのレコードを聴くための場所であり、隣の客にとってオーディオシステムを楽しむ場所であり、さらに単なるファッション感覚で入っている客もあろう（「真のインテリは、ゴダールの映画を観て、サルトルを読み、そしてジャズ喫茶に入るものだ」というように）。ジャズ喫茶の歴史は昭和初期まで遡るが、当初から最新の舶来文化を紹介する側面が重要であり、一九六〇年代のモダンジャズ喫茶も最新の輸入盤レコードやオーディオ機材を披露する意味では同じ機能を果たしていたと言える。あるいは、ジャズ喫茶は音によるアメリカの疑似体験を客に提供していた、ということができよう。

地方都市のジャズ喫茶も同じ役割を果たしていたが、さらに東京（または、京都）という「二次的な憧れの場所」に対する疑似体験も提供していたことが、東北や山口県や九州などのジャズ喫茶でのインタビューから明らかになった。言うまでもなく、当時の日本では大都市と地方都市との間に情報の格差が大きく、金のない学生にとって国内旅行も贅沢だったため、東京には行きたくてもまだ行ったことのない若者が少なからずいた。そのような地方出身の若者にとって、ジャズ喫茶に入ることは「何となく都会的な空気を吸っている」ように感じられたそうである。同様に、大学のために東京や京都に数年間住んでから帰省した若者にとって、

ジャズ喫茶が都会で過ごしてきた懐かしい時間を蘇らせてくれ、回顧心に駆られてしばらく通っていたと証言するジャズ喫茶客もいた。どちらの場合にも、日本の〈周辺／地方〉から〈中心／都会〉への憧れのまなざしが向けられており、地方のジャズ喫茶が果たしてきた独自の役割が見受けられる。

以上、日文研に与えていただいた贅沢極まりない一年にわたる研究（？）期間から得られた知見のほんの数例にすぎない。詳細について、拙著『ジャズ喫茶論』（筑摩書房、二〇一〇年）を参照されたい。最後に、本稿を以って、日文研に招聘してくださった細川周平教授に改めてお礼を申し上げたい（本人は今どき「あれは、失敗だった！」と嘆いているのかもしれないが……）。

（早稲田大学教授）

思想圏としての日本政治思想研究ノート

楊　際開

私は二〇一四年度の外国人研究者として日文研にいました。帰国する前に、伊東さんのご依頼を受けて、日文研の研究のスタンスについて、一回、お話しをさせていただきました。私の主張を簡単にいえば、日本研究は東アジア文明との共同性と連続性に立脚していなければ、その存在理由が無くなる恐れがあるということです。伊東さんの大作『思想としての近世中国』（東京大学出版会、二〇〇五年）を中国語に訳しているうち、朱子学を勉強するチャンスを得ました。其の時、生まれた疑問は朱子学がどのように日本に受け入れられたのか。私の本来の問題意識――東アジア文明は一つであり、その内部の政治理念が中国的な権原から日本的な法原の変遷過程を辿ってきました（拙論「近代中国の思想と革命研究覚書――日本からの思想的な要因を中心に」（国際日本文化研究センター『日本研究』第五一集、平成二七年三月）。「法原」という発想から出発して、徂徠研究を通じて、徐々に藤原惺窩以来の朱子学受容史に対する理解を深めました。惺窩は「在親民」という『大学』に出た言葉を「「在親民」トハ、「民」は士・農・工・商ノ四民ノ四業也。「親」ト云字二、親愛養育の心あり」（『大学要略』）、「親ト云字に親愛養育ノ心アリ。スナワチ養の義也」（『大学逐鹿評』）と理解し、新儒学の「新」の解釈と異なっています。日本の朱子学受容の関心は最初から政治秩序の再建にあったのではないか。つまり、伝統中国においては、朱子学の道徳論が強調されました。対して、日本の朱子

学関心はむしろ共通の政治パラダイムの創出にあると言ってよいでしょう。朱子学の本家の朱子学理解と日本の朱子学受容との違いを考える問題は思想史の課題ではなく、むしろ政治史の課程でしょう。つまり、中国的な権原のもとで、朱子学の利用価値は心性道徳の領域に限られて、日本的な法原のもとで、朱子学は戦国時代を経て幕府再建の政治道徳の資源になりました。

藤原惺窩（一五六一～一六一九）を始め、貝原益軒（一六三〇～一七一四）、伊藤仁斎（一六二七～一七〇七）、荻生徂徠（一六六六～一七二八）、会沢安、吉田松陰、西周等を経て、朱子学の「内」的要素を「外」的に転換させ、新たな政治パラダイムの出現を根拠づけてきました。それによって、アヘン戦争以後、明清朝の代替モデルとしての明治維新が育まれたと考えてもよいでしょうか。日清戦争を経て、出現した浮田和民の「国民的国家」論、内藤湖南の「にがり」説（『日本文化史研究・日本文化とは何ぞや（其一）』）、西田幾太郎の国家論（「国家は統一した一の人格であって、国家の制度法律はかくの如き共同意識の意志の発現である（この説は古代ではプラトー、アリストテレース、近代ではヘーゲルの説である）。」氏著『善の研究』岩波書店、一九五〇年、二一五頁）、橋樸のアジア思想、丸山真男の日本政治思想研究等はいずれも西洋並の近代国家の観念に立脚している故に、このような国家観による東洋文明の再生を図るという二律背反の命題を抱えています。江戸時代の「仁義」論は明治時代に入って、次第に井上哲次郎流の道徳論にとってかわりました。近代日本の国家思想や行動に刺激を受けた現代中国も全く同じ問題を抱えながら、日本との利益的、領土的、主権論的な衝突を展開しています。

問題の解決はもう一度孔子や江戸時代の「仁義」論に立ち返っていく外に道がありません。近年、京都大学法学部に訪問学者として滞在しながら、思想圏としての日本政治思想研究の可

能性を考え始めています。

丸山真男は一九六五年の日本政治思想史講義録の中で、「東洋とは何か」という問題に対して、「「東洋」は新しい文化圏として十九世紀中葉に成立した。それまでは東洋という地理的区別もなかったし、文化的に一つの特別のものという自覚もなかったから、この言葉は古くはなかったのである」と指摘します。彼は『日本政治思想史研究』に於いてもこういう見地に立脚し、「シナ帝国と同じくシナ学界も真の思想的対立を経験しなかった」と見、「徂徠学において絶頂に達するところの、朱子学に対する、より正確には朱子学的思惟方法に対する、アンチテーゼの成長を尋ねよう」とし、伝統中国の政治思想を「反面教師」とした形で日本政治思想史の枠組みを作ろうと考えていました。丸山の「東洋文明」不在論は津田左右吉に由来しています。また東洋文明を一つの思想圏として認めようとしない姿勢は西洋中心の価値観に左右されているからでしょう。

山室信一が『思想課題としてのアジア』（岩波書店、二〇〇一年）の中で提出した思想連鎖の問題も結局は西洋由来の近代概念が日本の漢訳化を通じて漢字文化圏に受容された話になります。漢字文化圏の存在があるからこそ、西洋の衝撃に対応できましたが、我々は東アジア政治史を語る時、ほとんど漢字文化圏そのものの存続原理を意識していません。溝口雄三は「文明圏」について、こう述べます。「文明圏というのは、実体的なある圏域として存在しているものではなく、単にある一つの関係構造にすぎない」。確かに我々は漢字文化圏を「ある一つの関係構造」としてしか把握することができませんが、「ある圏域」こそ、「ある一つの関係構造」を可能たらしめているのではないか。「ある圏域」への自覚は存在構造に関わるものです。明治維新後、漢字文化圏における「関係構造」の中身たる政治的関係や文化的基体に大きな変

化が発生しており、明治維新に対して、伝統中国はその文明の内部から衝撃を受け、近代に向かって再建の道を歩み始めました。

近代東アジア〝文明〟圏の形成について、狭間直樹はこう指摘します。「西洋近代文明を受容するにあたっての、中華〝世界〟における多くの和製漢語の作成、それの中国への移入とその後の展開は、まさに東アジア〝文明〟圏の誕生を示すもっとも端的な証明なのである」。実は、このような近代用語や西洋由来の思考様式に結ばれた東アジアの〝文明圏〟は、ある意味においては、漢字文化圏を一文明としてまとめ上げた内的結合関係を崩壊させました。

幕末日本でも知られた清代の史学家、趙翼（一七二七～一八一四）は一九世紀の初め出版した『二十二史劄記』巻三四「天主教」の中で、こう記しています。「儒教は中国の地だけでなく、南においてはベトナム、東においては琉球、日本、朝鮮に至っている」。これは一種「儒教」なる文化を文明概念の判断基準とし、西洋文明からの圧力の下で、清代中後期の知識人たちが東アジア文明の存在を意識し出したということを示しています。渡辺浩は「東アジア」について、次のように指摘しています。江戸時代において使われている「異国」という言葉は、中国、朝鮮、琉球、蝦夷、韃靼、ベトナムのような国や地域を指すもので、その「外」たる西洋や他の国々と違い一定の文化を共有し、何よりも漢字を知り食事に箸を使う、ということで、いわば、漢字文化圏、箸文化圏という意識が根底にあります。それは、現代日本語でいう「東アジア」に、おおむね合致します。東アジアの文明地図は漢字文化圏として、他の文化圏と異なる「共通」の文化的特色を持っています。それと同時に、「外」から見れば、東アジア文明に独特の文字体系、独特の思想体系があるにもかかわらず、その内部にも、一枚岩のような存在ではなく、文明触変の仕方によって、バリエーションを作り出しながら、ある種の生命

力を呈しています。近代東アジア政治史も漢字文明圏の中で展開しているので、それを裏付けるような思想史の研究も必要でしょう。

東アジア政治思想史に共通のテーマは、政治的「私」による社会的「公」への抑圧ということであり、君主制との朱子学的な連帯関係の解除は近代東アジア文明圏を形成させた社会契約的な絆となっていたと考えられます。そういう転換のなかで中江兆民の説いた天皇の役割（「天の説」）が憲法理念として浮かび上がってきました。魏源の提起した憲政的な問題（万事莫備於六官、而朝廷為出治之原）は政治的「私」から社会的「公」への憲法理念の転換を目指しています。それは、アヘン戦争、太平天国の衝撃を受けて明治維新の最大な政治課題となりました。瀧井先生の明治維新研究班に参加し、斉藤拙堂による『経世文編抄』及び、それが吉田松陰へのインパクトについて、ご報告をさせていただきました。清朝経世思潮――明治維新――辛亥革命を東アジア政治思想の展開という枠組みで捉えることが可能ではないでしょうか。

中村久四郎は曽て中国文化と日本文化を本流と支流、緯線と経線、偶然と必然に譬え、両者の関係を論じて、こう指摘します。「支流が何程数多くあっても、本流の源遠く流れ長くして河道の又大なるには及ばない。緯線は短い距離に於て忽ち左にゆき、忽ち右にゆき、其色も亦変化錯雑するのが常である。到底経線の一定貫通する長きに及ばない。併し、文彩錯綜して、美しく織りなすには、緯線の力を要する。又必然は一定確実であるが、不変単調といふ長所もあり短所もある。偶然は不確定であるが、事物を変化複調ならしむる作用がある。」私はこのように自分の帰属している文明を共変的に複眼的に捉える姿勢に共鳴を覚えています。

（杭州師範大学国学院教授）

ふたつの国の永遠のつながり

林　志宣

京都から帰って既に三年もたってしまったとは信じられません。ここソウルで桜の花や色とりどりの葉を見るたびに、日文研の風景が私の心で重なります。

日文研生活では作曲に集中することができたうえ、京都で「カオスモス Chaosmos」「不可能な可能性 Impossible Possibility」、東京で「生の永遠の歌 Perpetual Song of Life」を初演する機会を得ました。そして帰国後に出版する『映画のなかの現代音楽』の執筆に多くの時間を割くことができました。拙著は二〇一四年に出版され、韓国の出版財団の「世宗図書学術部門」でノミネートされたのは嬉しいことです。日韓の関係をただ一人の個人的経験に還元することを望みませんが、両国間で交換コンサートを催すことをずっと探っていて、二〇一五年は私の願いを実現するのに完璧なタイミングでした。その年は日韓外交関係樹立五〇周年にあたっていたのです。

新作を朝鮮通信使のコンセプトで作曲しようと思いつきました。それは日文研滞在中のふたつの体験にもとづきます。第一に、京都で娘とドキュメンタリー映画『最初の朝鮮通信使李藝（イ・イェジ）』を見ました。そこに描かれた両国の良好な関係を保とうとする両国の人々の努力に印象づけられました。一五世紀より一九世紀初頭まで朝鮮通信使は現在のソウルから京都まで二〇〇〇キロにわたる長い旅を行い、二〇〇〇人以上の人間や馬の大行列が両国で図版や

文書に記録されています。彼らは進んだ文化を日本側に伝え、日本側は一行を実に温かく、心から歓待しました。音楽と踊りは一行の長旅の疲れを癒し、日本の宿主はすばらしい食事と見世物で彼らを慰めました。第二に、京都近くの小さな祭りで元中学校長に出会い、彼は遠い昔、日本に進んだ文化を伝えようとした朝鮮人にどれほど感謝しているかを私に語りました。彼はそれを素晴らしい将来に結びつけようとしていました。この二つの刺激から朝鮮通信使を記念する作品が構想されました。

私が作曲家として委嘱を受けた画音室内管弦楽団と、京都市立芸術大学の中村典子准教授は、朝鮮通信使を記念する特別なコンサートを企画し、私は音による想像上の通信使の旅を描写した『朝鮮通信使の散らばった記憶との邂逅　Encounter with the Scattered Memory: Choseon Tongsinsa』を初演しました。かつて両国で共有され愛された旧来の習慣、文化、芸術を象徴するため、その古い響きを伝える伝統楽器の笙（笙篁）を用い、作品は四つの空想の情景を描いています。朝鮮王と通信使の面会と一行の釜山への陸路の移動の情景、瀬戸内海経由の波間の旅と上陸して京都に到着するまでの情景、安全な上陸後の休息と娯楽の情景、そして最後にほぼ九ヵ月の旅をしめくくる京都から江戸までの壮麗極まりない行列の情景、この四景です。

中村典子さんはそれに対して、同じコンサートで新作『海煥草木川花奏鳴』を初演しました。それは一九四五年、日本で獄死した韓国の詩人尹東柱（ユン・ドンジュ）に寄せられています。彼はわずか二七年生きた後に、韓国人の心に今でも残る美しい詩を多く書きました。彼の非暴力の抵抗は日本人にも強い印象を残したに違いなく、中村さんはプログラムに書いています。

海煥（해환）は、韓国の国民的詩人尹東柱の号である。尹東柱は中国満州に生まれ、幼い頃、海煥と呼ばれていた。彼は平壌、ソウル、東京、そして京都の同志社大学で学んだ。彼は詩を韓国語で書いていて、そして逮捕され、第二次世界大戦の終わる前に、福岡で二七歳で亡くなった。その時、彼の母国語である韓国語は西洋植民地国家の如く、大日本帝国によって禁じられていた。彼は私達の先祖の、力の信奉者によって死に運ばれ、帝国主義者と全体主義者が彼の生命を奪った。しかしながら、彼のメッセージは永遠に生きている。私はすべての草や樹や川や花の声の中にある彼の精神をいつも感じ、彼の光は私やあなたや私達そしてあらん限りのすべてを、海と天より抱容する。

アジア起源の弦楽と、天からの光を表す竹のマウスリードオルガンの日本伝統楽器笙が、宇宙すべてのそれぞれの場所で、絶え間なく会話する。

二〇一七年は尹東柱の生誕百周年にあたり、延世大学の尹東柱記念事業会は五月一八日に構内のクムホ芸術センターで、それを祝う特別コンサートを企画します。『海煥草木川花奏鳴』は詩人と密接に結び合っているので、作曲者と笙の奏者真鍋尚之氏を招き、延世シンフォニエッタによって初演されます。私はこの特別な機会のため、尹の人生と詩にヒントを得た新作、ヴィオラ協奏曲『新しい路New Paths』を書き終えたばかりです。二一世紀になってもなお両国間の社会政治的な摩擦は続きますが、このコンサートは傷ついた人々を慰め、両国民の平和的な共存を助けるという意味で意味深いと確信しています。尹東柱の人生の痕跡が日中韓の三国にまたがっていることを思うと、日韓のみならず中国を含めた東アジアの平和と発展の価値を広げるのに、彼は良きアイコンとなるに違いありません。

数日前、かつて日文研客員教授だったこともある兄で歴史家の林志弦（リン・ジェヒュン）と話しました。兄は次の研究休暇の計画のことを話し、二人で日文研の非常に静かな私生活と学術的な業績について懐かしがりました。果たして日文研に帰るかどうかは確かでありませんが、京都と日文研が兄にも決して忘れようのない良き思い出を与えてくれたことは間違いありません。

三〇周年、おめでとうございます！

（延世大学教授）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

医学史研究の高峰

梁　　嵘

日文研が設立された当初、山田慶児教授の指揮下で、科学技術史の研究が展開され、医学史が特に重要視された。当時の日文研は、日本全国だけではなく、アジア地域の優秀な医学史研究者をも惹きつけていた。研究班と読書会を通して、研究上の新発見について意見を交換し、重要な問題について議論を交わした。山田先生は中国の医学の起源、中国医学の基盤を築いた『黄帝内経』の思想的構造、中国医学の核心的概念「気」、それを運ぶ媒介物の「運気」などを深く研究され、独自の見解をもち、中国医学史の研究と発展に深遠な影響を与えている。特に「気」に関するご研究は、今日においてもなお学術的先見性をもちつづけている。

山田先生が退官されてから、栗山茂久先生が日文研において医学史研究のリーダーとなり、文化史の角度から、医学史研究の新しい領域を拓いた。先生は世界各地の研究者を日文研に招き、学術交流を行い、アジア医学史学会（the Asian Society for the History of Medicine, ASHM）を成立させて、アジア地域の歴史学研究者に生命科学史、医学文化史の研究課題を与えた。中国の医学史研究の人材を育てるために、北京大学、復旦大学（上海）、南開大学（天津）を頻繁に訪れて、若手の医学史研究を指導してきた。中国の中堅研究者によって極めて高く評価されている。

現在、日文研の医学史研究を牽引しているのはフレデリック・クレインス先生で、西洋の医

学が日本の医学及び医学の概念に与えた影響という角度から、ヨーロッパから日本へ輸入された重要な医学書について深く探求されている。先生の研究はまだ中国語に翻訳されていないため、中国国内の研究者に与えた影響は限られてはいるが、日文研で先生と交流を行ってきた中国人研究者は、先生の慎重な態度と厳密な方法に大きな感銘を受け、多くのものを学んでいる。

日文研は医学史研究の最高峰だったことがあり、医学史研究者たちの心の聖地でもある。研究者たちの長年収蔵した医学の書物もそれぞれの収蔵者の研究を物語っているようである。宗田文庫の書籍は、宗田一先生の体温を帯びているようで、読む者の心を打つ。

日文研は成立してから瞬く間に三〇周年となった。日文研の輝かしい道程を振り返る時、これからも医学史研究を俯瞰する最高峰でありつづけるように祈念している。

（北京中医薬大学教授）

原文：中国語

翻訳：郭南燕（国際日本文化研究センター准教授）

日文研創立三〇周年おめでとう！

陸　留弟

この度、国際日本文化研究センターが創立三〇周年を迎えました。かつて同センターで研究活動をした者として、衷心よりお祝いのことをお慶び申し上げます。本当におめでとうございます。

日文研との付き合いは、一九九〇年代に遡る事ができます。最初は一九九四年国際シンポジウムで、ノーベル文学賞の受賞者である大江健三郎先生の講演を聞くために足を運びました。当時、同シンポジウムは多数の参加者があり、大変盛況でした。

本会場では、数多くの研究者が集まり、基調講演をはじめ、数々の貴重な研究成果が発表され、聴衆が終始熱心に聞き入っていました。本会場のみならず、各分科会でも学術的な反論を含めて活発な討論を展開したり、参加者から発表者に熱心な質問が投げかけられたりする場面も多く見られ、熱気に溢れていました。日本人の研究発表ばかりでなく、外国人の研究発表も少なくありません。「日本語教育研究」分科会では、北京大学の孫宗光氏の発表した研究成果も、また王家驊氏の「日本の儒家と儒教思想の現状」に関する発言もとても示唆的で、勉強になりました。質疑応答では双方から活発に発言がなされ、予定時間を超えるほど充実した意見交換が行われました。

さらに、庭沿いの廊下に設けられた展示コーナーでは、同シンポジウムの参加者の皆様はポ

スターなどを通じて、日文研の概要やその研究内容を真剣に見学されました。このような学術交流と研究に関する展示は一側面から日文研の活動においても効果的な広報活動の場となりました。

日文研は、とても閑静とした京都の洛西に位置し、学問の研究活動にふさわしいのです。数多くの内外の研究者たちは、日頃の研究を重ねられた成果がここで報告され、お互いに議論を通じて、日本研究の諸成果を交換して相互刺激を与えつつ、学問の真理を切磋琢磨に探求し続けています。コーヒーブレイクでは、異文化を観察することや理解することなど、研究者の皆様は和やかな雰囲気の中で個々に忌憚のない歓談、親睦を深めました。

世界の日本研究者に研究情報の提供などの研究協力を行うことを設立趣旨としているのが日文研です。今日、研究者のネットワークづくりを進め、国内外の日本研究者の重要な研究拠点となっています。

このような日本の文化・歴史を研究する新しい豊かな一側面は、日本語教育者の私にとって大きな励みとなりました。一九九四年のシンポジウムがきっかけで、日文研との付き合いが始まりました。

海外の日本研究者への協力・支援制度を受け、外国人研究員として本格的に日文研にお世話になったのは二〇〇六年九月からの一年間でした。

当時「中日茶文化の違いについて」を研究テーマに、日文研の優れた研究者の方々に恵まれ、鈴木貞美先生のご指導を受けながら研究活動をさせていただきました。ある意味で、「茶の湯」と同じように日常の俗世を離れ、ちょうど学問の修行に入ったような研究活動の中で体を通して創造性に富み、進取の精神を会得していくものです。

さらに二〇一三年四～九月に、日本庭園研究の大家である白幡洋三郎先生のご指導をもとに、「日本の茶庭について」研究するために再び外国人研究員として日文研にやってまいりました。書斎で研究に没頭し、関連文献をリサーチするのみならず、日本海に臨む閑かな金沢を気ままに散策しました。三大名園の一つ「兼六園」のほか、実際の茶庭の環境と場面における茶人の行動に近づき、茶道思想を解析しようと、金沢「玉泉園」にある裏千家の茶庭「灑雪亭」とそこの露地などを回って現地調査をしました。

このように、私が日本語教育者として日文研に二回にわたってお世話になったのは、いずれも日本文化の神髄である「茶の湯」との出会いのおかげです。言い換えれば、日文研の先生との出会いは「Manpower」、日本文化との付き合いは「Tea Power」のおかげでしょう。研究成果として「茶芸と茶道における諸要素―中国茶芸の歴史、文化、習慣、特徴と日本茶道の型・気・美・禅」、「露地考―中国からみた日本の庭園美」、それぞれ拙論をまとめました。まさに日文研の趣旨にふさわしい研究協力を受け、研究情報を発信することができました。ここに改めて日文研に深く感謝致します！本当に恵まれて、とても光栄に思います。

「三〇にして立つ」。日文研は創立三〇周年の節目を迎えます。情報技術革命によって急速に変貌する世界の状況にふさわしい研究所として先端的で独創的な研究を生み出し続けています。

今日、日文研が国内外の日本研究者にとって他の追随を許さない重要な研究拠点となっていることは、専任研究スタッフから事務の職員に至るまで、センターが一丸となり、長年に努力し続けた賜物です。もちろんのこと、その中に外国人研究者の研究成果も含まれていることは、われわれ外国人研究者にとってこの上ない喜びでもあります。

「茶の湯」は、ただの飲み物ではなく、日本文化の回帰点にあるものです。このような立派な

文化的回帰点には、茶を入れて飲むことを楽しめるだけではなく、生きていく上での目的・考え方、宗教などが含まれています。すなわち人生観、宇宙観のような普遍的真理が存在しています。

「茶の湯」は日本文化の代表的な存在として、深く他の文化形態にも影響を及ぼしています。例えば、日本語の文法と日本人の行動パターンつまり「型」を複眼的に見ますと、「挨拶行為」にたどり着いたのです。つまりハイセンスな日本語表現、デリケートな「茶の湯」の作法と日本人の日常的な振る舞いを考えますと、この「挨拶」文化が大きな役割を果たしています。「挨拶は人より先に自分の方から」始まるという日本文化のすべてが凝縮されているのではありませんか。

「すみません」、「申し訳ありません」、「お疲れ様でした」、「ご苦労様でした」、「ありがとうございました」、「先に失礼します」、「大変結構でございます」、「今日はいい天気ですね。ええ、いい天気ですね」などなど、日本文化の神髄を物語っています。

「茶の湯」は、「挨拶」という一見簡単そうに聞こえるものを通じて、人類の普遍的なものとして日本文化を発信し続けています。敢えて「茶の湯」を研究した成果はなにかと自問すれば、おそらくそれは収穫の一つでした。もう一つ、とても深い感銘を覚えているのは「茶気」とのことです。

「この茶の茶気は重い」。中国語的な解釈をすれば、茶葉の入れすぎ、濃過ぎとの意味合いです。ですが、「茶気」という単語は日本語になると、使い方も意味合いも違ってきます。例えば「あの男は茶気がない」。つまり、あの男は風雅、俳諧とユーモアのセンスがないということになります。(「The Book Of Tea」岡倉覚三より)。いつかの日か、「立派な茶気人」とかの

ような挨拶用語が生まれてくるかもしれません。

今日、二〇〇あまりの国、七〇億を超えた人口という世界では、ほとんどと言えるほど、お茶が世界中で喜ばれているでしょう。例えば、中国浙江省杭州産の龍井茶は、ＥＵに「中国銘茶」と認められています。また日本の宇治茶も世界的なブランド品として好かれていて、パリのレストランで来客招待の一品とされるほど、魅力的です。

茶は、「文明の植物」とさえ称えられています。単なる飲料の範疇を超え、心臓病や癌の防止や脂肪減少などにも効果的であると研究成果に立証されています。さらに「和敬静寂」という茶の理念は人々の精神的な世界に浸透しています。「好い茶、好い水、好い器」の三つの「好」を持って楽しむ中国の茶藝文化、「茶室、茶庭と茶道具」の型を掲げながら、「修身養心」を趣旨とする日本の茶道文化が世界中に広げられつつあるのは、茶の葉から生まれた魅力的な魔法でしょう。

このような魅力的な植物を、根を深く、幹を太く、葉を大きく育てていかなければなりません。そしてまた、いつでも、どこでも、美味しくお茶を飲みましょう。

日文研への感謝の意を持って、またいつの日か、もう一度日文研の研究室で日本茶を点てて「茶の湯」という日本文化を研究する日を想像しながら、中国茶「龍井」を啜り続けています。

（国際日本文化研究センター元外国人研究員）

大枝山中一小鬼：日文研日記抄

劉　岳兵

顧みれば国際的視野への開示、基本的原典への沈潜など研究者としてあるべき姿勢と素養、その大切さを切実に体得できたことは、日文研で一年間滞在の最大の収穫でありました。字数の制限があるため、滞在期間の日記を抄出し、感謝の気持をこめて、日文研創立三〇周年記念のお祝いとして公開させていただきます。（二〇一七年一月一一日於魚鳶堂）

二〇一一年

一〇月三一日（月） 一二時一〇分、関西空港に着く。順調に日文研に到着後、事務の琴浦さんと西山さんから宿舎と設備の使い方の説明を受け、研究室の鍵を受け取る。

一一月一日（火） 午前、図書館で日本史学史関係の本を借り、自著『日本近現代思想史』一冊を寄付。一二時、笠谷先生が来所、一緒に赤鬼で昼食、諸事相談。一二時三〇分、研究部昼食会。その場で猪木所長、戸部良一、瀧井一博、劉建輝、徐興慶、劉克申、王確、楊暁捷ら諸氏と会う。午後二時、研究部井上章一主任が私の外国人研究員としての入所調印式を司会する。所長も参加。

一一月二日（水） 午後一時三〇分、所員会議で自己紹介。伊東貴之氏、稲賀繁美氏と会う。

一一月三日（木） 午前、京都「第三五回秋の古本まつり」（知恩寺で開催）に行く。

一一月三〇日（水） 午後六時から一〇時まで、荒木浩、佐野真由子ら諸氏と共に「にこにこ会」に参会。楊暁捷氏が会の幹事。

一二月二日（金） 午後、瀧井氏との交流。その新著『伊藤博文』を贈与される。伊藤博文を「近代日本を代表するデモクラシーの政治家」として高く評価した。

一二月一〇日（土） 午後、笠谷研究班で発表。前田勉氏などと知り合う。懇親会の後、一行が八坂神社で月見をする（月食）。

二〇一二年

一月五日（木） 午後四時三〇分、日文研新年会。八八歳の梅原猛先生が元気に御挨拶を述べ、現任所長のご努力を高く評価し、四月に新任する小松所長に大きく期待していた。自分が怨霊を研究しているが、小松氏が妖怪を研究する。日文研にたくさんの面白い研究成果を待望する、と。荒木氏に岩波から出た「古典文学大系」と小学館の「古典文学全集」との関係について教えを乞う。

一月一三日（金） 午後、陳凌虹さんの博士論文公開審査会を傍聴。

一月一七日（火） 劉建輝、柳書琴両氏主宰の研究会「「帝国」域内文化の再検証——人と物の移動を中心に」に参加。柳氏の報告における「被殖民の悲運におかれて「日本語」が台湾現代史に最初の言文一致の共同語になった」、「台湾文化としての日本語遺産」などの話に大きな衝撃を受けた。

一月二八日（土） 午後一時、戸部良一研究班「近代日本における指導者像と指導者論」に、黄自進氏の報告「蔣介石のリーダーシップ——満州事変前後の対日政策を中心として」を聞

く。報告後、名刺交換。彼は院生時代に兪辛焞先生に教えを乞ったと言う。

二月五日（日） 引き続き笠谷研究班に参加。午後、伊東貴之氏の報告「明清交替と東アジア世界」の後、芳賀徹氏が「十八世紀京都の詩と絵画」というテーマで伊藤若冲の画を中心に発表し、一八世紀京都の文人生活に非常に憧れた。上垣外憲一氏が無断に発言し、笠谷氏がその発言をさえぎる。お二人は仲が良いなあ。

三月二三日（金） 午後、安田喜憲教授退任記念講演会（「環境考古学への道」）。その父の遺言である「弱者の視線よりしか歴史の真相を究明しえない」ということに感銘した。

三月二九日（木） 午後四時から、猪木所長退職記念講演「日文研で感じたこと、考えたこと」。座無虚席。研究対象への興味を保持し、そのおもしろいところを見つけることを強調していた。五時一五分から宴会。梅原猛先生もご挨拶の中で学問への興味が尽きないことを述べられていた。最後、所長はある綺麗な女史と共にピアノで一曲を演奏した。素晴らしかった！今日はメールで松田利彦氏の「韓国語講座」への参加を申請した。

四月七日（土） 一日中、ブリーン研究班「『妙貞問答』の訳注・英訳・研究」に参加。参加者であるケンブリッジ大学のリチャード・バウリング教授の自己紹介によって『日本思想通史』を執筆中、しかも第一巻が既に完成したことが分った。一冊の拙著『日本近現代思想史』を差上げ、交流中、不意におロから中国語が出てきた。しかも、そのきっかけはこの本を通読できるように中国語をよく勉強したいという話を聞き、その謙遜さ、さすがだなあと思った。研究班で彼は「儒教之事」部分を担当したので、「太極図」に言及し、中国のそれに関する研究を知りたいと頼まれた。共同研究で原典翻訳のプロジェクトのやり方について、非常に参考になる。

四月一〇日（火） 立命館大学桂島宣弘研究室よりご送付の『東アジアの思想と文化』第四号を拝領。それに収録した拙論「中国における日本思想史研究の方法論的問題――ある学術史的回顧と展望」（金津日出美訳）をコピーしてセンター諸先生のメールボックスに差上げる。岩波書店の馬場公彦氏に一部を郵送する。

四月一一日（水） リチャード・バウリング氏にメールで「太極図」に関する次の研究書四冊を紹介する。『太極図集解』（王建常著、清麓叢書、一八七三年）、『太極図考』（楊践著、学鐸社叢書、一九二五年）、『太極図詳解』（張伯行輯、学苑出版、一九九〇年）、『中華太極圖與太極文化』（束景南著、蘇州大学出版社、一九九四年）。

四月一九日（木） 末木文美士氏に台湾版の大正蔵のことについて教えを乞う。午後四時三〇分から六時まで第一八六回日文研木曜セミナー。末木氏が其の新著『哲学の現場：日本で考えるということ』について話す。瀧井氏司会、細川周平氏とクレインス氏がコメントする。

四月二一日（土） 午後、鈴木貞美研究班「東アジア近現代における知的交流――概念編成を中心に」を傍聴する。

五月七日（月） 正午、郵便物（殆ど古本）を整理するのは一つの楽しい作業。

五月八日（火） 午後、大貫恵美子氏に協力して「日本の古本屋」に登録。

五月二三日（水） 午後、日文研創立二五周年記念会。小松所長と梅原顧問がご挨拶。その後、図書館前の中庭でパーティー。クレインス氏は、用が有って参加出来ずと言った。パーティーでよくドイツのハンス・マーティン・クレーマ氏、チェコのヤン・シコラ氏などと交流した。聞いた話だが、ある人が日文研に就職した時、主人公なのに歓迎パーティーを中座した。理由は夜九時に寝なくちゃいけないからと。さすがにいい習慣だなあ！

五月二六日（土） 午前九時、京都駅で植村和秀氏と会って一緒に近藤啓吾先生を訪問しに行く。午後二時、近藤先生のお宅に到着。二冊の拙著を差し上げ、先生は真剣に目録をご覧になった。狩野直喜氏をとても尊敬し、服部宇之吉氏をある程度に批判。内藤湖南を非常に尊敬していたが、その弟子たちは先生の学問の一面しか体得しないと感嘆した。日本近現代思想について、キリスト教の一夫一妻制の積極的影響を高く評価した。また近代神道、儒学についても話した。貴重な一時間半だった。

六月七日（木） 最近疲労感あり、今日は「出恭」三回。七月一〇日のフォーラムのテーマが決まった。「「中国式」日本研究の実像と虚像」（Images True and Fales: Chinese Style Research on Japan）。

六月二八日（木） 午後、韓国語講座。夜、楊暁捷氏の送別会。

七月一〇日（火） 午前、講演原稿をプリント。ＰＰＴの最終稿を研究協力課に送付。研究室で一回予演する。一二時五〇分、王鑫、傅玉娟、栄元と一緒に下山する。二時、ハートピア京都三階大会議室で第二五八回日文研フォーラム正式開始。笠谷先生司会。少し緊張したが、無事に終了した。ご質問に対してよく回答したと思う。

八月二三日（木） 夜、機械室で光田和伸氏と会う。一冊の複写製本した『藩風と藩学』を拝受した。

九月二二日（土） 午後、伊東貴之研究班に出席。垣内景子氏の報告「心学としての朱子学――朱子の「理」批判と経学」が面白い。購入書目の初校が出来あがる。

九月二六日（水） 夜、徐興慶氏と劉克申氏の送別会。

一〇月七日（日） 研究室で梱包開始、二七箱作った。夜、両足無力、顔色青い。

一〇月一〇日（水） 六七箱目まで作り、梱包完了。研究室を掃除する。

一〇月一八日（木） 午後三時三〇分、岩波書店に行って馬場公彦氏と会う。『近現代中国の日本観』という本を書くことを勧められた。

一〇月二三日（火） 午前、ある海運会社の貨車が来た。六七箱の書物が日文研を後にした。

一〇月二四日（水） 午後六時から、私の送別会が開始、司会者は陳凌虹さんで、劉建輝、張翔、金哲会、陳小法、セオドア・F・クックJr.諸氏、及び栄元、王鑫、傅玉娟、簡中昊諸君。賑やかだった。私は「贈別京西大枝山諸友」三首を披露した。曰く：

其一：大枝山中一小鬼、青燈紙魚相依偎。風月残卷風月解、旧夢未醒新夢催。

其二：君読幽月妾読夢、月印秋水夢無聲。誰知堂前空蝉殼、尚欲振翅弄風情。

其三：春夏秋冬自流轉、学仏学仙心似遠。紅顔白髪無常夢、一彎新月枕万年。

一〇月二九日（月） 午後五時、笠谷先生のご招待で、私と張翔氏と三人一緒にタクシーに乗って日文研から市内へ。清水・京料理・日月庵に至る。満月、今夜の月が東山第二九峰——清水山の頂上にあり。

一〇月三一日（水） 午後、知恩寺で第三六回秋の古本まつりに行く。『春秋左氏傳校本』（尾張秦鼎校読）を競売の三六〇〇円で落掌。夜一一時三〇分まで、研究室を整理し、そして翌日五時の予約車が来るまで宿舎の片付けをする。

一一月一日（木） 今朝五時、匆々に日文研を後にして帰国の途へ。関西空港で荷物の重量超過料金三一五〇〇円を払う。一一時二〇分、北京空港に着く。午後四時、無事に天津に帰る。

（南開大学日本研究院教授）

日文研と私の研究歴

ロー・ダニエル

わが心の御陵大枝山

ゴリョ・オエヤマ？私はアメリカの大学院生だった一九八五年、日本語を勉強し始めた。語学学習にずいぶん長い間苦労し、日本で何年も生活した後、二〇一一年日文研に到着した時には日本語能力に密かに誇りを持っていた。ゴリョ・オエヤマ、日文研が位置する神秘的で発音しづらい村の名前は京都生活に対する期待をふくらまし、それは裏切られなかった。

ここで東日本大震災について述べなくてはならない。この大惨事について聞いたのはソウルにいた時だった。友人たちは日本に行くのを心配したが、私はためらうことなくはねのけた。京都は東北から遠いし、そのような天災事変を経験することは、私の日本「研究歴」にとって必須だろうと思った。そして二〇一一年のエイプリル・フールの日に日文研に到着した。第一印象は、静けさと美しい風景に包まれた遠い修道院だった。

一年間、日文研ハウスに妻と暮らした。はっきりいうが、その年は私の人生で最も思い出深い一年だった。日文研を取り囲む美しい風景と音は今でも私を離れない。日文研は、京都の中心からバスで一時間しかかからない。だが、ひとたび御陵大枝山の丘を登り始めると、別世界に入っていくのを感じる。日本文化研究において傑出した研究所である日文研は、丘と森の合間に引っ込んでいるため、ユニークな日本の美について新鮮な考えをめぐらすことになる。

国際的評判の割には実際には大きくないが、日文研は魅惑的でそそられる場所をいくつも持っている。まずきっぱりいえるのが図書館で、日文研の王冠の宝石であることは間違いない。ちょっと素朴な扉をあけると何段にも積みあがった木製の筒のように空間が広がる。濃いベージュの筒は本棚が何段にも重なっていて、からだをぐるりと回して見上げるだけで見渡せる。そうすると、この場所が文化や文明についての研究に没入すべき場所にいると感じざるを得ない。

それと同じぐらい驚くのは日文研で一緒に暮らす人々の国籍が非常に多彩であることだ。周囲の自然は昔話を喚起するかもしれないが、所内で起きていることは紛れもなくグローバルさだ。教員、スタッフ、客員教員、大学院生がみな集まって多民族的なコミュニティを作っている。同じように日文研の屋根の下で進められている研究のテーマや分野も多岐にわたっていることも重要だ。今日は妖怪の専門家と話したと思ったら翌日は最新の博物館ソフトウェアについて語ることができる。

私の研究歴の転換点

私はマサチューセッツ工科大学で「日本専門家」として訓練を受けた。アメリカの一流大学院では地域の専門家に対して、数年間専門の国ですごしながら言語を学び論文調査を行うことを要求する。その目的のために一九八九年、私は初めて日本に足を踏み入れた。その入国には忘れがたい思い出がある。昭和時代にマサチューセッツ州ケンブリッジで航空券を買ったのだが、成田に到着した時には平成になっていたということである。そこで私は「平成ガイコクジン」と名乗る。私は祖国と複雑な歴史を持つ国を勉強しにやってきたことも言っておこう。そ

れ以来、他の国々でどれだけすごそうとも日本が心から離れたことはない。日文研で一年をすごすまで、日本と東京は私にとって同意語のようなものだったが、京都ですごし関西を出歩くことで、日本歴にバランスが生れ全体を見渡せるようになったと感じ始めた。ＭＩＴの留学時代には「ボストン人」がアメリカの精神世界の頂点に立つ「丘の上の街」で暮らすことを誇りに思っているのを知って驚かされたが、京都人も自分の街が伝説の多い山々に囲まれた「心のふるさと」であることに誇りを持っているのを感じて感動した。

私は著名な政治学者である戸部良一先生に招かれて客員研究員となった。彼の親切な指導を一年間受けたことは、研究歴の重要な転換点となった。日文研に到着した時には既に祖国の外で二八年すごしていた。成人期の仕上げにかかろうという五七歳になろうとし、三〇年間のノマドのような生活を集約するような研究計画に取り組まなくてはならないと決心していた。

日文研で読書し議論し、情報に富んだ非常に多くの集まりに参加し、「地政心理」（政治地理学的心性）という概念を作り出していた。この概念により、社会と文化の間の関係を地政学的な条件によって形成された「集団的心性」によって分析し解釈しようと思った。日文研における研究は成功し、今ではその成果が生み出されつつある。たとえば藤原書店から『地政心理で語る半島と列島』と題された著作が近刊予定である。私の研究計画はさらにこの分野では最初の（とあえて言うが）研究会社を作りだすに至っている。最近ソウルで設立したアジア・リスク・モニター社は、朝鮮半島と周辺諸国に関する地政的なリスク評価を専門とする。

人はいつも他人の言ったことを繰り返す。「ただのランチはない」と。それは本当ではない。私は日文研で最も暗い片隅に作られたレストランの豪華な一室で、毎月開かれた無料の所長ランチを楽しんだ。レストランの名前が「赤おに」であることも、忘れられない。コモンルーム

で飲める香り高いコーヒーも懐かしい。妻と私は今も御陵大枝山時代を楽しく思い出し、ぞっとし、ぞくっとした場面（?）について話す。アパートのベランダからバナナを集める猿を見、珍しい野鳥が庭に飛び、ホラー映画を撮影しているかのような近くの暗い竹林を散策したことを。朝起きると桂坂小学校へ行く子どもたちがしゃべる声がまるで歌のように聞こえたことをぼんやり思い出す。そこで日文研の客員研究員として「授業」をしたのは楽しかった。

（アジア・リスク・モニター社代表取締役）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）

『日文研』記念号に捧げるエッセイ

グニラ・リンドバーグ＝ワダ

私と日文研との最初のコンタクトは、一九九四年九月に梅原猛先生がスウェーデンとストックホルムを訪れたときだった。ストックホルム大学で講演を行った際、私たちは彼を囲んで気軽なランチョン・セミナーを開催した。その時、日文研の外国人研究員に応募したらどうかと持ちかけられたが、あいにくストックホルム大学よりサバティカルを取ることができず涙をのんだ。

初期には日文研は保守的で国粋的で、たぶん復古的な研究所という印象を持たれていた。かつての国粋的な国学運動に日本研究の歴史的な根っこを見るなら、そのようなナショナリズム的な見方はさして大げさではないかもしれないが、実際に訪れてみるともちろんその評判がやや大げさであることがわかった。

最初の滞在は二〇〇四年春で、六週間ほど鈴木貞美先生をカウンターパートに外来研究員としての滞在だった。私たちは二〇〇三年のＥＡＪＳ（ヨーロッパ日本研究協会）ワルシャワ大会で会い、その時にスウェーデン学術評議会が支援する六年プロジェクト「グローバルな文脈における文学と文学史」の一環として、翌二〇〇四年一一月にストックホルムで開催する国際シンポジウム「文化横断的な文学史研究」に彼を招いたのだった。京都滞在中にはこのプロジェクトの枠内で書いていた日本の文学史の始まりについての論文を準備した。それは数日間

の観光を除けば初めての京都滞在で、紫式部が見たのと同じ山川をこの目で見られることにぞくぞくした。長年『源氏物語』と『八代集』を勉強したことから、主に想像力の中で広がっていた自然が現実にそこにある。日文研の後ろにある山を何時間も歩いたし、ある日には仁和天皇の母君の墓に通じる小道を発見した！

二〇〇七年九月から二〇〇八年八月まで、やはり鈴木貞美先生を受入教員についに一年間の外国人研究員として滞在の機会を得た。二〇〇四年に私たちが準備していた論文はデ・グルイテル出版より二〇〇六年に出版された。鈴木先生の論文は『文化横断的な文学史研究』収録の「『文学』概念の歴史的変遷と一九世紀後半の『日本文学』の形成」、私のは『文学史―グローバルな視点をめざして』という編著のなかの収録論文である。このアンソロジーは文学（文芸）の概念、ジャンルとジャンル理論など世界各地の文学を時代や文化を横断して概観する四巻シリーズの一冊として出版された。二〇〇四年のシンポジウムの参加者は、翌年より小さなグループを作って、世界の文学史を書く可能性を議論していた。京都滞在中の春、ウプサラに三日間の短い旅をしてそのメンバーと会い、具体的にその四巻本のかたちで文学史を書いてみようという計画の概要と組織について議論していた。それは『文学―世界史』というシリーズ名で近刊予定である。私はそのなかで時代を超えた日本文学史のテクストの担当となり、日文研滞在中は日本文学一般、特に二〇世紀文学についての理解を広め深めることに費やされた。

外国人研究員として私は一般向けの日本語のレクチャーと所内の木曜セミナーにて英語でレクチャーするのが任務だった。一般向けに適した話題は何かを考えたあげく、スウェーデン＝フィンランド人の探検家・科学者のアドルフ・エリク・ノルデンシェルドと一八七九年に日本旅行について話すのに良い機会だと思った。その時彼は大西洋と太平洋を結ぶ北東航路の最初

の横断をなしとげたヴェガ探検隊のリーダーだった。これは京都で『源氏物語』の詩的な微細さや文学史記述の背後にある理論や思想について話すよりも、ずっと冒険的でスリリングな題材だった。ノルデンシェルドの一行は一〇月二七日に長崎よりスウェーデンに帰国の途につくまで八週間、日本に滞在した。その間、日本についての専門家の助けを借りて千冊、六千巻ほどの書物のコレクションを買い求めてスウェーデンに持ち帰った。彼は広い知の領域を代表する書物を要求し、法律、地理、言語学、文学、歴史、宗教、貨幣学、自然誌、医学、政治学のような分野から集められた。ヴェガ探検隊については立案、苦労、成功、結果などいくらでも話すことがあり、非常に多くの観点からその物語が語られてきた。その時にはパワーポイントにあまり慣れていなかったが、日文研の有能なスタッフの仕事のおかげで質の高いパワーポイントを使うことができた。

二〇一三年には最初の三ヶ月と六週間の暑い夏に、今度は佐野真由子先生を受入教員に外来研究員として滞在した。この時には豊かな図書館の蔵書と親切なスタッフのおかげで、『文学―世界史』のための古典（八世紀から鎌倉時代終わりまでの）日本文学論を書くことができた。それは私の仕事のカギを担う部分だった。佐野先生とは二〇一二年、「「日本研究」再考―北欧の実践から」と題された日文研海外シンポジウム・コペンハーゲン大会で初めて知り会った。私の発表では「日本研究」を再考するというこの題名通りのことを文字通り正確に実践した。これは学際的な話題であるので、ある意味で流動的だ。だからこそ何をやり何を目的とするかを省察する必要があると私は考えている。

二〇〇四年に日文研に初めて滞在してから多くのことが起きた。特に図書館、そしてテクノロジーの発展に伴って進み続ける研究設備の改善は留まるところを知らない。スタッフは昔と

変わらずどの点をとっても有能で親切で絶大な助けとなってくれる。教員（特に教授）と事務レベルの男性優位は昔と変わらずあまりいただけない。二〇一〇年代が終わろうとする時代に、この男女差を続けることには何の弁解もできない。それは国際的な学術の世界では優秀性の証拠とはいえない。日文研が近い将来にこの点でも改善することを心より望む。ちょうど設備と図書館利用についてトップレベルで迅速で能率よいのだから。

何年にもわたる日文研での集中的な研究生活を送れたことは私にとって非常に大きかった。単に設備だけでなく世界の各地よりやってきた若い、またベテランの学者たちと講演、セミナー、社交の催しで接することができたことも大きな意味を持った。もちろん日文研ハウスのキッチンやテレビ・ルームでの気楽で気持ち良い雰囲気の集まりは、今でも記憶に鮮明に残っている。オリンピックやその他の国際競技を見るといつでも、二〇〇八年のオリンピック北京大会をハウスでみなと一緒に見たことを思い出す。開会式でスウェーデン選手団の入場だけでなくデンマーク、フィンランド、ノルウェイの選手団にも熱烈に拍手を送ったら、みんながぽかんとしたのを思い出してくすくすと笑いだしてしまう。隣国にも拍手を送ったのは共通の歴史と文化的に非常な近しさを持っているからだと説明しようとしたが、二〇〇年以上戦争を経験していない国から来た者の状況や態度は例外的で、たぶん理解しがたいのだと気づいた。このエピソードから確信するのは、日文研が各国からの研究者にとってばかりでなく、日本と隣国の間の相互理解と平和な学術協力にとって重要な場所であるということだ。

（ストックホルム大学日本学部主任教授）

後藤新平、大谷光瑞との出会い

王　鍵

わが日文研創立三〇周年を迎えて、日文研在籍時期での楽しく且つ有意義な日々をありありと思い浮かべている。私には日文研のある桂坂は浮き世を離れた別天地の感があり、「地上の楽園・世外桃源」に深く感銘する所である。ここでは鳥がさえずり花が香る真夏もあり、所内各所で紅葉が見られる晩秋もあった。歴史と現実が「溶け合う」所であり、歴史人物とわれわれ現代人が「出会う」所でもある。いつも忘れがたい懐かしいわが日文研である。

在籍中の研究テーマは「後藤新平の植民地経営思想――科学哲学史からのアプローチ」であった。賢者たる劉建輝教授より助言を賜り、台湾、満州における植民地経営策の策定において中国固有の風習、いわゆる「旧慣」に準じて植民地統治策を策定した後藤新平の植民地経営思想の特性を科学哲学史の立場からアプローチし、官僚後藤新平と民間人大谷光瑞の事績を比較してみた。貴重史料に富んだ日文研図書館で空間を越えて多くの日本の歴史人物と接近したのは忘れがたい。

後藤新平はドイツ留学後、内務省衛生局長を経て台湾総督府民政長官となった。後藤新平の台湾経営の理念は「生物学的植民地論」として知られている。日本の慣行、組織、制度を台湾に適応するよう工夫しながら植民地経営を行うというもので、武断型の植民地支配とは一線を画する経営思想だった。「旧慣」に見合うような制度的工夫をしなければ、優れた台湾経営な

ど不可能だという思想の持ち主が後藤新平だった。彼はその思想を〝鯛の目と比目魚の目〟の比喩で語り、後藤新平の台湾開発は日本の「開発学」の原点でもある。

台湾社会の実状を深く把握した後藤新平が統治の効率的な住民組織「保甲制」を警察補佐組織として設置し、旧慣制度と土地人口調査、伝染病予防、縦貫鉄道（道路）・高雄基隆港建設などの「台湾経営」を勢い込んで展開した。歴史には断続性と一貫性が交錯している。後藤新平が台湾統治初期に試みた事業で収めた成果は、元台湾巡撫の劉銘傳によって着手され未完に終わっていた土地・人口調査事業を完成させたことだった。劉銘傳が完成できなかった土地調査事業を後藤新平は鉄腕を振るって、わずか半年で終了させた。土地調査を通じて全島の耕地面積・地形が確定され、地租徴収の基盤（総督府財政の基盤も）が整えられた。後に林野調査事業を実施し、全島の山林地帯の面積・地形も確定された。一九〇三（明治三六）年には「戸籍調査令」を下し、日本でも実践していなかった近代的「人口調査」を行った。ほかに台湾銀行の設立と台湾貨幣の統一に従い、台湾植民地経営の基礎は急速に整えられた。

後藤新平の「台湾経営」の特徴の一つは、優れた人材を集めたことにある。たとえば京都帝国大学教授岡松参太郎を台湾総督府臨時台湾旧慣調査会部長に招聘した。まだ札幌農学校で教鞭を執っていた新渡戸稲造を糖業改良のため総督府糖務局長に招聘した。『武士道』を書き上げた新渡戸稲造は、後藤新平の強い支持を受けて、ハワイから砂糖黍を導入し品種改良を加え、さらに搾糖の技術を革新して台湾製糖業の近代化を進めた。まだ総督府技師である磯永吉が日本米と台湾米の交雑実験を繰り返し、「蓬莱米」という品質でも単収でも当時の東アジアにおける画期的な新品種を開発した。同じく台湾総督府技師の八田興一も台湾中南部の嘉南ダムを一〇年余をかけて完成させ、嘉南農地がだいぶ豊穣になった。台湾を悩ませてきた「熱帯疫病」

も後藤新平により予防接種が義務化され、鉄筋コンクリート製の上下水道が敷設されたことによって退治できた。まだ医師を養成する台北医学校（現在の台湾大学医学院）が創設された。

日露戦争後、後藤新平は「満州経営梗概」を提出し、台湾総督府民政長官を辞め、「満州鉄道株式会社」総裁となる。後藤新平は多数の台湾経験者（たとえば岡松参太郎が満鉄東亜経済調査局長を兼任）を満州に連れて、旧慣調査の理念、方法を同地に持ち込み、いわば「満州経営」は「台湾経営」の延長線にあった。結果、満鉄は鉄道経営にとどまらない巨大総合コンツェルンとなった。まとめると、後藤新平の台湾および満州経営の理念が生んだ、いわば植民地遺産をプラスとマイナスの両面に捉え、プラスと思われる部分もいったん客観化、対象化し、あくまで現代を生きる一「方法」として活用してゆかなければならないと私は考えていた。

ほぼ同時期、大谷光瑞のことも興味深く調査した。大谷史料を読みながら彼の聖域でもある西本願寺に十数回も訪問した。大谷光瑞（一八七六～一九四八）は、第二一世法主大谷光尊（明如上人）の長男で、後に大正天皇の皇后貞明皇后の姉九条籌子（かずこ）と結婚した。京都本願寺・浄土真宗本願寺派第二二世法主であり、宗祖・親鸞の法灯と血統を二つながら継承して他に誰も代わりうるものがない希有の存在であった。彼はその宗教的権威を活用し、台湾と満州など諸地域で文化活動を展開した。

一九〇四年満州で展開した日露戦争の勃発とともに、大谷光瑞は大連本願寺（関東別院）を創設した。柴田幹夫氏の『大谷光瑞の研究―アジア広域における諸活動―』によると、大連本願寺（関東別院）の創設、発展には、二つの要素がはたらいた。一つは、日露戦争に際しての従軍布教であり、もう一つは在留民社会に対する社会活動、教育活動である。大連本願寺（関東別院）内に各種の紳士会、婦人会や青年会を設置し、幼稚園や語学や女子の手習いのような

教育施設を設け、大連の日本人社会にとって、中心的な機能を果たした。すなわち宗教活動とリンクさせた社会活動・教育活動に特色があった。これが大連関東別院の不断なき発展に繋がったと思われる。当時、「大連に縁があるものは、すべて満鉄とも縁がある」といわれ、本願寺はその満鉄の大株主でもあった。大谷光瑞はしばしば満鉄本社で講演し、満鉄読書会にも顔を出し、学生を満鉄の農業試験場などに送り込み、さらには満鉄が支援していた文化施設にも深く関与した。こうして大谷光瑞は、日露戦争後、大連関東別院の創建によって邦人の社会的・精神的中核となったうえ、満鉄を介し高い社会的ステイタスを確保することに成功した。

台湾との関わりも深く、台湾を「我が帝国の如意宝珠」なりと形容した。一九四〇（昭和一五）年、本願寺「飛雲閣」の類似性を取り上げて台湾の高雄に「逍遙園」という農地の拡がる荘園を作った。「逍遙園」で学生向けの講義室、食堂なども完備されて、大谷光瑞は学生たちを率い、自給自足という集団農業に従事した。そこで彼も著作活動を精力的に行っていた。「農業」と「教育」を大谷光瑞が最も重視したものであったが、「満鉄」の関連もあった「大谷光瑞興亜計画」や「欧亜連絡鉄道計画」なども模索していた。

総括すると、後藤新平の政策行動や大谷光瑞の民間行為から日本植民地経営の方向性をどのように行っていくべきかの模索が読み取れる。欧米諸国の例を参考にしながら、時代を率いるエリートたちの暗中模索が始まったばかりだった。後藤新平が台湾と満州で実験的意味も帯びて大規模な旧慣調査と施策を断行したが、今や彼とその主観的な意図とは無関係に実に厖大且つ貴重な学術的遺産が残された。後藤新平記念館（岩手県奥州市水沢）、国会図書館、日文研、台湾文献館、台湾図書館（元総督府図書館）、中国吉林省社会科学院満鉄資料館などに後藤新平文書含め、貴重史料が数多く所蔵されている。そして日本、米国、中国大陸及び台湾学界に

おいて後藤新平研究（満鉄研究、日本統治時代台湾史研究など）がますます重要視されている。

大谷光瑞は仏蹟の発掘を念頭において、生涯の使命とする西域探検、調査活動を何回も続け、「探検収集品」を数多く納めた。今や大谷コレクションは、中国・旅順博物館、韓国国立中央博物館、東京国立博物館、龍谷大学などで分蔵している。西本願寺別府別院内に大谷記念館も開設し遺品などを展示している。特に旅順博物館に「大谷探検収集品宝庫」には、大谷探検隊の第三次探検がトゥルファンで発掘したミイラなども所蔵している。まだ、旅順博物館も満鉄物産陳列所として一九一五年一一月開館したが、一九一七年四月関東都督府満蒙物産館に改称し、また一九三四年一二月旅順博物館に改称した。一九五二年一二月には、旅順歴史文化博物館に改称した経緯もあった。

日文研のおかげで後藤新平と大谷光瑞との出会いは実に楽しく、二人に魅力を感じた。今のわれわれとしては、如何に歴史人物が残される文化遺産を客観的に位置付け、それらを学問的に活用して初めて社会科学研究を進められると思う。いまだに「科学的政治家」と称される後藤新平が行ったのは、植民地経営するための「科学的行為」しかない（広重徹『科学の社会史』中央公論社、一九七三）とも言える。後藤新平と大谷光瑞の台湾活動と満州活動が今の時代にとって何であったかを問い返し、そして社会科学研究者の立場でそれを客観的に位置付ける必要がある。いかなる歴史にも「欠陥と遺憾」を残すのは普通であるが、「未来と希望」を見出すことがわれわれのやるべきことであり、責任と義務でもある。

終わりに日文研の皆様及び劉建輝教授へ深く謝意を申し上げる。

（中国社会科学院近代史研究所研究員、大学院教授）

資料編目次

○略年表 202
○歴代教員等一覧 204
・運営会議委員 204
・顧問 205
・海外研究交流顧問 205
・名誉教授 205
・所長 205
・副所長 206
・研究調整主幹 206
・情報管理施設長 206
・文化資料研究企画室長 206
・海外研究交流室長 207
・インスティテューショナル・リサーチ室長 207
・管理部長 207
・専任教員 208
・客員教員 210
・外国人研究員 212
・外来研究員 225
・総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻入学者 242
○日文研プロジェクト一覧 243
○共同研究会等一覧 246
・共同研究会 246
・基礎領域研究 261
○国際研究集会等一覧 263
・国際研究集会 263
・海外シンポジウム 265
・日本研究会 266
・海外研究交流シンポジウム 267
・シンポジウム 268
・「世界の日本研究」シンポジウム 271
・日文研フォーラム 272
・木曜セミナー 281
・Nichibunken Evening Seminar 287
・レクチャー 296
・東京講演会 298
・学術講演会 298
・特別講演会 301
・伝統文化芸術総合研究プロジェクト 302
・日文研・アイハウス連携フォーラム 304
○出版物一覧 306

略年表

一九八二年	「日本文化の総合的研究方法に関する研究」（文部省科学研究費補助金）を実施。
一九八三年	「日本文化総合研究の研究体制のあり方に関する研究」（文部省科学研究費補助金）を実施。
一九八四年	国立民族学博物館の事業として、「日本文化研究に関する調査研究」を実施。
一九八五年	国際日本文化研究センター（仮称）に関する懇談会（文部省）と同調査会議（国立民族学博物館）を設置（四月）。 調査会議は、同センターの構想について中間報告（八月）。
一九八六年	調査会議は、中間報告について、国内外の日本研究者及び関係分野の研究者の意見を聴取。 調査会議は、同センターの構想について最終報告（三月）。 国際日本文化研究センター（仮称）創設準備室を設置。創設準備室長に梅原猛教授が就任（四月）。 創設準備委員会（文部大臣裁定）を設置（五月）。
一九八七年	国際日本文化研究センターを大学共同利用機関として京都市に創設、梅原猛創設準備室長が初代所長に就任、管理部（総務課、研究協力課）、研究部を設置（五月二一日）。
一九八八年	情報管理施設（資料課）を設置、管理部総務課を庶務課、会計課に改組（四月）。
一九九〇年	研究棟の一部完成により仮事務所から移転（七月）。 情報・管理棟、国際交流棟、図書館が完成し、開所式を挙行（一二月）。
一九九一年	北研究棟完成（一〇月）。
一九九二年	コンピューター導入（一月）。 情報管理施設に情報課を設置、本センターに総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻設置（四月）。
一九九四年	講堂、福利施設棟、日文研ハウス（世帯用）、図書資料館完成。
一九九五年	梅原猛所長任期満了により退職、河合隼雄国際日本文化研究センター名誉教授が第二代所長に就任（五月）。 外部委員による「第三者評価委員会報告書」作成及び「将来計画概要」策定。

一九九七年	創立一〇周年記念式典を挙行（五月）。
	創立一〇周年記念シンポジウムを開催（一〇月）。
一九九八年	海外研究交流室を設置（四月）。
一九九九年	日文研ハウス（単身用）完成（三月）。
	文化資料研究企画室を設置（四月）。
二〇〇一年	河合隼雄所長任期満了により退職、山折哲雄国際日本文化研究センター名誉教授が第三代所長に就任（五月）。
二〇〇四年	法人化に伴い、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国際日本文化研究センターとなる。庶務課を総務課に、会計課を財務課に改組（四月）。
	法人化記念特別講演会を開催（一一月）。
二〇〇五年	山折哲雄所長任期満了により退職、片倉もとこ国立民族学博物館名誉教授が第四代所長に就任（五月）。
二〇〇七年	創立二〇周年記念式典を挙行（五月）。
二〇〇八年	片倉もとこ所長退職、猪木武徳国際日本文化研究センター教授が第五代所長に就任（四月）。
	管理部総務課と財務課を統合して総務課に改組（一〇月）。
二〇一〇年	第二図書資料館完成（六月）。
二〇一二年	『国際日本文化研究センター25年史―資料編―』を発行（三月）。
	猪木武徳所長退職、小松和彦国際日本文化研究センター教授が第六代所長に就任（四月）。
	創立二五周年を祝う会を開催（五月）。
二〇一四年	『新・日本学誕生 国際日本文化研究センターの25年』発行（一〇月）。
二〇一六年	第三図書資料館完成（七月）。
	インスティテューショナル・リサーチ室を設置（四月）。

歴代教員等一覧

（カッコ内は在任期間）

（二〇〇七年四月以降を掲載）

運営会議委員

稲賀繁美（07・4・1～）
早川聞多（08・4・1～14・3・31）
荒　このみ（08・4・1～14・3・31）
坂井東洋男（08・4・1～10・3・31）
牛村　圭（08・4・1～10・3・31、15・4・1～）
劉　建輝（08・4・1～10・3・31、13・4・1～）
川北　稔（09・4・1～14・3・31）
馬田綾子（10・4・1～16・3・31）
大原謙一郎（10・4・1～16・3・31）
久保文明（10・4・1～16・3・31）
佐藤洋一郎（10・4・1～15・4・30）
多田一臣（10・4・1～16・3・31）
倉本一宏（10・4・1～14・3・31）
末木文美士（10・4・1～14・3・31）
戸部良一（10・4・1～14・3・31）
天野文雄（12・4・1～）
植田和弘（12・4・1～16・3・31）
陣内秀信（12・4・1～16・3・31）
徳田和夫（12・4・1～）
荒木　浩（12・4・1～）
伊東貴之（12・4・1～）
福井憲彦（15・4・1～）
渡辺公三（15・4・1～）
山田奨治（15・4・1～）
松田利彦（15・4・1～）
細川周平（15・4・1～16・3・31）
瀧井一博（15・4・1～16・3・31）
時田アリソン（15・6・1～）
吉澤健吉（16・4・1～）
李　成市（16・4・1～）
御厨　貴（16・4・1～）
保立道久（16・4・1～）
落合恵美子（16・4・1～）

川村　湊（16・4・1～）
磯前順一（16・4・1～）
パトリシア・フィスター（16・4・1～）

顧問

梅原　猛（95・5・21～）

海外研究交流顧問

ロナルド・ドーア（06・4・1～08・3・31）

名誉教授（称号授与年順）

*埴原和郎（93・4・1）
*河合隼雄（94・4・1）
久野　昭（94・4・1）
伊東俊太郎（95・4・1）
中西　進（95・4・1）
速水　融（95・4・1）
村井康彦（95・4・1）
梅原　猛（95・5・21）
*杉本秀太郎（96・4・1）

*濱口惠俊（97・4・1）
芳賀　徹（97・4・1）
山折哲雄（97・4・1）
山田慶兒（97・4・1）
*飯田経夫（98・4・1）
尾本惠市（99・4・1）
石井紫郎（01・4・1）
木村　汎（02・4・1）
赤澤　威（04・4・1）
今谷　明（08・4・1）
*片倉もとこ（08・4・1）
千田　稔（08・4・1）
合庭　惇（09・4・1）
井波律子（09・4・1）
猪木武徳（12・4・1）
安田喜憲（12・4・1）
鈴木貞美（13・4・1）
宇野隆夫（13・4・1）
白幡洋三郎（14・4・1）
戸部良一（14・4・1）
早川聞多（15・4・1）

笠谷和比古（15・4・1）
末木文美士（15・4・1）

（*印は故人）

所長

猪木武徳（08・4・1～12・3・31）
小松和彦（12・4・1～）

副所長

小松和彦（10・4・1～12・3・31）
宇野隆夫（12・4・1～13・3・31）
井上章一（13・4・1～16・3・31）
稲賀繁美（16・4・1～）
劉建輝（16・10・1～）

研究調整主幹

細川周平（07・4・1～09・3・31）
白幡洋三郎（08・4・1～10・3・31）
宇野隆夫（08・4・1～10・3・31）
井上章一（09・4・1～12・3・31）
早川聞多（10・4・1～12・3・31）
稲賀繁美（10・4・1～12・3・31）
戸部良一（12・4・1～14・3・31）
白幡洋三郎（12・4・1～14・3・31）
倉本一宏（12・4・1～14・3・31）
荒木浩（14・4・1～16・3・31）
山田奨治（14・4・1～16・3・31）
劉建輝（14・4・1～）
松田利彦（16・4・1～）
磯前順一（16・4・1～）

情報管理施設長

鈴木貞美（08・4・1～10・3・31）
早川聞多（10・4・1～12・3・31）
白幡洋三郎（12・4・1～14・3・31）
山田奨治（14・4・1～）

文化資料研究企画室長

鈴木貞美（08・4・1～10・3・31）
森洋久（10・4・1～12・3・31）
早川聞多（12・4・1～14・3・31）

マルクス・リュッターマン（14・4・1～17・3・31）

※文化資料研究企画室は、二〇一七年三月三一日をもって廃止

インスティテューショナル・リサーチ室長

山田奨治（16・4・1～）

海外研究交流室長

細川周平（07・4・1～09・3・31）

宇野隆夫（09・4・1～10・3・31）

山田奨治（10・4・1～12・3・31）

劉　建輝（12・4・1～14・3・31）

瀧井一博（14・4・1～16・3・31）

坪井秀人（16・4・1～）

管理部長

佐久間研二（07・10・1～09・7・13）

丹沢広行（09・7・14～13・3・31）

竹田和彦（13・4・1～16・3・31）

北出猛夫（16・4・1～）

専任教員（二〇〇七年四月以降を掲載）

就任年月日	氏名	職名	前職等
07・4・1	磯前順一	准教授	日本女子大学助教授から（15・4・1教授昇任）
07・10・1	瀧井一博	准教授	兵庫県立大学教授から（13・7・1教授昇任）
08・8・1	郭南燕	准教授	オタゴ大学准教授から
08・9・1	ジョン・ブリーン	准教授	ロンドン大学SOAS准教授から（11・4・1教授昇任）
09・4・1	戸部良一	教授	防衛大学校教授から（14・3・31定年退職）
09・4・1	末木文美士	教授	東京大学大学院教授・国際日本文化研究センター客員教授から（15・3・31定年退職）
09・4・1	倉本一宏	教授	駒沢女子大学教授から
09・8・1	森洋久	准教授	大阪市立大学准教授・国際日本文化研究センター特別客員准教授から（17・3・31辞職）
10・1・1	榎本涉	准教授	採用
10・4・1	荒木浩	教授	大阪大学大学院教授から
10・4・1	伊東貴之	教授	武蔵大学教授から
10・4・1	佐野真由子	准教授	静岡文化芸術大学准教授から
10・8・1	尾形洋一	特任助教	採用（11・3・31任期満了退職）
11・4・1	小都晶子	特任助教	採用（13・3・31任期満了退職）
12・4・1	丸川雄三	准教授	国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授から（13・9・30辞職）
13・1・1	寺村裕史	特任准教授	採用（15・3・31任期満了退職）
13・4・1	北浦寛之	助教	京都造形大学非常勤講師から
13・10・1	大塚英志	教授	神戸芸術工科大学教授・国際日本文化研究センター客員教授から
13・10・1	宮崎康子	特任助教	採用（16・3・31任期満了退職）
14・4・1	坪井秀人	教授	名古屋大学教授から
15・4・1	楠綾子	准教授	関西学院大学准教授・国際日本文化研究センター客員准教授から

15・4・1	石上阿希	特任助教	採用
15・10・1	古川綾子	特任助教	採用
16・4・1	磯田道史	准教授	静岡文化芸術大学教授から
16・4・1	石川肇	助教	国際日本文化研究センター機関研究員から
16・10・1	呉座勇一	助教	立教大学兼任講師・国際日本文化研究センター客員准教授から

客員教員（二〇〇七年四月以降を掲載）

［教授］

氏名	就任時の所属	在任期間
望月　和彦	桃山学院大学教授	07・4・1～10・3・31
Friedrich Detlev SCHAUWECKER	元関西大学教授	07・4・1～10・3・31
川勝　平太	静岡文化芸術大学学長	07・4・1～08・3・31
落合恵美子	京都大学大学院教授	07・4・1～09・3・31
大嶋　仁	福岡大学教授	08・4・1～11・3・31
奥野　卓司	関西学院大学教授	08・4・1～11・3・31
上垣外憲一	帝塚山学院大学教授	08・4・1～11・3・31
末木文美士	東京大学大学院教授	08・4・1～09・3・31
古田島洋介	明星大学教授	09・4・1～12・3・31
酒井　哲哉	東京大学教授	10・4・1～12・3・31
高橋　伸彰	立命館大学教授	10・4・1～12・3・31
林　淳	愛知学院大学教授	10・4・1～13・3・31
近藤　好和	國學院大學兼任講師他	10・4・1～13・3・31
浦田　義和	佐賀大学教授	11・4・1～14・3・31
張　競	明治大学教授	11・4・1～14・3・31
依岡　隆児	徳島大学大学院教授	11・4・1～14・3・31
中村　和恵	明治大学教授	11・4・1～14・3・31
飯塚　靖	下関市立大学教授	12・4・1～15・3・31
大塚　英志	神戸芸術工科大学教授	12・4・1～13・9・30
御厨　貴	放送大学教授	12・4・1～15・3・31
山　泰幸	関西学院大学教授	12・4・1～13・3・31
谷川　建司	早稲田大学大学院客員教授	13・4・1～16・3・31
阿部　泰郎	名古屋大学大学院教授	13・4・1～16・3・31
中生　勝美	桜美林大学教授	13・4・1～16・3・31
吉川　真司	京都大学大学院教授	13・4・1～16・3・31
仲　万美子	同志社女子大学教授	14・4・1～17・3・31
橋爪　紳也	大阪府立大学教授	14・4・1～17・3・31
上野　誠	奈良大学教授	14・4・1～17・3・31
真鍋　昌賢	北九州市立大学教授	15・4・1～
安井眞奈美	天理大学教授	15・4・1～17・3・31
吉村　和真	精華大学教授（副学長）	16・4・1～
三澤真美恵	日本大学教授	16・4・1～
長田　俊樹	総合地球環境学研究所名誉教授	16・4・1～

［准教授］

氏名	就任時の所属	在任期間
佐野真由子	静岡文化芸術大学講師	07・4・1～10・3・31
中島　岳志	北海道大学公共政策大学院准教授	07・4・1～10・3・31
千葉　慶	明治大学非常勤講師	08・4・1～11・3・31
平野共余子	元映画専門大学院大学非常勤講師	08・4・1～11・3・31
磯田　道史	茨城大学准教授	08・4・1～11・3・31
片山　杜秀	慶応義塾大学准教授	09・4・1～12・3・31

橋本　順光	大阪大学准教授	09・4・1～12・3・31
上村　敏文	ルーテル学院大学准教授	09・4・1～11・3・31
森　勇一	金城学院大学講師	10・4・1～12・3・31
多田　伊織	皇學館大学大学院非常勤講師	11・4・1～13・3・31
	鈴鹿医療科学大学非常勤講師	
	京都大学人文科学研究所非常勤講師	
小川原正道	慶應義塾大学准教授	11・4・1～13・3・31
木村　朗子	津田塾大学准教授	11・4・1～14・3・31
辻垣　晃一	京都府立東舞鶴高等学校教諭	11・4・1～14・3・31
楠　綾子	関西学院大学准教授	12・4・1～15・3・31
滝澤　修身	長崎純心大学教授	12・4・1～15・3・31
奈良岡聰智	京都大学大学院准教授	13・4・1～16・3・31
中町美香子	京都大学非常勤講師	13・4・1～14・3・31
木村　直恵	学習院女子大学准教授	14・4・1～17・3・31
今泉　宜子	明治神宮国際神道文化研究所主任研究員	15・4・1～
大久保健晴	慶應義塾大学准教授	15・4・1～
林　洋子	文化庁芸術文化調査官	15・4・1～
呉座　勇一	東京大学大学院学術研究員	15・4・1～16・9・30
小川　順子	中部大学准教授	15・4・1～
加藤　雄三	専修大学非常勤講師	16・4・1～
羽鳥　隆英	新潟大学助教	16・4・1～

［特別客員准教授］

氏名	就任時の所属	在任期間
喜多　千草	関西大学准教授	08・4・1～11・3・31
森　洋久	大阪市立大学准教授	09・4・1～09・7・31
齋藤　俊文	九州大学大学院准教授	10・4・1～12・3・31

［外国人研究員］

氏名	就任時の所属	上記機関の所在国	受入期間	研究テーマ
Ioulia Karali GIANNAKOPOULOU	アテネ大学教授	ギリシャ	07・4・1～07・7・31	エーゲ海新石器時代の貝文化―日本の縄文・弥生との比較
Hyung-Il Pai	カリフォルニア大学サンタバーバラ校准教授	アメリカ	07・4・1～08・3・28	観光産業と〝日本文化財〟の宣伝：博物館、記念物と先祖遺産のマーケティング
金　榮　哲	漢陽大学校国際文化大学教授	韓国	07・4・1～08・3・31	朝鮮と江戸時代の文芸に現れる遊興の美意識の比較研究
Gilles Jean-Pierre CAMPAGNOLO	フランス国立科学研究センター研究員	フランス	07・4・1～08・3・31	日本の近代化を論じた「外書」―日文研および関西の図書館を利用して
王　維　坤	西北大学副院長	中国	07・4・1～08・3・31	古代中国と日本の都城・墓制文物交流の研究
Brian Douglas RUPPERT	イリノイ大学アーバナシャンペーン校準教授	アメリカ	07・7・1～08・6・30	日本中世後期における経蔵・書写活動及び寺院ネットワークの変遷
汪　宏　倫	台湾中央研究院社会学研究所準研究員	台湾	07・7・1～08・6・30	日中に於ける歴史を書く政治：そのフィーリング、価値観及びモダニティーの未完成プロジェクト
Frederic Rene Robert GIRARD	フランス国立極東学院研究員	フランス	07・8・1～08・7・31	中世に於ける宗教・思想の研究
Hugh Barry DE FERRANTI	ニューイングランド大学助教授	オーストラリア	07・8・1～08・1・31	音楽体験から観た日本の近代：世界大戦間の大阪を例に
Michael S. MOLASKY	ミネソタ大学準教授	アメリカ	07・9・1～08・8・31	ジャズ喫茶と戦後日本文化

金　貞　恵	釜山外国語大学校東洋語大学教授	韓国	07・9・1～08・8・31	在日コリアン文学に表れたディアスポラの様相と意味
周　　見	中国社会科学院世界経済政治研究所教授	中国	07・9・1～08・8・31	渋沢栄一と近代中国
William Jefferson TYLER	オハイオ州立大学準教授	アメリカ	07・10・1～08・9・29	世界に石川淳を紹介する（その第三段）―壮年期代表作『荒魂』の英訳
Karin Gunilla LINDBERG-WADA	ストックホルム大学教授	スウェーデン	07・10・1～08・8・31	世界文学史の中の日本文学
Purnendra Chandra JAIN	アデレード大学アジア研究センター教授	オーストラリア	07・11・1～08・1・31	日本の選択：急成長する中国と浮上するインドの間で
Alexander VOVIN	ハワイ大学マノア校教授	アメリカ	08・1・10～09・9・30	『万葉集』の英語全注釈と翻訳
金　弼　東	世明大学校副教授	韓国	08・3・1～09・2・28	日本の「東アジア経済圏」構想と「アジアアイデンティティ」に関する研究
王　中　忱	清華大学教授	中国	08・3・1～09・2・28	近代知としての「満蒙」及び「満蒙史」研究の設立とその行方
Alison Isobel Rae TOKITA	モナシュ大学日本センター教授	オーストラリア	08・4・1～09・3・31	両世界大戦間（一九一八～一九三八年）の大阪における音楽と近代
蔡　　敦　達	同済大学教授	中国	08・4・1～08・9・30	日本文明における長江文明の摂取
Kuldeep Kumar BHAN	マハラジャサラジラオ大学教授	インド	08・6・3～09・3・20	インド考古学へのＧＩＳの応用
David HUGHES	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院シニアレクチャラー	イギリス	08・7・1～08・12・15	日本民謡の将来：保存会とコンクールの役割と影響

Felix Ulombe KAPUTU	ルブンバシ大学教授	コンゴ民主共和国	08・7・1～09・3・31	北日本の〝いたこ〟現象と中央アフリカの“Mikishi”―社会宗教学的比較研究―	
Mauricio MARTINEZ RODRIGUEZ	ロスアンデス大学教授	コロンビア	08・7・1～09・6・30	スペイン語版インターネット日本芸能百科事典	
趙　政男	高麗大学校政経大学教授	韓国	08・8・1～09・7・31	現代日本の政治理念研究	
胡　宝華	南開大学副教授	中国	08・9・1～09・8・31	二十世紀における日本学者の中国史研究	
Michel DALISSIER	フランス国立科学研究庁（CNRS）	フランス	08・9・1～09・8・31	日本現代哲学についての研究	
雷　国山	南京大学助教授	中国	08・9・1～09・7・31	武士道総合研究	
Ami Aminah MEUTIA	インドネシア科学研究所研究員	インドネシア	08・10・1～09・3・31	環境サステイナビリティにおけるローカルノレッジの役割、インドネシア・マンニンジョウ湖と日本・琵琶湖の比較研究	
Wolfgang SCHAMONI	ハイデルブルグ大学名誉教授	ドイツ	08・10・1～09・3・31	十八・十九世紀の自伝・伝記文学の研究	
林　慶花	成均館大学校研究教授	韓国	08・11・1～09・3・31	帝国の声・民族の声―近代東アジアにおける「民謡」言説比較	
河名サリ	マサチューセッツ大学ボストン校助教授	アメリカ	09・1・1～09・5・31	マンガ文化と日本の視覚文化	
Anu JINDAL	画家・日本美術史研究家		09・3・1～10・2・28	美女の理想としての傾城：浮世絵とインド細密画	
Yona SIDERER	エルサレム・ヘブライ大学シニアレクチャラー	イスラエル	09・4・1～10・3・31	日本の近現代化学史	

尹　海東	成均館大学校教授	韓国	09・4・1～10・3・31	国家としての朝鮮総督府
陳　玲	清華大学准教授	中国	09・4・1～10・3・31	京都祇園祭―異文化〝共存〟の歴史的モデルとして
蔡　慧玉	中央研究院台湾史研究所副研究員	台湾	09・4・1～09・11・30	「湾官」：日本人街庄長の分析（一九二〇～一九四五）を例として―植民地官僚と日本の台湾支配の一考察
Theodore F. Cook	ニュージャージーウィリアムパターソン大学教授	アメリカ	09・5・1～09・8・31	全面戦争中の文化―日本の体験
David Gabriel HEBERT	シベリウス音楽院教授	フィンランド	12・6・1～13・1・13	日本文化形成と戦争の記憶
Namlin HUR	ブリティッシュコロンビア大学准教授	カナダ	09・6・1～09・6・1～09・8・31	日本の吹奏楽作品にみるトランスカルチャレーション
野原博淳	フランス国立科学研究センターシニアリサーチャー	フランス	09・7・1～10・6・30	トハイブリディティ
黄　自進	中央研究院近代史研究所研究員	台湾	09・7・1～10・6・30	秘仏の誘い―開帳と日本近世の宗教文化
	中央研究院近代史研究所研究員（教授）		14・6・1～15・5・31	バイオテクノロジー発展の日仏比較：コンビータンスのネットワーク化と知識獲得メカニズム
Murielle HLADIK	サンチエンヌ国立建築高等研究院准教授	フランス	09・7・1～10・2・28	満州事変の再考察：日中関係史における位置づけ
Giang Thi Thu PHAM	ベトナム国家大学附属人文社会科学大学専任講師	ベトナム	09・7・1～10・2・28	日本の軍事戦略と東アジア社会―日中戦争期を中心として―
蒋　立峰	中国社会科学院日本研究所教授	中国	09・8・1～10・3・31	建築と庭園―東洋と西洋における交流の展望―
Jeffrey Matthew ANGLES	ウェストミシガン大学助教授	アメリカ	09・8・30～10・8・29	日本仏教における肉食妻帯問題―その実態および思想的特徴―
				日本文化と日本人
				日本における翻訳の文化史

林　志弦	漢陽大学校比較歴史文化研究所所長	韓国	09・9・1～10・8・31	犠牲者意識の民族主義
Philip Tudor HARRIES	オックスフォード大学クイーンズカレッジフェロー	イギリス	09・9・1～10・8・31	奈良・平安初期の和歌における地名の使い方
李　相燦	ソウル大学校人文大学教授	韓国	09・9・1～10・8・31	明治期近代文書管理制度成立過程研究
趙　維平	上海音楽学院教授	中国	09・9・1～10・8・31	東アジアにおける中国音楽の受容に関する研究―日本、朝鮮、ベトナム宮廷音楽の初期史を中心に―
Ekkehard MAY	フランクフルト大学名誉教授	ドイツ	09・12・1～10・5・31	芭蕉俳文の研究
根川幸男	ブラジリア大学准教授	ブラジル	10・1・1～11・12・31	新世界ブラジルにおける日本的教育文化の越境と展開
			13・4・1～14・3・31	日本的教育文化の複数地域展開に関する比較研究―ブラジル・フィリピン・ハワイ・アメリカの日系教育史を中心に―
高　崇文	北京大学考古文博学院院長	中国	10・4・1～11・3・31	中日間の古代都市文明に関する比較研究
呉　京煥	釜山大学校教授	韓国	10・4・1～11・3・31	日本浪漫派とアジア
Aida SULEYMENOVA	極東国立総合大学准教授	ロシア	10・4・1～11・3・31	二〇世紀前半の北東アジアにおけるロシア亡命人の文芸詩と近代短歌
Roman ROSENBAUM	シドニー大学名誉アソシエイト	オーストラリア	10・4・1～11・3・31	日本の戦後文化研究：戦争の傷跡と焼け跡、闇市世代
Bernard FAURE	コロンビア大学教授（日本宗教学センター所長）	アメリカ	10・4・2～10・6・30	中世日本宗教の一側面―三天信仰（弁財天、茶吉尼天、毘沙門天）について
Pullattu Abraham GEORGE	ジャワハルラル・ネルー大学教授	インド	10・6・1～11・5・31	文学の中の宗教と民間伝承の融合：宮沢賢治の世界観の再検討

魏　大海	中国社会科学院外国文学研究所研究員（教授）	中国	10・6・1～11・5・31	日中近代文学ジャンルの比較研究―「純文学」「大衆文学」「私小説」「心境小説」などを中心に	
崔　官	高麗大学校日本研究センター所長	韓国	10・6・1～11・2・28	戦争・記憶・想像力	
Boyka Elit TSIGOVA	「聖クリメント・オフリドスキ」ソフィア大学教授	ブルガリア	10・7・1～11・6・30	京都禅寺における普遍概念の表現	
康　志賢	全南大学校副教授	韓国	10・7・1～11・6・30	小説から浮世絵へ、越境する江戸表象文化考―〈膝栗毛もの〉の図様継承史を端緒に―	
Mitsuyo WADA-MARCIANO	カールトン大学准教授 カールトン大学芸術文化大学教授	カナダ	10・8・1～11・7・31	現代日本映画と映像文化におけるニューメディアの影響	
徐　載坤	韓国外国語大学校副教授	韓国	10・9・1～11・8・31	日本現代文学と戦争表象	
韓　東育	東北師範大学教授（院長）	中国	10・10・1～11・9・30	近世日本における知の再編と来日儒学者・朱舜水	
王　鉄軍	遼寧大学日本研究所副研究員	中国	10・10・1～11・9・30	戦前日本植民地官僚制度研究―台湾総督府と関東庁との比較を中心として	
Thi Thanh Tam NGUYEN	ベトナム科学技術協会技術開発研究所副所長	ベトナム	10・11・1～11・10・31	ベトナム高等教育における「日本文化」教育のための基礎的研究	
王　確	東北師範大学文学院院長	中国	11・4・1～12・3・31	植民地近代国家の夢と「満州国」美術展	
金　哲	延世大学校教授	韓国	11・4・1～12・2・28	韓国近代における公と私という問題―韓国の小説と「私的公共性」という問題を中心として	
Cynthia VIALLE	ライデン大学研究員	オランダ	11・4・1～12・8・31	オランダから江戸まで―徳川時代における東インド会社の献上品	
Daniel ROH	（財）未来工学研究所研究参与	日本	11・4・1～12・3・31	戦後日韓関係の心理構造	

朴　賛勝	漢陽大学校東アジア文化研究所所長	韓国	11・4・1～12・1・31	一九二〇・三〇年代日本の新聞・雑誌の朝鮮流入	
Philippe BONNIN	フランス国立科学研究センター教授	フランス	11・6・1～12・5・31	仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論	
Thi Oanh NGUYEN	ベトナム社会科学院准教授	ベトナム	11・6・1～12・5・31	日本説話における鬼神世界―ベトナムとの比較	
楊　暁捷	カルガリー大学教授	カナダ	11・7・1～12・6・30	デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代	
Gary James HICKEY	クイーンズランド大学英語・メディア研究・美術史学科美術館研究主査	オーストラリア	11・7・1～12・6・30	文化的な相違：オーストラリアと日本	
Frederick DICKINSON	ペンシルベニア大学准教授	アメリカ	11・7・1～12・3・31	戦間期世界における政治指導の困難：浜口雄幸を中心に	
都　珍淳	昌原大学校教授	韓国	11・9・1～12・8・31	一九世紀開港に対する韓・中・日の記憶と記念に関する比較研究	
Hans Martin KRAMER	ルール大学准教授	ドイツ	11・9・1～12・7・31	明治初年の浄土真宗海外教状視察団と近代日本の「宗教」概念形成	
劉　克申	上海対外貿易学院教授	中国	11・10・1～12・9・30	日本医学史に関する研究	
徐　興慶	台湾大学日本語文学系・日本語文学研究所教授兼系主任・所長	台湾	11・10・1～12・9・30	近代日本知識人の中国観―伝統と近現代の葛藤における徳富蘇峰の視点とその役割―	
刘　岳兵	南開大学教授	中国	11・11・1～12・10・31	前近代の日本における中国認識とその変遷――一八世紀を中心に	
大貫恵美子	ウィスコンシン大学教授	アメリカ	12・4・1～12・8・31	象徴人類学、医療人類学、歴史人類学、理論と方法論、言語人類学、他	

Soyombo Lubsangjabyn BORJIGIN	チョイ・ルブサンジャブ言語文明大学教授	モンゴル	12・4・1～13・3・31	民族学、文化人類学
韋　立　新	広東外語外貿大学教授	中国	12・4・1～13・3・13	日本文化、日本仏教史、日中文化交流史
金　哲　会	北京語言大学教授	中国	12・4・1～13・3・31	日本語、日本文学、日本文化
Kulatilaka KUMARASINGHE	ケラニヤ大学教授	スリランカ	12・6・1～13・3・31	シンハラ演劇と日本伝統芸能の影響
Jorg B. QUENZER	ハンブルク大学教授	ドイツ	12・7・1～12・9・30	夢と表象―メディア・歴史・文化
Kacem ZOUGHARI	フランス国立東洋言語文化大学 フランス日本協会研究者	フランス	12・7・18～13・6・30	日本とヨーロッパの古伝武術の伝授方法の共通点
魯　成　煥	蔚山大学校人文大学教授	韓国	12・8・1～13・7・31	日本の神になった朝鮮人（―文禄、慶長の朝鮮捕虜を中心に―）
林　志　宣	延世大学校教授	韓国	12・9・1～13・8・31	民族主義的な形式を取る現代音楽の超民族的な様相―韓国と日本の作曲家の伝統楽器適用の研究―
Wybe KUITERT	ソウル国立大学准教授	韓国	12・9・1～13・8・31	ルイ一四世からのヨーロッパ庭園論争と日本情報
陳　小　法	浙江工商大学准教授	中国	12・9・1～13・8・31	遣明使と大運河―策彦周良を中心に―
張　翔	復旦大学教授	中国	12・10・1～13・3・31	「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―
徐　勇	北京大学教授	中国	12・10・1～13・9・30	近代中国と日本の軍政関係研究（一八九五～一九八二）

Anna ANDREEVA	ハイデルベルグ大学アカデミックフェロー	ドイツ	12・11・1～13・6・30	中世・近世日本における密教とその地域的応用パターン
Michael Dylan FOSTER	インディアナ大学准教授	アメリカ	13・1・1～13・12・31	妖怪文化、年中行事、祭、儀礼、観光の研究、ユネスコ
Thi Hoang Mai TRAN	ベトナム社会科学院附属東北アジア研究院・情報図書センター所長	ベトナム	13・2・1～13・11・30	「日本の図書館におけるデジタル化環境下の書誌コントロール。ベトナムの図書館との比較研究」
陸　留弟	華東師範大学教授	中国	13・4・1～13・9・30	茶庭における日本庭園と中国庭園
徐　禎完	翰林大学校教授	韓国	13・4・1～14・3・31	植民地朝鮮における文化権力としての能
鄭　鎣壇	国大学校文科大学教授	韓国	13・4・1～13・6・30	韓日の近世小説と仏教
厳　紹璗	北京大学教授	中国	13・6・1～13・8・31	中国から「古事記」を読む
Agnese HAJIMA	ラトビア大学准教授	ラトビア	13・6・1～13・8・31	夢と表象―メディア・歴史・文化
Hans Bjarne THOMSEN	チューリッヒ大学教授	ドイツ	13・7・1～13・9・30	春画の中の言葉
Marina Konstantinova KOVALCHUK	極東国立総合大学東洋学大学准教授	ロシア	13・7・1～14・6・30	幕末日本人留学生の目から見たロシア帝国
載　暁芙	復旦大学日本研究センター准教授	中国	13・7・1～14・3・31	日本的生活スタイルの変化に影響する要因に関する研究
劉　暁峰	清華大学教授	中国	13・9・1～14・8・31	大嘗祭研究

高馬京子	ヴィータウタス・マグヌス大学アジア研究センター常勤研究員	リトアニア	13・9・1～14・8・31	越境文化として「カワイイ」とその原点
Elizabetta PORCU	ライプツィヒ大学地域研究センター講師	ドイツ	13・9・1～14・8・31	京都の祇園祭―文化・宗教・共同体―
朴映美	檀国大学校師範大学講師	韓国	13・9・1～14・8・31	韓国における近代的〝知〟の形成―服部宇之吉を中心として
唐権	華東師範大学副教授	中国	13・9・1～14・8・31	近世中国に於ける日本語による文学創作に関する研究
Harald FUESS	ハイデルベルク大学教授	ドイツ	13・10・1～14・9・30	日本居留地での日常生活及び治外法権
森幸一	サンパウロ大学教授、サンパウロ大学日本文化研究所長	ブラジル	13・10・1～14・7・31	新大陸の日系移民の歴史と文化
外村中	ヴュルツブルグ大学講師	ドイツ	13・10・1～14・3・31	日本庭園と中国・インドの古代庭園の比較研究
王鍵	中国社会科学院近代史研究所台湾史研究室研究員	中国	13・11・1～14・10・31	日本植民地経営の連続・不連続―台湾、満州における後藤新平の施策を中心に
Emilia GADELEVA	フリーランス（研究者）		14・1・1～14・12・31	いわゆる「日本スタイル」：西洋にどのように解釈され、どのように受入・拒絶されるか
楊際開	杭州師範大学国学院専任研究員	中国	14・3・1～15・2・28	東アジアの視野における　徂徠学と反徂徠
朴順愛	湖南大学校人文社会大学教授	韓国	14・4・1～15・3・31	日本大衆文化とナショナリズム
王成	清華大学教授	中国	14・4・1～15・3・31	中国の大衆文化の復興と日本文化について
Gergana Rumenova PETTKOVA	ソフィア「聖クリメント・オフリドスキ」大学准教授	ブルガリア	14・4・1～14・9・30	日本民話の解釈から日本文化の理解へ
王明珂	国立中興大学特任教授兼文学院院長	中国	14・7・1～15・6・30	近代以前の満州の歴史と人類生態の変遷

Linh Hain PHAN	ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学講師	ベトナム	14・8・1～14・8・31	お歯黒文化圏に関する試論―ベトナムと日本を事例にして	
Luciana GALLIANO	カ・フォスカリ大学客員教授	イタリア	14・9・1～15・3・31	日本とフルクサス。フルクサスにおける日本人アーティストや日本の美楽―日本方からフルクサスを見直す	
Andrew Clarence GERSTLE	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院教授	イギリス	14・9・1～15・8・31	パロディの一形態としての春画の文化的・社会的意義	
朴　正一	釜山外国語大学校教授	韓国	14・9・1～15・8・31	人とモノの移動に伴う新しいコミュニティの形成―井戸茶碗と朝鮮茶碗	
梁　嶸	北京中医科大学教授	中国	14・9・1～15・8・31	日中健康診断史の比較研究	
望月みや	サンタクララ大学イエズス会神学校准教授	アメリカ	14・9・1～14・11・30	世界的観点：ジェズイットと日本最初の欧州芸術	
Ranjana MUKHOPADHYYAYA	デリー大学准教授	インド	14・9・1～15・5・31	日本仏の平和思想的展開―ポストコロニアル理論の視点からの考察	
Richard Edger TORRENCE	オハイオ州立大学教授	アメリカ	15・1・1～15・12・31	出雲と大阪：二つの地方文化史	
Kevin Michael DOAK	ジョージタウン大学教授	アメリカ	15・1・1～15・12・31	田中耕太郎の思想と行動	
高　文勝	天津師範大学教授	中国	15・1・1～15・12・31	一九二〇年代における日中外交史の実証的研究―中国側の視点から―	
李　容相	又松大学副教授	韓国	15・2・1～16・1・31	植民地統治期の日本の鉄道政策に関する研究―日本と朝鮮と満州鉄道との政策比較を中心に	
Michel MOHIR	ハワイ大学マノア校准教授	アメリカ	15・2・1～15・7・31	解脱に対する禅理解の再検討	

Maya Bedros KELIYAN	ブルガリア科学アカデミー教授	ブルガリア	15・4・1～16・3・31	日本とブルガリアの地域社会における祭礼比較を通して	
韓　錫　政	東亜大学校教授（副学長）	韓　国	15・4・1～16・2・29	満州国から南朝鮮への文化的拡散	
Monir Hossain MONI	アジア太平洋研究所准教授	バングラデシュ	15・4・1～16・3・31	二一世紀ニューアジアにおける日本のパブリックディプロマシーとソフトパワー	
李　愛　淑	国立韓国放送大学教授	韓　国	15・6・1～16・5・31	女性の文学と絵画	
歐　素　瑛	国史館修纂処纂修	台　湾	15・6・15～15・9・15	台北帝国大学と熱帯気象学の展開―白鳥勝義を中心に	
張　寅　性	ソウル大学校教授	韓　国	15・7・1～16・3・31	戦後日本の保守主義に関する一研究―福田恆存と江藤淳を中心に	
Igor Konstantinovich BOTOEV	ブリヤート国立大学准教授	ロシア	15・8・1～16・7・31	日本文学の翻訳における異文化コミュニケーションの諸問題	
Nhu Vu Quynh NGUYEN	在ホーチミン日本国総領事館広報文化班アシスタント	ベトナム	15・9・1～16・8・31	現代日本社会における俳句の変化	
Bonaventura RUPERTI	ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学教授	イタリア	15・9・1～16・8・31	日本の舞台芸術における身体―死と生、人形と人工体	
李　応　寿	世宗大学校人文科学大学教授	韓　国	15・9・1～16・8・31	日本と韓国―演劇から文化へ	
龔　穎	中国社会科学院哲学研究所研究員	中　国	15・9・1～16・8・31	中国における近代的な学問の成立と日本思想との交流―倫理学を例にして	
Eyal BEN-ARI	キネレット大学社会安全保障センター所長	イスラエル	15・9・16～16・3・31	よい戦死から戦没者の魂のためのよい安息へ：産業民主主義の武装勢力の比較分析	

姜　龍範	延辺大学教授	中国	16・1・1～16・12・31	戦後日朝関係研究
周　閔	北京語言大学教授	中国	16・2・1～17・1・31	川端康成文学と中国文化
Matthias Jean-Francois HAYEK	パリ・ディドロ大学准教授	フランス	16・2・1～17・1・31	近世初・中期の「知」の形成と媒体―日本的ヒューマニズムと啓蒙思想の基礎的研究
官　文娜	香港中文大学アジア太平洋研究所助教	中国	16・4・1～17・3・31	近代化過程における日、中両国の風俗改造と国民修身教育に関する歴史的考察
Maral ANDASSOVA	カザフ国立女子教育大学研究員	カザフスタン	16・4・1～16・9・25	古事記及び日本書紀における「天皇像」に関する考察
山崎　佳代子	ベオグラード大学教授	セルビア	16・6・1～16・11・30	セルビア・アヴァンギャルドと日本
鄭　在貞	ソウル市立大学校教授	韓国	16・6・1～16・8・31	植民地期の鉄道とソウル、そして市民の生活
Barbara HARTLEY	タスマニア大学上級講師、プログラム・ディレクター	オーストラリア	16・7・1～17・6・30	昭和期における大陸表象――物語と視覚イメージ
宋　浣範	高麗大学GLOBAL日本研究院教授（副院長）	韓国	16・7・1～17・2・28	説話文学と歴史史料の間に
鄭　相哲	韓国外国語大学教授	韓国	16・9・1～17・8・31	「東京裁判」における通翻訳の研究―社会・文化・政治的な観点から―
李　済滄	南京師範大学副教授	中国	16・9・1～17・8・31	谷川道雄の中国史研究とその思想
劉　雨珍	南開大学教授	中国	16・9・1～17・8・31	筆談と明治前期の中日文化交流
Chung Toan TRAN THI	グェンチャイ大学副学長兼日本語学部学部長（准教授）	ベトナム	16・10・1～17・9・30	平安時代の女流日記文学を通じて古代日本文学における女性像と女性作家の役割を探る

葛　継勇	鄭州大学アジア太平洋研究センター副教授	中国	16・11・1～17・10・31	来日唐僧からみた唐仏教文化と古代日本―受容と抵抗の外来文化―
Bert WINTHER-TAMAKI	カリフォルニア大学アーバイン校教授	アメリカ	17・1・1～17・12・31	近代日本の陶芸、写真とインスタレーション・アートにおける土の美
Nicolas FIEVE	高等研究実習院教授	フランス	17・2・1～18・1・31	人間自然学観点からの近代住宅空間評論史

［外来研究員（日本学術振興会）］

氏名	就任時の所属	上記機関の所在国	受入期間	研究テーマ
Xun LI	マッセー大学リサーチアシスタント	ニュージーランド	07・9・10～09・9・9	イースター島の生態史における人為的影響
陳　妍渥	台湾中央研究院台湾史研究所助研究員	台湾	07・11・20～08・11・19	植民地帝国日本と東アジアの知識交流―台湾と朝鮮の植民地期メディアを対象に―
Noriko MANABE	ブルックリンカレッジ講師	アメリカ	08・2・18～09・1・17	西洋音楽語法で書かれた日本の歌の変遷―歌詞と旋律・リズムの関係を中心に
Bjorn BERGLUND	ルンド大学名誉教授	スウェーデン	08・10・1～08・11・6	日本とスウェーデンの里山の比較研究
Johan ERIKSSON	ゴットランド大学准教授	スウェーデン	12・4・19～12・5・18	〃
李　偉	総合研究大学院大学博士（学術）	日本	09・3・11～09・3・27	近世日本におけるビジュアルコミュニケーション
Micah Louis AUERBACK	ミシガン大学准教授	アメリカ	10・4・1～12・3・31	満州における公園文化の受容―日本人の造園活動を中心に―
			10・6・2～11・7・31	近代日本におけるさまざまな仏伝

趙　暁寰	オタゴ大学准教授	ニュージーランド	11・1・5～11・3・5	関漢卿の雑劇と世阿弥の能における幽霊の表現方法の比較研究
James SHIELDS	バックネル大学准教授	アメリカ	11・5・30～11・7・29	明治・大正期の新仏教運動と一八八〇年代から一九三〇年代の進歩的仏教の結社活動
Paola VOCI	オタゴ大学シニアレクチャラー	ニュージーランド	11・10・3～11・10・29	日中戦争をテーマとする中国映画に現れたコミュニケーションの問題
Per LAGERAS	スウェーデン・ナショナルヘリテージ委員会研究員	スウェーデン	12・4・19～12・5・18	スウェーデンと日本における自然と人間の関係の比較研究
許　海華	総合研究大学院大学大学院生	日本	12・11・1～13・3・31	幕末明治期における旧唐通事の史的研究
李　卓	南開大学教授	中国	13・1・7～13・1・26	古代日本における科挙制度の導入および廃止について
Alice Joy FREEMAN	オックスフォード大学博士課程	イギリス	13・2・20～13・5・19	昭和期日本の禅の国際交流―アジア・西洋との関係
Ekaterina LEVCHENKO	極東国立人文大学専任講師	ロシア	13・4・1～14・3・31	日本の上代文学作品における慣用連語について
陳　其松	総合研究大学院大学大学院生	日本	13・4・1～14・3・31	一九世紀西洋図像新聞紙における東アジア図像印象について
Anja BATRAM	ルール大学博士課程	ドイツ	13・6・18～14・8・19	江戸時代における神社の変遷：氏子組織と近代神道概念の構築
Frederic MONVOISIN	パリ第3大学講師	フランス	13・10・7～14・10・6	映画、アジア映画、フィルム分析、地政学、現代史
Agnese HAJIMA	ラトビア大学准教授	ラトビア	15・6・1～16・1・31	日本美術に見るユーモア

印南　芙沙子	ダラム大学助教授	イギリス	16・7・1～16・9・30	スキンシップ：触れられるものと触れられないものを介して	
Galia Todorova PETKOVA	国立演劇映画芸術アカデミー客員講師	ブルガリア	16・11・4～18・11・3	日本における伝統演劇―ジェンダー論、文化的遺産、国家／地域のアイデンティティ―	
陸　榮　洙	中央大学校教授	韓国	16・12・26～17・2・23	一九世紀後半における日韓エリートたちのアメリカ文明評価	
韓　賓　娜	東北師範大学教授	中国	17・1・30～17・3・31	日本古都研究に関する新情報	

［外来研究員（国際交流基金）］

氏　名	就任時の所属	上記機関の所在国	受入期間	研究テーマ
Raquel ABISAMARA	ブラジル科学技術開発協議会研究員、ジャーナリスト	ブラジル	07・7・2～08・6・1	都会の風景と現代日本詩
Junko OTA	サンパウロ大学所長（教授）	ブラジル	08・1・7～08・4・3	江戸から明治時代にかけての日本語変化の文化・社会・歴史的背景
Maria Teresa Rodriguez NAVARRO	バルセロナ自治大学研究員	スペイン	09・6・24～09・9・23	明治期における文化受容―日本人著者と翻訳者及び文化的仲介者としての役割について
Wiebke DENECKE	コロンビア大学バーナードカレッジ准教授	アメリカ	09・9・1～10・6・1	中国・ギリシアの足跡―日本語世界とラテン語世界の作者たちとその文学伝統
Minh Hang HOANG	ベトナム社会科学院研究員	ベトナム	10・5・22～10・11・21	一九七〇年代の福田ドクトリンと東南アジアにおける日本の政治的役割の台頭

白石　実	バルセロナ自治大学コーディネイター	スペイン	10・7・13～10・9・9	日本美術における東アジア美術の影響：思想と形、資料収集、データ作成
Anne COMMONS	アルバータ大学准教授	カナダ	10・10・19～10・12・16	俊頼の詩的特質―『俊頼髄脳』にけるカノン形成と説話引証をめぐって
Vijay Suryakant TENNETI	英語・外国語大学准教授	インド	11・1・15～12・1・15	社会文化的理解と異文化交渉
Thi Hoang Mai TRAN	ベトナム社会科学院附属東北アジア研究院日本研究センター情報図書館センター所長	ベトナム	11・6・15～12・3・15	日本の図書館におけるデジタル化環境下の書誌コントロール―ベトナムの図書館への教訓―
Gita KEENI	ヴィシュヴァ・バーラティ大学（タゴール大学）講師	インド	11・6・30～12・6・27	女性に関する日本とベンガルのことわざの比較研究
Csaba Gergely TAMAS	パーズマーニ・ペーテル・カトリック大学非常勤講師	ハンガリー	11・7・9～11・8・13	日本の議会政治―その歴史的進展と現代的課題―
Huong Lan NGO	ベトナム社会科学院東北アジア研究所日本研究センター副所長	ベトナム	11・10・1～12・5・31	日本人のコミュニケーション文化の特徴：ベトナムの断わりの言語行為との比較
Andrijana CVETKOVIK	欧州映画アカデミーESRAパリ―スコピエ―ニューヨーク客員教授、映像作家、映像研究者	マケドニア	11・12・1～12・11・30	映画表現を通じた文化的イメージと日本の潜在意識の形
Edward Thomas MACK	ワシントン大学准教授	アメリカ	13・3・14～14・3・13	ブラジルにおける日本語のフィクションと民族／国民文学の問題
James SHIELDS	バックネル大学准教授	アメリカ	13・8・1～14・7・31	春と修羅：明治末期から昭和初期までの仏教改革と革命

Nguyen Ngoc Phuong TRANG	ベトナム東北アジア研究所・日本研究センター研究員（博士課程）	ベトナム	13・9・10～14・5・10	第二次世界大戦後から一九九六年にかけての日本の新宗教	
Galina VOROBEVA	キルギス民族大学上級日本講語講師	キルギス	13・12・1～14・5・31	非漢字圏日本語学習者のための階層構造分解による新常用漢字の分析	
Amaury GARCIA	エル・コレヒオ・デ・メヒコ大学アジア・アフリカ研究センター教授	メキシコ	14・6・15～15・6・14	日本美術史における生産・流通・消費の回路・歴史学的な再評価	
Wael Mohamed Orabi ABDELMAKSOUD	キング・サウード大学准教授	エジプト	14・6・15～14・7・28	日本・アラブ近代文学の〈接点〉を探る比較研究プロジェクト	
Andrew GORDON	ハーバード大学ライシャワー日本研究所教授	アメリカ	14・9・1～15・5・31	『失われた20年』の同時代史に向けて	
Galia Todorova PETKOVA	国立演劇映画芸術アカデミー客員講師	ブルガリア	14・11・1～15・9・30	女もの：日本の伝統的男性演劇における女性性の登場と役割	
Nhung Thi TRAN	ベトナム社会科学院東北アジア研究所上級研究員（所長）	ベトナム	14・11・25～15・1・23	二〇一二年度日本の社会保障改革の日本の高齢者層への影響―ベトナムへの提言として	
Yanru ZHANG	中国社会科学院世界歴史研究所準教授	中国	16・8・1～16・12・31	近代日本における国体をめぐる議論	
Nathalie PHILLIPS	エディンバラ大学大学院生	イギリス	16・10・1～17・5・31	平安時代の社会・政治的な背景から見た超（越）自然的な信仰の認識論的な役割	
Meghen JONES	アルフレッド大学助教	アメリカ	17・1・10～17・8・10	茶碗：日本から世界へ	

［外来研究員（外国人来訪研究員）］

氏名	就任時の所属	上記機関の所在国	受入期間	研究テーマ
大森恭子	ハミルトン大学助教授	アメリカ	07・5・8～07・5・31	「モダニズム」を探偵する：雑誌『新青年』、探偵小説、日常と平俗のモダニズム文化（一九二〇～一九五〇年）
Michael MARRA	カリフォルニア大学ロサンゼルス校日本研究センター教授	アメリカ	07・6・11～07・6・25	和歌における日本の美学―身体感覚を通して
李漢燮	高麗大学校教授	韓国	07・7・19～07・8・25	近代日本語語彙の研究文献調査
			07・12・24～08・2・3	〃
			08・7・22～08・8・5	〃
			09・12・23～10・1・24	〃
Andrew Clarence GERSTLE	ロンドン大学教授	イギリス	07・8・7～07・9・6	18世紀艶本の研究
Louis Michael CULLEN	ダブリン大学トリニティーカレッジ教授	アイルランド	08・3・5～08・3・30	徳川時代の官吏と支配―発展体制と資料
			09・3・31～09・4・21	鎖国時代日本の外交における意思決定―資料分析を通して
			10・3・10～10・3・30	鎖国時代日本の外交政策決定における文書原拠の研究と分析
Thomas LAMARRE	マギル大学教授	カナダ	14・3・20～14・4・4	江戸時代の統計的資料：長崎貿易の資料と研究の問題
			08・4・21～08・5・22	戦前の国策漫画映画と日本の動物観・進化論に関する研究

Amaury GARCIA	エル・コレヒオ・デ・メヒコ・大学院大学教授	メキシコ	08・6・24～08・6・30	西川祐信と上方艶本文化	
Agnieszka KOZYRA	ワルシャワ大学教授	ポーランド	08・6・28～08・7・28	一九世紀の出版の商業戦略：国芳と国貞の艶本の場合	
			10・6・27～10・7・4	西田幾多郎の芸術論	
			10・7・21～10・8・16	現代日本文化における神話・民間伝承の影響	
Gina Lee BARNES	ダーラム大学名誉教授	イギリス	16・8・1～16・8・31	〃	
	ロンドン大学リサーチ・アソシエイト		08・7・1～08・12・15	四世紀中期～五世紀大和における工芸技術の進歩	
金　榮　哲	漢陽大学校教授	韓　国	10・7・6～10・7・19	五世紀における移民テクノロジー	
			08・7・4～08・8・3	井原西鶴『浮世草子』の京都と遊興の美意識	
			14・7・1～14・7・31	西鶴と淀川の文芸的かかわり	
Constantine Nomikos VAPORIS	メリーランド大学教授	アメリカ	08・7・28～08・7・31	参勤交代に関する思想	
Yomna Tareef Amin ELKHOLY	カイロ大学教授	エジプト	08・8・25～08・9・14	日本文化における哲学と科学	
楊　念　群	中国人民大学清史研究所教授	中　国	08・11・1～08・11・30	日中近代医学概念成立の比較的研究	
Noriko THUNMAN	ヨーテボリ大学教授	スウェーデン	09・5・25～09・7・13	俳諧の連歌の文学史上の位置―中興の俳諧復興期の批判的評価	
			11・2・1～11・3・25	〃	
Shawn BENDER	ディッキンソン大学准教授	アメリカ	09・6・17～09・8・3	高齢化社会向けの知的機械の創造―日本の介護ロボット工学とテクノロジー	
Mats KARLSSON	シドニー大学講師 シドニー大学シニア講師	オーストラリア	09・7・22～09・10・9	日本のプロレタリア文化運動再考	
			13・1・21～13・7・14	日本の紅い星：日本のプロレタリア文化運動再考	

Mark Cody POULTON	ヴィクトリア大学教授	カナダ	09・8・7～10・1・3	『コロンビア現代日本戯曲名作集』の翻訳、注釈、編集完成
			12・8・15～13・6・5	日本演劇における「非人間的なるもの」との遭遇：霊・動物・テクノロジー
			14・11・3～15・1・31	〃
			16・4・27～16・7・17	〃
Chavalin SVETANANT	マコーリー大学講師	オーストラリア	09・11・16～09・12・15	文化を越えた感情：標準日本語とタイ語の語彙の比較からみた琉球語の「感情語」のエスノグラフィー的研究
Massimiliano TOMASI	ウェスタンワシントン大学教授	アメリカ	09・11・25～09・12・11	キリスト教の比喩論―近代日本文学における「信仰」の問題
蔡　慧　玉	中央研究院台湾史研究所副研究員	台湾	09・12・1～10・3・30	鷲巣敦哉とその植民地世界
Tobias CHEUNG	フンボルト大学ハイゼンベルグ・フェロード	ドイツ	10・4・1～10・4・30	日本における生理学の受容：自然と人文科学における星座比較
Stina JELBRING	ストックホルム大学講師	スウェーデン	10・4・29～10・6・8	『源氏物語』のメタファー論とスウェーデン語訳
			12・4・1～12・4・20	〃
	ストックホルム大学准教授		13・12・9～14・1・8	〃
			14・10・27～14・12・7	歌物語における死のテーマ―伊勢物語と大和物語の場合
			15・11・24～15・12・16	古代日本の歌論：比喩概念を中心に
			16・7・1～16・12・31	木下恵介監督再評価：日本映画黄金時代における人気映画製作の原点を探る

David HUGHES	ロンドン大学リサーチ・アソシエイト	イギリス	10・7・6～10・7・19	一、心の郷を守る：無形文化財としての民謡 二、日本民謡の将来：保存団体および民謡大会の役割と影響 三、日本の盆踊り：世俗的か宗教的か
Wael Mohamed Orabi ABDELMAKSOUD	カイロ大学専任講師	エジプト	10・7・20～10・8・16	横光利一「上海」論
Ahmed Mohamed Fathy MOSTAFA	カイロ大学准教授	エジプト	10・8・7～10・9・9	野坂昭如文学におけるアメリカ人コンプレックス
奥泉栄三郎	シカゴ大学図書館日本文庫長	アメリカ	11・8・1～11・8・31	特攻隊と日本戦後小説・その流れと問題点
根川幸男	ブラジリア大学准教授	ブラジル	10・11・1～10・11・30	日本研究のための大型・特殊・デジタル情報等の分析評価とメディア・リテラシー
黄自進	中央研究院近代史研究所研究員	台湾	11・1・1～11・12・31	人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクト（カテゴリーBアメリカ大陸チームb）
柳書琴	台湾国立清華大学台湾文学研究所准教授	台湾	11・1・9～11・1・23	池田勇人内閣の二つの中国政策（一九六〇～一九六四）
			13・2・1～13・2・15	東アジアの国際政治と沖縄返還
			14・1・7～14・1・21	満州国の成立初期における社会基盤
			16・1・24～16・2・6	全面戦争前夜における日中関係：緩衝勢力の位置づけを中心に（一九三三～三五年）
			11・2・1～12・1・31	上海魅影：植民都市としての台北と哈爾濱（ハルピン）の現代的考察
			16・6・25～16・7・20	〃

Yona SIDERER	エルサレム・ヘブライ大学上級講師	イスラエル	11・3・3～11・3・22	環境問題と日本における原子炉の安全策に関する研究：政府と国民の視点から
孫　昌武	南開大学教授	中国	11・3・8～11・4・15	中国歴史における北方民族と仏教
太田雄三	マギル大学教授	カナダ	11・4・1～11・5・31	遠藤周作と井上洋治におけるキリスト教の土着化の問題
蔡　敦達	同済大学日本研究所教授（所長）	中国	11・5・6～11・6・30	辻惟雄著『日本美術の歴史』の翻訳・注釈および伊東忠太・関野貞の中国美術・建築踏査に関する資料調査
呉　京煥	釜山大学校人文大学教授	韓国	11・7・4～11・8・3	保田与重郎と韓国の美
Beata KUJBIAK HO-CHI	ワルシャワ大学准教授	ポーランド	11・9・9～11・10・8	今日の日本文学における日常生活の審美化（一九八〇～二〇一〇）
Krystyna WILKOSZEWSKA	ヤギエウオ大学教授	ポーランド	11・9・22～11・10・8	日常活動の審美化
Wolfgang SCHAMONI	ハイデルベルク大学教授	ドイツ	11・10・4～11・12・6	松浦武四郎「近世蝦夷人物誌」の研究
			13・10・1～13・11・30	〃
			14・11・3～14・12・19	〃
	ハイデルベルク大学名誉教授		16・4・15～16・6・15	松浦武四郎の「近世蝦夷人物誌」と幕末の文人社会の研究
Helena GRINSHPUN	エルサレム・ヘブライ大学付属トルーマン平和研究所博士研究員	イスラエル	11・10・15～12・2・1	グローバルチェーンと日本の都市論：グローバル化の形成過程
呂　莉	中国社会科学院外国文学研究所教授	中国	11・11・1～12・4・30	柿本人麻呂と中国文学
黄　愛民	上海海洋大学副教授	中国	12・1・10～13・1・9	日中文化交流史の研究

Aida SULEYMENOVA	極東連邦大学准教授	ロシア	12・1・23〜12・2・5	日本の作家の作品から見た満州（与謝野鉄幹・晶子の紀行文に見た満州、シベリア、『巴里より』、『蒙古紀行』）	
			12・7・26〜12・8・22	「近代文学の紀行文における中国、朝鮮、ロシアのイメージ」（与謝野寛・晶子、若山牧水、宮沢賢治に対するP・シュクールキン、N・マトベエフ、N・バイコフのような作家、詩人）	
Frederick DICKINSON	ペンシルベニア大学准教授	アメリカ	12・4・1〜12・6・22	戦間期世界における政治指導の困難：浜口雄幸を中心に	
柳　吉　東	漢陽女子大学教授	韓国	12・6・1〜12・7・31	能を中心とする日本文化の研究	
David UHER	パラツキー大学准教授	チェコ共和国	12・6・17〜12・8・24	中国漢字字典『説文解字』の書記法研究	
張　艶　茹	中国社会科学院世界歴史研究所助理研究員	中国	12・7・12〜12・8・10	近代日本の元老政治	
李　泰　昇	威徳大学校副教授	韓国	13・1・15〜13・1・30	近代日本仏教界の戦争に対する認識研究	
			14・1・9〜14・1・28	〃	
			15・1・22〜15・2・10	日本近代仏教家の井上円了研究	
Karin Gunilla LINDBERG-WADA	ストックホルム大学教授	スウェーデン	13・1・16〜13・3・31	世界の中の日本文学史	
			13・7・15〜13・8・26	〃	
Brian A. VICTORIA	オックスフォード大学付属仏教研究所研究員	イギリス	13・2・20〜13・5・19	仏教とくに禅宗の役割：井上日召と他の血盟団団員の思想と行動から探る	
			13・9・1〜14・8・31	〃	
			14・9・1〜15・8・31	〃	

Hans Martin KRAMER	ハイデルベルク大学東アジア研究センター准教授	ドイツ	13・3・1～13・3・14	日本におけるアジア主義の宗教的底流
Cynthia VIALLE	アントン・ウルリッヒ公爵美術館特別研究員	ドイツ	13・4・3～13・4・30	江戸期のオランダ商館日記にみる医療交流
	ライデン大学研究員	オランダ	14・10・1～14・11・30	「日蘭文化交渉と海賊行為」に関する文献調査・分析
			15・10・20～15・12・17	アジアを中心としたヨーロッパ拡張の歴史
			16・3・11～16・3・28	ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書の調査・研究・活用
			16・10・5～16・12・7	〃
佐伯千鶴	北アラバマ大学准教授（大学院研究科長）	アメリカ	13・5・10～13・7・30	日米文化外交における日本人のアメリカ感の移り変わり
			14・5・12～14・8・5	日米の民間文化外交
楊暁旋	カルガリー大学教授	カナダ	13・6・17～13・7・15	「後三年合戦絵詞」模本群をめぐる基礎研究
藩光哲	台湾中央研究院副研究員（准教授）	台湾	13・6・17～13・8・31	胡適と蔣介石
Charles EXLEY	ピッツバーグ大学准教授	アメリカ	13・7・1～13・7・31	文化的批評としての「Cross-dressing 異性の服を着ること」：森村泰昌の芸術
Nguyen Thi OANH	ベトナム社会科学院准教授	ベトナム	13・7・1～13・8・30	日本説話における「夢告」「讖緯」「童謡」などの未来記についての考察―ベトナムの漢文説話との比較
Rotem KOWNER	ハイファ大学教授	イスラエル	13・8・15～13・9・5	戦前日本のインドネシア（かつてオランダ領東インド）に対する態度と印象
			14・7・9～14・7・23	近現代日本における肉食の文明
Gary James HICKEY	クイーンズランド大学研究員	オーストラリア	13・9・5～13・12・4	オーストラリア国立図書館の口絵研究

Sybille GIRMOND	ヴュルツブルク大学リサーチ・アソシエイト（非常勤講師）	ドイツ	13・10・1～14・3・31	一八八五年（明治一八年）ドイツ・ニュルンベルク万国金工博覧会に出品された日本の金工および七宝について	
鄭　義　徹	尚志大學校助教授（准教授）	韓国	13・10・25～13・12・27	エスニックメディアと共同体参与―移住民の社会、文化政治活動を中心に	
秦　剛	北京外国語大学北京日本学研究センター副教授	中国	13・12・15～14・8・14	一九三〇年代日本の出版メディアと中国知識界―改造社と「改造」雑誌に繰り広げられた中日文化交渉	
Stylianos PAPALEXANDROPOULOS	アテネ大学教授	ギリシャ	14・2・10～14・3・3	ギリシア日本学の危機的状況への対処	
			14・9・10～14・10・9	〃	
戴　暁　芙	復旦大学日本研究センター准教授	中国	14・4・1～14・12・31	日本的生活スタイルの変化を影響する要因に関する研究：戦後女性洋装化における影響要因の分析	
Wayne FARRIS	ハワイ大学マノア校教授	アメリカ	14・6・1～14・7・31	近世以降におけるお茶の食生活的および文化的位置	
奈　良　博	ピッツバーグ大学教授	アメリカ	14・6・15～14・7・7	日本の近代化におけるギリシャへの志向	
			16・7・4～16・8・1	フェノロサ著「美術真説」の英語訳	
曹　景　惠	台湾大学副教授	台湾	14・6・25～14・8・31	鎌倉期の三教一致論	
陳　紅	浙江工商大学講師	中国	14・7・25～14・8・25	意訳から直訳へ―魯迅の翻訳姿勢の転換と明治の翻訳思想の受容―	
張　文　良	中国人民大学副教授	中国	14・7・25～14・8・25	日本における中国仏教研究	
Dalibor KLICKOVIC	ベオグラード大学准教授	セルビア	14・8・4～14・8・28	セルビアにおける日本仏教研究の推進	

矢野明子	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院ジャパン・リサーチ・センターリサーチ・アソシエイト	イギリス	14・9・5～15・8・27	江戸時代中後期の上方における視覚芸術（書画）制作に関する美術史的・文化社会史的考察	
趙建民	復旦大学日本研究中心／南開大学研究所兼任研究員（兼任教授）	中国	15・2・27～15・3・28	欧州の日本研究者と宣教師の言語取得と出版に貢献した南洋華僑	
阿武正英	祥明大学助教授	韓国	15・4・6～15・8・22	日韓サブカルチャーの比較研究	
佐藤ロスベアグナナ	祥明大学副教授		16・7・15～16・8・29	日韓サブカルチャーと映像文化研究	
Dennitza GABRAKOVA	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院講師	イギリス	15・6・29～15・7・31	一九七〇年代八〇年代の日本におけるトランスレーションスタディーズ	
David JOHNSON	香港城市大学助理教授	中国	15・8・1～15・8・26	主権の島々―有吉佐和子及び池澤夏樹作品考察	
Galia Todorova PETKOVA	ボストンカレッジ助教	アメリカ	15・9・1～16・8・29	自我について：和辻と共に	
姜娜	国立演劇映画芸術アカデミー客員講師	ブルガリア	15・10・1～16・3・31	女もの：日本の伝統的男性演劇における女性性の登場と役割	
王来特	中山大学歴史人類学研究センター講師	中国	15・10・20～16・1・15	沖縄の対外文化交流史――海洋移民を中心に	
Marina Konstantinova KOVALCHUK	東北師範大学講師	中国	15・11・20～15・12・20	東アジア経済貿易史	
	極東連邦大学准教授	ロシア	15・12・24～16・1・24	幕末日本人留学生の目から見たロシア帝国	
Christopher LEHRICH	インディペンデント・リサーチャー		16・1・18～16・8・1	宗教、音楽、表象について	

唐　権	華東師範大学副教授	中国	16・1・21～16・2・20	来舶清人の研究――江芸閣を中心に
于　華	青島大学教授	中国	16・12・26～17・5・26	『青鼇』の文学空間
Aldo TOLLINI	ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学准教授	イタリア	17・2・28～17・5・26	キリシタン文学に見えるヨーロッパ人の日本文化の受容

［外来研究員（AHRC）］

氏　名	就任時の所属	上記機関の所在国	受入期間	研究テーマ
Aodhan Jesse O'Shea	ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン大学院生	イギリス	09・5・1～09・8・14	The Deutsche Werkbund：現代における歴史主義、古典主義、芸術思想
Helena Capkova	ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アーツ大学院生	イギリス	09・5・21～09・10・16	日本の芸術の受容―一九二〇年～四〇年における中央ヨーロッパ建築とデザイン
Hannah WATERSON	マンチェスター大学大学院生	イギリス	09・8・17～09・12・17	日本におけるエイズ―健康促進の展望
Paul ROLLASON	オックスフォード大学付属仏教研究所講師	イギリス	10・10・1～11・3・30	現代日本文化におけるApocalypseの描写
Simone Shu-Yeng CHUNG	ケンブリッジ大学大学院生	イギリス	12・1・4～12・4・30	Engaging Spatial Translatability by Reviewing Urban Complexity in East Asian Localities
Malcolm MCNEILL	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院大学院生	イギリス	13・8・27～13・11・27	美術史概念としての禅画：中国禅画に対する日本の学術界の歴史的・現代的な潮流
Shinhyung CHOI	クイーンズ大学ベルファスト特別研究員	カナダ	13・9・26～14・1・25	日本、北朝鮮、国際社会：現代日本の北朝鮮に対する文化的関与
佐藤ロスベアグナナ	イーストアングリア大学講師	イギリス	14・3・10～14・5・31	漫画から映画への翻訳、文化翻訳

Majella MUNRO	テートリサーチセンターアジア太平洋研究員	イギリス	14・7・15～14・10・14	自然に近く？　日本のアーティストと環境、広島から福島まで
Hannah BAYLEY	キール大学博士課程大学院生	イギリス	14・10・20～15・3・20	サウンドと国際的な再映画化―日本の超自然的ホラー映画とアメリカのリメイクの音楽と文脈の分析
Ian RAPLEY	カーディフ大学東アジア史講師	イギリス	15・7・1～15・9・30	エスペラントとトランスナショナルな実践―戦間期日本における草の根国際主義と言語
Mark PENDLETON	シェフィールド大学東アジア研究所日本研究講師	イギリス	15・8・26～15・11・25	廃墟にみる日本の近代性
Joanne MCCALLUM	ファルマス大学大学院博士課程	イギリス	16・8・18～16・12・17	自然は師匠？　日本の竹籠作りにみる情動、環境、そして仏教の伝統

［外来研究員（博報財団）］

氏名	就任時の所属	上記機関の所在国	受入期間	研究テーマ
Ricard BRU TURULL	一、市立世界文化博物術館総合内容コーディネーター 二、美術史と現代デザイン（モデルニスム）研究室員 三、モデルニスム講演会専任講師美術館コーディネーター	スペイン	15・3・1～15・8・31	20世紀の日本とスペインの芸術関係について
Cecile LALY	パリ・ソルボンヌ大学極東研究センター（CREOPS）博士研究員	フランス	15・9・1～16・8・31	凧物語

Lan Anh Thi NGUYEN	ハノイ大学副学科長	ベトナム	16・3・1～16・8・31	ベトナム人日本語学習者に向ける日本事情教材作成
Natalia KLOBUKOVA	チャイコフスキー・モスクワ音楽院世界の音楽文化センター助手	ロシア	16・9・1～17・8・31	日本における正教会の聖歌とその発生、発展、特徴
Edoardo GERLINI	フィレンツェ大学／ヴェネツィア大学非常勤講師	イタリア	17・3・1～17・8・31	文学は無用か「不朽の盛事」か―平安朝前期に見る「文」の社会的役割とその世界文学における位相―

総合研究大学院大学文化科学研究科
国際日本研究専攻入学者

（二〇〇七年四月以降を掲載）

07年4月1日入学

長門洋平（12年3月23日博士授与）
鈴木堅弘（12年9月28日博士授与）

08年4月1日入学

陳　凌虹（12年3月23日博士授与）
徳永誓子（13年3月22日博士授与）
岡本貴久子（14年3月20日博士授与）
大塚絢子

09年4月1日入学

門脇朋裕
楊　爽

10年4月1日入学

漆﨑まり（14年9月29日博士授与）
韓　玲玲（15年3月24日博士授与）
九里文子
李ユンヒ

11年4月1日入学

アントン・ルイス・カピストラノ・セビリア（15年3月24日博士授与）
簡　中昊（16年3月24日博士授与）
王　莞晗

12年4月1日入学

栄　元（17年3月24日博士授与）
西田彰一

13年4月1日入学

光平有希（16年3月24日博士授与）
宇佐美智之
小泉友則
山村　奨

14年4月1日入学

大石真澄
坂　知尋
春藤献一
ゴウランガ・チャラン・プラダーン
フレデリック・ウェストマン

15年4月1日入学

片岡真伊
田村美由紀
増田　斎
南　直子

16年4月1日入学

長瀬　海
仲田侑加
単　荷君
宋　琦

日文研プロジェクト一覧

『東アジア近代史資料の再構築―旧「日中歴史研究センター」所蔵図書を利用して―』（06年4月～09年3月）
研究代表者：合庭　惇教授

『ＧＩＳを基盤とする考古・歴史民俗・環境情報の高度連携研究―ユーラシア集落・都市の営みと環境の関わりを中心として―』（06年4月～13年3月）
研究代表者：宇野隆夫教授

『戦間期日本の小作争議と地方議会選挙に関するデータベースの作成』（07年4月～09年3月）
研究代表者：猪木武徳教授

『ユーラシア大陸における都市文化の比較的研究』（07年4月～10年3月）
研究代表者：白幡洋三郎教授

『電子古事類苑プロジェクト』（07年4月～12年3月）
研究代表者：山田奨治准教授

『文明研究プロジェクト』（07年4月～14年3月）
研究代表者：安田喜憲教授

『伝統文化芸術総合研究プロジェクト』（07年4月～15年3月）
研究代表者：笠谷和比古教授

『外像データベースの作成と外像資料による日本文化分析』（07年4月～17年3月）
研究代表者：白幡洋三郎教授、小松和彦教授（井上章一教授）

『怪異・妖怪文化資料データベースプロジェクト』（07年4月～17年3月）
研究代表者：小松和彦教授

『外書の研究』（08年4月～17年3月）
研究代表者：小松和彦教授（フレデリック・クレインス准教授）

『学術外交としての日本研究』（09年4月～12年3月）
研究代表者：猪木武徳教授

『日中歴史マイクロ資料の整理と利用』（09年4月～12年3月）
研究代表者：劉　建輝准教授

『東アジアにおける知的システムの近代的再編』（10年4月～13年3月）
研究代表者：鈴木貞美教授

『日文研所蔵写真資料の整理、保存、ならびに利用貸出データの整備』（10年4月～14年3月）
研究代表者：白幡洋三郎教授

『「東洋」再考学術協力・関連研究事業プロジェクト』（10年4月～16年3月）
研究代表者：稲賀繁美教授

『国際春画研究プロジェクト（海外の若手日本研究者の変体仮名習得と近世資料の解読教習プログラム）』（11年4月～12年3月）
研究代表者：早川聞多教授

『中世日本文学と寺院資料に関する研究展開』（11年4月～15年3月）
研究代表者：荒木　浩教授

『「日本関連在外資料の調査研究」（カテゴリーB）近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究』（11年4月～17年3月）
研究代表者：鈴木貞美教授、井上章一教授、劉　建輝教授

『日中文庫所蔵未公刊資料の整理と研究』（12年4月～17年3月）
研究代表者：劉　建輝准教授

『摂関期古記録データベースプロジェクト』（13年4月～16年3月）
研究代表者：倉本一宏教授

『デジタル人文学研究プロジェクト』（14年4月～17年3月）
研究代表者：山田奨治教授

『グローバル・ヒストリーのなかの「失われた20年」』（14年4月～17年3月）
研究代表者：瀧井一博教授

『キリシタン文学の継承―宣教師の日本語文学』（15年4月～17年3月）
研究代表者：郭　南燕准教授

『日本古典文学研究の再構築と国際的展開』（16年4月～17年3月）
研究代表者：荒木　浩教授

『文化伝搬の「うつわ」と「うつし」関連研究事業プロジェクト』（16年4月～17年3月）
研究代表者：稲賀繁美教授

『平安時代古記録データベースプロジェクト』（16年4月～17年3月）
研究代表者：倉本一宏教授

共同研究会等一覧

（二〇〇七年四月以降を掲載）

［共同研究会］

古代東アジア交流の総合的研究（07・4～08・3）

（代表者　王　維坤、幹事　宇野隆夫）

〔班員名〕

新宮学、井上和人、井上満郎、臼井正、小澤毅、川崎保、気賀澤保規、肥塚隆保、小嶋芳孝、菅谷文則、関清、妹尾達彦、銭静怡、高瀬奈津子、田中俊明、土屋昌明、豊田裕章、中川あや、橋本義則、林部均、菱田哲郎、宮原健吾、門田誠一、矢野建一、合庭惇、千田稔、中谷正和、山田奨治

日本文明史の再建―生命文明の時代を求めて―（07・4～10・3）

（代表者　安田喜憲、幹事　池内　恵）

〔班員名〕

赤池学、石田秀輝、磯野宏夫、植田和弘、大熊一寛、大塚邦明、大橋力、小佐野峰忠、我喜屋まり子、加藤忠哉、河合徳枝、岸本吉生、鬼頭昭雄、河野博子、小林俊安、小林正明、佐藤文一、佐藤真弓、佐藤洋一郎、椎川忍、篠上雄彦、清水昭、下原勝憲、杉田定大、杉山洋、高橋美恵子、竹林征三、竹林征雄、田中章義、田中克、谷口正次、民岡順朗、鵜謙一、十市勉、中井徳太郎、永里善彦、永野博、中山厚、名越万里子、新妻弘明、仁科エミ、畠山重篤、羽田肇、秦陽一、速水亨、平川新、平野秀樹、藤崎憲治、古沢広祐、本田学、前田泰宏、真下正樹、南敦資、宮内博美、宮本昌宏、宮本融、村田泰夫、森鐘一、森勇一、森本英香、吉澤保幸、今谷明、宇野隆夫、笠谷和比古、千田稔、アミ・ムティア

性欲の社会史（07・4～11・3）

（代表者　井上章一、幹事　新井菜穂子・松田利彦）

〔班員名〕

青木健一、赤枝香奈子、石田仁、岩見照代、梅川純代、小川順子、川井ゆう、斎藤光、阪本博志、澁谷知美、申昌浩、菅沼信彦、永井良和、中村隆文、西村大志、ノッター・デビット、古川誠、松田（鴻嶋）さおり、光石亜由美、三橋順子、平松隆円、劉建輝、唐権

近代日本の公と私、官と民―比較の視点から―（07・4～11・3）

（代表者　猪木武徳、幹事　マルクス・リュッターマン）

〔班員名〕

井出文紀、上山隆大、桂木隆夫、紙谷雅子、木村真、佐伯啓思、佐藤一進、デトレフ・シャウベッカー、田島正樹、土井真一、中

岡俊介、橋本努、藤倉皓一郎、宮一穂、望月和彦、山本貴之、井上章一、松村博行

都市文化とは何か?―ユーラシア大陸における都市文化の比較史的研究―（07・4～11・3）

（代表者　白幡洋三郎、幹事　牛村　圭）

〔班員名〕

天野史郎、新井菜穂子、大澤直哉、長田俊樹、小野健吉、小野寺浩、川島真、越澤明、佐藤友美子、佐藤洋一郎、申昌浩、図師宣忠、武田佐知子、竹村民郎、田中淡、豊田裕章、錦仁、端信行、原田信男、日向進、平野秀樹、藤井真生、宮一穂、矢ヶ崎善太郎、渡辺千香子、池内恵、奥野卓司、テモテ・カーン、上垣外憲一、フレデリック・クレインス、町田香、李偉、劉建輝、唐権

一八世紀日本の文化状況と国際環境（07・4～10・3）

（代表者　笠谷和比古、幹事　フレデリック・クレインス）

〔班員名〕

新井菜穂子、伊藤奈保子、岩下哲典、魚住孝至、落合恵美子、加藤善朗、川勝平太、郡司健、小林龍彦、小林善帆、佐伯順子、佐藤次高、高橋博巳、武井協三、竹市明弘、武内恵美子、竹村英二、谷井俊仁、谷口昭、辻垣晃一、芳賀徹、長谷川成一、林淳、原道生、平井晶子、平石直昭、平木實、藤實久美子、ヘルベルト・プルチョウ、前田勉、真栄平房昭、松田清、松田泰代、松山壽一、水田かや乃、宮崎修多、森田登代子、横田冬彦、横谷一子、脇田修、和田光俊、稲賀繁美、上村敏文、上垣外憲一、姜鶯燕、佐野真由子、白幡洋三郎、早川聞多、パトリシア・フィスター、平松隆円、山田奨治

東アジアにおける知的システムの近代的再編成（07・4～10・3）

（代表者　鈴木貞美、幹事　劉　建輝）

〔班員名〕

浅岡邦雄、阿毛久芳、荒川清秀、荒木正純、有馬学、池内輝雄、磯部敦、井上健、今村忠純、岩月純一、王暁葵、岡田建志、梶山雅史、金子務、川島真、川尻文彦、衣笠正晃、木村直恵、ロバート・キャンベル、小谷野敦、権藤愛順、酒井敏、佐藤一樹、佐藤バーバラ、鈴木敏昭、須藤遙子、全美星、孫安石、孫江、高柳信夫、竹村民郎、竹本寛秋、田中比呂志、陳継東、陳捷、陳力衛、津本信博、寺澤行忠、十重田裕一、中川成美、中嶋隆、橋本行洋、林正子、檜垣樹里、兵藤裕己、平野健一郎、福井純子、星野靖二、堀まどか、増田周子、松田清、真鍋昌賢、村田雄二郎、目野由希、リース・モートン、茂木敏夫、安田敏朗、安野一之、八耳俊文、山本美紀、吉岡亮、依岡隆児、李梁、林少陽、新井菜穂子、磯前順一、稲賀繁美、魏大海、テモテ・カーン、郭南燕、上垣外憲一、フレ

デリック・クレインス、小松和彦、ジェームズ・バスキンド、マルクス・リュッターマン、カリン・グニラ・リンドバーグ＝ワダ、陸留弟、章清、韓東育、馮天瑜、黄克武、麻国慶、王中忱

アジアにおける家族とジェンダーの変容：近代化とグローバル化の時代に（07・4～09・3）

（代表者　落合恵美子、幹事　井上章一）

〔班員名〕

安里和晃、粟屋利江、石井正子、石田あゆう、上野加代子、奥井亜紗子、押川文子、嘉本伊都子、金貞任、小林和美、小山静子、施利平、鈴木伸枝、瀬地山角、タンタン・アウン、長坂格、中谷文美、朴宣美、橋本泰子、姫岡とし子、藤田道代、宮坂靖子、ミン・サン、大和礼子、山根真理、山本理子、井波律子、パトリシア・フィスター、劉建輝

「満州」学の整理と再編（07・4～11・3）

（代表者　劉　建輝、幹事　稲賀繁美）

〔班員名〕

テレングト・アイトル、安藤潤一郎、井村哲郎、岡田英樹、金子務、川島真、川尻文彦、貴志俊彦、岸陽子、厳平、小林善帆、島本浣、姜克實、戦暁梅、孫江、竹村民郎、単援朝、塚瀬進、西原和海、西村成雄、バイカル、平石淑子、平野健一郎、深尾葉子、松宮貴之、南誠、山田敬三、李相哲、劉岸偉、井上章一、牛村圭、尾形洋一、小都晶子、上垣外憲一、韓東育、黄自進、小松和彦、鈴木貞美、千田稔、松田利彦、王中忱

民謡研究の新しい方向（07・4～11・3）

（代表者　細川周平、幹事　鈴木貞美）

〔班員名〕

石橋純、伊東信宏、井上貴子、大和田俊之、岡田暁生、柿沼敏江、倉田量介、阪井葉子、島添貴美子、高橋美樹、滝口幸子、竹内有一、武田俊輔、長尾洋子、中原ゆかり、藤田隆則、松村洋、三井徹、森博史、横井雅子、輪島裕介、早稲田みな子、片山杜秀、デイビッド・ヒューズ、林慶花

戦後政治・外交政策の検証と再定義（08・4～10・3）

（代表者　池内　恵、幹事　瀧井一博）

〔班員名〕

五百旗頭薫、宇野重規、遠藤乾、岡本隆司、苅部直、川島真、黒崎輝、篠田英朗、鈴木一人、土居丈朗、中山俊宏、間寧、潘亮、細谷雄一、待鳥聡史、簑原俊洋、宮城大蔵、井上章一

仏教からみた前近代と近代（08・4～12・3）

（代表者　末木文美士、幹事　井上章一・磯前順一）

〔班員名〕

阿部仲麻呂、ゲイレン・アムスタッツ、新井菜穂子、池内恵、シルヴィオ・ヴィータ、魚川祐司、大谷栄一、神田英昭、金泰勲、オリオン・クラウタウ、田中悟、陳継東、中島岳志、西村玲、ジェームズ・バスキンド、藤井淳、藤本龍児、前川健一、吉永進一、米田真理子、稲賀繁美、小松和彦、ファム・ティ・トゥ・ザン、林淳、山田奨治、徳永誓子

植民地帝国日本における支配と地域社会（08・4～11・3）

（代表者　松田利彦、幹事　マルクス・リュッターマン）

〔班員名〕

青野正明、庵逧由香、李鐘旼、李昇燁、板垣竜太、梅森直之、大浜郁子、小川原宏幸、金貞蘭、胎中千鶴、崔眞善、陳宛妤、長沢一恵、永島広紀、野口真広、ジェームズ・バクスター、春山明哲、樋口雄一、広瀬貞三、藤永壯、水野直樹、宮崎聖子、李相燦、瀧井一博、趙政男、蔡慧玉、尹海東、劉建輝、李炯植、田中隆一、福井譲、陳姃湲

「東洋美学・東洋的思惟」を問う：自己認識の危機と将来への課題（08・4～12・3）

（代表者　稲賀繁美、幹事　瀧井一博）

〔班員名〕

テレングト・アイトル、足立元、伊藤奈保子、今井祐子、鵜飼敦子、小田部胤久、金田晉、河田明久、衣笠正晃、木下長宏、金惠信、オリヴィエ・クリシャー、呉孟晋、佐々木健一、島本浣、鈴木禎宏、クリストファー・W・A・スピルマン、戦暁梅、ミシェル・ダリシエ、礪波護、西原大輔、西槇偉、芳賀徹、畠山香織、濱下昌宏、林洋子、範麗雅、檜垣樹理、平川祐弘、平松秀樹、藤原貞朗、マリア＝ヘススデ・プラダ＝ビセンテ、松原知生、武藤秀太郎、村井則子、梅定娥、安松みゆき、横山輝樹、李建志、陸偉榮、劉岸偉、李偉、新井菜穂子、磯前順一、井上章一、牛村圭、大嶋仁、古田島洋介、佐野真由子、鈴木貞美、ヨナ・シデラー、アヌ・ジンダル、千葉慶、陳玲、蔡慧玉、朴美貞、橋本順光、デヴィッド・ハバート、平野共余子、パトリシア・フィスター、細川周平、堀まどか、ミュリエール・ラディック、山田奨治、劉建輝、マルクス・リュッターマン、王中忱、大塚絢子、岡本貴久子、韓玲玲、金炳辰、小山周子、コルネーエヴァ・スヴェトラーナ・アレクサンドロヴナ、陳凌虹、徳永誓子、戸矢理衣奈、長門洋平、吉本弥生、李ユンヒ、李応寿、大橋良介、厳安生、酒井順一郎、徐蘇斌、ハイエク・マティアス、

クリストフ・マルケ、柳瀬善治

文明と身体（09・4～13・3）

（代表者　牛村　圭、幹事　劉　建輝）

〔班員名〕

岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川本玲子、小堀馨子、佐伯順子、竹村民郎、永井久美子、西原大輔、平松隆円、古川優貴、山中由里子、稲賀繁美、井上章一、郭南燕、フレデリック・クレインス、古田島洋介、白幡洋三郎、堀まどか、楊爽、眞嶋亜有

日本の近代化とプロテスタンティズム（09・4～11・3）

（代表者　上村敏文、幹事　笠谷和比古）

〔班員名〕

石居基夫、稲垣俊也、植木献、魚住孝至、雲龍、小田淳一、北原かな子、黒住真、小林善帆、佐治晴夫、武内恵美子、竹村英二、谷口昭、豊田俊雄、仲秀和、中東弘、西井麻美、西江雅之、長谷川（間瀬）恵美、長谷川成一、林香純、平石直昭、平木實、深井智朗、古屋安雄、前田勉、前田ひとみ、間瀬啓允、松山壽一、森田登代子、山根一城、佐野真由子、ジョン・ブリーン、Daniel KIKAWA、George PINDUA、Fadhili SAGA、Mufwimi SAGA

日本における翻訳の文化史（09・8～10・8）

（代表者　ジェフリー・アングルス、幹事　鈴木貞美）

〔班員名〕

安藤恭子、伊井春樹、飯田（佐藤）祐子、井上健、江藤裕之、大村梓、ヒュー・クラーク、鴻巣友季子、佐藤＝ロスベアグ・ナナ、澤田敬司、全美星、高橋睦郎、沼野充義、宮下恵美子、リース・モートン、石川肇、稲賀繁美、堀まどか、劉建輝、インドラ・リービ

怪異・妖怪文化の伝統と創造―研究のさらなる飛躍に向けて―（10・4～14・3）

（代表者　小松和彦、幹事　山田奨治）

〔班員名〕

今井秀和、香川雅信、アダム・カバット、木場貴俊、佐々木高弘、小林健二、近藤瑞木、齋藤真麻里、清水潤、志村三代子、高橋明彦、堤邦彦、常光徹、徳田和夫、永原順子、正木晃、安井眞奈美、横山泰子、飯倉義之、プラットゥ・アブラハム・ジョージ、中野洋平、徳永誓子、マーク・オンブレロ、魯成煥、朴銓烈、マティアス・ハイエク

生命文明の時代を創造する（10・4～12・3）

（代表者　安田喜憲、幹事　フレデリック・クレインス）

〔班員名〕
赤池学、石田秀輝、石原三千代、岩田泰、上田善隆、上野景文、戎晃司、遠藤正俊、大熊一寛、大塚邦明、大橋力、小佐野峰忠、加藤忠哉、神谷昌岳、河合徳枝、岸本吉生、北島正一、熊野英介、河野博子、小林俊安、小林正明、佐藤文一、佐藤真弓、椎川忍、塩谷崇之、塩谷治子、篠上雄彦、清水昭、下原勝憲、菅節子、杉田定大、園部信幸、竹林征三、竹林征雄、田中章義、田中克、谷口正次、鵜謙一、十市勉、中井徳太郎、永里善彦、永野博、長野麻子、中山厚、名越万里子、新妻弘明、仁科エミ、羽田肇、秦陽一、畠山重篤、平川新、平野英樹、藤崎憲治、古沢広祐、本田学、前田泰宏、真下正樹、松田美夜子、南敦資、三宅曜子、宮本昌宏、村田泰夫、村山茂樹、森鐘一、森本英香、山根正義、吉澤保幸、笠谷和比古、森勇一

近代日本における指導者像と指導者論（10・4～14・3）
（代表者　戸部良一、幹事　瀧井一博）
〔班員名〕
五百旗頭薫、河野仁、楠綾子、黒沢文貴、佐古丞、佐藤卓己、庄司潤一郎、武田知己、フレドリック・ディキンソン、中西寛、奈良岡聡智、野中郁次郎、畑野勇、波多野澄雄、猪木武徳、牛村圭、小川原正道、鈴木貞美、松田利彦、黄自進

帝国と高等教育―東アジアの文脈―（10・4～12・3）
（代表者　酒井哲哉、幹事　松田利彦）
〔班員名〕
浅野豊美、飯島渉、石川健治、石川裕之、馬越徹、片岡龍、川尻文彦、通堂あゆみ、中生勝美、松田吉郎、米谷匡史、瀧井一博、呉密察、金昌祿、崔鍾庫、白永瑞、劉書彦

「日本浪曼派」とアジア（10・4～11・3）
（代表者　呉　京煥、幹事　劉　建輝）
〔班員名〕
浦田義和、奥山文幸、川口隆行、河田和子、五味渕典嗣、坂元昌樹、佐野正人、竹内清己、田中益三、長澤雅春、西原和海、西村将洋、野坂昭雄、山崎義光、山本直人、ライアン・モリソン、稲賀繁美、上垣外憲一、鈴木貞美

東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に―（10・4～13・3）
（代表者　鈴木貞美、幹事　伊東貴之）
〔班員名〕
浅岡邦雄、阿毛久芳、荒川清秀、荒木正純、有馬学、磯部敦、井上健、今村忠純、岩月純一、王暁葵、岡田建志、梶山雅史、金子務、

上垣外憲一、川島真、川尻文彦、衣笠正晃、木村直恵、小谷野敦、権藤愛順、佐藤一樹、佐藤バーバラ、澤田晴美、全美星、須藤遙子、孫安石、孫江、高柳信夫、竹村民郎、竹本寛秋、田中比呂志、陳継東、陳捷、陳力衛、寺澤行忠、十重田裕一、中川成美、中嶋隆、野網摩利子、橋本行洋、林正子、兵藤裕己、平野健一郎、福井純子、星野靖二、増田周子、松田清、真鍋昌賢、村田雄二郎、目野由希、リース・モートン、茂木敏夫、安田敏朗、安野一之、八耳敏文、山本美紀、吉岡亮、李梁、磯前順一、稲賀繁美、郭南燕、金哲、フレデリック・クレインス、小松和彦、多田伊織、韓東育、堀まどか、依岡隆児、劉建輝、章清、馮天瑜、黄克武、麻国慶、王中忱

日記の総合的研究（10・4～13・3）

（代表者　倉本一宏、幹事　テモテ・カーン・佐野真由子・榎本　渉）

〔班員名〕

蘭香代子、有富純也、池田節子、石田俊、板倉則衣、井原今朝男、今谷明、磐下徹、上野勝之、上島享、小倉久美子、小倉慈司、尾上陽介、久冨木原玲、小嶋菜温子、古藤真平、佐藤全敏、佐藤泰弘、シャバリナ・マリア、下郡剛、末松剛、菅原昭英、瀬田勝哉、曽我良成、富田隆、中町美香子、中村康夫、中西和子、名和修、西村さとみ、畑中彩子、藤本孝一、堀井佳代子、松薗斉、松田泰代、三橋順子、三橋正、森公章、山下克明、横山輝樹、吉川真司、吉川敏子、カレル・フィアラ、荒木浩、稲賀繁美、井上章一、笠谷和比古、近藤好和、鈴木貞美、瀧井一博、マルクス・リュッターマン、門脇朋裕、吉田小百合、呉海航

文学の中の宗教と民間伝承の融合：宮沢賢治の世界観の再検討（10・6～11・5）

（代表者　プラットゥ・アブラハム・ジョージ、幹事　小松和彦）

〔班員名〕

青木美保、牛崎敏哉、鎌田東二、黒澤勉、杉浦静、鈴木健司、中地文、萩原昌好、森三紗、望月善次、山根知子、荒木浩、稲賀繁美、鈴木貞美

夢と表象―メディア・歴史・文化―（11・4～14・3）

（代表者　荒木　浩、幹事　マルクス・リュッターマン）

〔班員名〕

安東民兒、池田忍、入口敦志、上野勝之、加藤悦子、河東仁、高橋文治、丹下暖子、中川真弓、林千宏、平野多恵、福島恒徳、藤井由紀子、松薗斉、松本郁代、室城秀之、伊東貴之、榎本渉、郭南燕、木村朗子、倉本一宏、早川聞多、箕浦尚美、楊暁捷、李育娟、イーヴェ・コヴァチ、ヨーク・クヴェンツァー

徳川社会と日本の近代化―一七～一九世紀における日本の文化状況と国際環境―（11・4～14・3）

（代表者　笠谷和比古、幹事　佐野真由子）

〔班員名〕

磯田道史、伊藤奈保子、岩下哲典、上村敏文、魚住孝至、大川真、加藤善朗、上垣外憲一、郡司健、小林龍彦、小林善帆、高橋博巳、武内恵美子、竹村英二、谷口昭、芳賀徹、長谷川成一、原道生、平井晶子、平木實、平松隆円、藤實久美子、前田勉、真栄平房昭、宮崎修多、宮田純、森田登代子、横谷一子、横山輝樹、脇田修、和田光俊、フレデリック・クレインス、瀧井一博、辻垣晃一

「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―（11・4～15・3）

（代表者　伊東貴之、幹事　榎本　渉）

〔班員名〕

青木隆、恩田裕正、垣内景子、片岡龍、河野哲也、黒住真、桑子敏雄、小島毅、関智英、銭国紅、高橋博巳、田尻祐一郎、陳継東、土田健次郎、手島崇裕、永冨青地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道信、水口拓寿、横手裕、李梁、末木文美士、鈴木貞美、ジョン・ブリーン、劉建輝、フレデリック・ジラール、張翔、陳健成

新大陸の日系移民の歴史と文化（11・4～16・3）

（代表者　細川周平、幹事　瀧井一博）

〔班員名〕

赤木妙子、アンジェロ・イシ、粂井輝子、栗山新也、小嶋茂、佐々木剛二、スエヨシ・アナ、高木（北山）眞理子、滝田（石井）祥子、竹村民郎、日比嘉高、松岡秀明、水野真理子、フェリッペ・アウグスト・ソアレス・モッタ、物部ひろみ、森本豊富、守屋貴嗣、守屋友江、柳田利夫、吉田裕美、早稲田みな子、高橋勝幸、根川幸男、エドワード・マック

仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論（11・6～12・5）

（代表者　フィリップ・ボナン、幹事　稲賀繁美）

〔班員名〕

阿部順子、江口久美、加藤邦男、千代章一郎、田路貴浩、土居義岳、西田雅嗣、松原康介、松本裕、三宅理一、渡邊一正、セシル・アサヌマ＝ブリス、シルヴィー・ブロッソー、ジェニファー・ハサエ、ブノワ・ジャケ、ジャーク・プズー＝マサビュオ、マニュエル・タルディッツ、クリスティーヌ・ヴァンドルディ＝オザノー、朴美貞、マルク・ブルディエ、ニコラ・フィエヴェ、コリンヌ・ティリ、アンヌ・ゴッソ

デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代（11・7～12・6）

（代表者　楊　暁捷、幹事　小松和彦）

〔班員名〕

赤間亮、石川透、海野圭介、大谷節子、大場利康、大向一輝、小峯和明、田良島哲、千本英史、藤原重雄、荒木浩、早川聞多、ギャリー・ジェイムズ・ヒッキー、森洋久、山田奨治

人文諸学の科学史的研究（12・4～16・3）

（代表者　井上章一、幹事　瀧井一博）

〔班員名〕

今谷明、上島享、上村敏文、鵜飼正樹、内田忠賢、大塚英志、長田俊樹、小路田泰直、斎藤成也、関幸彦、高木博志、高谷知佳、竹村民郎、玉木俊明、鶴見太郎、シルヴィオ・ヴィータ、藤原貞朗、安田敏朗、若井敏明、林淳、荒木浩、伊東貴之、倉本一宏

日本庭園のあの世とこの世―自然、芸術、宗教（12・4～14・3）

（代表者　白幡洋三郎、幹事　榎本　渉）

〔班員名〕

小野健吉、鈴木久男、田中淡、錦仁、原口志津子、原田信男、飛田範夫、豊田裕章、日向進、水野杏紀、村井康彦、吉澤健吉、山田邦和、多田伊織、荒木浩、ウィーベ・カウテルト、町田香、蔡敦達、陸留弟

現代民俗研究方法論の学際的研究（12・4～13・3）

（代表者　山　泰幸、幹事　小松和彦）

〔班員名〕

石田佐恵子、岩本通弥、浮葉正親、門田岳久、阪本俊生、菅康弘、橋弘文、舩戸修一、法橋量、山中千恵、梁仁實、飯倉義之

建築と権力の相関性とダイナミズムの研究（12・4～14・3）

（代表者　御厨　貴、幹事　井上章一）

〔班員名〕

五十嵐太郎、池内恵、小宮京、佐藤信、砂原庸介、手塚洋輔、中村武生、奈良岡聡智、牧原出、松宮貴之

昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析―ザ・タイガースの研究（12・4～15・3）

（代表者　磯前順一、幹事　井上章一）

〔班員名〕

浅尾雅俊、飯田健一郎、小野善太郎、柿田肇、金谷幹夫、黒﨑浩行、中村俊夫、永岡崇、水内勇太、倉本一宏、細川周平、光平有希、

エリザベッタ・ポルク

二一世紀一〇年代日本文化の軌道修正：過去の検証と将来への提言（12・4～16・3）

（代表者　稲賀繁美、幹事　牛村　圭）

〔班員名〕

テレングト・アイトル、鵜戸聡、大西宏志、小倉紀蔵、鞍田崇、呉孟晋、小崎哲哉、近藤高弘、戦暁梅、千葉慶、西田雅嗣、西原大輔、波嵯栄ジェニファしょう子、橋本順光、範麗雅、平芳幸浩、平松秀樹、藤原貞朗、シルヴィー・ブロッソー、クリストフ・マルケ、本浜秀彦、山本麻友美、與那覇潤、李建志、渡邊淳司、張競、滝澤修身、中村和恵、朴美貞、大橋良介、デンニッツァ・ガブラコヴァ

万国博覧会とアジア（12・4～13・3）

（代表者　佐野真由子、幹事　劉　建輝）

〔班員名〕

石川敦子、市川文彦、伊藤奈保子、岩田泰、鵜飼敦子、江原規由、川口幸也、神田孝治、中牧弘允、芳賀徹、橋爪紳也、林洋子、武藤秀太郎、稲賀繁美、井上章一、瀧井一博、ウィーベ・カウテルト、朴美貞、青木信夫、徐蘇斌

日本文化形成と戦争の記憶（12・6～13・5）

（代表者　セオドア・F・クック、幹事　鈴木貞美）

〔班員名〕

浅田裕子、一ノ瀬俊也、ベティナ・グラムリヒ＝オカ、加藤（野島）陽子、河野仁、川村湊、窪島誠一郎、小菅信子、M・G・シュフトール、庄司潤一郎、竹内栄美子、竹本知行、田辺明生、谷口幸代、田谷治子クック、坪井秀人、等松春夫、直野章子、中川成美、花崎育代、原剛、原山浩介、平瀬礼太、平野共余子、松竹京子、南誠、宮城晴美、本康宏史、横山篤夫、吉田裕、李建志、多田伊織、稲賀繁美、末木文美士、戸部良一、ジョン・ブリーン、磯前順一、郭南燕、佐野真由子、瀧井一博、劉建輝、堀まどか、石川肇

日本的時空観の形成（13・4～14・3）

（代表者　吉川真司、幹事　倉本一宏）

〔班員名〕

井上直樹、今津勝紀、上島享、宇野隆夫、大津透、門井直哉、上川通夫、河上麻由子、神戸航介、佐藤早紀子、下垣仁志、武井紀子、武田和哉、西本昌弘、畑中彩子、林部均、古松崇志、細井浩志、本庄総子、横内裕人、荒木浩、榎本渉、徳永誓子、堀井佳代子、劉暁峰、井上亘

日本仏教の比較思想的研究（13・4～15・3）
（代表者　末木文美士、幹事　稲賀繁美）
〔班員名〕
阿部仲麻呂、井上克人、沖永宜司、坂井祐円、坂本慎一、佐藤弘夫、島薗進、ミシェル・ダルシエ、永井晋、中島隆博、西平直、西村玲、モリー・ヴァラー、シルヴィオ・ヴィータ、藤田正勝、前川健一、吉永進一、米田真理子、阿部泰郎、アントン・セビリア、高橋勝幸、アンナ・アンドレーワ、鄭灝、許祐盛

万国博覧会と人間の歴史―アジアを中心に（13・4～16・3）
（代表者　佐野真由子、幹事　井上章一）
〔班員名〕
石川敦子、市川文彦、伊藤奈保子、鵜飼敦子、江原規由、川口幸也、神田孝治、寺本敬子、中牧弘允、芳賀徹、橋爪紳也、林洋子、武藤秀太郎、稲賀繁美、瀧井一博、ジョン・ブリーン、劉建輝、朴美貞、青木信夫、岩田泰、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギルモンド、徐蘇斌

植民地帝国日本における知と権力（13・4～17・3）
（代表者　松田利彦、幹事　瀧井一博）
〔班員名〕
飯島渉、小野容照、加藤聖文、加藤道也、川瀬貴也、河原林直人、栗原純、愼蒼健、通堂あゆみ、春山明哲、洪宗郁、松田吉郎、宮崎聖子、やまだあつし、吉川絢子、李昇燁、中生勝美、稲賀繁美、劉建輝、朴暎美、陳妍湲、李炯植

日本的教育文化の複数地域展開に関する比較研究―ブラジル・フィリピン・ハワイ・アメリカの日系教育史を中心に―（13・4～14・3）
（代表者　根川幸男、幹事　井上章一）
〔班員名〕
浅野豊美、飯窪秀樹、伊志嶺安博、大浜郁子、カール呉、小林茂子、坂口満宏、佐々木剛二、住田育法、高橋美樹、中原ゆかり、中村茂生、西村大志、東悦子、松盛美紀子、物部ひろみ、森本豊富、柳下宙子、吉田亮、細川周平、石川肇、小林ルイス・オタビオ眞登、野呂博子

マンガ・アニメで日本研究（13・4～17・3）
（代表者　山田奨治、幹事　荒木　浩）
〔班員名〕
飯倉義之、石田佐恵子、伊藤慎吾、伊藤遊、岩井茂樹、岡本健、金水敏、白石さや、秦剛、山中千恵、山本冴里、油井清光、横濱雄二、吉村和真、谷川建司、北浦寛之、小泉友則、高馬京子

日記の総合的研究の総括（13・4～14・3）
（代表者　倉本一宏、幹事　榎本　渉）
〔班員名〕
有富純也、板倉則衣、井原今朝男、今谷明、磐下徹、上島享、上野勝之、尾上陽介、小倉慈司、加藤友康、久冨木原玲、古藤真平、近藤好和、佐藤信、佐藤全敏、下郡剛、末松剛、曽我良成、中村康夫、名和修、西村さとみ、カレル・フィアラ、藤本孝一、古瀬奈津子、松薗斉、三橋順子、三橋正、森公章、山下克明、吉川真司、中町美香子、荒木浩、井上章一、堀井佳代子、劉暁峰

昭和戦後期における日本映画史の再構築（14・4～15・3）
（代表者　谷川建司、幹事　細川周平）
〔班員名〕
晏妮、板倉史明、井上雅雄、小川順子、木下千花、木村智哉、河野真理江、須藤遙子、冨田美香、中村秀之、西村大志、柳下毅一郎、北浦寛之、長門洋平、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ

戦争と鎮魂（14・4～17・3）
（代表者　牛村　圭、幹事　ジョン・ブリーン）
〔班員名〕
今泉宜子、岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川村覚文、川本玲子、金志映、古田島洋介、小堀馨子、佐伯順子、竹村民郎、等松春夫、永井久美子、西原大輔、平松隆円、堀まどか、眞嶋亜有、吉井文美、吉田（古川）優貴、稲賀繁美、倉本一宏、末木文美士、松田利彦、劉建輝、磯前順一、郭南燕、徐載坤

画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国域内文化の再検討（14・4～17・3）
（代表者　劉　建輝、幹事　北浦寛之）
〔班員名〕
安藤潤一郎、井村哲郎、上垣外憲一、岸陽子、呉孟晋、小林茂、姜克実、白幡洋三郎、鈴木貞美、戦暁梅、単援朝、塚瀬進、根川幸男、松宮貴之、森田憲司、李相哲、劉岸偉、伊東貴之、稲賀繁美、井上章一、松田利彦、森洋久、石川肇、陳其松、王中忱、徐興慶、孫江

夢と表象―その統括と展望（14・4～15・3）
（代表者　荒木　浩、幹事　マルクス・リュッターマン）
〔班員名〕
安東民兒、池田忍、入口敦志、上野勝之、鍛治恵、加藤悦子、河東仁、木村朗子、笹生美貴子、仙海義之、高橋文治、立木宏哉、玉田沙織、林千宏、平野多恵、福島恒徳、藤井由紀子、松薗斉、松本郁

代、箕浦尚美、室城秀之、伊東貴之、倉本一宏、早川聞多、榎本涉、郭南燕、丹下暖子、中川真弓、ヨーク・B・クヴェンツァー、アイヴ・コヴァチ、李育娟

おたく文化と戦時下・戦後（14・4～16・3）

（代表者　大塚英志、幹事　北浦寛之）

〔班員名〕

浅野龍哉、板倉史明、内田力、大野修一、香川雅信、菊地暁、キム・ジュニアン、木村智哉、嵯峨景子、佐野明子、須藤遙子、鶴見太郎、冨田美香、中川譲、藤岡洋、細馬宏通、牧野守、室井康成、山本忠宏、秦剛、マーク・スタインバーグ

日本の軍事戦略と東アジア社会―日中戦争期を中心として―（14・6～15・5）

（代表者　黄　自進、幹事　劉　建輝）

〔班員名〕

相澤淳、浅野豊美、家近亮子、井上寿一、王柯、加藤聖文、黒沢文貴、小菅信子、佐藤卓己、澁谷由里、姜克実、鈴木多聞、田嶋信雄、段瑞聡、戸部良一、波多野澄雄、服部龍二、馬暁華、松浦正孝、松重充浩、劉傑、鹿錫俊

日本大衆文化とナショナリズム（14・4～15・3）

（代表者　朴　順愛、幹事　山田奨治）

〔班員名〕

市川孝一、須藤遙子、全美星、竹内幸絵、土屋礼子、寺沢正晴、油井清光、尹健次、吉田則昭、谷川建司、朴美貞

戦後日本文化再考（15・4～18・3）

（代表者　坪井秀人、幹事　磯前順一）

〔班員名〕

浅野麗、石川巧、岩崎稔、大原祐治、岡田秀則、長志珠絵、辛島理人、狩俣真奈、川口隆行、菅野優香、北中淳子、北原恵、木村朗子、高榮蘭、紅野謙介、五味渕典嗣、斉藤綾子、佐藤泉、塩野加織、島村輝、沈熙燦、申知瑛、鈴木勝雄、張政傑、十重田裕一、鳥羽耕史、戸邉秀明、成田龍一、朴貞蘭、橋本あゆみ、福間良明、松原洋子、水川敬章、光石亜由美、美馬達哉、村上陽子、尹芷汐、李承俊、鷲谷花、渡邊英理、渡辺直紀、郭南燕、北浦寛之、石川肇、杉田智美、栄元、王莞晗、田村美由紀、増田斎、五十嵐惠邦、キャロル・グラック、酒井直樹

説話文学と歴史史料の間に（15・4～18・3）

（代表者　倉本一宏、幹事　榎本　涉）

〔班員名〕
上野勝之、内田澪子、追塩千尋、大橋直義、尾崎勇、加藤友康、川上知里、木下華子、小峯和明、佐藤信、佐野愛子、関幸彦、五月女肇志、曽根正人、多田伊織、蔦尾和宏、中村康夫、野上潤一、野本東生、樋口大祐、藤本孝一、古橋信孝、保立道久、前田雅之、松薗斉、三舟隆之、山下克明、横田隆志、呉座勇一、荒木浩、井上章一、中町美香子、谷口雄太、グエン・ニュー・ヴー・クイン、グエン・ティ・オワイン、劉暁峰、魯成煥、宋浣範

日本の舞台芸術における身体―死と生、人形と人工体（15・9～16・8）
（代表者　ボナヴェントゥーラ・ルペルティ、幹事　細川周平）
〔班員名〕
赤間亮、板谷徹、井上理恵、岩井眞實、梅山いつき、菊地浩平、桜井圭介、佐藤恵里、滝澤修身、武井協三、竹本幹夫、カティア・チェントンツェ、土田牧子、中嶋謙昌、橋本裕之、深澤昌夫、藤井慎太郎、森下隆、山田和人、李応寿

明治日本の比較文明史的考察―その遺産の再考―（15・4～18・3）
（代表者　瀧井一博、幹事　牛村　圭）
〔班員名〕
浅見雅男、五百旗頭薫、岩谷十郎、上野景文、植村和秀、大川真、岡本貴久子、小川原正道、勝部眞人、加藤雄三、國分典子、今野元、塩出浩之、島田幸典、清水唯一朗、谷川穣、永井史男、長尾龍一、中村尚史、福岡万里子、前田勉、松田宏一郎、山田央子、奈良岡聰智、大久保健晴、林洋子、ジョン・ブリーン、佐野真由子、アリステア・スウェール、ハラルド・フース

浪花節の生成と展開についての学際的研究（16・4～17・3）
（代表者　真鍋昌賢、幹事　細川周平）
〔班員名〕
芦川淳平、上田学、北川純子、薦田治子、諏訪淳一郎、時田アリソン、馬場美佳、兵藤裕己、細田明宏、森谷裕美子、早稲田みな子、渡瀬淳子、延宏真治、古川綾子、瀬戸智子、朴英山

3・11以後のディスクール／『日本文化』（16・9～17・8）
（代表者　ミツヨ・ワダ・マルシアーノ、幹事　坪井秀人）
〔班員名〕
石田美紀、久保豊、谷川建司、木村朗子、川口隆行、クリスティーナ・岩田ワイケナント、清水晶子、高橋準、菅野優香、出口康夫、水谷雅彦、一ノ瀬正樹、近森高明、西村大志、松浦雄介、アンニャ・ホップ、安本真也、須藤遙子、馬然、木下千花、大塚英志、北浦

寛之、長門洋平、王向華、金普慶

比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想 ―王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼―（16・4～19・3）

（代表者　伊東貴之、幹事　倉本一宏）

〔班員名〕

青木隆、新井菜穂子、井上厚史、恩田裕正、垣内景子、橋川智昭、権純哲、小島毅、関智英、末木文美士、銭国紅、竹村英二、竹村民郎、田尻祐一郎、土田健次郎、永冨青地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道信、水口拓寿、横手裕、李粱、吾妻重二、新田元規、石井剛、伊藤聡、井ノ口哲也、内山直樹、遠藤基郎、大久保良峻、苅部直、黒岩高、岸本美緒、児島恭子、近藤成一、佐々木愛、杉山清彦、高柳信夫、葭森健介、保立道久、李暁東、本間次彦、松野敏之、石川洋、澤井啓一、渡邊義浩、前田勉、渡辺美季、平野千果子、中純夫、古勝隆一、茂木敏夫、張啓雄、葛兆光、手島崇裕、ベンジャミン・A・エルマン、井上章一、瀧井一博、ジョン・ブリーン、松田利彦、劉建輝、榎本渉、フレデリック・クレインス、マルクス・リュッターマン、佐野真由子、山村奨

多文化間交渉における「あいだ」の研究（16・4～19・3）

（代表者　稲賀繁美、幹事　榎本　渉）

〔班員名〕

新井菜穂子、鵜戸聡、江口久美、大西宏志、岡本光博、小川さやか、隠岐さや香、小倉紀蔵、金子務、鞍田崇、クリストフ・マルケ、近藤高弘、申昌浩、鈴木洋仁、全美星、荘千慧、滝澤修身、武内恵美子、竹村民郎、多田伊織、千葉慶、テレングト・アイトル、戸矢理衣奈、中村和恵、西原大輔、二村淳子、朴美貞、橋本順光、範麗雅、平松秀樹、平芳幸浩、藤原貞朗、ヘレナ・カブコヴァ、堀まどか、松嶋健、三原芳秋、マシュー・ラーキン、山本麻友美、今泉宜子、木村直恵、林洋子、郭南燕、フレデリック・クレインス、森洋久、宮崎康子、李応寿、石川肇、杉田智美、デイビット・W・ジョンソン、セシル・ラリ、長門洋平、九里文子、李ユンヒ、春藤献一、片岡真伊、デンニッツァ・ガブラコヴァ、近藤貴子、ミツヨ・デルクール＝イトナガ

差別から見た日本宗教史再考（16・4～17・3）

（代表者　磯前順一、幹事　北浦寛之）

〔班員名〕

吉村智博、佐藤弘夫、鈴木岩弓、小倉慈司、片岡耕平、鈴木英生、小田龍哉、川村覚文、山本昭宏、青野正明、沈熙燦、高柳健太郎、田辺明生、苅田真司、舩田淳一、太田恭治、浅居明彦、水内勇太、鍾以江、島薗進、佐々田悠、寺戸淳子、金沢豊、西宮秀紀、舟橋

健太、幡鎌一弘、鶴見晃、河井信吉、上村静、安部智海、竹本了悟、パトリシア・フィスター、マルクス・リュッターマン、シュタイネック・智恵、シュタイネック・ラジ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ

日本語の起源はどのように論じられてきたか―日本言語学史の光と影（16・4～17・3）

（代表者　長田俊樹、幹事　井上章一）

〔班員名〕

斎藤成也、安田敏朗、狩俣繁久、千田俊太郎、風間伸次郎、永澤済、児玉望、菊澤律子、林範彦、アンナ・ブガエワ、福井玲、伊藤英人、鈴木貞美、マーク・ハドソン、平子達也、杉山豊、トマ・ペラール、ジョン・ホイットマン、アレキサンダー・ヴォヴィン

投企する古典性―視覚／大衆／現代（16・4～19・3）

（代表者　荒木　浩、幹事　稲賀繁美）

〔班員名〕

飯倉洋一、伊藤慎吾、上野友愛、岡田圭介、河東仁、恋田知子、河野貴美子、河野至恩、合山林太郎、齋藤真麻理、竹村信治、中野貴文、中前正志、野網摩利子、三戸信惠、箕浦尚美、山本陽子、渡部泰明、渡辺麻里子、マラル・アンダソヴァ、石上阿希、呉座勇一、李愛淑、土田耕督、徳永誓子、漆崎まり、ゴウランガ・チャラン・プラダン、チャン・ティ・チュン・トアン、ガリア・トドロヴァ・ペトコヴァ、楊暁捷、山藤夏郎、李愛淑

（文責：研究協力課）

［基礎領域研究］（二〇〇七年四月以降の新規研究を掲載）

比較日本文化研究基礎論（07・4～12・3）

代表者　小松和彦

概　要　比較論の立場から、日本文化を解明する上で重要な意味を持つ宗教の信仰形態、儀礼、美術、等の諸現象の分析を行い、日本人の精神構造のあり方を明らかにする。

中国語運用の基礎・応用（09・7～15・3）

代表者　郭　南燕

概　要　研究その他の業務で中国語を必要とする人に対して、中国語運用の基礎を実践的に訓練し、会話、読解、聴解の習得を目的とする。

日本宗教史基礎研究（10・4～14・3）

代表者　末木文美士

概　要　日本宗教史に関する基礎的な問題に関して討議する。

宗教・文化の理論的研究（12・4〜13・3）
代表者　磯前順一
概　要　日本内外における宗教および文化に関する最新の理論的研究を取り上げ、文体の問題から、理論と感情の問題に至るまで幅広く考察する。

日本宗教史基礎研究（14・4〜15・3）
代表者　末木文美士
概　要　日本宗教史に関する基礎的な問題に関して討議し、必要に応じて重要な文献の講読を行う。

中世文学購読（14・4〜17・3）
代表者　荒木　浩
概　要　『方丈記』や『徒然草』など、日本中世文学の文献を、影印を参照し、英訳などとも対比しながら精読する。

日本近代まんが史概論（15・4〜16・3）
代表者　大塚英志
概　要　サブカルチャー領域の研究を希望するこの分野の初心者に近代まんが史の初歩的な常識を概説する。

古記録学基礎研究（15・4〜17・3）
代表者　倉本一宏
概　要　日本前近代の根幹的史料である古記録の解読を、原本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。

文学・文化史理論入門（15・5〜18・3）
代表者　坪井秀人
概　要　文学および文化史に関する基礎的な理論を学びながらテクストの読解・分析の実践的方法を修得する。

近現代史史料文献研究（15・4〜18・3）
代表者　瀧井一博
概　要　日本近現代史の基礎史料と古典的および先端的な文献を講読し、社会科学的な歴史研究の方法と実践を討究する。

国際研究集会等一覧

［国際研究集会］

○第31回「東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的発展のために」（07年3月23日～25日）
公式言語：日本語・中国語

○第32回〈創立20周年記念国際シンポジウム〉「日本文化研究の過去・現在・未来―新たな地平を開くために―」（07年9月18日～21日）
公式言語：日本語
公開講演会
『生への存在』オギュスタン・ベルク（フランス国立社会科学高等研究院教授）
『〝絞〟からの脱出は可能か―富永仲基の研究法の視点から―』李御寧（元韓国文化大臣（初代）／梨花学術院名誉碩座教授）

○第33回「王権と都市」（08年3月6日～8日）
公式言語：日本語・英語
公開講演会
『中国の都城のプランから見る日本の都城制の源流』王維坤（西北大学副院長・教授／日文研外国人研究員）
『都市の共和制と多数決原理―古代ギリシャのポリス形成について―』エゴン・フライグ（ロストク大学ハインリヒ・シュリーマン古代研究所教授）

○第34回「石川淳と戦後日本」（08年6月27日～30日）
公式言語：日本語・英語

○第35回「東アジア近代における概念と知の再編成」（08年11月17日～20日）
公式言語：日本語・中国語

○第36回「いま構築されるアジアのジェンダー：人間再生産のグローバルな再編成」（09年1月8日～10日）
公式言語：日本語・英語

○第37回「都市文化とは何か―文化論からの日本「発見」―」（10年2月23日～28日）
公式言語：日本語
公開講演会
『日本の都市文化』村井康彦（京都市美術館長）

○第38回「東洋美学と東洋的思惟を問う：植民地帝国下の葛藤するアジア像」（10年11月8日～11日）
公式言語：英語
公開講演会
『東洋の導師と現代芸術家―戦後米国アートに見る役割分担―』バー

ト・ウィンザー＝タマキ（カリフォルニア大学アーヴァイン校准教授）
『舞踏という経験―東西の違いを越えて身体を再創造する―』クリスティーヌ・グライナー（サンパウロ・カトリック大学教授）

○第39回「環境と文明：過去・現在・未来」（10年11月29日～12月3日）
公式言語：日本語・英語
公開講演会
『太陽・永遠の旅：先史時代スカンディナビアとドイツの宇宙観』イングリーザ・スタイツ（ディスカバリー・プログラム研究員）
『アイルランドの太陽信仰』マイケル・オコーネル（アイルランド国立大学教授）
『長江文明の太陽信仰』安田喜憲（日文研教授）
『神々の起源―自然・政治・信仰―』フェクリ・ハッサン（ロンドン大学名誉教授）
『マヤ文明とアステカ文明における太陽と暦』青山和夫（茨城大学教授）

○第40回「植民地帝国日本における支配と地域社会」（11年7月13日～16日）
公式言語：日本語・韓国語・中国語

○第41回「近代と仏教」（11年10月12日～15日）
公式言語：日本語・英語
公開講演会

『平和主義と仏教の社会参加』ランジャナ・ムコパディヤーヤ（デリー大学准教授）
『仏教と平和：再生への道』ブライアン・ヴィクトリア（アンティオク大学教授）

○第42回「帝国と高等教育―東アジアの文脈から」（12年2月10日～12日）
公式言語：日本語・韓国語・中国語

○第43回「日仏の空間語彙：概念と仕掛け」（12年5月11日～13日）
公式言語：フランス語・英語

○第44回「東アジアにおける知的交流―キイ・コンセプトの再検討」（12年11月13日～17日）
公式言語：日本語・中国語
公開講演会
『東アジアにおける概念編制史研究の現在と展望』鈴木貞美（日文研教授）
『新語と近代東アジア叙述の構築』章清（復旦大学教授）
『観念史の方法と中国研究』鄭文惠（台湾政治大学教授）
『韓国における概念史研究の現状と展望』許洙（翰林大学教授）
『近代韓国語コーパスに現れた近代新概念の様子と定着過程』李漢燮（高麗大学教授）

○第45回「怪異・妖怪文化の伝統と創造―「内」と「外」の視点から」（13年11月25日～27日）
公式言語：日本語
公開講演会
『妖怪研究の新時代』小松和彦（日文研所長）
『妖怪を殺す「妖怪」～創作／権利／民俗』京極夏彦（小説家）
『欧米における怪異・妖怪文化研究の現状』マイケル・ディラン・フォスター（日文研外国人研究員）
○第46回「比較思想から見た日本仏教」（15年2月20日～21日）
公式言語：日本語
○第47回「夢と表象―その国際的・学際的展開の可能性」（15年3月1日～3日）
公式言語：日本語
公開講演会
『夢と表象研究の展望―日本古典文学の視点から』荒木浩（日文研教授）
『作曲された悪夢』伊東信宏（大阪大学教授）
『西洋美術における夢』高階秀爾（大原美術館館長／東京大学名誉教授）
○第48回「万国博覧会と人間の歴史」（15年12月17日～20日）
公式言語：日本語・英語
公開講演会
『アジアの万博』堺屋太一（作家、元国務大臣経済企画庁長官）、吳建民（博覧会国際事務局名誉議長、元駐仏中国大使、中国外交学院院長）
○第49回「「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―」（16年2月19日～21日）
公式言語：日本語

［海外シンポジウム］
○第14回（07年10月31日～11月2日）
『日本文化の解釈：ロシアと日本からの視点』
共催：ロシア国立人文学大学及びモスクワ国立大学
場所：モスクワ大学（モスクワ ロシア）
○第15回（08年10月14日～16日）
『日本・ブラジル文化交流―言語・歴史・移民』
共催：サンパウロ大学
場所：サンパウロ大学（サンパウロ ブラジル）
○第16回（09年11月3日～4日）
『アジア新時代の南アジアにおける日本像―インド・SAARC諸国における日本研究の現状と必要性』
共催：ジャワハルラル・ネルー大学

場所：ジャワハルラル・ネルー大学（デリー インド）
○**第17回**（10年10月5日～10月7日）
『日本の文化と社会の潮流』
共催：インドネシア大学
場所：インドネシア大学（デポック インドネシア）
○**第18回**（11年5月27日～29日）
『江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘―』
共催：復旦大学
場所：復旦大学（上海 中国）
○**第19回**（12年8月22日～24日）
『「日本研究」再考―北欧の実践から』
共催：コペンハーゲン大学
場所：コペンハーゲン大学（コペンハーゲン デンマーク）
○**第20回**（13年11月13日～15日）
『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題』
共催：ベトナム社会科学院
場所：ベトナム社会科学院（ハノイ ベトナム）
○**第21回**（14年11月11日～13日）
『新領域・次世代の日本研究』
主催：国際日本文化研究センター
場所：国際日本文化研究センター（京都 日本）

○**第22回**（15年6月30日～7月2日）
第一部『失われた20年と日本研究のこれから』
主催：国際日本文化研究センター
場所：国際日本文化研究センター（京都 日本）
第二部『失われた20年と日本社会の変容』
主催：国際日本文化研究センター、ハーバード大学
場所：ハーバード大学（ボストン アメリカ）
○**第23回**（16年11月24日～25日）
『南太平洋から見る日本研究：歴史、政治、文学、芸術』
共催：オタゴ大学
場所：オタゴ大学（ニュージーランド）

［日本研究会］

○**第14回**（07年8月2日～6日）
場所：サンパウロ大学日本文化研究所、国際交流基金サンパウロ日本文化センター、リオデジャネイロ州立大学（ブラジル）
○**第15回**（08年11月21日）
『日本語教育を踏まえた日本研究への道』
場所：ハノイ大学（ベトナム）
○**第16回**（09年5月10日～14日）
『Current Issues on Japan Society』

場所：インドネシア大学（インドネシア）
○（09年10月22日～23日）
場所：ベトナム社会科学院（ベトナム）
○第17回（10年10月16日～17日）
『東アジアにおける日本と台湾：日本研究の新視点を求めて』
場所：台湾中央研究院民族学研究所（台湾）
○第18回（11年8月24日～27日）
『怪異・妖怪文化の伝統と創造』
場所：タリン大学（エストニア）
○第19回（14年10月18日）
『近代日本の思想、外交、ジェンダー』
場所：ペンシルベニア大学（米国）

［海外研究交流シンポジウム］

○第3回（07年12月12日～13日）
『日文研セッション「日文研における研究状況」、中国側セッション「中国中南部地域における日本研究の現状」』
場所：華東師範大学外国語学院（中国）
○第4回（08年3月1日～2日）
『近代日本の社会と文化』
場所：アルザス・ヨーロッパ日本学研究所（フランス）
○第5回（08年9月26日～27日）
『ロシア極東文化の中の日本』
場所：ロシア国立極東大学付属東洋大学（ロシア）
○第6回（09年6月2日～3日）
『他者になること―東西文化の変容の体験と物語―』
場所：国際日本文化研究センター（日本）
○第7回（10年3月19日～20日）
『出島文書と徳川時代』
場所：国際日本文化研究センター（日本）
○第8回（11年2月25日～26日）
『文化の翻訳―北欧における日本文学研究を中心に』
場所：国際日本文化研究センター（日本）
○第9回（12年2月22日～23日）
『私の研究アプローチ』
場所：ホテル・アルマダ、ペタリンジャヤ（マレーシア）
○第10回（13年2月28日～3月1日）
『中国の日本認識と日本の中国認識』
場所：復旦大学（中国）

［シンポジウム］

○**第84回**（07年7月17日）
『イスラーム神学校における教育文化』
主催教員：ジェームズ・バクスター教授

○**第85回**（08年10月4日）
『安丸民衆史の射程―主体性・全体性・両義性―』
主催教員：磯前順一准教授

○**第86回**（08年10月22日）
『東アジア連帯論の系譜と国際理解』
主催教員：劉建輝准教授

○**第87回**（08年12月4日）
『戦間期大阪の音楽と近代』
主催教員：細川周平教授

○**第88回**（09年5月23日～24日）
『京都学派と「近代の超克」―近代性・帝国・普遍性―』
主催教員：鈴木貞美教授

○**第89回**（09年6月17日）
『日文研・バークレーの対話』
主催教員：ジェームズ・バクスター教授

○**第90回**（09年9月9日～14日）
『東北アジア文化史の再構築』
主催教員：劉建輝准教授

○**第91回**（09年11月25日～27日）
『近代東アジアにおける鍵概念民族、国家、民族主義―』
主催教員：鈴木貞美教授

○**第92回**（09年12月4日～5日）
『立命館アート・リサーチセンター創立10周年記念―近世春本・春画とそのコンテクスト―』
主催教員：早川聞多教授

○**第93回**（10年3月5日～6日）
『近代東アジア歴史研究の現状と既存資料の有効利用』
主催教員：劉建輝准教授

○**第94回**（10年7月16日～18日）
『東アジアにおけるトランスナショナル人文学の可能性』
主催教員：鈴木貞美教授

○**第95回**（10年9月11日）
『日本の歴史的時空間情報の現在』
主催教員：山田奨治准教授

○**第96回**（10年9月19日）
『『文藝春秋』の欧文付録「Japan To-day」の研究』
主催教員：鈴木貞美教授

○**第97回**（10年9月23日〜25日）
『東アジアにおける知的体系の再構築―日本と中国の視座―』
主催教員：鈴木貞美教授
○**第98回**（10年10月30日）
『「石川淳と戦後日本」合評会』
主催教員：鈴木貞美教授
○**第99回**（10年12月18日〜20日）
『日韓相互認識―移動と視線一九一〇〜二〇一〇』
主催教員：松田利彦准教授
○**第100回**（11年3月4日〜6日）
『中国東北部（旧満州）と日本―一〇〇年関係史の整理と再編』
主催教員：劉建輝准教授
○**第101回**（11年3月19日〜20日）
『一九五〇年代日本映画における「戦後」の構築研究』
主催教員：細川周平教授
○**第102回**（11年7月30日〜31日）
『一九五〇年代日本映画における戦前・戦中との連続性・非連続性』
主催教員：細川周平教授
○**第103回**（11年9月30日〜10月1日）
『万国博覧会とアジア―上海から上海へ、そしてその先へ―』
主催教員：佐野真由子准教授

○**第104回**（11年11月25日）
『生態、環境、資源から見る近代「満洲」：前近代からの連続・非連続を中心に』
主催教員：劉建輝准教授
○**第105回**（12年1月21日）
『「外地」文学の言説的ネットワーク―台湾と「満洲」の対話―』
主催教員：劉建輝准教授
○**第106回**（12年2月3日〜4日）
『植民地朝鮮と宗教―トランスナショナルな帝国史の叙述にむけて―』
主催教員：磯前順一准教授
○**第107回**（12年2月13日）
『植民地裁判資料の活用―韓国大法院所蔵民事判決文を中心に』
主催教員：松田利彦准教授
○**第108回**（12年4月7日）
『「妙貞問答」の訳注・英訳・研究』
主催教員：ジョン・ブリーン教授
○**第109回**（12年7月22日）
『ポスト世俗主義と公共性』
主催教員：磯前順一准教授
○**第110回**（12年11月10日〜11日）
『近代アジアをめぐる絵ハガキメディア―帝国・表象・ネットワーク』

主催教員：稲賀繁美教授
○**第111回**（12年12月8日）
『近代仏教―トランスナショナルな視点から』
主催教員：末木文美士教授
○**第112回**（12年12月8日～9日）
『日蘭関係史をよみとく―蘭学を中心に―』
主催教員：フレデリック・クレインス准教授
○**第113回**（13年3月15日）
『近代日本と華北――文化交流からの再検討』
主催教員：劉建輝准教授
○**第114回**（13年6月16日）
『近代日本の国家観―学際的考察―』
主催教員：瀧井一博教授
○**第115回**（13年7月21日～22日）
『宗教と公共性―神道と宗教復興から』
主催教員：磯前順一准教授
○**第116回**（13年7月26日～27日）
『国際シンポジウム　転換期の伊勢』
主催教員：ジョン・ブリーン教授
○**第117回**（13年8月26日）
『『妙貞問答』の諸問題』

主催教員：末木文美士教授
○**第118回**（13年11月8日～10日）
『「大名庭園」の新発見』
主催教員：白幡洋三郎教授
○**第119回**（14年3月5日）
『関西の映画興行史の基礎調査―『合同通信』を中心に』
主催教員：細川周平教授
○**第120回**（14年10月29日）
『交錯する外交と貿易―明清交替期前後の東アジア三国関係』
主催教員：劉建輝教授
○**第121回**（14年12月5日）
『言葉の境界をこえる／詩とその翻訳をめぐって』
主催教員：坪井秀人教授
○**第122回**（15年1月10日～11日）
『怪異・妖怪文化研究の現在』
主催教員：小松和彦所長
○**第123回**（15年2月7日～8日）
『日本古代の地域と交流』
主催教員：倉本一宏教授
○**第124回**（15年3月13日～15日）
『学生・教員参加による日本アニメーション・まんが研究及び教育法』

主催教員：大塚英志教授

○第125回（15年3月24日）

『記憶の改変―「私は貝になりたい」と記憶の政治学』

主催教員：瀧井一博教授

○第126回（15年9月26日～27日）

『民謡研究の今日』

主催教員：細川周平教授

○第127回（15年11月20日）

『ドイツにおける日本文学の研究』

主催教員：郭南燕准教授

○第128回（15年11月28日～29日）

『鎮魂・翻訳・記憶―声にならない他者の声を聴く』

主催教員：磯前順一教授

○第129回（16年2月9日）

『CM研究の展開と発展 日文研共同研究からの一〇年』

主催教員：山田奨治教授

○第130回（16年2月27日～28日）

『翻訳の再評価：学問を深める原動力』

主催教員：パトリシア・フィスター教授

○第132回（16年2月12日～13日）

『海賊・山賊・馬賊・愚連隊：無法者outlawの社会史にむけて―竹村民郎著作集を参照点として』

主宰教員：稲賀繁美教授

○第131回（16年12月5日～6日）

『鈴木大拙を顧みる：没後50年を記念して』

主催教員：山田奨治教授

［「世界の日本研究」シンポジウム］

○第8回（07年1月12日～13日）

『コミュニケーションを考える』

主催教員：ジェームズ・バクスター教授

○第9回（08年3月14日～15日）

『日本の仏教学者：21世紀の仏教学に向けて』

主催教員：細川周平教授

○第10回（10年1月29日）

『日本語で書く―文学創作の喜びと苦しみ―』

主催教員：郭南燕准教授

○第11回（12年1月27日～28日）

『日本語で書く―非母語文学の成立』

主催教員：稲賀繁美教授

［日文研フォーラム］

○第201回（07年4月18日）
『国境を越えた日本の学校文化』モハメッド・レザ・サルカール・アラニ（アラメ・タバタバイ大学助教授／日文研外国人研究員）

○第202回（07年5月16日）
『唐代文学における日本のイメージ』張哲俊（北京師範大学比較文学研究所教授／日文研外国人研究員）

○第203回（07年6月13日）
『「気」の思想・「こころ」の文化―言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方―』チャワーリン・サウェッタナン（チュラーロンコーン大学専任講師／日文研外国人研究員）

○第204回（07年7月25日）
『淡路島における災害と記憶の文化―荒神信仰を中心に―』シンシア・ネリ・ザヤス（フィリピン国立大学国際研究センター准教授／日文研外国人研究員）

○第205回（07年9月11日）
『宮本常一の民俗誌を通して見た日本女性と日本文化理解』チャン・ティ・チュン・トアン（ベトナム国立ハノイ国家大学助教授／日文研外国人研究員）

○第206回（07年10月10日）
『朝鮮旅行案内書に見る日本人のロマン』ペイ・ヒョンイル（カリフォルニア大学サンタバーバラ校准教授／日文研外国人研究員）

○第207回（11年11月14日）
『遊興の「花」としての理想―妓生と遊女―』金榮哲（漢陽大学校教授／日文研外国人研究員）

○第208回（07年12月12日）
『中国出土の文物から見た中日古代文化交流史―和同開珎と井真成墓誌を中心として―』王維坤（西北大学教授・副院長／日文研外国人研究員）

○第209回（08年1月16日）
『懺悔・供養・修法―前近代日本仏教の心を探る―』ブライアン・小野坂・ルパート（イリノイ大学准教授／日文研外国人研究員）

○第210回（08年2月26日）
『関西のジャズ喫茶文化』マイク・モラスキー（ミネソタ大学准教授／日文研外国人研究員）

○第211回（08年3月18日）
『北極から日本へ―スウェーデン探検隊が見た明治日本―』グニラ・リンドバーグ＝ワダ（ストックホルム大学主任教授／日文研外国人研究員）

○第212回（08年4月23日）
『渋沢栄一と張謇―日中近代企業家に関する一つの比較―』周　見（中国社会科学院世界経済政治研究所教授／日文研外国人研究員）

○**第213回**（08年5月14日）
『小説を通してみたグローバル時代の在日コリアン』金　貞恵（釜山外国語大学校教授／日文研外国人研究員）
○**第214回**（08年6月11日）
『ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ―エミール・ギメと日本の僧侶神主との問答―』フレデリック・ジラール（フランス国立極東学院教授／日文研外国人研究員）
○**第215回**（08年7月9日）
『萬葉集に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布』アレキサンダー・ヴォヴィン（ハワイ大学マノア校教授／日文研外国人研究員）
○**第216回**（08年9月11日）
『韓国における日本研究が語るもの』金　弼東（世明大学校副教授／日文研外国人研究員）
○**第217回**（08年10月9日）
『一九三〇年代の『改造』における魯迅の日本越境』王　中忱（清華大学教授／日文研外国人研究員）
○**第218回**（08年11月12日）
『日本における禅浄双修―黄檗宗を中心として―』ジェームズ・バスキンド（日文研プロジェクト研究員）
○**第219回**（08年12月10日）
『洋楽ジャンルの適応と変遷：童謡、ヒップホップとレゲエの事例研究』ノリコ・マナベ（ニューヨーク市立大学非常勤講師／日文研外来研究員）
○**第220回**（09年1月16日）
『志賀直哉の関西観』郭　南燕（日文研准教授）
○**第221回**（09年2月17日）
『内藤湖南の中国学界に与えた影響』胡　宝華（南開大学准教授／日文研外国人研究員）
○**第222回**（09年3月9日）
『江戸時代における無名の人々の伝記』ヴォルフガング・シャモニ（ハイデルベルグ大学教授／日文研外国人研究員）
○**第223回**（09年4月14日）
『メディア・ミックスの系譜―近代文学とベストセラーと視覚文化』河名サリ（マサチューセッツ大学ボストン校助教授／日文研外国人研究員）
○**第224回**（09年5月12日）
『変わりゆく国家と民族のすがた』趙　政男（高麗大学校教授／日文研外国人研究員）
○**第225回**（09年7月14日）
『天皇のギフト―明治外交の一齣―』ジョン・ブリーン（日文研准

教授）

○**第226回**（09年9月8日）

『日本の技術者とフランスの技術者―技術革新の担い手―』野原博淳（フランス国立科学研究センター上級研究員／日文研外国人研究員）

○**第227回**（09年10月26日）

『韓国の純情漫画と日本の少女マンガ』秋　菊姫（東京大学交流研究員）

○**第228回**（09年11月16日）

『世俗化から見た近代仏教―日本とベトナムとの比較―』ファム・ティ・トゥ・ザン（ハノイ国家大学・人文社会科学大学専任講師／日文研外国人研究員）

○**第229回**（09年12月8日）

『近世日本における開帳と秘仏の文化』許　南鱗（ブリティッシュコロンビア大学教授／日文研外国人研究員）

○**第230回**（10年1月19日）

『猿と一緒に踊り、鷹と共に空へ飛ぶ―バーチャル空間における文化遺産の再構築―』陳　玲（清華大学准教授／日文研外国人研究員）

○**第231回**（10年2月9日）

『日本文化の形成及びその特徴』蒋　立峰（中国社会科学院日本研究所教授／日文研外国人研究員）

○**第232回**（10年3月9日）

『東アジアにおける雅楽の流れ』趙　維平（上海音楽学院教授／日文研外国人研究員）

○**第233回**（10年4月13日）

『見る風景・想像する風景―芭蕉の俳文をたのしむ―』エッケハルト・マイ（フランクフルト大学名誉教授／日文研外国人研究員）

○**第234回**（10年5月11日）

『蔣介石の人格形成と日本』黄　自進（台湾中央研究院近代史研究所研究員・教授／日文研外国人研究員）

○**第235回**（10年6月8日）

『「訳する」というのはどういうことか？―翻訳概念史の概略―』ジェフリー・アングルズ（ウェスタン・ミシガン大学准教授／日文研外国人研究員）

○**第236回**（10年7月13日）

『初期の和歌と地名―英詩からの見方―』フィリップ・ハリス（オックスフォード大学クイーンズカレッジフェロー／日文研外国人研究員）

○**第237回**（10年9月14日）

『戦争・記憶・想像力―文禄の役（壬辰倭乱）をめぐって―』崔　官（高麗大学校教授・日本研究センター所長／日文研外国人研究員）

○**第238回**（10年10月12日）
『海を渡った日本の教育―戦前期ブラジルにおける日本的教育文化の越境と再創―』根川幸男（ブラジリア大学准教授／日文研外国人研究員）
○**第239回**（10年11月9日）
『日本現代批評と韓国の美』呉　京煥（釜山大学校教授／日文研外国人研究員）
○**第240回**（10年12月14日）
『小田実の思想と文学―全体小説を短編で書くこと―』ローマン・ローゼンバウム（シドニー大学名誉アソシエイト／日文研外国人研究員）
○**第241回**（11年1月18日）
『亡命ロシア人が見た近代日本』アイーダ・スレイメノヴァ（極東国立総合大学准教授／日文研外国人研究員）
○**第242回**（11年2月15日）
『時空を超える弥次喜多の笑い―小説から浮世絵まで―』康　志賢（全南大学校副教授／日文研外国人研究員）
○**第243回**（11年3月9日）
『萩原朔太郎と近代日本―時代のパイオニア―』徐　載坤（韓国外国語大学校副教授／日文研外国人研究員）

○**第244回**（11年4月26日）
『戦後映画における孤児の表象』ミツヨ・ワダ＝マルシアーノ（カールトン大学准教授／日文研外国人研究員）
○**第245回**（11年5月17日）
『関東都督府の満州調査』王　鉄軍（遼寧大学日本研究所副研究員／日文研外国人研究員）
○**第246回**（11年6月14日）
『朱舜水と日本』韓　東育（東北師範大学教授・院長／日文研外国人研究員）
○**第247回**（11年7月12日）
『竹島から「韓流」まで：日本と韓国の「地政心理」の出会い』ロー・ダニエル（社団法人東アジア平和投資プログラム代表／日文研外国人研究員）
○**第248回**（11年9月13日）
『ベトナムにおける日本語教育と日本研究の現状』グエン・ティ・タン・タム（ハノイ貿易大学上級講師／ベトナム科学技術協会技術開発研究所副所長／日文研外国人研究員）
○**第249回**（11年10月11日）
『美術とコロニアリズムの掛け合い―国策としての偽満州国第一回美術展覧会について―』王　确（東北師範大学教授／日文研外国人研究員）

○**第250回**（11年11月8日）
『近代日本の最盛期：明宮嘉仁（のち大正天皇）の生涯を通して』フレデリック・リチャード・ディキンソン（ペンシルベニア大学准教授／日文研外国人研究員）
○**第251回**（11年12月13日）
『韓国における「親日派」言説に関する一つの考察』金　哲（延世大学校教授／日文研外国人研究員）
○**第252回**（11年1月17日）
『ベトナムの習慣と信仰を古典文学に探る』グエン・ティ・オワイン（ベトナム社会科学院准教授／日文研外国人研究員）
○**第253回**（12年2月14日）
『天寿の域にいたる道―貝原益軒の『養生訓』を中心に―』劉　克申（上海対外貿易学院教授／日文研外国人研究員）
○**第254回**（12年3月13日）
『帝誅しと帝諫めの物語―狩野重信筆『帝鑑図・咸陽宮図屏風』を読む―』楊　暁捷（カルガリー大学教授／日文研外国人研究員）
○**第255回**（12年4月10日）
『東アジア近代史における「記憶と記念」』都　珍淳（昌原大学校教授／日文研外国人研究員）
○**第256回**（12年5月15日）
『近代日中知識人の自他認識―思想交流史からのアプローチ―』徐興慶（台湾大学研究所教授／日文研外国人研究員）
○**第257回**（12年6月12日）
『日本映画に於ける原型的な表現方法』アンドリヤナ・ツヴェトコビッチ（欧州映画アカデミーＥＳＲＡパリ―スコピエ―ニューヨーク客員教授／日文研外来研究員）
○**第258回**（12年7月10日）
『「中国式」日本研究の実像と虚像』刘　岳平（南開大学教授／日文研外国人研究員）
○**第259回**（12年9月11日）
『中国文化への誘い―漢字からのアプローチ』金　哲会（北京語言大学教授／日文研外国人研究員）
○**第260回**（12年10月9日）
『戦国の宗教文化と宣教師―大航海時代における異教の位置づけを考える―』シルビオ・ヴィータ（京都外国語大学教授）
○**第261回**（12年11月6日）
『「汎ヨーロッパ」から「美の国」へ―クーデンホーフ＝カレルギーと日本―』バルト・ガーンズ（フィンランド国際関係研究所研究員）
○**第262回**（12年12月11日）
『日本の中世文化を考える―上流階層における唐物趣味や禅趣味を中心に―』韋　立新（広東外語外貿大学教授／日文研外国人研究員）

○**第263回**（13年1月15日）
『スリランカにおける演劇史と日本の伝統演劇からの影響について』クラティラカ・クマーラシンハ（ケラニア大学教授／日文研外国人研究員）
○**第264回**（13年2月12日）
『中日文化異同論の推移――近代以降の日本と欧米の学界を中心に』張　翔（復旦大学教授／日文研外国人研究員）
○**第265回**（13年3月12日）
『日本演劇における「非人間的なるもの」との遭遇――霊・動物・テクノロジー』マーク・コーディ・ポールトン（ヴィクトリア大学教授／日文研外国人研究員）
○**第266回**（13年4月9日）
『武術伝授に見る東西両世界』カセム・ズガリ（フランス国立東洋言語文化大学フランス日本協会研究員／日文研外国人研究員）
○**第267回**（13年5月14日）
『中世日本に於ける密教僧と神祇崇拝　伊勢、三輪山等を中心とする両部神道説について』アンナ・アンドレーワ（ワシントン大学カール・ヤスペルス・センターアカデミックフェロー／日文研外国人研究員）
○**第268回**（13年6月11日）
『耳塚の「霊魂」をどう考えるか』魯　成煥（蔚山大学校人文大学教授／日文研外国人研究員）
○**第269回**（13年7月9日）
「ヨーロッパ貴族と日本美―知られざる一七世紀のジャポニスム―』ウィーベ・カウテルト（ソウル国立大学准教授／日文研外国人研究員）
○**第270回**（13年9月20日）
『春画を語る・語る春画―春画を西洋の大学で教える諸問題―』ハンス・トムセン（チューリッヒ大学教授／日文研外国人研究員）
○**第271回**（13年10月8日）
『ブラジルの日本語文学』エドワード・トーマス・マック（ワシントン大学国際交流基金フェロー／日文研准教授）
○**第272回**（13年11月5日）
『伝統と観光を考える―日本の来訪神行事を事例として―』マイケル・ディラン・フォスター（インディアナ大学准教授／日文研外国人研究員）
○**第273回**（13年12月10日）
『近代能楽史と植民地』徐　禎完（翰林大学校教授／日文研外国人研究員）
○**第274回**（14年1月21日）
『他者の風景―一九世紀西洋絵入り新聞から見る東アジア』陳　其松（日本学術振興会特別研究員／日文研外来研究員）

○第275回（14年2月12日）
『『吾妻鏡』の謎――清末中国へ渡った明治の性科学』唐 権（華東師範大学准教授／日文研外国人研究員）
○第276回（14年3月11日）
『“Kawaii”をめぐる表象――その形成と展開』高馬京子（ミコラスロメリス大学准教授／日文研外国人研究員）
『ポピュラー・カルチャーと世代間ギャップ――ヨーロッパにおける日本研究の将来は如何に』ハラルド・フース（ハイデルベルク大学教授／日文研外国人研究員）
『日本ファッションは「前衛」か?――Future Beauty展の現場から』深井晃子（京都服飾文化研究財団理事、チーフ・キュレーター）
○第277回（14年4月8日）
『森有礼が見た一九世紀半ばのロシア帝国――虚像と実像――』マリーナ・コヴァルチュク（極東連邦大学助教／日文研外国人研究員）
○第278回（14年5月13日）
『中日の知をつないだ上海内山書店』秦 剛（北京外国語大学北京日本学研究センター副教授／日文研外来研究員）
○第279回（14年6月10日）
『宗教と世俗の間―祇園祭とサルデーニャの祭をめぐって』エリザベッタ・ポルク（ライプティッヒ大学地域研究センター上級研究員兼講師／日文研外国人研究員）

○第280回（14年7月8日）
『仏教社会主義について――妹尾義郎と新興仏教青年同盟――』ジェームス・マーク・シールズ（バックネル大学准教授／日文研外来研究員）
『ナチスと日本宗教』ブライアン・アンドレー・ヴィクトリア（オックスフォード大学付属仏教研究所研究員／日文研外来研究員）
○第281回（14年9月16日）
『後藤新平研究――中国の視点から』王 鍵（中国社会科学院近代史研究所研究員／日文研外国人研究員）
○第282回（14年10月14日）
『日本が自ら日本を世界に紹介した最初の本にみる日本の美意識について』エミリア・シャロンドン（トゥールーズ・ル・ミライユ大学講師／日文研外国人研究員）
○第283回（14年11月27日）
『日本古典文学における隠喩の考察――主に歌ことば、翻訳、隠喩の展開について』スティーナ・イェルブリン（日文研外来研究員）
○第284回（14年12月12日）
『タブーを破る―春画研究・展示の意義』アンドリュー・ガーストル（ロンドン大学SOAS教授／日文研外国人研究員）
『日本の春画をイギリスはどう見たか』矢野明子（ロンドン大学SOASジャパン・リサーチ・センター―リサーチ・アソシエイト／日

文研外来研究員）
『大英博物館春画展を受けて―日本側のリアクション』石上阿希（立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員）
○**第285回**（15年1月13日）
『グローバル時代における日本大衆文化とその変容――大河ドラマ分析を通じて』朴　順愛（湖南大学校教授／日文研外国人研究員）
○**第286回**（15年2月10日）
『仏教と平和主義――日本仏教の挑戦』ランジャナ・ムコパディヤーヤ（デリー大学准教授／日文研外国人研究員）
○**第287回**（15年3月10日）
『私の日本映画研究とソフトパワー外交』アンドリヤナ・ツヴェトコビッチ（駐日マケドニア共和国特命全権大使／元日文研外来研究員）
○**第288回**（15年4月14日）
『日本をめぐる認識変容――高度成長期から「失われた二〇年」を通じて』アンドルー・ゴードン（ハーバード大学教授／日文研外来研究員）
○**第289回**（15年5月12日）
『蔣介石の日本像』黄　自進（中央研究院近代史研究所／日文研外国人研究員）
○**第290回**（15年6月11日）
『火の女神と神になった男―一六世紀の井戸茶碗を中心に―』朴正一（釜山外国語大学校教授／日文研外国人研究員）
○**第291回**（15年7月7日）
『おんなもの――日本の伝統芸能における「女性」の登場とその表象をめぐって』ガリア・トドロヴァ・ペトコヴァ・ガブロフスカ（ブルガリア国立演劇映画芸術アカデミー客員講師／日文研外来研究員）
○**第292回**（15年9月15日）
『何でそんなに愛され、そんなに憎まれるのか――文学キャラクターとしてのスサノオノミコト』リチャード・トランス（オハイオ州立大学教授／日文研外国人研究員）
○**第293回**（15年10月13日）
『法と教養と文化の基礎――田中耕太郎にならって』ケビン・ドーク（ジョージタウン大学教授／日文研外国人研究員）
○**第294回**（15年11月17日）
『鉄道から見た東アジアの歴史』李　容相（又松大学教授／日文研外国人研究員）
○**第295回**（15年12月1日）
『日中両国はどう付き合うべきか――王正廷の「王道・覇道」論から考える』高　文勝（天津師範大学教授／日文研外国人研究員）
○**第296回**（16年1月5日）
『日本美術に見るユーモア――河鍋暁斎の動物戯画と暁斎が笑った明治の西洋化』アグネセ・ハイジマ（ラトビア大学准教授／日文研

外来研究員）

○**第297回**（16年2月19日）

『ロシア文学における日露戦争の記憶――「日本」の表象を中心に』イーゴリ・ボトーエフ（ブリヤート国立大学准教授／日文研外国人研究員）

○**第298回**（16年3月8日）

『「近代の宿命」と「保守」――福田恆存の保守主義を考える』張寅性（ソウル大学校教授／日文研外国人研究員）

○**第299回**（16年4月12日）

『人形浄瑠璃文楽――伝統演劇の魅力と苦難』ボナヴェントゥーラ・ルペルティ（ヴェネツィア　カ・フォスカリ大学教授／日文研外国人研究員）

○**第300回**（16年5月10日）

『獅子舞がつなぐ東アジア』李　応寿（世宗大学校韓日芸能研究所所長／日文研外国人研究員）

○**第301回**（16年6月14日）

『「古くて新しいもの」――ベトナム人の俳句観から日本文化の浸透を探る』グエン・ヴー・クイン・ニュー（在ホーチミン日本国総領事館広報文化班アシスタント／日文研外国人研究員）

○**第302回**（16年7月12日）

『中国近代心理学の先駆け、陳大斉の日本留学とそれから――小秀

才から教育者へ』龔　穎（中国社会科学院哲学研究所研究員／日文研外国人研究員）

○**第303回**（16年9月13日）

『変容するヤマト――『古事記』の「天皇」を考える――』マラル・アンダソヴァ（カザフ国立女子教育大学研究員／日文研外国人研究員）

○**第304回**（16年10月4日）

『木下恵介映画の見どころ――忘れられた日本のこころ』マッツ・カールソン（シドニー大学シニア講師／日文研外来研究員）

○**第305回**（16年11月15日）

『セルビア・アヴァンギャルド詩と『日本の古歌』』山崎佳代子（詩人／ベオグラード大学教授／日文研外国人研究員）

○**第306回**（16年12月13日）

『北朝鮮の核問題と中国の新たな朝鮮半島政策』姜　龍範（天津外国語大学教授／日文研外国人研究員）

○**第307回**（17年1月10日）

『近世前期の学識と実学を再考する―京都の博学者、馬場信武を中心に』マティアス・ハイエク（パリ・ディドロ大学准教授／日文研外国人研究員）

○**第308回**（17年2月10日）

『京都から考える「東アジア安全共同体」――「戦争」「災害」「歴史」

をキーワードとして』宋　浣範（高麗大学副院長／日文研外国人研究員）

［木曜セミナー］

○第144回（07年4月19日）
『ネットワークの現場から見た知の共有と独占』新井菜穂子（日文研准教授）

○第145回（07年5月24日）
『〈日本の宗教学〉再考―学説史から学問史へ』磯前順一（日文研准教授）

○第146回（07年6月21日）
『知的感性のゆくえ―iMovies（パソコンで作成できる映画）の性格と文化的意義』栗山茂久（ハーバード大学教授／日文研外来研究員）

○第147回（07年7月19日）
『柿本人麻呂と中国文学』呂　莉（中国社会科学院外国文学研究所助教授／日文研外国人研究員）

○第148回（07年10月18日）
『考古学ＧＩＳの実践』宇野隆夫（日文研教授）

○第149回（07年11月15日）
『改変された平城京―史書に書かれなかった事実―』千田　稔（日文研教授）

○第150回（08年1月24日）
『東アジア近代文化史の問い直しにむけて：北米滞在帰朝報告』稲賀繁美（日文研教授）

○第151回（08年2月21日）
『明治憲法史と伊藤博文』瀧井一博（日文研准教授）

○第152回（08年4月17日）
『ジャズ喫茶研究の諸問題―歴史観から方法論まで』マイク・モラスキー（日文研外国人研究員）

○第153回（08年5月22日）
『コルマール（仏）・セミナー（二〇〇八年三月）を振り返って』細川周平（日文研教授）、稲賀繁美（日文研教授）、瀧井一博（日文研准教授）、磯前順一（日文研准教授）

○第154回（08年6月19日）
『『〈海賊版〉の思想―一八世紀英国の永久コピーライト闘争』について』山田奨治（日文研准教授）、池内恵（日文研准教授）

○第155回（08年10月16日）
『日韓関係にとっての『韓流』ブームと東アジアにおけるソフトパワーの争い』アリソン・トキタ（日文研外国人研究員）

○第156回（08年11月13日）
『書評『遠きにありてつくるもの―日系ブラジル人の思い・ことば・芸能―』』松田利彦（日文研准教授）、細川周平（日文研教授）

○第157回（08年12月18日）
『書評『春画の見かた―一〇のポイント―』』山田奨治（日文研教授）、早川聞多（日文研准教授）
○第158回（09年1月22日）
『書評　牛村圭、日暮吉延著『東京裁判を正しく読む』（文春新書：六六〇）』瀧井一博（日文研准教授）、牛村圭（日文研教授）
○第159回（09年2月19日）
『山王祭りの原点：日吉神社における近代化の一齣』ジョン・ブリーン（日文研准教授）
○第160回（09年4月16日）
『書評　光田和伸著『恋の隠し方』（青草書房、二〇〇八年七月）』早川聞多（日文研教授）
○第161回（09年6月18日）
『私はこうして生きてきました―研究生活、今日までそして明日から―』倉本一宏（日文研教授）
○第162回（09年7月16日）
『仏教写本を見る愉しみ』末木文美士（日文研教授）
○第163回（09年9月17日）
『軍人はなぜ政治化したのか―日本陸軍の場合―』戸部良一（日文研教授）

○第164回（09年10月15日）
『書評　猪木武徳著『大学の反省』（ＮＴＴ出版二〇〇九年四月）を読む』猪木武徳（日文研所長）
○第165回（09年11月12日）
『日文研二五年史の編纂―その中間報告―』白幡洋三郎（日文研教授）、小松和彦（日文研教授）、瀧井一博（日文研准教授）
○第166回（09年12月17日）
『人間性のかけらを求めて―石井部隊や九大生体解剖事件における個人的責任を考える―』郭　南燕（日文研准教授）
○第167回（10年1月21日）
『情報という分野』森　洋久（日文研准教授）
○第168回（10年2月18日）
『九～一四世紀東シナ海交流の素描』榎本　渉（日文研准教授）
○第169回（10年4月22日）
『書評　宇野隆夫編著『ユーラシア古代都市・集落の歴史空間を読む』（二〇一〇年三月勉誠出版）』宇野隆夫（日文研教授）
○第170回（10年6月17日）
『〈フキダシ〉からのぞく日本中世文学の世界―夢とことばの表現論のために―』荒木浩（日文研教授）
○第171回（10年7月22日）
『中国近世思想史の再構成―拙著『思想としての中国近世』を素材

として―』伊東貴之（日文研教授）

○**第172回**（10年9月16日）

『安政四年十月二十一日、米国使節の登城・将軍拝謁をめぐって―「幕末」について考えるために―』佐野真由子（日文研准教授）

○**第173回**（10年11月18日）

『書評　フレデリック・クレインス著『十七世紀のオランダ人が見た日本』（臨川書店、二〇一〇年七月）』フレデリック・クレインス（日文研准教授）

○**第174回**（10年12月16日）

『「北方領土」問題をめぐる歴史的省察』笠谷和比古（日文研教授）

○**第175回**（11年1月20日）

『書評　鈴木貞美著『「文藝春秋」とアジア太平洋戦争〈東アジア叢書〉』（武田ランダムハウスジャパン二〇一〇年五月）』鈴木貞美（日文研教授）

○**第176回**（11年2月17日）

『書評　榎本渉著『僧侶と海商たちの東シナ海』（講談社選書メチエ二〇一〇年一〇月）』榎本　渉（日文研准教授）

○**第177回**（11年4月21日）

『日文研二五年史座談会Ⅲ―国際交流の展望―』猪木武徳（日文研所長）、細川周平（日文研教授）、山田奨治（日文研教授）、劉　建輝（日文研准教授）、磯前順一（日文研准教授）、佐野真由子（日文研准教授）、テモテ・カーン（日文研助教）

○**第178回**（11年5月19日）

『日文研二五年史座談会Ⅳ―文献、データベース、出版―』宇野隆夫（日文研教授）、白幡洋三郎（日文研教授）、末木文美士（日文研教授）、早川聞多（日文研教授）、パトリシア・フィスター（日文研教授）、ジョン・ブリーン（日文研教授）、フレデリック・クレインス（日文研准教授）、光田和伸　（日文研准教授）

○**第179回**（11年6月16日）

『新たな文明原理を求めて：東日本大震災と原発事故に思う』安田喜憲（日文研教授）

○**第180回**（11年7月21日）

『世界記憶遺産に推薦が決まった「御堂関白記」自筆本（一一世紀）の裏に「後深心院関白記」（一四世紀）を写した近衛信尹（一六世紀）』倉本一宏（日文研教授）

○**第181回**（11年9月22日）

『可視化される「帝国」・パッケージされる「外地」―日文研所蔵外地関連地図、絵葉書について―』劉　建輝（日文研准教授）

○**第182回**（11年11月17日）

『書評　山田奨治著『日本の著作権はなぜこんなに厳しいのか』（人文書院二〇一一年九月）』山田奨治（日文研教授）

○**第183回**（11年12月22日）
『書評　ジョン ブリーン著『儀礼と権力　天皇の明治維新』（平凡社二〇一一年八月）』ジョン・ブリーン（日文研教授）
○**第184回**（12年1月19日）
『書評　小松和彦著『いざなぎ流の研究：歴史のなかのいざなぎ流太夫』（角川学芸出版二〇一一年九月）』小松和彦（日文研副所長）
○**第185回**（12年2月16日）
『世界を旅する学問―トランスナショナルな日本研究に向けて―』磯前順一（日文研准教授）
○**第186回**（12年4月19日）
『書評　末木文美士著『哲学の現場：日本で考えるということ』（二〇一二年一月トランスビュー）』末木文美士（日文研教授）、細川周平（日文研教授）、フレデリック・クレインス（日文研准教授）
○**第187回**（12年5月24日）
『京都の洋館と庭、そして権力の館？―白幡洋三郎『庭を読み解く』、井上章一『京都洋館ウォッチング』刊行記念トークイベント―』白幡洋三郎（日文研教授）、井上章一（日文研教授）、御厨貴（日文研客員教授）
○**第188回**（12年6月21日）
『アーカイブの活用と連想―文化遺産オンラインと実業史錦絵引の紹介―』丸川雄三（日文研准教授）

○**第189回**（12年7月19日）
『北朝鮮を訪ねて―「凍土の共和国」に非ず、「地上の楽園」に非ず』松田利彦（日文研准教授）
○**第190回**（12年9月20日）
『図書館の〝はたらき〟は国を越えて届くか―『本棚の中のニッポン』から―』江上敏哲（日文研資料課資料利用係長）
○**第191回**（12年10月18日）
『陸上競技をどう語るか：日本のオリンピック参加一〇〇年を機に』牛村圭（日文研教授）
○**第192回**（12年11月22日）
『文の面について』マルクス・リュッターマン（日文研准教授）
○**第193回**（12年12月20日）
『〈座談会〉日文研二五年史編纂を振り返る』小松和彦（日文研所長）、白幡洋三郎（日文研教授）、瀧井一博（日文研准教授）、山内直樹（山内編集事務所代表）
○**第194回**（13年1月24日）
『書評　劉建輝著『日中二百年―支え合う近代』（二〇一二年東アジア叢書）』劉　建輝（日文研准教授）、郭　南燕（日文研准教授）、松田利彦（日文研准教授）
○**第195回**（13年2月21日）
『二〇世紀初頭の俳句・能の海外発信――「二重国籍」詩人・野口

米次郎のもたらしたもの』堀まどか（日文研機関研究員）、三原芳秋（同志社大学准教授）

○**第196回**（13年4月18日）

『古墳はどのような「場所」に築造されたのか―三～六世紀の前方後円墳の立地と眺望分析から―』寺村裕史（日文研特任准教授）

○**第197回**（13年5月23日）

『書評　倉本一宏著『藤原道長の日常生活』（二〇一三年　講談社現代新書）』倉本一宏（日文研教授）、井上章一（日文研副所長）、荒木浩（日文研教授）

○**第198回**（13年6月20日）

『テレビ時代の日本映画とその変革の諸相』北浦寛之（日文研助教）

○**第199回**（13年7月18日）

『日系ブラジル移民文学』を上梓して』細川周平（日文研教授）、根川幸男（日文研外国人研究員）

○**第200回**（13年9月19日）

『「融通念仏縁起」の研究―物語絵にみる日本中世の信仰世界―』徳永誓子（日文研機関研究員）

○**第201回**（13年10月17日）

『大英博物館の春画展開催の報告』早川聞多（日文研教授）

○**第202回**（13年11月21日）

『スマート・グリッド―エネルギーのゆくえ』森洋久（日文研准教授）

○**第203回**（13年12月19日）

『旧植民地関係資料の行方―日本の文書破棄とGHQによる文献文書接収』井村哲朗（日文研特任教授）、熱田見子（外交史料館外務事務官）

○**第204回**（14年1月23日）

『ザ・タイガースとボクらの時代―磯前順一『ザ・タイガース　世界はボクらを待っていた』（集英社新書）を読む』井上章一（日文研副所長）、細川周平（日文研教授）、磯前順一（日文研准教授）

○**第205回**（14年2月20日）

『植民地朝鮮の表象―朝鮮写真絵葉書と官展入選作にみるイメージの相関性』朴美貞（日文研機関研究員）

○**第206回**（14年4月17日）

『映画式まんが家入門』大塚英志（日文研教授）、中島千晴（漫画家）

○**第207回**（14年5月22日）

『教育哲学としてのバタイユ思想』宮崎康子（日文研特任助教）

○**第208回**（14年6月19日）

『日本映画の音響理論――『映画音響論　溝口健二映画を聴く』を中心に』長門洋平（日文研機関研究員）

○**第209回**（14年7月17日）

『笠谷和比古著『武士道　侍社会の文化と倫理』（二〇一四年、NHK出版）をめぐって』笠谷和比古（日文研教授）、伊東貴之（日文

研教授）、ジョン・ブリーン（日文研教授）

○第210回（14年9月18日）

『ギリシャでの日本学の発展』スティリアノス・パパレクサンドロプロス（アテネ大学教授／日文研外来研究員）

○第211回（14年10月16日）

『KATSURA-Ⅱ―古地図Google Mapの試み―』森　洋久（日文研准教授）

○第212回（14年11月20日）

『国文学者の戦中戦後―榊原美文の場合』坪井秀人（日文研教授）

○第213回（14年12月18日）

『帝国大学とは何だったのか』瀧井一博（日文研教授）

○第214回（15年1月22日）

『文化資料のデジタル化と情報発信』寺村裕史（日文研特任准教授）

○第215回（15年2月19日）

『平安時代の内裏と平安京』中町美香子（日文研機関研究員）

○第216回（15年4月16日）

『現代建築を考える―合評　井上章一『現代の建築家』（ADAエディタトーキョー、二〇一四年）』井上章一（日文研副所長）、稲賀繁美（日文研教授）、佐野真由子（日文研准教授）

○第217回（15年5月21日）

『雑誌『世界の日本研究』の回顧と展望』郭　南燕（日文研准教授）、瀧井一博（日文研教授）、松田利彦（日文研教授）、山田奨治（日文研教授）、劉　建輝（日文研教授）

○第218回（15年6月18日）

『日米同盟研究―歴史と理論』楠　綾子（日文研准教授）

○第219回（15年7月16日）

『日本古典籍の図像／図版データベース構築にむけて』石上阿希（日文研特任助教）

○第220回（15年9月17日）

『倉本一宏著『平安朝　皇位継承の闇（「狂気」の天皇）』（KADOKAWA、二〇一四年）と『「旅」の誕生（東海道の「旅」）』（河出書房新社、二〇一五年）を斬る！』倉本一宏（日文研教授）、牛村　圭（日文研教授）、光田和伸（日文研准教授）

○第221回（15年10月22日）

『小泉鉄、〈台湾〉を表象する』杉田智美（日文研機関研究員）

○第222回（15年11月19日）

『平戸オランダ商館文書が語るもの』フレデリック・クレインス（日文研准教授）、シンティア・フィアレ（ライデン大学史学研究所研究員／日文研外来研究員）

○第223回（15年12月17日）

『万国博覧会から人間の歴史を考える』佐野真由子（日文研准教授）、井上章一（日文研副所長）、中牧弘允（吹田市立博物館館長）

○第224回（16年1月21日）
『表具ができるまで』佐々木弘明（京表具翠光堂主人（伝統工芸士））
○第225回（16年2月18日）
『上方演芸の近代史と現状』古川綾子（日文研特任助教）
○第226回（16年4月21日）
『キリシタン文学の継承：宣教師の日本語文学』郭　南燕（日文研准教授）、井上章一（日文研教授）
○第227回（16年5月26日）
『稲賀繁美『接触造形論』（名古屋大学出版会、二〇一六）をめぐって』稲賀繁美（日文研副所長・教授）、細川周平（日文研教授）、宮崎康子（日文研技術補佐員）
○第228回（16年6月23日）
『『日本研究』編集の現場から』坪井秀人と『日本研究』編集の仲間たち
○第229回（16年7月21日）
『アメリカ大統領制の歴史・現在・未来―制度分析の観点から』待鳥聡史（京都大学大学院法学研究科教授）、楠綾子（日文研准教授）
○第230回（16年9月23日）
『藩政を比較する』磯田道史（日文研准教授）
○第231回（16年10月23日）
『ミッシング・ヒストリー』ジェームス・E・ケテラー（シカゴ大学教授）、磯前順一（日文研准教授）
○第232回（16年11月18日）
『江戸期における仏像の妖怪化』今井秀和（日文研機関研究員）
○第233回（16年11月18日）
『コロンブスの卵―資料の見せ方』石川　肇（日文研助教）
○第234回（17年1月19日）
『来たるべき日文研　高等研究所とは？　コンソーシアムとは？』マーク・E・リンシカム（京都アメリカ大学コンソーシアム所長）、マティアス・ハイエク（パリ・ディドロ大学東アジア言語文化学部日本学科准教授／日文研外国人研究員）、松田利彦（日文研教授）、磯前順一（日文研教授）
○第235回（17年2月16日）
『南北朝時代の戦術と武士』呉座勇一（日文研助教）

［Nichibunken Evening Seminar］

○第118回（07年4月5日）
『Celebrating Work in Pictures: A New Subject for Edo Society』メアリー・エリザベス・ベリー（カリフォルニア大学バークレー校 教授／日文研外来研究員）
○第119回（07年5月10日）
『On geidan: an anthropological approach』井口かをり（日文研海外研

究交流室プロジェクト研究員）

○**第120回**（07年6月7日）

『Shells in Prehistoric Societies from West to East: A Preliminary Approach』イウリア・カラリ＝ヤナコプール（アテネ大学教授／日文研外国人研究員）

○**第121回**（07年7月5日）

『Hinduism and Shintoism: A Comparative Study』ラジェンドラ・トマール（ジャワハルラル・ネルー大学客員教授／日文研外国人研究員）

○**第122回**（07年9月6日）

『石干見（Ishihimi）- Studies on the Relics of Maritime Civilizations in the Visayas, Piscadores, and the Ryukyus』シンシア・ネリ・ザヤス（フィリピン国立大学国際研究センター准教授／日文研外国人研究員）

○**第123回**（07年10月4日）

『The Science of Karma: The Congruence of Buddhism and 19th Century Evolutionary Thought in the Writings of Lafcadio Hearn』ジェームズ・バスキンド（日文研海外研究交流室プロジェクト研究員）

○**第124回**（07年12月6日）

『Music on the Periphery of Modan Raifu: Traces of Music-making among the Okinawan and Korean Communities of Interwar Osaka』ヒュー・デ・フェランディ（ニューイングランド大学助教授）

○**第125回**（08年2月7日）

『Visualizing an Ancient Land Near, Yet Far: Imperialist Nostalgia and the Production of Tourist Images in Colonial Korea』ペイ・ヒュンイル（カリフォルニア大学サンタバーバラ校准教授／日文研外国人研究員）

○**第126回**（08年3月6日）

『Archives of Western Social Scientists in Japanese Collections, with Special Reference to the Kansai Area』ジル・ジャン・ピエール・カンパニョーロ（フランス国立科学研究センター研究員・准教授／日文研外国人研究員）

○**第127回**（08年4月3日）

『An Arctic Passage to the Far East: The Visit of the Swedish Vega Expedition to Japan in 1879』グニラ・リンドバーグ＝ワダ（ストックホルム大学主任教授／日文研外国人研究員）

○**第128回**（08年5月8日）

『Rereading Those Lines: Rethinking Japanese Buddhism through Examining Bunin (Appointments Works)』ブライアン・O・ルパート（日文研外国人研究員）

○**第129回**（08年6月5日）

『The Ticklish Triangle: Reflections on Nationalisms in Japan, China and Taiwan since the 1990s』汪　宏倫（日文研外国人研究員）

○**第130回**（08年7月3日）
『Bad Boy of the Gods: Readings from a Translation-in-Progress of Aratama, Ishikawa Jun's Novel of 1964』ウィリアム・タイラー（日文研外国人研究員）
○**第131回**（08年10月2日）
『The Method of Tsugaru Shamans in Osabe Hideo's Literature: Towards a New Relation between Japan and Asia』郭　南燕（日文研准教授）
○**第132回**（08年11月6日）
『The Heart's Home Town: Traditional Folk Song in Modern Japan』デビッド・ヒューズ（日文研外国人研究員）
○**第133回**（08年12月4日）
『The Adaptation of Western Genres in Japanese Popular Music: Evolution of Musical Style and Text Setting in Children's Songs and Hip-Hop』ノリコ・マナベ（日文研外来研究員）
○**第134回**（09年1月15日）
『The Theatre of Species: Race and Animals in Wartime Animation』トーマス・ラマール（マクギル大学教授）
○**第135回**（09年2月5日）
『Shamanism in Context: Itako (Northern Japan) and Mikishi (Democratic Republic of Congo)』フェリックス・カプトゥ（日文研外国人研究員）
○**第136回**（09年3月12日）
『Past and Present: Stone Bead Making in India』クルディープ・バーン（日文研外国人研究員）
○**第137回**（09年4月2日）
『Cramming the Canon: Contemporary Gakushū Manga and the Possibilities of Edutainment』河名サリ（日文研外国人研究員）
○**第138回**（09年5月14日）
『What is Japanese Performing Arts? The Process of Constructing an Image』マウリシオ・マルティネス（日文研外国人研究員）
○**第139回**（09年6月4日）
『Sakabe Megumi, A Scenic Philosophy』ミシェル・ダリシエ（日文研外国人研究員）
○**第140回**（09年7月2日）
『Soldiers and Society in Japan: Exploring the Issues』セオドア・F・クック（日文研外国人研究員）
○**第141回**（09年9月3日）
『Multiproxy Evidence of Tropical Holocene Climate Variability and Anthropogenic Interference from a Lake Record in Bali』シュン・リ（日文研外来研究員）
○**第142回**（09年10月1日）
『Monsters and Micronesia Japanese Conceptualizations of the South

Seas as a Supernatural Space』マーク・オンブレッロ（総合研究大学院大学大学院生）

○**第143回**（09年11月5日）

『Architecture & Photography: Longing for the Past and Reconstructing the Future』ミュリエール・ラディック（日文研外国人研究員）

○**第144回**（09年12月3日）

『Kume Kunitake and Kume Keiichiro: Father and Son, Advocators of Western Science and Art』ヨナ・シデラー（日文研外国人研究員）

○**第145回**（10年2月4日）

『Ideals of Feminine Beauty: Portrayal in Ukiyo-e and Indian Miniature Painting』アヌ・ジンダル（日文研外国人研究員）

○**第146回**（10年3月4日）

『The "Eyes" of the Police and a Historiographic Problem: The 1925 Taipei Police Exhibition』蔡　慧玉（日文研外来研究員）

○**第147回**（10年4月8日）

『Hideyoshi's Invasion of Korea and the Diplomacy of Survival 1596-98』許　南麟（日文研外国人研究員）

○**第148回**（10年5月13日）

『Voices from Nara at the Chinese Court: Poetry and Diplomacy in Eighth-century East Asia』ヴィプケ・デネッケ（日文研外国人研究員）

○**第149回**（10年6月10日）

『The Function of Place Names in Early Waka: Some Comparisons with English, Welsh and Anglo-Welsh Poetry』フィリップ・ハリス（日文研外国人研究員）

○**第150回**（10年7月1日）

『Rethinking Shonen'ai: Uses of History in Edogawa Ranpo's Writing about the Love of Boys』ジェフリー・アングルス（日文研外国人研究員）

○**第151回**（10年9月2日）

『Buddhist Chaplaincy during the Russo-Japanese War』マイカ・アウエルバッハ（日文研外来研究員）

○**第152回**（10年10月14日）

『Modern Japanese Literature and Russian Poet-immigrants: A Case of Eastern Diaspora』アイーダ・スレイメノヴァ（日文研外国人研究員）

○**第153回**（10年12月9日）

『Japanese Studies in Bulgaria: The 20th Anniversary of the "Japanese Studies" Major at St. Kliment Ohridski University of Sofia』ボイカ・ツィゴヴァ（日文研外国人研究員）

○**第154回**（11年2月3日）

『Chinese and Japanese Ghost Drama: A Comparative Study with Special Reference to Japanese Noh Plays and Chinese Zaju (Variety Plays)』趙

暁寰（日文研外来研究員）

○**第155回**（11年3月3日）

『Writing in Between Language and Culture: Some Cases in Contemporary Japanese Literature』ノリコ・トゥンマン（日文研外来研究員）

○**第156回**（11年4月7日）

『When Did the Japanese Start Writing Books on Japan in English? The Strengths and Weaknesses of the First Generation of Native Japan Interpreters』太田雄三（日文研外国人研究員）

○**第157回**（11年5月12日）

『Self and Society in Ethics of Emptiness: As Seen in a Preliminary Examination of Hisamatsu Shin'ichi and Watsuji Tetsuro』アントン・ルイス・セビージャ（総合研究大学院大学大学院生）

○**第158回**（11年6月2日）

『Studying Translations-Then and Now』ヴィジャヤ・スリヤカント・テネッティ（日文研外来研究員）

○**第159回**（11年7月7日）

『To Capture Their Favor: Gift-giving by the Dutch East India Company』シンティア・フィアレ（日文研外国人研究員）

○**第160回**（11年9月8日）

『Desire and the Civilization: A Political-Economy Inquiry into the Japanese Mind』ロー・ダニエル（日文研外国人研究員）

○**第161回**（11年10月6日）

『Chinese Portable Movies』パオラ・ヴォーチ（日文研外来研究員）

○**第162回**（11年11月10日）

『Resistance and Despair: A Speculation on "Pro-Japanese" Discourse in Korea』金　哲（日文研外国人研究員）

○**第163回**（11年12月8日）

『Chain and the City: Conceptualizing Public Space in Japan』イレナ・グリンスプン（日文研来訪研究員）

○**第164回**（12年2月2日）

『Japanese Women through the Prism of Proverbs』ギータ・A・キニ（日文研外来研究員）

○**第165回**（12年3月8日）

『Masterworks of Ukiyo-e in an Australian Collection』ギャリー・ジェームズ・ヒッキー（日文研外国人研究員）

○**第166回**（12年4月5日）

『An Other Other? The Qur'ān, Islam, and Religious Identity in Modern Japan』ハンス・マーティン・クラマー（日文研外国人研究員）

○**第167回**（12年5月10日）

『Tukioka Kogyo and the Popularization of Nōh in Modern Japan』リチャード・J・スメサースト（ピッツバーグ大学教授）

○**第168回**（12年6月7日）
『Taisho as Interwar: Reflections on Japan in the History of the Modern World』フレデリック・ディッキンソン（日文研外来研究員）
○**第169回**（12年7月5日）
『Archetypes in Japanese Films: The Wanderer Archetype from Myth to Street』アンドリヤナ・ツヴェトコビッチ（日文研外来研究員）
○**第170回**（12年9月6日）
『Shinto and Shamanism: The Indigenous Religions of Japan and Mongolia』ソヨンボ・ボルジギン（日文研外国人研究員）
○**第171回**（12年10月4日）
『Noh Drama as a Vehicle for Spreading Shintoism and Buddhism in Medieval Japan』クラティラカ・クマーラシンハ（日文研外国人研究員）
○**第172回**（12年11月8日）
『Aloha Buddha and Bounty Zen: Global, Transnational, and Ethnic Buddhism in a Hawaiian Diaspora Context』ヨルン・ボロプ（オーフス大学准教授）
○**第173回**（12年12月6日）
『Common Points between the Classical Martial Art of Japan and the European Art of Fighting』カセム・ズガリ（日文研外国人研究員）
○**第174回**（13年2月7日）
『Kyoto's Old Cherries are More Beautiful than the New: How and Why?』ウィーベ・カウテルト（日文研外国人研究員）
○**第175回**（13年3月7日）
『Inspiration and the Languages of Contemporary Music』林　志宣（日文研外国人研究員）
○**第176回**（13年4月11日）
『UNESCO Comes to Kagoshima: Ritual, Depopulation, and the Problem of Intangible Cultural Heritage』マイケル・ディラン・フォスター（日文研外国人研究員）
○**第177回**（13年5月9日）
『Uncanny Realism: Mimesis and Metamorphosis in Japanese Theatre and Beyond』マーク・コーディ・ポールトン（日文研外来研究員）
○**第178回**（13年6月6日）
『Childbirth and Women's Health in Heian and Kamakura Japan』アンナ・アンドレーワ（日文研外国人研究員）
○**第179回**（13年7月4日）
『Hara Setsuko's Screen Career: The Intersection between Eternal Virgin and Eternal Madonna』マッツ・カールソン（日文研外来研究員）
○**第180回**（13年9月5日）
『The Birth of Mutual Recognition: European and Japanese Visual Images of Each Other during the Edo Period and the Quest for Generalization』ロテム・コーネル（日文研外来研究員）

○**第181回**（13年10月3日）
『Transgressive Readers and Writers: On the Japanese-Language Literature of Brazil』エドワード・トーマス・マック（日文研外来研究員）
○**第182回**（13年11月7日）
『Narrative Agency in 13th-14th Century Chan Figure Painting: a Study of Hagiography-Iconography Text-Image Relationships』マルコム・マクネル（日文研英国芸術・人文リサーチカウンシル研究員）
○**第183回**（13年12月5日）
『Animism for Modernity: Lessons from Minamata for the Post-Fukushima World』ショウコ・ヨネヤマ（アデレード大学シニア講師）
○**第184回**（14年2月6日）
『Spring and Asura: Buddhist Progressivism in the Taishō Era』ジェームズ・マーク・シールズ（日文研国際交流基金フェロー）
○**第185回**（14年3月6日）
『Forgotten Treasures of Meiji Japan: The Nuremberg 1885 Exhibition Revisited』シビル・ギルモンド（日文研外来研究員）
○**第186回**（14年4月3日）
『Religion and Community in Kyoto: The Gion Matsuri and Chōnaikai』エリザベッタ・ポルク（日文研外国人研究員）
○**第187回**（14年5月8日）
『Reflections on "Japanese" Culture in Transnational Communication as Seen through Representations of "Kawaii"』高馬京子（日文研外国人研究員）
○**第188回**（14年6月5日）
『Mori Arinori's Journey to St. Petersburg in 1866: Images of Western Backwardness and Threatening Modernization』マリーナ・コヴァルチュク（日文研外国人研究員）
○**第189回**（14年7月3日）
『Transcultural Encounters: German Beer and Meiji Japan』ハラルド・フース（日文研外国人研究員）
○**第190回**（14年9月4日）
『SuperNATURAL Japan:Digging Out the Embedded Cultural Realities in Japanese Fairy Tales』ゲルガナ・ペトコヴァ（日文研外国人研究員）
○**第191回**（14年10月2日）
『Yashiro's Details and the Problem of Place』望月みや（日文研外国人研究員）
○**第192回**（14年11月6日）
『Tree Blossoms and Rock Gardens:On the Duakity of the Japanese Sense of Beauty』ヒ〝リア・シャロンドン（日文研外国人研究員）

○**第193回**（14年12月4日）
『Rethinking the Concept of New Religions in Japan:the Case of Agonshu』ペノ・アレクサンドル（立命館大学フェロー）
○**第194回**（15年2月5日）
『The Circuits of Production, Distribution, and Consumption as a Possible Narrative within Japanese Art History:Some Preliminary Considerations』ガルシア・ロドリゲス・アマウリ・A（日文研国際交流基金フェロー）
○**第195回**（15年3月5日）
『Music as Representation:Thoughts and Remarks on Japanese Fluxus』ルチアナ・ガリアーノ（日文研外国人研究員）
○**第196回**（15年4月2日）
『Proselytizing in the "Western Paradise":Pan-Asianism to Pacifism in Nipponzan Myohoji』ランジャナ・ムコパディヤーヤ（日文研外国人研究員）
○**第197回**（15年5月7日）
『Early Izumo,from the Upper Paleolithic to the Kofun Period』リチャード・トランス（日文研外国人研究員）
○**第198回**（15年6月4日）
『"Female"Presence on the Stage of the ALL-Male Traditional Japanese Theatre』ガリア・トドロヴァ・ペトコヴァ・ガブロフスカ（日文研外来研究員）
○**第199回**（15年7月2日）
『Toward the Reexamination of Universality:Indian Inspiration for Hori Shitoku and Fellow Meiji Buddhist Clerics Opposed to Marriage』ﾏｲｹﾙ・モール（日文研外国人研究員）
○**第200回**（15年9月3日）
『Reading Tanaka Kotaro,Re-thinking Japanese Studies:Thoughts on Universalism and Particularism』ケビン・ドーク（日文研外国人研究員）
○**第201回**（15年10月8日）
『Japanese Local Community: Structures, Characteristics, and Resources』マヤ・ケリヤン（日文研外国人研究員）
○**第202回**（15年11月5日）
『Tsuda Sokichi's View of Cultural Development:Japanese Literary History Rewritten in the Postwar Period』一瀬陽子（大阪府立長尾高等学校非常勤講師）
○**第203回**（15年12月3日）
『The Flying Octopus Story:Japanese Traditional Kite Culture and Its People』ラリ・セシル（日文研外来研究員）
○**第204回**（16年2月2日）
『Shichifukujin : Seven Gods of Good Luck and Humor in Japanese Religious Painting』アグネセ・ハイジマ（日文研日本学術振興会研

究員）

○**第205回**（16年3月3日）

『Tanoshikatta ne? Learning to be Happy in Japanese Preschools』ヒヤル・ベンアリ（日文研外国人研究員）

○**第206回**（16年4月7日）

『Enjoying Haiku as It Is: A Vietnamese View』グエン・ヴー・クイン・ニュー（在ホーチミン日本国総領事館広報文化班アシスタント／日文研外国人研究員）

○**第207回**（16年5月12日）

『The Relational Self: Nature and Sociality in the Philosophy of Watsuji Tetsurō』デビット・ジョンソン（ボストンカレッジ助教授／日文研外来研究員）

○**第208回**（16年6月1日）

『Celebrity Creativity: Picturing Women Film Directors through Historical Perspectives and Contemporary Themes』イヴォンヌ・タスカー（イースト・アングリア大学映画学教授兼人文学部長）、北浦寛之（日文研准教授）

○**第209回**（16年7月7日）

『Reconsidering Mircea Eliade: Politics of Religious Studies and the Morphology of Religion』クリストファー・レーリック（日文研外来研究員）、磯前順一（日文研教授）

○**第210回**（16年9月8日）

『Looking for 'Correct' Knowledge in Early Edo Japan: Baba Nobutake's Critic and Defense of Various Theories (Shosetsu bendan 諸説辨断, 1715) and Its Context』マティアス・ハイエク（パリ・ディドロ大学准教授／日文研外国人研究員）

○**第211回**（16年10月6日）

『The Poetry of Takarabe Toriko: Elegies of Children, Women and War』バーバラ・ハートリー（タスマニア大学校シニア講師／日文研外国人研究員）

○**第212回**（16年11月2日）

『The Rise and Fall of Kinoshita Keisuke's Films: Critical Perspectives』マッツ・カールソン（シドニー大学シニア講師／日文研外来研究員）

○**第213回**（16年12月8日）

『Nature as Master? Exploring Affect, Environment, and Shinto-Buddhist Traditions in the Craft of Japanese Bamboo Basket Making』ジョアンナ・マッカラム（ファルマス大学イノベーション&リサーチ・アカデミー大学院博士課程／日文研英国芸術・人文リサーチカウンシル研究員）

○**第214回**（17年2月2日）

『Family Memories in Place, Time, and Motion: The Kōfukuji Nan'endō and Its Buddhist Icons』詹晏怡（カンザス大学博士候補者／総研大研究生）

○第215回（17年3月2日）
『Consume or Perish!: Making of Consumer Society in Interwar Japan』ヤン・シーコラ（カレル大学准教授／東アジア研究所副所長／大阪大学招聘教授）

［レクチャー］
○第121回（09年4月8日）
『How to Publish Your Manuscript』ウィリアム・ハメル（ハーバード大学アジアセンター出版部編集委員）
○第122回（09年11月11日）
『日本宗教研究をめぐって』ジャクリーヌ・ストーン（プリンストン大学教授）
○第123回（09年11月20日）
『一九二〇～三〇年代中国におけるビアズリーの受容と上海のデカダンス文学』周　小儀（北京大学教授）
○第124回（09年12月11日）
『現代中国の仏教と仏教研究』張　文良（中国人民大学准教授）
○第125回（09年12月21日）
『中央アジア・ソグディアナにおける仏教遺跡と美術』アブデゥラエフ・カジム（ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所指導研究員）、パルダエフ・ムフトルクル（ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所指導研究員）
○第126回（10年4月6日）
『ヨーロッパにおける国制史の現状』ヴィルヘルム・ブラウネーダー（ウィーン大学教授）、屋敷二郎（一橋大学大学院法学研究科准教授）
○第127回（10年11月19日）
『禅とテロリズム―血盟団事件を中心に―』ブライアン・ヴィクトリア（アンティオク大学教授）
○第128回（11年5月20日）
『禅と西洋形而上学の解体』ハヨ・クロンバッハ（ロンドン大学講師・研究員）
○第129回（11年6月24日）
『念仏のペルソナ』マーク・ブラム（ニューヨーク州立大学オールバニー校教授）
○第130回（11年6月25日）
『再検証『戦後知の可能性』（安丸良夫他編著）』安丸良夫（一橋大学名誉教授）
○第131回（11年7月27日）
『日英関係と汎アジア主義の挑戦一八九五～一九五六』アントニー・ベスト（ロンドン大学上級講師）
○第132回（11年10月7日）
『日本帝国における植民地化―朝鮮半島と琉球』與那覇潤（愛知県

立大学准教授）

○第133回（12年2月1日）

『引揚げ―帝国と冷戦のはざまで』パク・ユハ（世宗大学教授）

○第134回（12年7月18日）

『薔薇と桜―日本研究の現状と課題』大貫恵美子（日文研外国人研究員）

○第135回（12年9月28日）

『〈間〉の場―相互干渉・相互浸透の場　国際間における現代の比較思想』橋　枠（ウィーン大学専任教授）

○第136回（12年12月3日）

『一九四〇年前後の朝鮮への日本人観光：観光促進と同化政策のはざまで』ケネス・ルオフ（ポートランド州立大学教授）

○第137回（12年12月15日）

『ウズベキスタンにおける近年の考古学調査』アムルディン・ベルディムロドフ（ウズベキスタン考古学研究所所長）、ゲナディ・ボゴモドフ（ウズベキスタン考古学研究所上級研究員）

○第138回（13年3月14日）

『一九世紀後半の英国における日本仏教認識』ルチア・ドルチェ（ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）准教授）

○第139回（13年5月16日）

『Fascist Spain and the Japanese War Efforts, 1937-1945』ロレンティノ・ロダオ・ガルシア（マドリード・コンプルテンセ大学准教授）

○第140回（13年8月8日）

『The Iconology of 14th-16th Century Japanese Ink Painting with Focus on Sesshu's Landscape Scroll of the Four Seasons (in English)』アグネセ・ハイジマ（日文研外国人研究員）

○第141回（13年11月28日）

『伊勢神宮遷宮―古代制度のおもかげを見る―』石野浩司（皇学館大学神道研究所客員研究員）

○第142回（13年12月11日）

『Rethinking the Body and Eroticism in Classical and Medieval Japanese narratives』ラジャシュリ・パンディ（ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ教授）

○第143回（14年5月7日）

『謡曲における親子に関する表現』シリモンポーン・スリヤウヲンパイサーン（チュラーロンコーン大学准教授）

○第144回（14年8月21日）

『試練多き道を歩んで：セルビアにおける日本学の過去と今』ダリボル・クリチュコヴィチ（ベオグラード大学准教授／日文研来訪研究員）

○第145回（15年3月20日）

『「女性お笑い芸人」という存在―男性中心のお笑いの世界で女性は

人を笑わせることができるか―』ティル・ワインガートナー（インディペンデント・スカラー）

○**第146回**（15年12月10日）

『皆川淇園―その教育者・思想家としての位置づけ―』W・J・ボート（ライデン大学名誉教授）

○**第147回**（16年3月18日）

『Global Mission: Catholic Imperial and Spiritual Networks in India and beyond (16th-18th c.)』イネス・ズバノブ（フランス国立科学研究センターシニアフェロー）

○**第148回**（16年12月21日）

『Japan's Perennial New Man: The Liberal and Fascist Incarnations of Rōyama Masamichi』ロイ・スターズ（オタゴ大学准教授）

○**第149回**（16年12月12日）

『「職場の歴史」とはなにか?』竹村民郎（元大阪産業大学教授）、古川誠（関西大学准教授）

［東京講演会］

○**第17回**（08年6月7日）

『日本のジャズ喫茶文化―反懐古趣味の視点』マイク・モラスキー（ミネソタ大学教授）

『武士道と現代』笠谷和比古（日文研教授）

○**第18回**（09年6月6日）

『新世紀の生存論理―グローバリゼーションと民族問題―』趙　政男（高麗大学校教授）

『日本の仏教を見直す』末木文美士（日文研教授）

○**第19回**（10年6月5日）

『蔣介石と日本―友と敵の狭間で―』黄　自進（日文研外国人研究員）

『石原莞爾と東京裁判―満州事変主役はなぜ裁かれなかったのか―』牛村　圭（日文研教授）

○**第20回**（13年7月6日）

『志賀潔と朝鮮』松田利彦（日文研教授）

『革命の語り方』井上章一（日文研副所長）

［学術講演会］

○**第40回**（07年7月13日）

『宮沢賢治の作品に見られる「自己犠牲の精神」「不殺生」と「菜食主義」―インド人の観点から―』プラット・アブラハム・ジョージ（ジャワハルラル・ネルー大学准教授／日文研外国人研究員）

『二一世紀の生命観を求めて―重層する危機のなかで―』鈴木貞美（日文研教授）

○**第41回**（07年11月16日）

『科学へのまなざし―ことばの視点から日本の近代科学を考える―』

新井菜穂子（日文研准教授）
『日本神話と長江文明』安田喜憲（日文研教授）
○**第42回**（08年3月13日）
『中世史研究四十年―天皇家はなぜ続いてきたのか―』今谷　明（日文研教授）
『世界地図に日本像はどのように認識されてきたか』千田　稔（日文研教授）
○**第43回**（08年9月18日）
『「文学の所有」をめぐる、ひとつの物語』山田奨治（日文研准教授）
『福沢諭吉の倫理観における「公」と「私」』猪木武徳（日文研所長）
○**第44回**（08年11月27日）
『マドレーヌ・デ・スクデーリ（一六〇七～一七〇一）と鵜殿余野子（一七二九～八八）―近世女性作家の書簡感性をめぐって―』マルクス・リュッターマン（日文研准教授）
『江戸時代の比丘尼御所の世界―信仰に身を投じた四人の皇女たち―』パトリシア・フィスター（日文研教授）
○**第45回**（09年3月11日）
『ハイデガーとマクルーハン：技術とメディアへの問い』合庭　惇（日文研教授）
『中国の五大小説』井波律子（日文研教授）
○**第46回**（09年9月30日）
『立憲政治と政党政治―伊藤博文の遺産―』瀧井一博（日文研准教授）
『日系ブラジル人の短歌と俳句』細川周平（日文研教授）
○**第47回**（10年3月16日）
ジェームズ・バクスター教授退任記念講演会
『価値観と報酬―野球、経営、教育の日米比較―』ジェームズ・バクスター（日文研教授）
『欧米で日本陶磁器はいかに愛好されたか?―19世紀後半の趣味の変貌と、世紀末芸術の誕生―』稲賀繁美（日文研教授）
○**第48回**（11年3月10日）
『京都・一〇一一年：一条天皇最期の日々』倉本一宏（日文研教授）
『欧州情勢は「複雑怪奇」だったのか?―独ソ不可侵協定締結と日本―』戸部良一（日文研教授）
○**第49回**（11年9月29日）
『小笠原諸島の自然と文化―世界遺産から未来へ―』郭　南燕（日文研准教授）
『明清交替と東アジア』伊東貴之（日文研教授）
○**第50回**（12年3月23日）
『「神都」物語り：明治期の伊勢について』ジョン・ブリーン（日文研教授）
『環境考古学への道』安田喜憲（日文研教授）

○**第51回**（12年6月29日）
『江戸時代の僧伝出版と清初仏教』榎本　渉（日文研准教授）
『四国の山村で日本文化を考える―いざなぎ流研究四〇年―』小松和彦（日文研所長）
○**第52回**（13年3月8日）
宇野隆夫副所長・鈴木貞美教授退任記念講演会
『私の未来的人文学―考古学ＧＩＳから時空間情報科学へ―』宇野隆夫（日文研副所長）
『日文研の二五年を振りかえって』鈴木貞美（日文研教授）
○**第53回**（13年5月22日）
梅原猛先生米寿記念特別講演会
『私の学問と芸術』梅原猛（日文研顧問）
○**第54回**（13年9月6日）
『古地図とナビゲーション技術』森洋久（日文研准教授）
『知らず顔の桐壺院―〈圏外〉の源氏物語論』荒木浩（日文研教授）
○**第55回**（14年3月18日）
白幡洋三郎教授・戸部良一教授退任記念講演会
『太平洋戦争を考える』戸部良一（日文研教授）
『山と島―日本庭園の源流と日本の自然観』白幡洋三郎（日文研教授）
○**第56回**（14年6月25日）
『日本映画の黄金期と斜陽期―テレビ産業との攻防の中で』北浦寛之（日文研助教）
『文化の法律はどう作られるべきか？―著作権法を例に考える』山田奨治（日文研教授）
○**第57回**（14年9月25日）
『徳川将軍の外交儀礼　一八五七―一八六七』佐野真由子（日文研准教授）
『和歌をうたう――モダニズムとジャポニスムをむすぶ和歌歌曲――』坪井秀人（日文研教授）
○**第58回**（15年3月25日）
笠谷和比古教授・末木文美士教授・早川聞多教授退任記念講演会―江戸を語る―
『江戸時代の新しい歴史像を求めて』笠谷和比古（日文研教授）
『思想史からみた近世』末木文美士（日文研教授）
『江戸絵画に見る表裏一体の表現』早川聞多（日文研教授）
○**第59回**（15年6月10日）
『オランダ商館長の将軍謁見』フレデリック・クレインス（日文研准教授）
『天は球いか平たいか―地動説理論と佐田介石（一八一八～八二）との格闘―』マルクス・リュッターマン（日文研准教授）
○**第60回**（15年9月10日）
『春画を見る、艶本を読む―近世から現代まで』石上阿希（日文研

特任助教）
『「松島詩子コレクション」について―戦前ジャズ・タンゴ歌手の興行』細川周平（日文研教授）
○第61回（16年3月14日）
光田和伸准教授退任記念講演会
『吉田・鳩山・岸の時代―一九五〇年代の日本外交』楠　綾子（日文研准教授）
『神々は出雲に帰る―「邪馬台国」と『水底の歌』に及ぶ』光田和伸（日文研准教授）
○第62回（16年6月28日）
『徳川時代から発想する―経済・教育・防災―』磯田道史（日文研准教授）
『支え合う近代―文化史から見る日中二百年―』劉　建輝（日文研教授）
○第63回（16年9月14日）
『中世東シナ海の航路を守る神』榎本　涉（日文研准教授）
『戦争の日本史』倉本一宏（日文研教授）
○第64回（17年3月9日）
『上方喜劇の現代性―曾我廼家劇から松竹新喜劇まで』古川綾子（日文研特任助教）
『日本の大衆文化とキリスト教』井上章一（日文研教授）

［特別講演会］
○国際日本文化研究センター創立20周年記念講演会（07年5月21日）
『二〇年をふり返って』梅原　猛（日文研顧問）
『日本近代化論再訪』ロナルド・ドーア（ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス特別研究員）
○片倉もとこ先生退任記念講演会（08年5月29日）
『「らーは」の世界―フィールド・ワークの旅から―』片倉もとこ（日文研前所長）
○日文研・地球研合同シンポジウム「山川草木の思想―地球環境問題を日本文化から考える」（08年6月21日）
『天文本覚論と環境問題』梅原　猛（日文研顧問）
○京都の文化と環境―水と暮らし―（09年5月9日）
『京都盆地の地形環境を読む』宇野隆夫（日文研教授）
『京の庭園と水』白幡洋三郎（日文研教授）
『京の人と水―湧水・地下水』谷口真人（地球研教授）
『京の水と暮らし』秋道智彌（地球研教授）
○日文研・地球研合同シンポジウム「京都の文化と環境―森や林―」（10年5月22日）
『地球の森世界からみるモリの日本』山田　勇（地球研共同研究員）
『近代日本の自然観を反省する』末木文美士（日文研教授）

○Tokyo Public Lecture: 文化勲章受章記念講演会（10年6月11日）
『人類の遺産―徳川日本の宗門改帳―』速水　融（日文研名誉教授）
○日文研・地球研合同シンポジウム「環境問題はなぜ大事か―文化から見た環境と環境から見た文化―」（11年5月21日）
『貿易と環境問題』猪木武徳（日文研所長）
『持続可能な発展を再考する：復旧・復興・新興』立本成文（地球研所長）
『煙たい月は泣いているのか?』荒木　浩（日文研教授）
『人のいる自然・人のいない自然』阿部健一（地球研教授）
○猪木所長退任記念講演会（12年3月29日）
『日文研で感じたこと、考えたこと』猪木武徳（日文研所長）
○日文研・地球研合同シンポジウム「文化・環境は誰のもの?」（12年9月14日）
『中世の「惣」および「universitas/communitas」をめぐって』マルクス・リュッターマン（日文研准教授）
『「人類の無形文化遺産」になった祇園祭―文化は誰のものにされようとしているのか―』佐野真由子（日文研准教授）
『里山の生態系サービスと今後の国土管理』嘉田良平（地球研教授）
『分かちあう豊かさ：環境と文化』阿部健一（地球研教授）
○特別講演会　「映画史の中の太秦」（14年11月11日）
上野隆三（東映京都撮影所殺陣師／東映剣会特別会員）
大野裕之（日本チャップリン協会会長／脚本家・プロデューサー）
小川順子（中部大学・大学院准教授）
○小松和彦所長文化功労者顕彰記念講演会（17年3月28日）
『妖怪と戯れて四〇年―私の学問人生―』小松和彦（日文研所長）

［伝統文化芸術総合研究プロジェクト］
○邦楽と西洋音楽を超えて（08年2月15日）
《講演》
『伝統文化と現代―多元的グローバリズムを目指して―』
笠谷和比古（日文研教授）
《ワークショップ》
『能管と西洋管弦楽との統合、そして超越』
作曲・楽曲解説：武内基朗（作曲家）
○能楽囃子と西洋管弦楽との饗宴（09年2月25日）
《趣旨説明》
笠谷和比古（日文研教授）
《公演》
第一部「能楽囃子の伝統的演奏」
第二部「能楽囃子と西洋管弦楽との協奏」
囃子方（笛）：杉信太朗
囃子方（小鼓）：曽和尚靖

囃子方（大鼓）：谷口有辞
囃子方（太鼓）：前川光範
作曲：武内基朗

○二人のマリアと葵上（09年11月27日）

《趣旨説明》
笠谷和比古（日文研教授）
《公演》
「マグダラのマリアと葵上」（新作）
舞：古澤侑峯（地歌舞古澤流家元）
演出、構成：上村敏文（ルーテル学院大学准教授）
作曲：原夕輝
披講：林香純 薫香・香雅流 宗匠
笛：雲龍
ディジュリドゥ：KNOB
アフリカ民族楽器：yasuski
協力：大内山香雅 薫香・香雅流家

○謡曲と西洋管弦楽との協奏の試み―『平家物語』「祇園精舎」を主題として―（10年2月17日）

《趣旨説明》
笠谷和比古（日文研教授）
《解説》
『謡曲による『平家物語』「祇園精舎」』
笠谷和比古（日文研教授）
『謡曲と西洋管弦楽による『平家物語』「祇園精舎」』
武内基朗（作曲家）

○能楽と西洋管弦楽との協奏―能「小鍛冶」を題材に（11年2月23日）

《趣旨説明・解説》
『能の構成と音楽的性格』
笠谷和比古（日文研教授）
《公演》
『西洋管弦楽法による能「小鍛冶」』
演奏者：武内基朗（作曲家）

○新作能「ルター」（試作）（12年2月17日）

《公演》
解説者：上村敏文（ルーテル学院大学准教授）
実演者（ルター）：上田公威（シテ方観世流）
実演者（キチカエ）：上田拓司（シテ方観世流）
実演者（笛）：竹市学（笛方藤田流）
実演者（地謡）：上田大介 外4名（シテ方観世流）
実演者（創案）：上村敏文（ルーテル学院大学准教授）
実演者（監修）：大倉源次郎（小鼓方大倉流十六世宗家）
コーディネーター：笠谷和比古（日文研教授）

○『忠臣蔵』の世界（13年2月28日）
《講演》
『赤穂事件と『忠臣蔵』の世界』
笠谷和比古（日文研教授）
《公演》
『仮名手本忠臣蔵』三段目「殿中刃傷の段」
実演者（義太夫）：竹本相子大夫
実演者（三味線）：竹澤團吾
○ルネサンスダンスと筑前琵琶による「安寿と厨子王」
（14年3月26日）
《趣旨説明》
『日文研伝統文化プロジェクトの現在』
笠谷和比古（日文研教授）
《座談会・楽器説明》
コーディネーター：門田展弥（追手門大学地域文化創造機構客員特別教授）
ルネサンスダンス：湯浅宣子（欧州舞踏史学協会会員）
琵琶奏者：S・ギニャール（大阪学院大学教授）
リュート奏者：佐野健二（相愛大学非常勤講師）
ダルシマー奏者：小川美香子
《公演》
ダンス：湯浅宣子、村上博子、小原麻美
構成・演出：門田展弥、湯浅宣子
作曲：S・ギニャール、P・アテニャン、門田展弥
筑前琵琶：シルヴァン・旭西・ギニャール
リュート、ヴィオラダ・ガンバ：佐野健二
ダルシマー：小川美香子
○能楽と西洋オペラとの統合の試み―楽劇『保元物語』をめぐって―
（15年2月17日）
《講演》
『楽劇『保元物語』と制作趣旨』
笠谷和比古（日文研教授）
《公演・解説》
『オペラ版『保元物語』の楽曲解説と演奏』
武内基朗（作曲家）

［日文研・アイハウス連携フォーラム］
○第1回（14年9月19日）
『妖怪と日本人の想像力』小松和彦（日文研所長）
○第2回（14年12月11日）
『越境する「大衆文学」の力―なぜ中国で松本清張が流行るのか』
王成（清華大学教授／日文研外国人研究員）

○第3回（15年2月12日）
『江戸時代にみるユーモア、パロディ、タブー――浮世絵と春画の社会的意義』アンドリュー・ガーストル（ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）教授／日文研外国人研究員）
○第4回（15年4月21日）
『ぼくは何故、「まんがの描き方」を海外で教えるのか』大塚英志（まんが原作者／日文研教授）
○第5回（15年7月16日）
『伊藤博文を越えて、伊藤博文へ――「知の政治家」の残したもの』瀧井一博（日文研教授）
○第6回（15年12月10日）
『世界文学としての『源氏物語』』李　愛淑（国立韓国放送通信大学教授／日文研外国人研究員）
○第7回（16年2月10日）
『イタリア演劇から見た日本の伝統演劇　能、歌舞伎、オペラ、バレエ――「狂乱」ものを中心に――』ボナヴェントゥーラ・ルペルティ（カ・フォスカリ大学教授／日文研外国人研究員）
○第8回（16年7月27日）
『川端康成文学と中国美術』周　閎（北京語言大学比較文学研究所教授／日文研外国人研究員）
○第9回（16年10月14日）
『海賊史観からみた世界史五〇〇年――『文明の海洋史観』の裏側を覗く』稲賀繁美（日文研副所長／教授）
○第10回（17年1月20日）
『志賀直哉の文学：外国語からの養分』郭　南燕（日文研准教授）
○日文研・アイハウス連携フォーラム in 京都（17年3月7日）
『「移動する帝国」――戦時観光と絵葉書』ケネス・ルオフ（ポートランド州立大学教授）
『従軍画家が描いた帝国のフロンティア』劉　建輝（日文研副所長／教授）

出版物一覧

書名	発行年月
●学術論文誌	
『日本研究』（一九八九年創刊） 日文研が年二回定期的に刊行する学術論文集で、日本文化研究の発展に寄与する内容であれば、誰でも投稿可能。投稿論文は審査委員による査読のうえ掲載。第五四集まで既刊。	
『JAPAN REVIEW』（一九九〇年創刊） 日文研が刊行する英文の学術雑誌で、優れた研究論文、研究ノート、書評論文を常時募集。過去と現在の日本文化の研究に関わっていれば誰でも投稿可能。応募原稿は、審査員による査読のうえ掲載。第二九集まで既刊。	
『日文研叢書』（一九九三年創刊） 日本研究に関する書き下ろしの論考シリーズ。日文研の専任教員や客員研究員が主催したシンポジウムの記録や共同研究会の成果、日文研所属の若手研究者の個人研究、あるいは貴重資料集成などを含む。第五五集まで既刊。	
『Nichibunken Monograph Series』（一九九八年創刊） 日文研における研究活動の最良の成果で単著のオリジナルな学術論文の英文モノグラフシリーズ。執筆者は日文研専任教員等。第一九集まで既刊。	

●研究活動報告書

『国際研究集会報告書』（一九八九年創刊）
日文研が主催した国際研究集会において発表・討議された内容を収録。第四五集まで既刊。

『海外シンポジウム報告書』（一九九七年創刊）
海外で行われた国際シンポジウムで発表・討議された内容を収録した報告書。第二二集まで既刊。

『世界の日本研究』（一九九〇年創刊）
世界の日本研究に関する情報を掲載している不定期出版物。第一九集まで既刊。

『日文研フォーラム報告書』（一九八八年創刊）
来日中の外国人研究者が日本に関連したテーマについて発表した内容を記録編集した報告書。随時刊行で第二七六回まで既刊。

〈共同研究報告書〉
日文研共同研究の総括報告書。商業出版含む。

『藝文　第1巻　〈藝文社版〉1巻1号』ゆまに書房（監修：呂　元明、鈴木貞美、劉　建輝）　07年7月
『伝統工藝再考　京のうちそと――過去発掘・現状分析・将来展望』思文閣出版（編：稲賀繁美）　07年7月
『语义的文化变迁』武汉大学出版社（編：冯　天瑜、（日）刘　建辉、聂　长顺）　07年10月
『関西モダニズム再考』思文閣出版（編：竹村民郎、鈴木貞美）　08年1月
『王権と都市』思文閣出版（編：今谷　明）　08年3月

A NEW JAPAN FOR THE TWENTY-FIRST CENTURY: An Inside Overview of Current Fundamental Changes and Problems, Rien T. Segers, Editor, Routledge

『公家と武家Ⅳ――官僚制と封建制の比較文明史的考察』思文閣出版（編：笠谷和比古）　08年3月

『関西を創造する』和泉書院（編：千田　稔）　08年3月

『死の儀法――在宅死に見る葬の礼節・死生観』ミネルヴァ書房（編著：近藤功行、小松和彦）　08年3月

『戦間期日本の社会集団とネットワーク――デモクラシーと中間団体』ＮＴＴ出版（編著：猪木武徳）　08年3月

『終わりきれない「近代」――八木一夫とオブジェ焼』美学出版（編：樋田豊郎、稲賀繁美）　08年4月

『性欲の文化史１』講談社（編：井上章一）　08年10月

『性欲の文化史２』講談社（編：井上章一）　08年11月

『幸田露伴の世界』思文閣出版（共編：井波律子、井上章一）　09年1月

『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』思文閣出版（編：松田利彦、やまだあつし）　09年3月

『性的なことば』講談社（編：井上章一、斎藤　光、澁谷知美、三橋順子）　10年1月

『コモンズと文化――文化は誰のものか』東京堂出版（編：山田奨治）　10年3月

『妖怪文化の伝統と創造――絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで』せりか書房（編：小松和彦）　10年9月

『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版（編：笠谷和比古）　11年8月

『都市歴史博覧――都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ』笠間書院（編著：白幡洋三郎、錦　仁、原田信男）　11年12月

『アジア女性と親密性の労働』京都大学学術出版会（編：落合恵美子、赤枝香奈子）　12年2月

『民謡からみた世界音楽――うたの地脈を探る』ミネルヴァ書房（編著：細川周平）　12年3月

『宮澤賢治の深層――宗教からの照射』法蔵館（編：ブラット・アブラハム・ジョージ、小松和彦）　12年3月

『東洋意識　夢想と現実のあいだ――1887–1953』ミネルヴァ書房（編著：稲賀繁美）　12年4月

『日本の近代化とプロテスタンティズム』教文館（編：上村敏文、笠谷和比古）　13年3月

『地域社会から見る帝国日本と植民地――朝鮮・台湾・満洲』思文閣出版（編：松田利彦、陳　姃湲）　13年3月
『デジタル人文学のすすめ』勉誠出版（編：楊　暁捷、小松和彦、荒木　浩）　13年7月
『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房（編：酒井哲哉、松田利彦）　14年2月
『*Vocabulaire de la spatialité japonaise* 日本の生活空間』CNRS Editions（編：Philippe Bonnin、西田雅嗣、稲賀繁美）　14年3月
『近代日本のリーダーシップ――岐路に立つ指導者たち』千倉書房（編：戸部良一）　14年3月
『妙貞問答を読む――ハビアンの仏教批判』法藏館（編：末木文美士）　14年3月
『東アジアにおける近代知の空間の形成』東方書店（編著：孫　江、劉　建輝）　14年3月
『『作庭記』と日本の庭園』思文閣出版（編：白幡洋三郎）　14年3月
『近代日本の公と私、官と民』ＮＴＴ出版（編著：猪木武徳、マルクス・リュッターマン）　14年10月
『ザ・タイガース研究論――昭和40年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析』近代映画社（編：磯前順一、黒﨑浩行）　15年3月
『徳川社会と日本の近代化』思文閣出版（編：笠谷和比古）　15年3月
『建築と権力のダイナミズム』岩波書店（編：御厨　貴、井上章一）　15年3月
『日記・古記録の世界』思文閣出版（編：倉本一宏）　15年3月
『異人論とは何か　―ストレンジャーの時代を生きる』ミネルヴァ書房（編：山　泰幸、小松和彦）　15年3月
『夢見る日本文化のパラダイム』法藏館（編：荒木　浩）　15年5月
『角倉一族とその時代』思文閣出版（編：森　洋久）　15年7月
『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版（編：佐野真由子）　15年10月
『比較思想から見た日本仏教』山喜房佛書林（編：末木文美士）　15年12月
『「心身／身心」と環境の哲学――東アジアの伝統思想を媒介に考える――』汲古書院（編：伊東貴之）　16年3月
『大衆文化とナショナリズム』森話社（編：朴　順愛、谷川建司、山田奨治）　16年5月

『越境と連動の日系移民教育史――複数文化体験の視座――』ミネルヴァ書房（編著：根川幸男、井上章一）　16年6月
『戦後映画の産業空間　資本・娯楽・興行』森話社（編：谷川建司）　16年7月
『海賊史観からみた世界史の再構築――交易と情報流通の現在を問い直す』思文閣出版（編：稲賀繁美）　17年2月

●広報物

『日文研』（一九八八年創刊）
年二回発行する和文広報誌。専任教員、外国人研究員等のエッセイ、研究活動、研究協力活動の報告、共同研究会の記録等を収録。第五九号まで既刊。

『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』（一九八八年創刊）
年二回発行する和英併記の広報誌。日文研に関係する研究者のエッセイ、催し物などの活動状況等を収録。第九五号まで既刊。

●その他の出版物

『海外日本像集成』（二〇〇七年創刊）
幕末から明治にかけて外国人が執筆した日本旅行記や研究書に掲載されている挿絵のみを集めた図版集。第五冊まで既刊。

『異邦人のまなざし』（二〇〇七年創刊）
『海外日本像集成』と同様に、一八五〇年代から一九〇〇年頃までに出版された「外国語で書かれた日本研究書」（略して「外書」）の挿絵を、「富士山」「芸者」「子ども」など、テーマ別に抽出し編集したカラー図版シリーズ。第一〇輯まで既刊。

〈翻訳出版協力プロジェクト〉

日本文化の理解を助けるために、日本語による文献（古典および近代の古典、改訳を含む）を諸外国語で翻訳し、学術出版するためのプロジェクト。企画を公募し、厳正なる審査のうえ毎年一～二件程度採択し、現在までに世界各国で一〇冊の翻訳書が出版された。

『民間伝承論・郷土生活の研究法』学苑出版社（著：柳田国男　訳：王　暁葵、王　京、何　彬）　10年2月

『十返舎一九作品選集』ソミョン出版（著：十返舎一九　訳：康　志賢）　10年5月

『明治の文化』Nawafez Society（著：色川大吉　訳：NOUR El Nahas）　11年

『風土』CNRS ÉDITIONS（著：和辻哲郎　訳：オギュスタン・ベルク）　11年1月

『一揆』CNRS ÉDITIONS（著：勝俣鎮夫　訳：ピエール・フランソワ・スイリ、印出忠夫、中島圭一）　11年9月

『宮澤賢治作品集』サナービル・ブックス（著：宮澤賢治　訳：マーヒル・エルシリビーニー）　14年3月

『漢訳与謝蕪村俳句集』人民文学出版社（著：与謝蕪村　訳：王　岩）　15年3月

『宣告』Éditions Matériologiques（著：加賀乙彦　訳：笠井かおり）　16年1月

『曽我物語』ギペリオン（訳：オニスチェンコ・ヴャチェスラヴ）　16年8月

『今昔物語集　巻第十一～巻第十九』社会科学出版社（訳：グエン・ティ・オワイン、チャン・ティ・チュン・トアン、ダオ・フオン・チ）　16年11月

〈所蔵図書目録類〉

国際日本文化研究センターに所蔵している図書、資料の目録。

『日中文庫目録　The Japan-China Library Collection Catalogue』　11年3月

『海野文庫目録　Catalogue of the Umno Collection』　13年3月

日文研　五十九号　創立三十周年記念特集号

二〇一七（平成二九）年五月二一日発行

編　集　細川周平、石川　肇、矢田部恵子

発　行　大学共同利用機関法人　人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所　〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話　（〇七五）三三五―二二二二

ファックス　（〇七五）三三五―二〇九一

ホームページ　http://www.nichibun.ac.jp

印刷　中西印刷株式会社